

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 224

伊福定国前遺跡

独立行政法人国立病院機構岡山医療
センター宿舎整備工事に伴う発掘調査

2010

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 224

伊福定国前遺跡

独立行政法人国立病院機構岡山医療
センター宿舎整備工事に伴う発掘調査

2010

独立行政法人国立病院機構岡山医療センター
岡山県教育委員会



2区弥生時代遺構全景（南から）

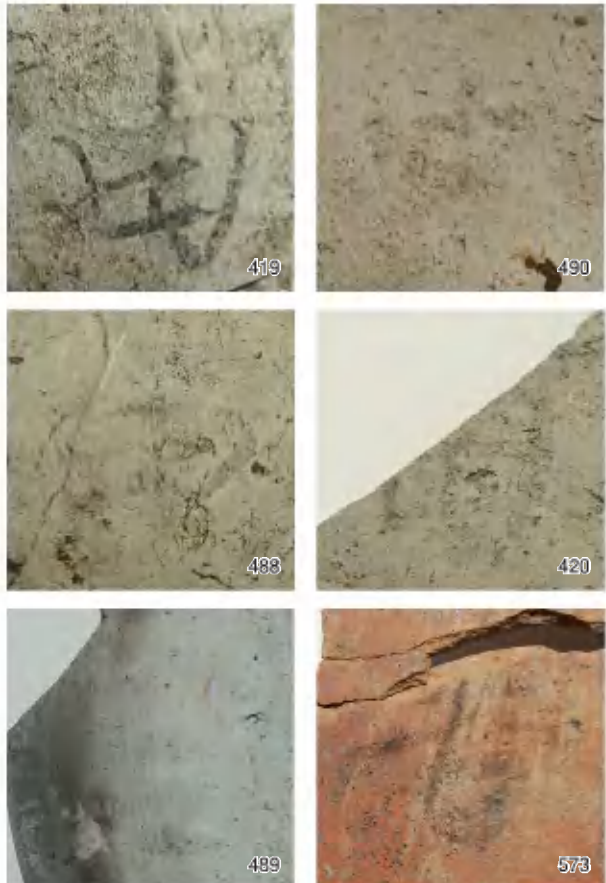
卷頭図版2



1 土壙20出土の弥生土器



2 緑釉陶器、灰釉陶器、円面硯



3 墨書土器

序

岡山医療センターは、岡山市の中心から北へ約10km、桃太郎伝説で名高い笹ヶ瀬川と山野に囲まれた閑静な環境にあります。中国地区の基幹病院として、永らく地域医療の中核的役割を担ってきましたが、平成11年3月の国立病院療養所再編計画見直しにより、高度の医療を提供する総合医療施設として位置づけられ、同年4月に行政法人となったあとも、政策医療を担う施設として重要な役割を果たしています。

このたび、岡山市北区伊福町4丁目に所在する職員宿舎の整備工事を計画いたしました。この場所が周知の埋蔵文化財包蔵地「伊福定国前遺跡」に隣接することから、岡山県教育委員会と協議し、事前に発掘調査を実施することといたしました。

この調査では、弥生時代中期～室町時代にわたる集落跡が確認されましたが、ことに奈良時代～平安時代の遺構から出土した円面硯や墨書土器、緑釉陶器、灰釉陶器などの遺物は、古代伊福郷の一端を物語る資料として注目されます。

本書が、地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として、広く活用されることを期待いたします。

最後に、発掘調査及び報告書作成に当たられた岡山県教育委員会をはじめ、その実施に際して御理解・御協力を賜った関係機関や地元住民のみな様に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

独立行政法人

国立病院機構岡山医療センター

院長 青山 興 司

序

本書は、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターの宿舎整備工事に伴い発掘調査を実施した、伊福定国前遺跡の発掘調査報告書です。

旭川下流域に形成された岡山平野には、初期の水田遺構が確認されたことで著名な津島遺跡（国指定史跡）をはじめ、弥生時代の木製品を大量に出土した南方遺跡や吉備第五位の規模を誇る全長150mの神宮寺山古墳（国指定史跡）など数多くの遺跡が知られており、古代吉備の中枢を形成していました。その一画を占めるこの遺跡は、県立岡山工業高等学校の校舎改築に伴う確認調査でその存在が知られるようになり、以来2次にわたる発掘調査によって弥生時代～中世にかけて営まれた集落跡であることが明らかになりました。

このたびの調査でも、やはり弥生時代中期～室町時代にわたる集落跡が確認されましたが、中でも奈良時代～平安時代の遺構からは円面硯や墨書土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土し、古代伊福郷の一端が明らかとなりました。

本書が地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待いたします。

発掘調査及び報告書作成に当たりましては、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターをはじめとする関係機関や地元住民のみな様に御理解・御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成22年 3月

岡山県古代吉備文化財センター
所 長 児 仁 井 克 一

例 言

- 1 本書は、独立行政法人国立病院機構岡山医療センター宿舎の改築に伴い、岡山県教育委員会が実施した伊福定国前遺跡いふくさだくにまへの発掘調査報告書である。
- 2 伊福定国前遺跡は、岡山県岡山市北区伊福町4丁目8-12に所在する。
- 3 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが実施し、平成19年4月16日～24日に和田剛が試掘調査（24㎡）を、平成20年4月1日～8月31日に亀山行雄・柴田英樹・上梶武が全面調査（1,031㎡）を担当した。
- 4 本書の作成は、亀山（平成20年9月1日～平成21年3月31日）、柴田・上梶（平成20年9月1日～30日）が担当して実施した。
- 5 本書の執筆は亀山・柴田・上梶が分担して行い、全体の編集は亀山が行った。
- 6 本書の作成に当たり、遺物の時期・材質などに関する鑑定・同定を下記の諸氏に依頼して有益な教示を受けた。記して厚く御礼申し上げる。
 - ・墨書文字の鑑定 狩野 久（岡山県文化財保護審議会委員）
 - ・陶器の鑑定 高橋照彦（大阪大学）
 - ・石材の同定 鈴木茂之（岡山大学）
 - ・動物遺体の同定 富岡直人（岡山理科大学）
- 7 自然遺物に関する同定・分析は下記の機関に委託した。
 - ・木材の樹種同定 環境考古研究会
 - ・木材の年代測定 環境考古研究会
 - ・土壌の植物化石同定 環境考古研究会
- 8 遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 9 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山県岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度は海拔高である。
- 2 本書に用いた方位は世界測地系に基づく。
- 3 本書に収載した遺構・遺物図の縮尺は、竪穴住居・掘立柱建物を1/60、井戸・土壙を1/30、土器・陶器を1/4・1/6・1/8、石製品を1/2・1/3、土製品を1/3、木製品を1/6、金属製品を1/3・1/4に統一している。
- 4 本書に収載した遺物図には、石製品にはS、土製品にはC、木製品にはW、金属製品にはMの記号を番号の前に付した。
- 5 土層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』による。
- 6 本書に収載した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/25,000「岡山北部」「岡山南部」を複製して使用した。

目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 序説	1
第1節 遺跡を取り巻く環境	1
第2節 調査の経緯と経過	5
第2章 調査の概要	9
第1節 概要	9
第2節 古墳時代以前の遺構・遺物	9
第3節 奈良～平安時代の遺構・遺物	59
第4節 鎌倉時代以後の遺構・遺物	80
第3章 総括	83
第1節 調査地の変遷	83
第2節 古代の井戸	87
第3節 墨書土器について	93
第4節 伊福定国前遺跡における環境考古学分析	103
遺構一覧表	106
遺物観察表	108
図版	
報告書抄録	

目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000)	1	第36図	土壙20出土遺物 3 (1/4)	35
第2図	周辺遺跡分布図 (1/30,000)	2	第37図	土壙20出土遺物 4 (1/4)	36
第3図	上伊福遺跡群の範囲 (1/6,000)	3	第38図	土壙20出土遺物 5 (1/4)	37
第4図	竪穴住居 1 (1/60)	9	第39図	土壙20出土遺物 6 (1/3・1/4)	38
第5図	検出遺構全体図 (1/400)	10	第40図	土壙21 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)	39
第6図	調査区土層断面図 (1/60)	11	第41図	土壙21出土遺物 2 (1/4)	40
第7図	古墳時代以前遺構全体図 (1/400)	12	第42図	土壙22~24 (1/30)、出土遺物 (1/4)	41
第8図	古墳時代以前遺構配置図 1 (1/200)	13	第43図	土器溜り 1 出土遺物 1 (1/4)	42
第9図	古墳時代以前遺構配置図 2 (1/200)	14	第44図	土器溜り 1 出土遺物 2 (1/4)	43
第10図	竪穴住居 2 (1/60)、出土遺物 (1/4)	15	第45図	土器溜り 1 出土遺物 3 (1/4)	44
第11図	竪穴住居 3 (1/60)、出土遺物 (1/3)	16	第46図	土器溜り 1 出土遺物 4 (1/4)	45
第12図	井戸 1 (1/30)、出土遺物 (1/4)	16	第47図	土器溜り 2 出土遺物 (1/4)、土器溜り 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)、火処 (1/30)	46
第13図	井戸 2 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)	17	第48図	溝 1 (1/40)	47
第14図	井戸 2 出土遺物 2 (1/4)	18	第49図	溝 1 出土遺物 1 (1/4)	48
第15図	井戸 3 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)	19	第50図	溝 1 出土遺物 2 (1/4)	49
第16図	井戸 3 出土遺物 2 (1/4)	20	第51図	溝 1 出土遺物 3 (1/4)	50
第17図	土壙 1・2 (1/30)、出土遺物 (1/4)	21	第52図	溝 1 出土遺物 4 (1/2・1/3・1/4)	51
第18図	土壙 3 (1/30)、出土遺物 (1/3・1/4)	22	第53図	溝 2~6 (1/30)、出土遺物 (1/4)	52
第19図	土壙 4 (1/30)、出土遺物 (1/4)	23	第54図	溝 7~9 (1/40)	53
第20図	土壙 5 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)	23	第55図	溝 10・11 (1/30)	53
第21図	土壙 5 出土遺物 2 (1/4)	24	第56図	溝 10・11 出土遺物 (1/4)	54
第22図	土壙 6 (1/30)、出土遺物 (1/4)	25	第57図	水田 1・2 (1/20・1/60)	54
第23図	土壙 7~9 (1/30)	25	第58図	水田 1・2 出土遺物 (1/3・1/4)	55
第24図	土壙 10・11 (1/30)、出土遺物 (1/4)	26	第59図	その他の遺物 1 (1/4)	57
第25図	土壙 12 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)	26	第60図	その他の遺物 2 (1/2・1/3・1/4)	58
第26図	土壙 12 出土遺物 2 (1/4)	27	第61図	掘立柱建物 1 (1/60)	59
第27図	土壙 13 (1/30)、出土遺物 (1/4)	27	第62図	奈良時代~平安時代遺構全体図 (1/400)	60
第28図	土壙 14 (1/30)、出土遺物 (1/4)	28	第63図	奈良時代~平安時代遺構配置図 1 (1/200)	61
第29図	土壙 15 (1/30)、出土遺物 (1/4)	28	第64図	奈良時代~平安時代遺構配置図 2 (1/200)	62
第30図	土壙 16 (1/30)、出土遺物 (1/4)	29	第65図	井戸 4 (1/30)	63
第31図	土壙 17 (1/30)、出土遺物 (1/4)	30	第66図	井戸 4 出土遺物 1 (1/4・1/8)	64
第32図	土壙 18・19 (1/30)、出土遺物 (1/4)	31			
第33図	土壙 20 (1/30)	32			
第34図	土壙 20 出土遺物 1 (1/4)	33			
第35図	土壙 20 出土遺物 2 (1/4)	34			

第67図 井戸4出土遺物2 (1/6).....	65	第80図 溝19 (1/40)、出土遺物 (1/4)	75
第68図 土壙25・26 (1/30)、出土遺物 (1/4)	65	第81図 溝20・21 (1/30)、出土遺物 (1/4)	75
第69図 土壙27 (1/30)、出土遺物 (1/4)	66	第82図 その他の遺物1 (1/4).....	76
第70図 土壙28・29 (1/30)、出土遺物 (1/4)	66	第83図 その他の遺物2 (1/4).....	77
第71図 土壙30 (1/30)、出土遺物 (1/4)	67	第84図 その他の遺物3 (1/4).....	78
第72図 土壙31 (1/30)、出土遺物 (1/4)	68	第85図 その他の遺物4 (1/3).....	79
第73図 土壙32・33 (1/30)、出土遺物 (1/4)	69	第86図 土壙35 (1/30)、出土遺物 (1/4)	80
第74図 土壙34出土遺物 (1/4).....	69	第87図 鎌倉時代以後遺構全体図 (1/400)	81
第75図 たわみ出土遺物1 (1/4).....	70	第88図 溝22~24 (1/30)、水田3 (1/40)、 出土遺物 (1/3・1/4)	82
第76図 たわみ出土遺物2 (1/3・1/4・1/6).....	71	第89図 その他の遺物 (1/3・1/4)	82
第77図 溝12 (1/60)、出土遺物 (1/3・1/4).....	72	第90図 遺構の変遷 (1/1,000)	84
第78図 溝13~17 (1/30)	73	第91図 古代井戸の形態分類模式図.....	88
第79図 溝18 (1/40)、出土遺物 (1/4)	74		

図版目次

巻頭図版1

2区弥生時代遺構全景 (南から)

巻頭図版2

- 1 土壙20出土の弥生土器
- 2 緑釉陶器、灰釉陶器、円面硯
- 3 墨書土器

図版1

- 1 2区弥生時代遺構全景 (南から)
- 2 竪穴住居2 (西から)

図版2

- 1 竪穴住居1 (西から)
- 2 竪穴住居3 (東から)
- 3 井戸1 (南西から)

図版3

- 1 井戸2土層断面 (東から)
- 2 井戸3土層遺物出土状況 (北西から)
- 3 井戸3 (西から)

図版4

- 1 土壙3 (東から)
- 2 土壙5 (東から)
- 3 土壙12 (西から)

図版5

- 1 土壙13 (南から)
- 2 土壙14 (南から)
- 3 土壙17 (東から)

図版6

- 1 土壙20遺物出土状況 (北東から)
- 2 土壙20 (南西から)
- 3 土壙21 (東から)

図版7

- 1 土器溜り1 (南から)
- 2 溝1 (北西から)
- 3 溝10・11 (北西から)

図版8

- 1 溝2・7~9 (東から)
- 2 水田1・2と溝1・5・6 (北西から)

図版9

- 1 水田1畦畔 (北西から)
- 2 水田1土層断面 (北西から)

図版10

- 1 1区古代~中世遺構全景 (南東から)
- 2 掘立柱建物1周辺 (北から)

図版11

- 1 井戸4（東から）
- 2 井戸4須恵器据え方（東から）

図版12

- 1 井戸4上層遺物出土状況（南西から）
- 2 井戸4隅柱柄組み（南東から）
- 3 土壙25（南から）

図版13

- 1 土壙28（西から）
- 2 土壙30（北西から）
- 3 土壙31（西から）

図版14

- 1 土壙31遺物出土状況（西から）
- 2 溝12遺物出土状況（南から）
- 3 溝18（西から）

図版15

- 1 溝19（北西から）
- 2 溝19土層断面（東から）

3 たわみ遺物出土状況（南から）

図版16

井戸1～3、土壙3出土土器

図版17

土壙13・19・20出土土器

図版18

土壙20出土土器

図版19

土器溜り1出土土器

図版20

溝1出土土器

図版21

井戸4、土壙25・30・31、溝12、包含層
出土土器

図版22

- 1 出土石製品
- 2 出土土製品・金属製品

第1章 序 説

第1節 遺跡を取り巻く環境

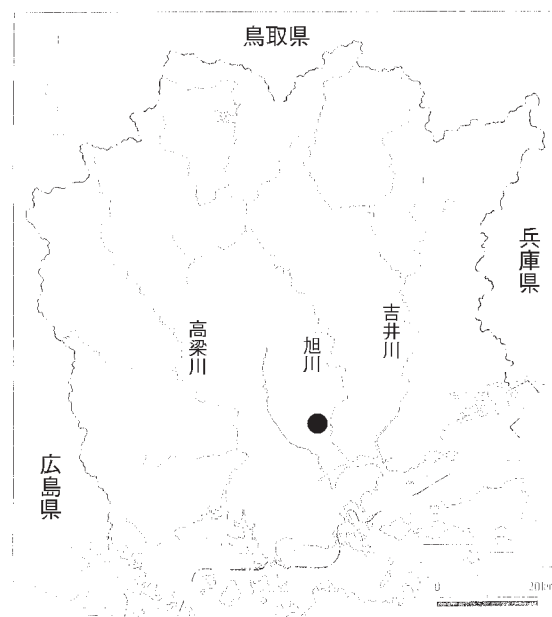
伊福定国前遺跡が立地する岡山平野は、中国山地に源を發し、吉備高原を貫いて流れる旭川によって形成された沖積平野である（第2図）。

縄文時代の後・晩期には、ダイミ山の南麓や操山の北麓に安定した集落が営まれるほか、各所の自然堤防上にもこの時期の生活の痕跡が認められる。弥生時代に入ると、沖積地への本格的な進出が始まり、南方遺跡や沢田遺跡では環濠集落が形成されている。中期には南方遺跡の周辺に絵図遺跡や上伊福九坪遺跡などが営まれ、この地域における生産や流通の拠点として機能していたものと思われるが、その末葉には解体の方向に向かう。その一方で、天瀬遺跡や鹿田遺跡など広範囲に集落が拡散し、これらは古墳時代前期に至るまで継続して営まれる。集落の一画に設けられていた集団墓地は、やがて平野部を見下ろす丘陵上に移り、都月坂2号墓のような墳丘墓も築かれる。

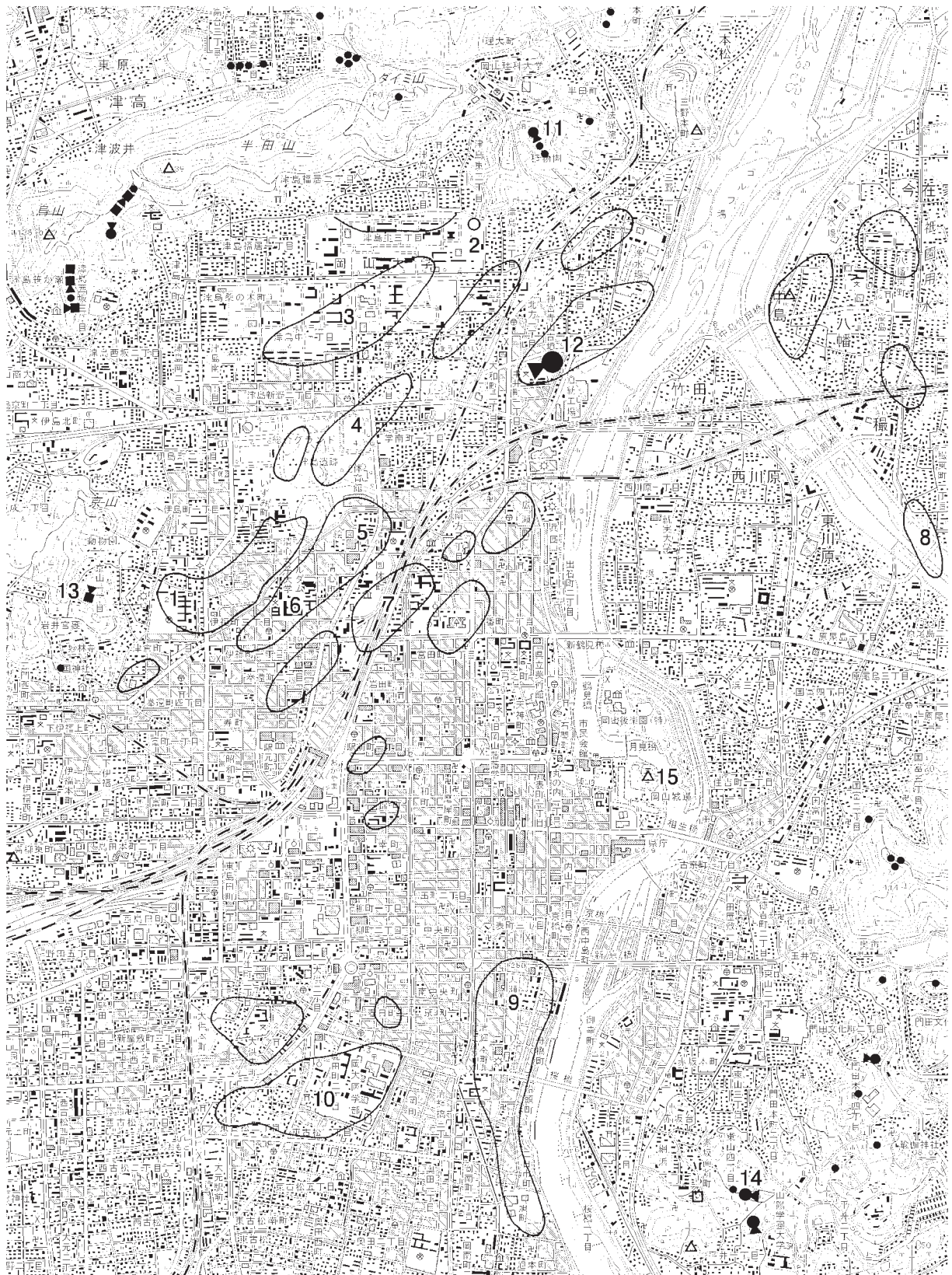
古墳時代の前期には、平野を見下ろす丘陵上に七つ坑1号墳や都月坂1号墳、津倉古墳、湯迫車塚古墳など全長30~40mの前方後方墳が築かれる一方で、吉備の穴海に臨む操山山塊では、網浜茶臼山古墳、操山109号墳など80m前後の前方後円墳が築造され、その系譜は全長120mの湊茶臼山古墳まで続く。弥生時代後期以来、順調に発展してきた集落も古墳時代前期後半に至ってその数を減らす。これらが再び拡大傾向を示すのは中期後半のことである。中期の古墳は、旭川西岸の丘陵上に一本松古墳や青陵古墳などの小形前方後円墳が見られる一方、東岸では低地に中井・南三反田遺跡のような古墳群が現れる点で注意される。後期は、竜ノ口山塊に80基、操山山塊に100基余りの群集墳が見られる東岸に対し、西岸では矢坂山山塊に40基が知られるにすぎず、こうした両地域の不均衡な状況は、古代寺院の分布においても見て取れる。

奈良時代、西岸平野は御野郡に属するが、この郡名を負う三野氏は津高郡領を務めたことが知られ、西山古墳群、横山古墳群などの群集墳や白壁奥遺跡のような製鉄遺跡が分布する笹ヶ瀬川流域と一体の領域を形成していた可能性が指摘されている。伊福郷や津島郷・弘西郷など西岸平野の中心部は公領として永く維持される一方で、その縁辺部も比較的早い段階から開発が進み、鹿田荘をはじめ円覚寺荘、大安寺荘などの荘園が開かれる。

鎌倉時代、相模から来住した松田氏は、室町時代には備前守護代として威を奮い、守護赤松



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

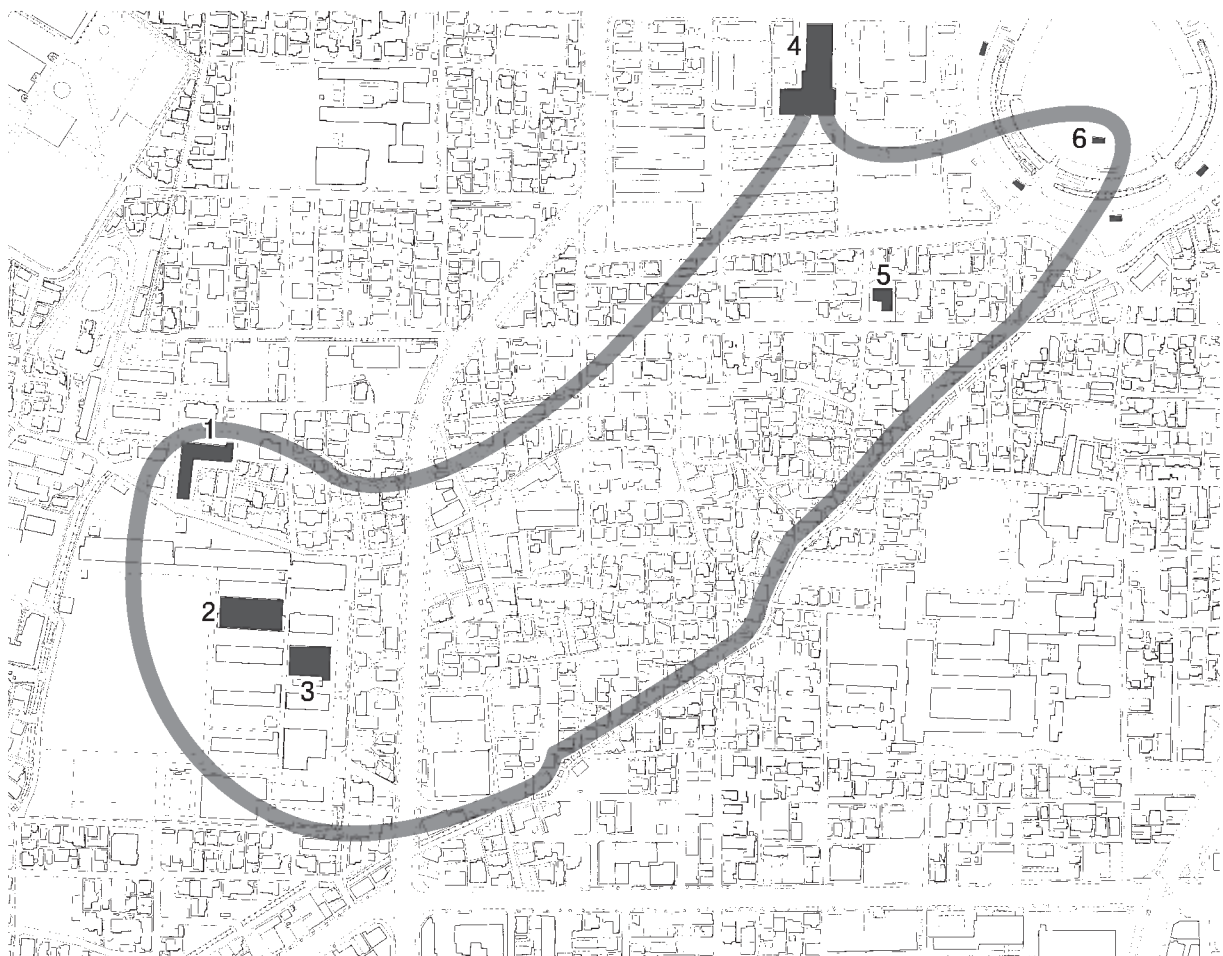
- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|---------|
| 1 伊福定国前遺跡 | 2 朝寝鼻貝塚 | 3 津島岡大遺跡 | 4 津島遺跡 | 5 絵図遺跡 |
| 6 上伊福九坪遺跡 | 7 南方遺跡 | 8 百間川原尾島遺跡 | 9 天瀬遺跡 | 10 鹿田遺跡 |
| 11 一本松古墳 | 12 神宮寺山古墳 | 13 津倉古墳 | 14 網浜茶臼山古墳 | 15 岡山城跡 |

氏と反目するに至る。文明15年（1483）には備後守護山名氏の助勢を得て守護代浦上氏と争い、以後、西備前を勢力下において浦上氏と対峙する。やがて浦上氏の旗下にあった宇喜多直家が急速に勢力を伸ばし、備中から進出した三村氏を退けるとともに、松田・浦上氏を滅ぼして備前の覇権を手にする。

関ヶ原戦に敗れた宇喜多氏に代わって備前・美作に封じられた小早川氏はわずか2年で断絶し、慶長8年（1603）には池田氏が備前に入封して明治維新に至る。江戸時代、西国往來を境に下伊福村と分かれた上伊福村は、二千石という備前国有数の村高を有し、栄ヶ崎・定国・津倉・別所などの枝村があった。

明治時代には京山の山裾に衛戍病院や種畜場が置かれ、大正～昭和時代には倉敷紡績や備作製錬、片倉製糸などの工場が建設された。戦後の一時期には県庁が置かれるなどしたが、この一帯が市街地へと変貌を遂げる契機となったのは、昭和37年（1962）、岡山県営総合グラウンドを主会場とする第17回国民体育大会の開催であった。そして現在は、池田動物園や京山遊園地といった行楽地を控え、清心女子大学や県立生涯学習センター（旧県立短期大学）、県立児童会館、県立岡山工業高等学校などの教育施設を抱えた住宅地として発展している。

さて、旧上伊福村一帯（現伊福町、伊島町、伊島北町、いずみ町、絵図町、国体町、清心町、津倉町、奉還町、三門東町、京山、谷万成の一部）に遺跡が所在することは早くから知られており、昭和



第3図 上伊福遺跡群の範囲（1/6,000）

- | | | |
|-------------------|---------------------|--------------------|
| 1 岡山医療センター宿舍（H20） | 2 県立岡山工業高等学校校舎（H14） | 3 県立岡山工業高等学校校舎（H6） |
| 4 中国財務局合同宿舍（H17） | 5 岡山家庭裁判所所長官舎（H10） | 6 津島遺跡確認調査（H15） |

13年（1938）に刊行された「弥生式土器聚成図録」にもここから出土した弥生土器が数多く掲載されている。この上伊福村が岡山市へ編入される大正10年（1921）の地割り図を見ると、上伊福の集落を挟んで北東から南西に走る地割りが確認できるが、これは自然堤防（微高地）に沿って走る旧河道（低位部）の痕跡と見られる。これにより推定される自然堤防の範囲は、岡山県総合グラウンド南端の野球場周辺に始まり岡山工業高等学校の校地東半で収束する延長800m、幅200mに復元され、伊福定国前遺跡はその西端に位置していることになる（第3図）。この自然堤防より低位部を隔てた北側には弥生時代前期の農耕集落として著名な津島遺跡、東側には弥生時代中期にはじまる絵図遺跡、南側には弥生時代中期から古墳時代前期にかけて営まれた上伊福九坪遺跡が立地し、西に連なる京山山塊の麓にも弥生時代中期の上伊福西遺跡や古墳時代中期の尾針神社遺跡が存在する。

この自然堤防上では、平成10年（1998）に岡山家庭裁判所所長宿舍の建て替えに伴い発掘調査が実施されている。ここでは、弥生時代中期の水田を覆う微高地上に展開する弥生時代後期と古墳時代後期の集落が検出され、後者は製鉄にかかわる遺物を伴っている。ここから150m北へ離れた地点で平成17年に行われた中国財務局合同宿舍建て替えに伴う発掘調査では、弥生時代前期～古墳時代前期の水田と集落が確認され、微高地の北端にあたるということが明らかにされている。この自然堤防の西側にあたる岡山工業高等学校では、校舎の改築に伴い二次にわたって発掘調査が実施されている。平成6年の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期と室町時代の集落が検出され、平成14年の調査では、これに加えて古墳時代後期～奈良時代の遺構と中世まで機能した河道が確認された。

このように、上伊福遺跡群の北側には弥生時代前期～中期の水田が広がり、後期には拡大した微高地上に集落が展開して古墳時代前期まで続く。古墳時代後期には再び集落が形成されるが、その規模は大幅に縮小しているようである。奈良時代～平安時代には微高地の西部に円面硯や墨書土器、緑釉陶器・灰釉陶器を伴う建物が存在することが今回の調査で明らかとなった。中世の集落は室町時代前期以後、その痕跡が見られなくなることから、現在集落のある場所へと移動したのかも知れない。

（亀山）

参考文献

- 『京山物語』郷土史「京山物語」をつくる会 2003
小林行雄『弥生式土器聚成図録』本編 東京考古学会 1938
永山卯三郎『岡山県農地史』岡山県庁内農地改革委員会 1952
『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』125 岡山県教育委員会 1998
「津島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』145 岡山県教育委員会 1999
「津島遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004
「伊福定国前遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』188 岡山県教育委員会 2005
「津島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』206 岡山県教育委員会 2007

第2節 調査の経緯と経過

1 調査の経緯

伊福定国前遺跡は、平成6年9月、県立岡山工業高等学校の産業教育施設改築に先立ち実施した発掘調査によってその存在が知られるようになった。校地の東側中央で行ったこの調査では、弥生時代後期中葉～中世にわたる集落跡が検出され、その北西で実施した平成14年度の調査でもやはり同時期の遺構が確認されている。さらに、校地南東の100周年記念会館建設に際する立会調査においても微高地の存在が確かめられており、遺跡は校地東半に広がるものと推定された。

平成18年10月、独立行政法人国立病院機構岡山医療センターによって岡山工業高等学校の北に隣接する職員宿舎の改築が計画され、その取り扱いについて岡山県教育庁文化財課と協議が行われた。この地点に周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったものの、伊福定国前遺跡の広がりも予測されたため事前に試掘調査を行うこととし、平成19年4月、岡山医療センターから委託を受けた岡山県古代吉備文化財センターでは既存建物の間に4か所のトレンチを設定して掘り下げを行った。その結果、いずれのトレンチでも弥生時代～中世の遺構が検出されたことから、文化財課では岡山医療センターと再度協議し、平成20年度に全面調査を実施することとなった。

2 調査の経過

既存建物を解体撤去した後に、厚さ1mほどの造成土を重機により除去し、4月8日から発掘資材を搬入して調査に着手した。調査は、排土を場内で処理する関係から、北側の1区と南側の2区に分けて実施した。調査の過程で、弥生時代後期の集落遺構の下層に弥生時代中期に遡る水田が広がっていることが判明し、予想外の排土量に悩まされるなどしたが、8月11日によりやく調査を完了した。

1区では、宅地に造成される以前の近・現代水田層を除去すると、東側に灰白色をなす鎌倉時代～室町時代の水田層が遺存していた。この水田の西側で、奈良時代～室町時代の掘立柱建物や土壇・井戸・溝などを検出したが、ことに平安時代前期の土壇や溝からは「由」・「吉」の墨書をもつ須恵器がまとまって出土し注目された。この下層には、幅2～4m、高さ50cmを測る2筋の堤状地形が東西にのび、その間に挟まれた幅5～7mの帯状をなす水田や、これと並走する弥生時代中期末～後期前葉の溝を確認した。

2区では、近・現代の水田層を除去すると、直ちに奈良時代～鎌倉時代の遺構面が現れた。鎌倉時代の柱穴は北側に集中し、奈良時代～平安時代の柱穴や土壇、溝もこれと重複していた。南側では鎌倉時代の溝や水田が検出されたが、その下も奈良時代の低位部（たわみ）が広がっており、遺構は概して稀薄であった。これらの遺構からは、丹塗り土師器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器、円面硯、土馬などが出土し、一般集落とはやや異なる性格が想定された。ここから20cmほど掘り下げると、竪穴住居や井戸、土壇、溝など、弥生時代後期後葉～末の遺構が確認できた。これよりさらに40cm下には弥生時代中期末の水田層が広がっていたが、畦畔は検出できなかった。

(亀山)

3 調査の体制

発掘作業は、岡山県古代吉備文化財センターの調査員3名の指示のもとに作業員を雇用して実施するとともに、整理作業員により出土遺物の水洗・注記作業をあわせて行った。

発掘作業終了後、文化財センターにて報告書の作成を行った。調査員3名は、遺構図面・写真の整理と平行して、整理作業員を指揮して出土遺物の復元・実測・写真撮影を行うとともに、出土木材の樹種鑑定及び年代測定、土壌分析、動物遺体の同定などを関係機関、各氏に依頼した。

平成19年度（試掘調査）

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 神田 益穂

文化財課

課長 藤井 守雄

参事 木山 潤郎

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

光永 真一

主任 小嶋 善邦・金出地敬一

古代吉備文化財センター

所長 高畑 知功

次長（総務課長）

小林 勝

参事 岡田 博

副参事 中島 謙次

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任 福池 光修

<調査第一課>

課長 中野 雅美

総括主幹（第一班長）

大橋 雅也

主事 和田 剛（調査担当）

平成20年度（全面調査）

岡山県教育委員会

教育長 門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長 岡野 健一

文化財課

課長 三村 修

参事 木山 潤郎

参事 田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

光永 真一

主任 小嶋 善邦

主事 平井 利尚

古代吉備文化財センター

所長 藤川 洋二

次長（総務課長）

小林 勝

参事 岡田 博

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任 福池 光修・中島 忍

<調査第三課>

課長 江見 正己

総括主幹（第二班長）

亀山 行雄（調査・整理担当）

主幹 柴田 英樹（調査・整理担当）

主事 上椿 武（調査・整理担当）

4 日誌抄

平成19年

4月16日（月）発掘資材搬入、試掘調査着手

4月24日（火）発掘資材撤収、試掘調査完了

平成20年

4月8日（火）発掘資材搬入、全面調査着手

4月9日（水）1区東・2区北造成土除去（～10日）

4月14日（月）1区東・2区北掘り下げ開始

5月23日（金）1区東掘り下げ終了

5月26日（月）1区西造成土除去（～28日）

5月29日（木）1区西掘り下げ開始

6月30日（月）2区北掘り下げ終了

7月1日（火）2区南造成土除去

7月2日（水）2区南掘り下げ開始

7月30日（水）石材同定を鈴木氏（岡山大学）に依頼

8月5日（火）1区西・2区南掘り下げ終了

8月6日（水）埋め戻し（～7日）

8月11日（月）発掘資材撤収、全面調査完了

緑釉陶器・灰釉陶器の鑑定を高橋氏（大阪大学）に依頼

8月12日（火）図面・写真整理に着手

9月1日（月）遺物復元に着手

9月10日（水）遺物実測に着手

9月19日（金）土壌分析・木材同定を環境考古研究会へ依頼

9月29日（月）動物遺体の同定を富岡氏（岡山理科大学）に依頼

10月14日（火）埋蔵文化財保護専門委員会にて指導を受ける

平成21年

1月26日（月）遺物写真撮影着手

2月13日（金）遺物実測終了

2月19日（木）遺物図トレース終了

2月20日（金）遺物復元終了

2月25日（水）遺物写真撮影終了

3月2日（月）本文・図版割付着手

3月31日（火）本文・図版割付終了、報告書作成作業完了

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期 間
1	岡古調 第18号 H19.5.15	周知外	集落跡 伊福定回前遺跡	岡山市伊福町4丁目 8-12	24	国立病院 宿舎整備	有	岡山県古代古蹟文 化財センター所長	和田 剛	H19.4.16～H19.4.21

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	指示事項
1	教文埋 第1456号 H20.3.25	集落跡 伊福定回前遺跡	岡山市伊福町4丁目8-12	2,217	集合住宅	(独)国立病院機構岡山医療センター院長	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期 間
1	岡古調 第2001号 H20.4.8	集落跡 伊福定回前遺跡	岡山市伊福町4丁目 8-12	960	国立病院 宿舎整備	岡山県古代古蹟文化財センター 所長	亀山行雄・柴田英 樹・上裕武	H20.4.1～H20.8.31

埋蔵文化財発見の通知（法第100条）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第169号 H19.5.1	弥生土器・土師器・須恵器・陶 磁器 計整理箱1箱	岡山市伊福町4丁目 8-12	H19.4.16～H19.4.21	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	(独)国立病院機構	岡山県古代古蹟文 化財センター
2	教文埋 第604号 H20.8.11	土器・陶磁器・石製品・土製品・ 金属製品・木製品等 計135箱	岡山市伊福町4丁目 8-12	H20.4.1～H20.8.11	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	(独)国立病院機構	岡山県古代古蹟文 化財センター

第2章 調査の概要

第1節 概要

弥生時代の遺構は、上下二層にわたって検出した。下層には、黄褐色の粘質土を基盤とする水田がほぼ全面に広がり、その北側には5～7mの間隔で東西に延びる二筋の堤状地形に沿って、溝10条を検出した。これらは、中期後半～後期前葉の土器を包含する砂質土で覆われている。上層の遺構は、この砂質土を基盤として掘り込まれており、竪穴住居3軒、井戸3基、土壙24基、土器溜り3か所、溝2条がある。これらは主に2区の北側にまとまっており、後期後葉（上東・鬼川市Ⅲ式期）～後期末（才の町Ⅰ・Ⅱ式期）に属するものが大半である。

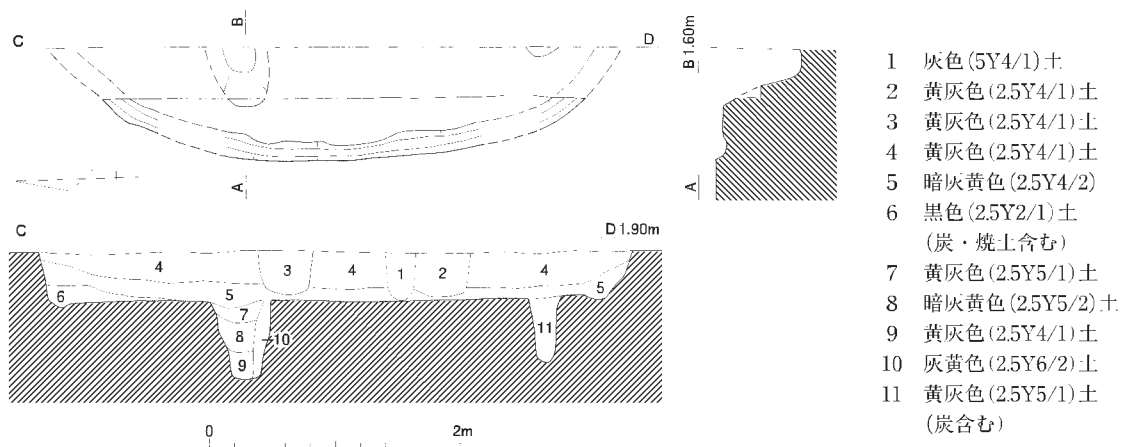
奈良～平安時代の遺構は、1区の西側から2区北側にまとまって検出した。掘立柱建物1棟や井戸1基、土壙10基、たわみ1か所、溝10条があるが、このうちたわみは古墳時代まで遡ることが考えられ、掘立柱建物についても中世まで下る可能性がある。遺物には、多量の須恵器や土師器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器、墨書土器、円面硯、土馬などがある。

鎌倉時代は、前代の遺構と重複する多数の柱穴のほか、1区の東側や2区の南側で水田が検出されているが、この水田は室町時代にも引き続き維持されていたようである。（亀山）

第2節 古墳時代以前の遺構・遺物

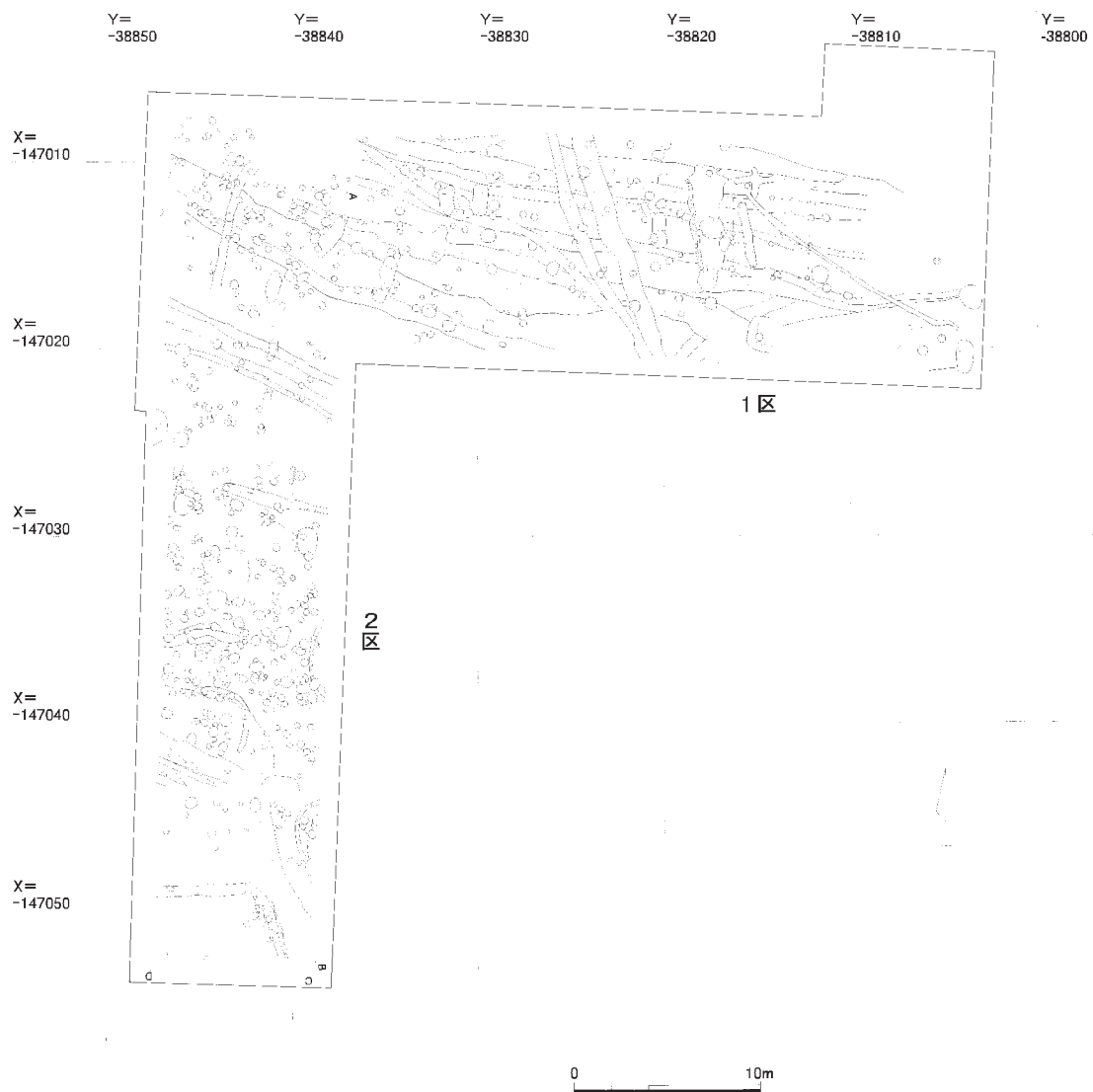
竪穴住居1（第4・7・9図、図版2）

2区の中央東端に位置する竪穴住居である。上層遺構の影響もあって検出が難しく、その存在を確認したのは床面までわずかに10cmの深さであったが、土層断面を観察すると深さ40cmほど遺存していたようである。調査区境にかかって検出したため全形を知りえないが、壁体に沿って弧状にめぐら幅15cm、深さ4cmの溝は南東へやや急に屈曲することから隅丸方形をなすことも考えられる。海拔高



第4図 竪穴住居1 (1/60)

第2章 調査の概要



第5図 検出遺構全体図 (1/400)

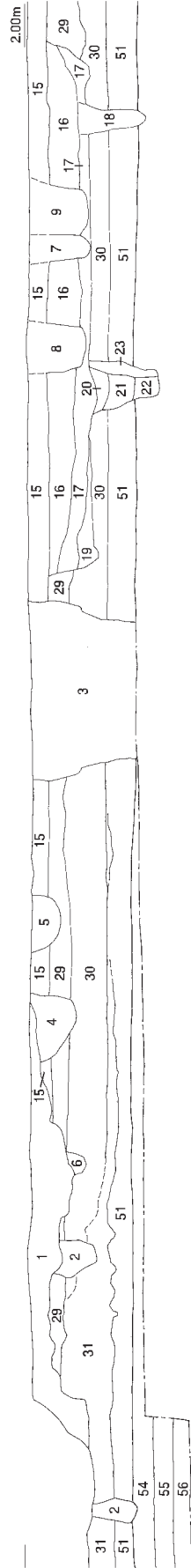
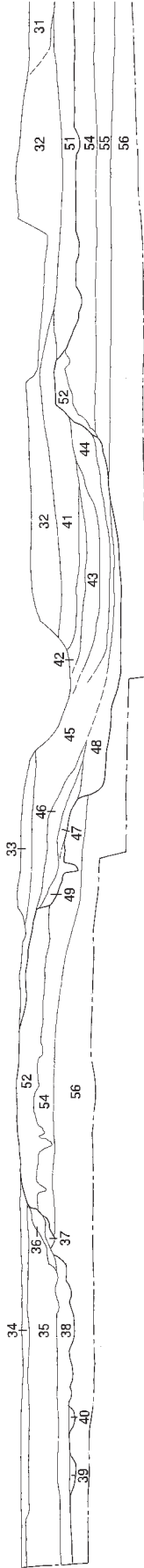


土器溜り1 調査状況 (西から)

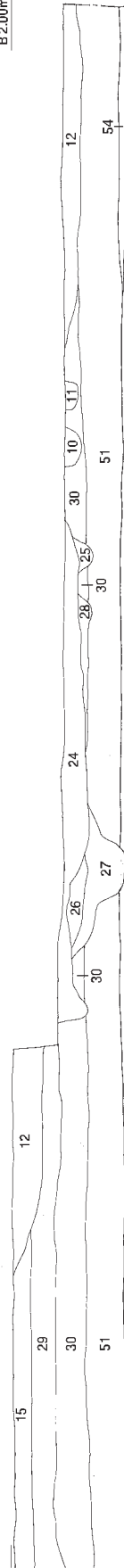


溝1へと続く土器溜り1 (西から)

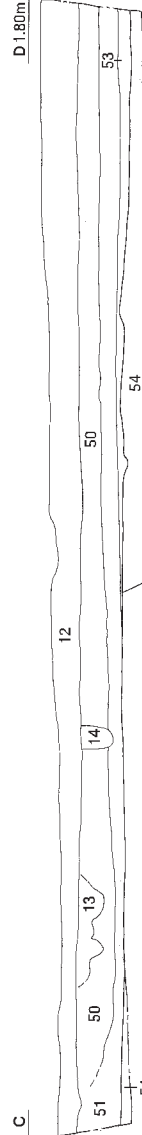
2.00m



B 2.00m



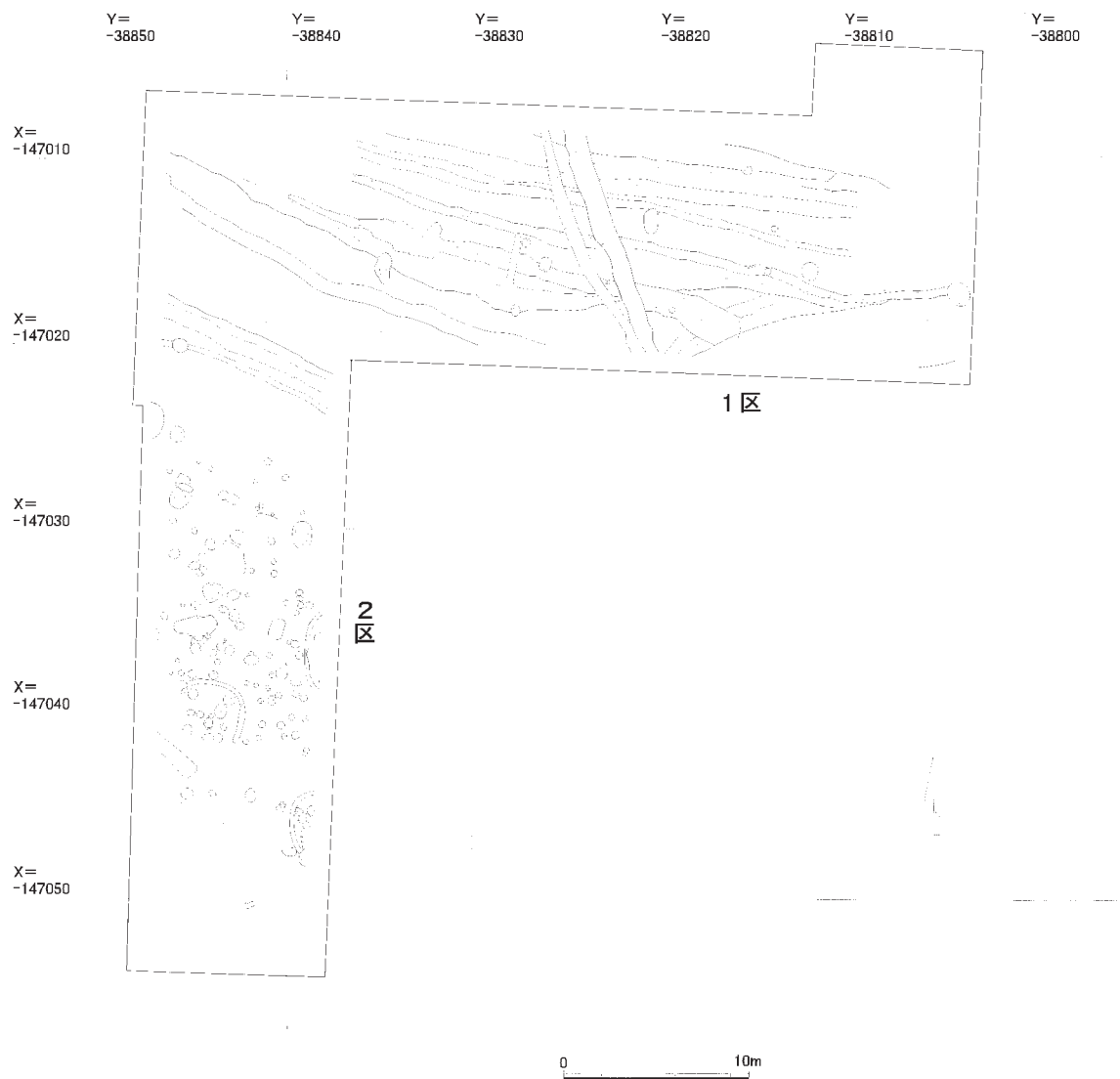
D 1.80m



- | | | | | | | | | | | | |
|----|----------------------|----|------------------------|----|-----------------------|----|----------------|----|--------------------|----|--------------------|
| 1 | 造成土 | 11 | 褐灰色(10YR4/1)土(柱穴埋土) | 21 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 | 31 | 灰色(5Y5/1)土 | 41 | にぶい黄褐色(10YR4/1)土 | 51 | 暗灰黄色(2.5Y6/2)土 |
| 2 | 灰色(5Y5/1)砂質土(攪乱) | 12 | 灰色(5Y4/1)土 | 22 | 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 32 | 灰黄褐色(10YR6/2)土 | 42 | 灰色(N5/)粘質土 | 52 | 暗灰黄色(2.5Y6/2)土 |
| 3 | 攪乱 | 13 | 褐灰色(10YR4/1)土(溝埋土) | 23 | 灰黄色(2.5Y6/2)土 | 33 | 灰色(5Y4/1)土 | 43 | 灰色(N5/)粘質土 | 53 | 黄灰色(2.5Y4/1)土 |
| 4 | 黄灰色(2.5Y4/1)土(柱穴埋土) | 14 | にぶい黄褐色(10YR5/3)土(柱穴埋土) | 24 | 褐灰色(10YR4/1)土 | 34 | 灰黄褐色(10YR5/2)土 | 44 | にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土 | 54 | 明黄褐色(2.5Y7/6)土 |
| 5 | 灰オリーブ色(5Y4/2)土(柱穴埋土) | 15 | 灰色(5Y4/1)土 | 25 | 褐灰色(10YR4/1)土(黄褐色土含む) | 35 | 暗灰色(10YR5/1)土 | 45 | 灰色(7.5Y5/1)砂質土 | 55 | オリーブ灰色(2.5Y6/1)砂質土 |
| 6 | 黄灰色(2.5Y4/2)土(柱穴埋土) | 16 | 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 26 | 褐灰色(10YR4/1)土(黄褐色土含む) | 36 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 | 46 | 灰色(N4/1)土 | 56 | 黒褐色(10YR3/1)粘質土 |
| 7 | 灰色(5Y4/1)土(柱穴埋土) | 17 | 暗灰黄色(2.5Y4/2)土 | 27 | 黒褐色土(10YR3/2)土 | 37 | 黒褐色(2.5Y3/2)土 | 47 | 黒色(N2/1)土 | | |
| 8 | 黄灰色(2.5Y4/1)土(柱穴埋土) | 18 | 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 28 | 褐灰色(10YR4/1)土(黄褐色土含む) | 38 | 暗灰色(N3/1)土 | 48 | 暗灰色(N3/1)粘質土 | | |
| 9 | 黄灰色(2.5Y4/1)土(柱穴埋土) | 19 | 黒色(2.5Y2/1)土(炭・焼土含む) | 29 | 灰オリーブ色(5Y4/2)土 | 39 | 暗灰色(10YR4/1)土 | 49 | 黒色(N2/1)土 | | |
| 10 | 褐灰色(10YR4/1)土(柱穴埋土) | 20 | 黄灰色(2.5Y5/1)土 | 30 | 灰黄色(2.5Y6/2)土 | 40 | 暗灰色(10YR4/1)土 | 50 | にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土 | | |

第6図 調査区土層断面図 (1/60)

第2章 調査の概要



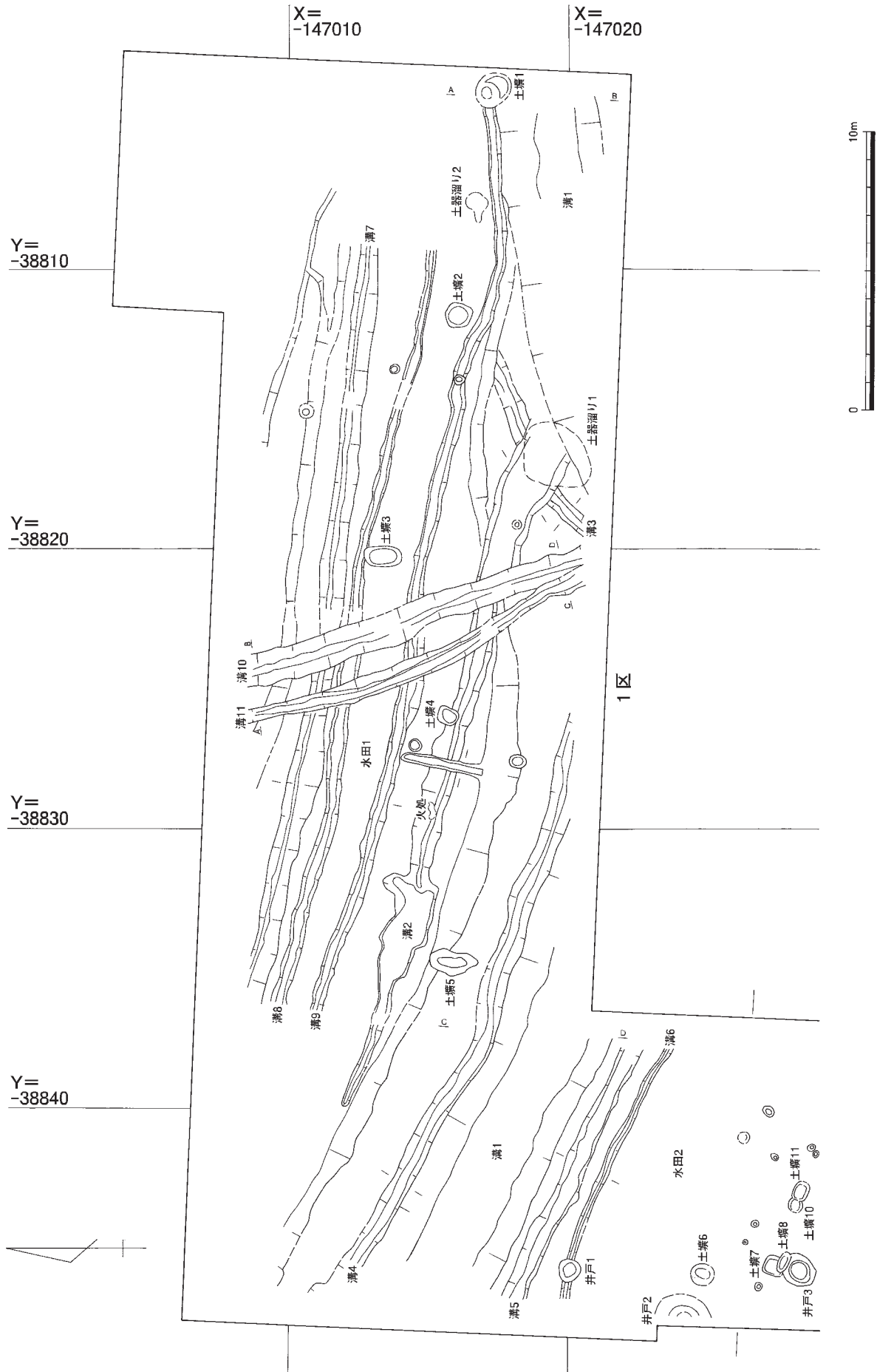
第7図 古墳時代以前遺構全体図 (1/400)



土器溜り2 (南東から)



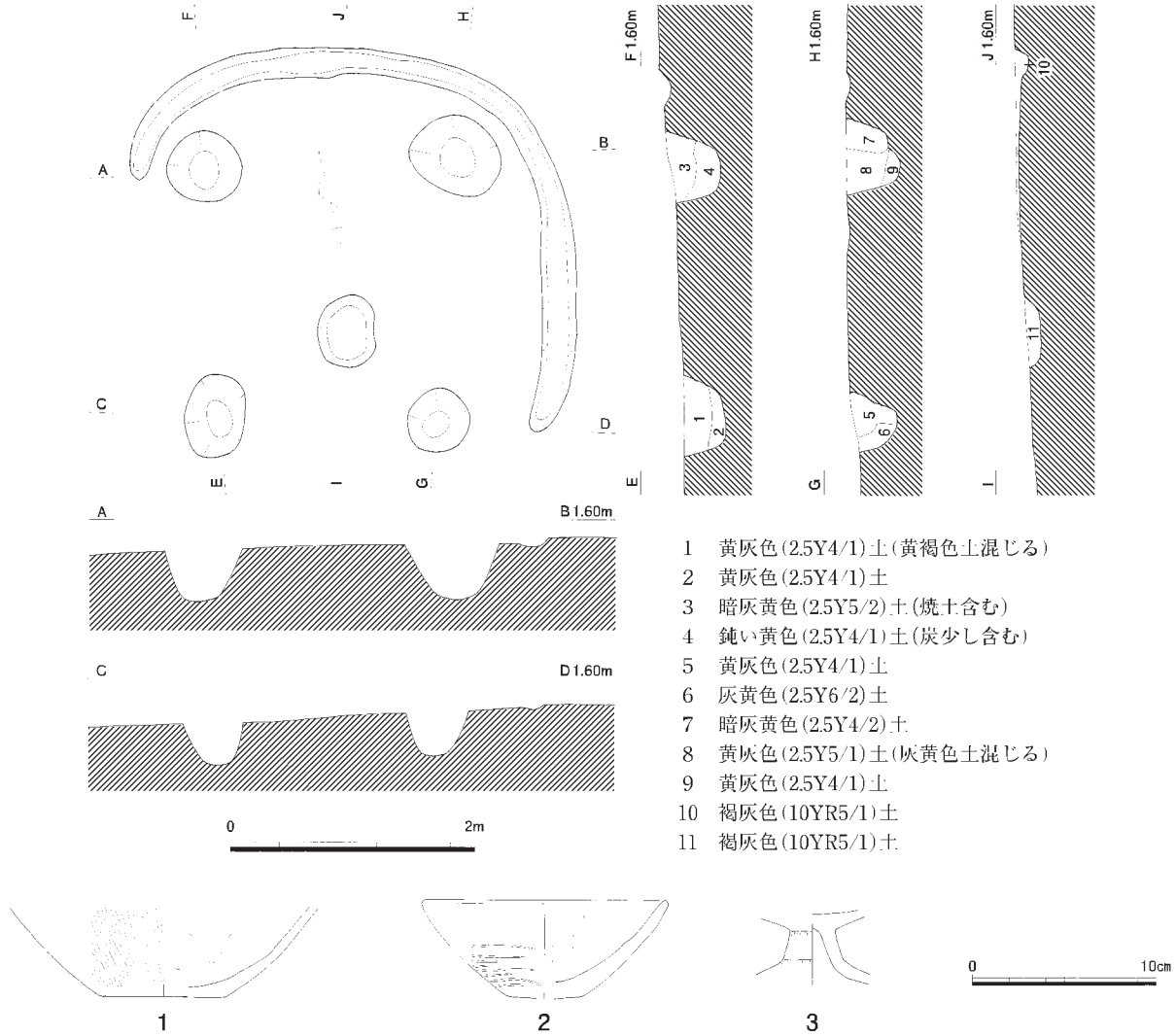
北側の堤状地形 (東から)



第8図 古墳時代以前遺構配置図1 (1/200)



第9図 古墳時代以前遺構配置図2 (1/200)



第10図 竪穴住居2 (1/60)、出土遺物 (1/4)

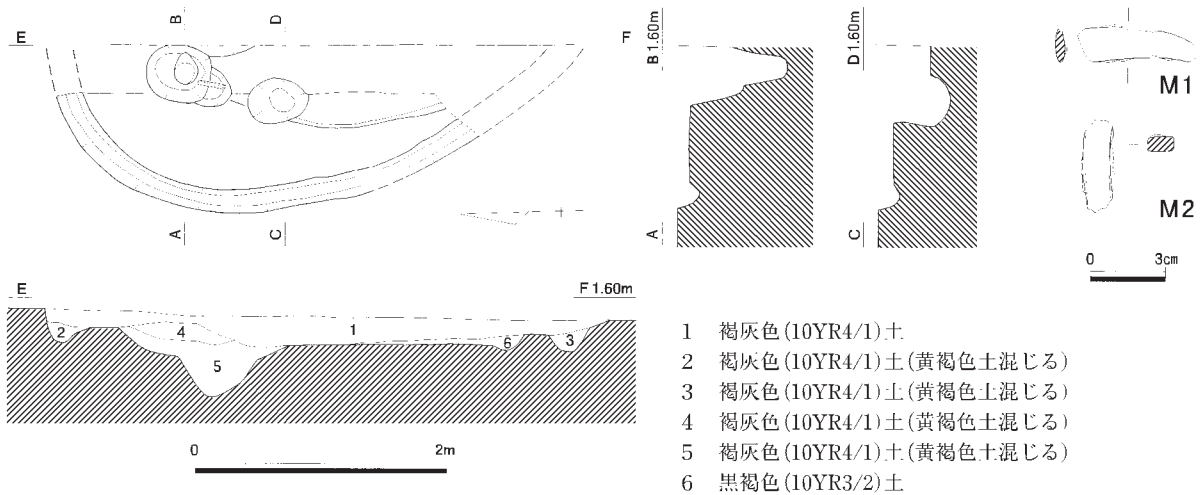
1.4mにある床面で2本の柱穴を検出したが、主柱と見られる柱穴は壁体から81cmの位置にあり、深さは63cmを測る。

図示できる遺物はないが、わずかに出土した弥生土器の断片から後期末に属するものと推定される。
 (亀山)

竪穴住居2 (第7・9・10図、図版1)

竪穴住居1の南西3.7mに位置する。2区の南側に広がる低位部(たわみ)の底で検出したもので、海拔高1.4mを測る床面の大半は削平を受け、弧状に走る幅25cm、深さ10cmの壁体溝も北～東側のみ遺存するにすぎないが、本来は長さ4mほどの隅丸方形をなすものと思われる。壁体から65cmの位置にある主柱は4本あり、その掘り方は径48～76cm、深さ33～43cmの不整な円形を呈する。柱間距離は南北203～218cm、東西177～207cmとわずかに南北が長い。主柱で囲まれた床面の中央南よりで長さ58cm、幅45cm、深さ12cmの楕円形を呈する浅い土塋が検出されたが、炭化物の堆積や被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物は少ないが、精良な胎土をもつ小形の鉢2や脚部の短い高杯3が出土しており、弥生時代後期末に比定できる。
 (亀山)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 土
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 土 (黄褐色土混じる)
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 土 (黄褐色土混じる)
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 土 (黄褐色土混じる)
- 5 褐灰色 (10YR4/1) 土 (黄褐色土混じる)
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 土

第11図 竪穴住居 3 (1/60)、出土遺物 (1/3)

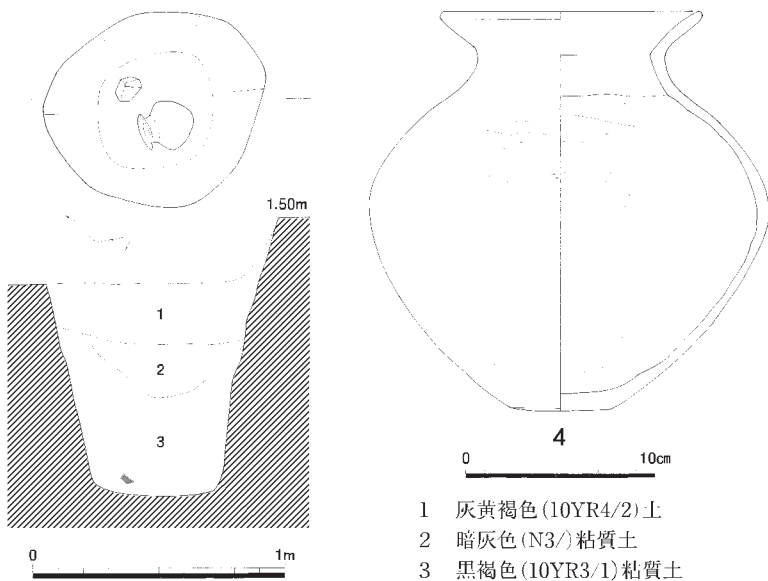
竪穴住居 3 (第7・9・11図、図版2)

2区の南東で検出した竪穴住居で、竪穴住居2の南東4.4mに位置する。2区の東壁にかかって検出したもので、竪穴住居の西端を確認したにすぎないが、弧状にめぐる幅16cm、深さ8cmの壁体溝は北東に向かって屈曲することから隅丸方形を呈するものと思われる。海拔高1.37mを測る床面は東に向かって一段低くなるが、基礎杭による攪乱もあって当初の形状を反映したものかどうか明らかではない。支柱と見られる柱穴は壁体から99cmの位置にあり、深さ77cmを測る掘り方内には径15cmの柱痕跡が認められた。また、これに切られた柱穴には礎板と見られる木材が遺存していた。

褐灰色をなす埋土からは、甕や高杯と見られる弥生土器の小片と器種不明の鉄器M1・2が出土したが詳細な時期は明らかでない。(亀山)

井戸 1 (第7～9・12図、図版2・16)

1区の南西端で検出した井戸で、竪穴住居2から約18m北に離れて位置する。地山と埋土の区別が難しく、海拔高1.3mで掘り方を確認したが、本来1.5mまで立ち上がる。遺構は、水田2の上に50cm



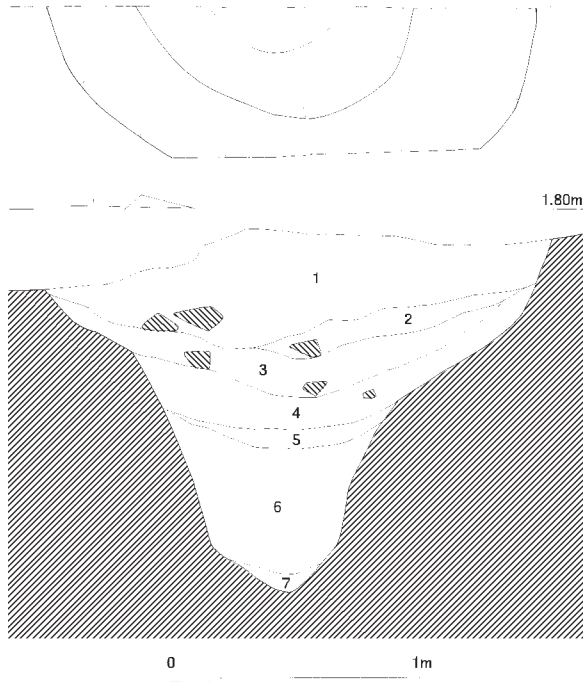
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
- 2 暗灰色 (N3/) 粘質土
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土

第12図 井戸 1 (1/30)、出土遺物 (1/4)

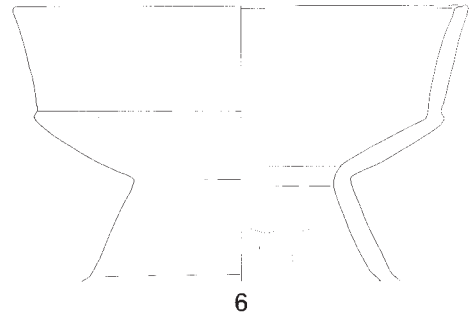
以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれたことがわかる。

掘り方平面形は不整形を呈し、検出面での長さは90cm、幅は77cm、深さは111cmを測る。底面の海拔高は0.38mである。掘り方は比較的まっすぐ立ち上がり、底面は平坦である。1・2層からは、土器の小片やモモの核が出土した。底からは、完形の壺4と角礫が出土した。

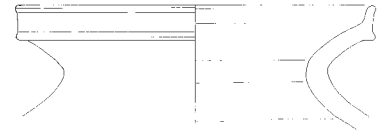
遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。(柴田)



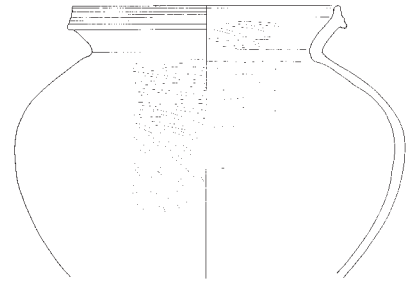
- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 灰色(5Y4/2)土 | 5 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土 |
| 2 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土 | 6 灰色(N4/)粘質土 |
| 3 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 7 灰色(N4/)細砂 |
| 4 灰色(N4/)砂質土 | |



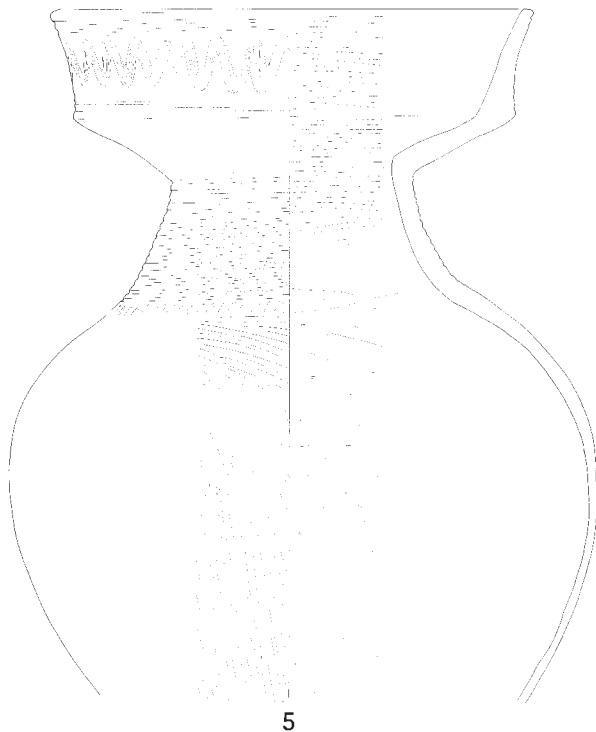
6



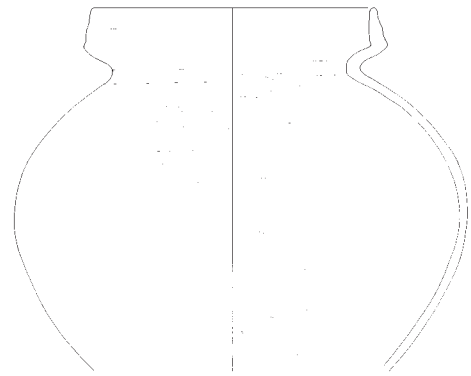
7



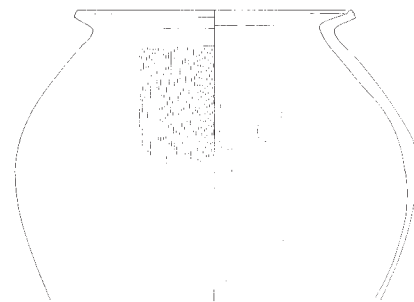
8



5



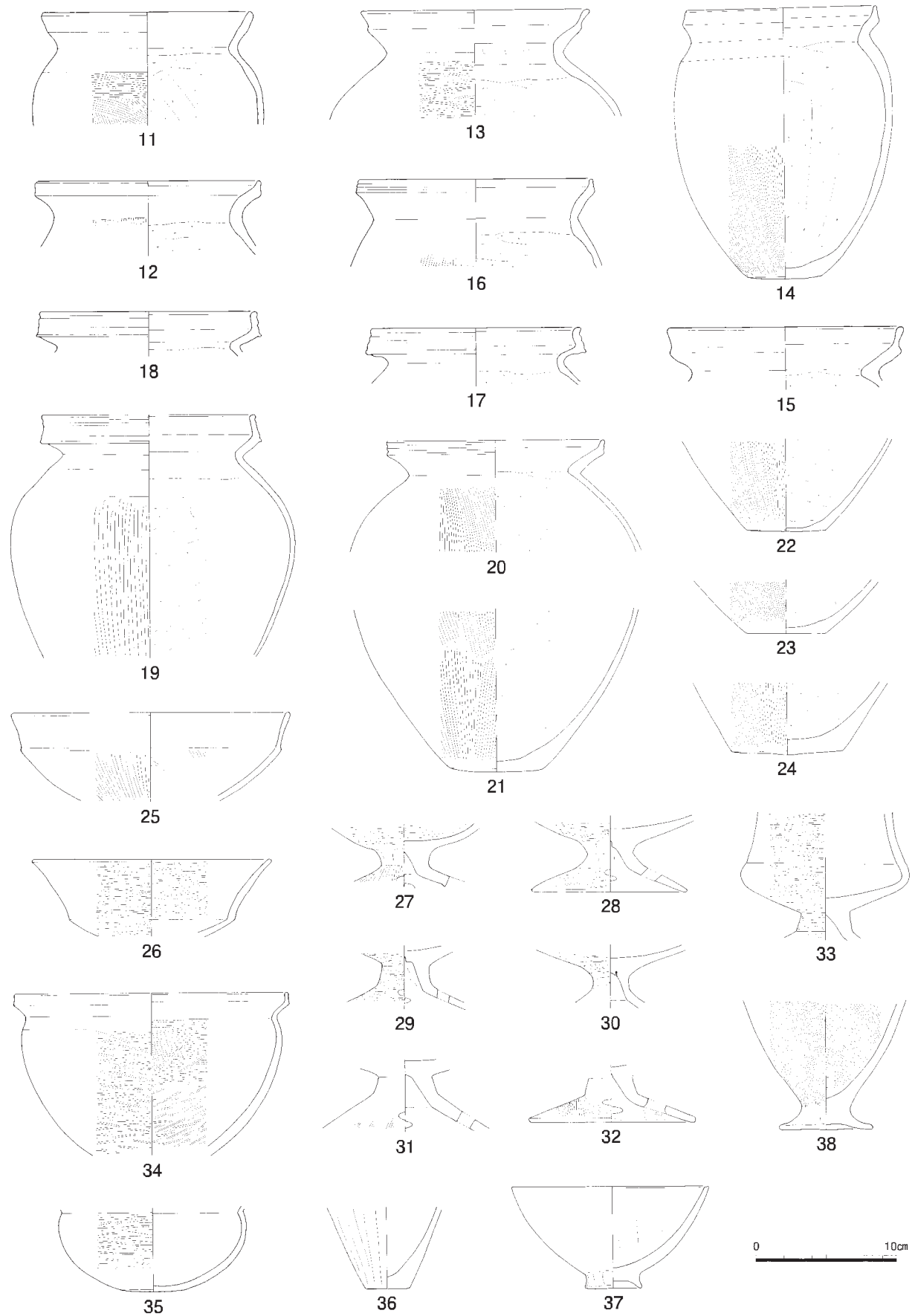
9



10

0 10cm

第13図 井戸 2 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)



第14図 井戸2出土遺物2 (1/4)

井戸2 (第7～9・13・14図、図版3・16)

1区の南西端で検出した井戸で、井戸1から約3m南に離れて位置する。掘り方が海拔高1.7mまで立ち上がり、水田2の上に70cm以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれたことがわかる。

掘り方平面形は、ごく一部の検出であるが、不整楕円形の可能性がある。検出面での長さは195cm、幅は60cm、深さは140cmを測る。底面は中心部分はずれていると思われ、現状で確認できる底面の海拔高は0.08mである。掘り方は二段になっており、断面形は漏斗形を呈する。4～7層では、人為的な埋土は確認できなかったが、4層の堆積後に形成された凹み内には、角礫や多量の土器が、廃棄されたような状態で出土した。また、6層下部からは鉢34の破片1点が出土した。

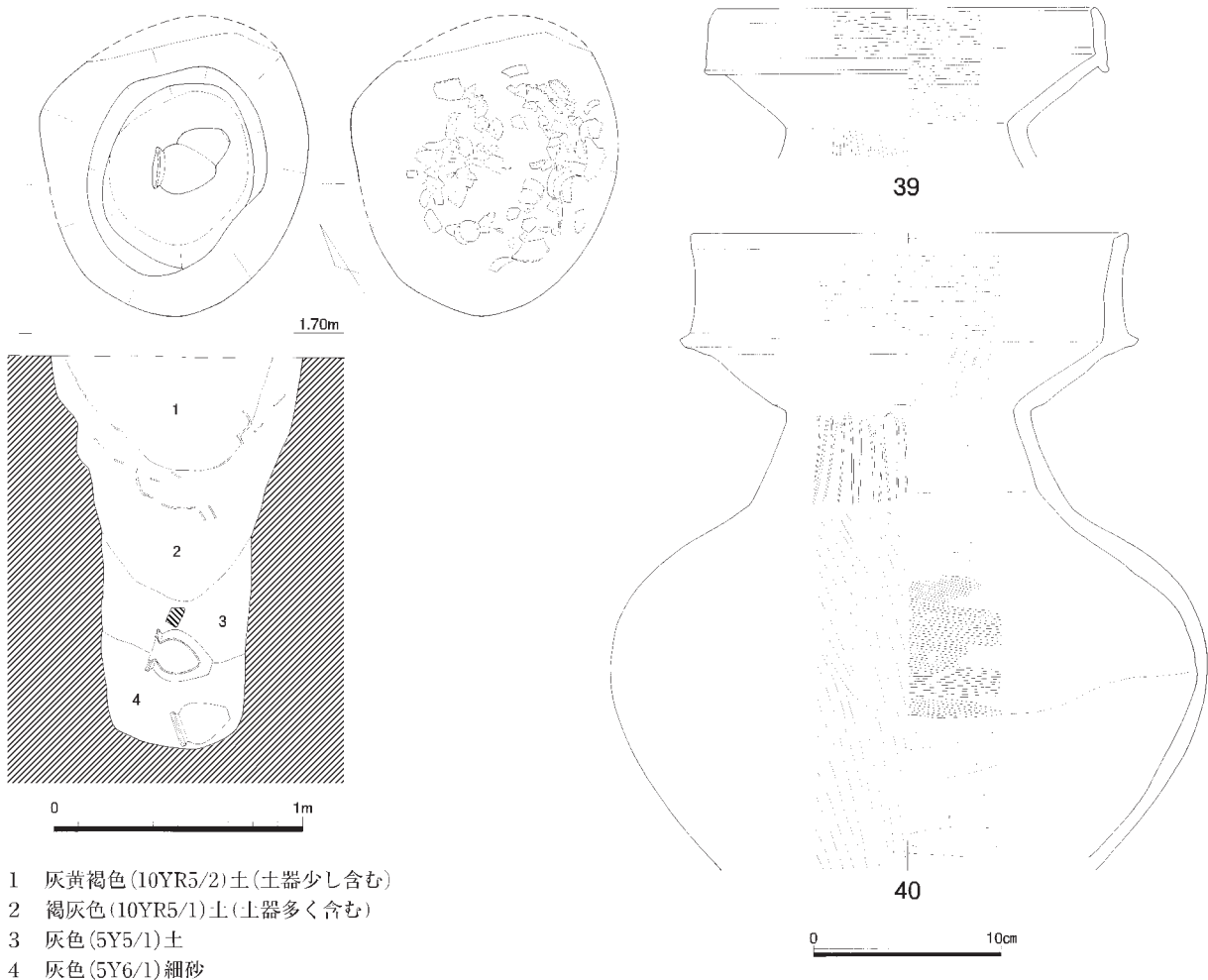
壺には、長頸の5・6や、短頸の8・9がある。甕では、体部外面下半の剥離が認められる10、口縁部外面と肩部以下に煤の付着が著しい13・20などがある。なお、10は讃岐系の甕である。高杯については、杯部は深く、脚部はいずれも短い。鉢では34の外面に煤が著しく付着している。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。

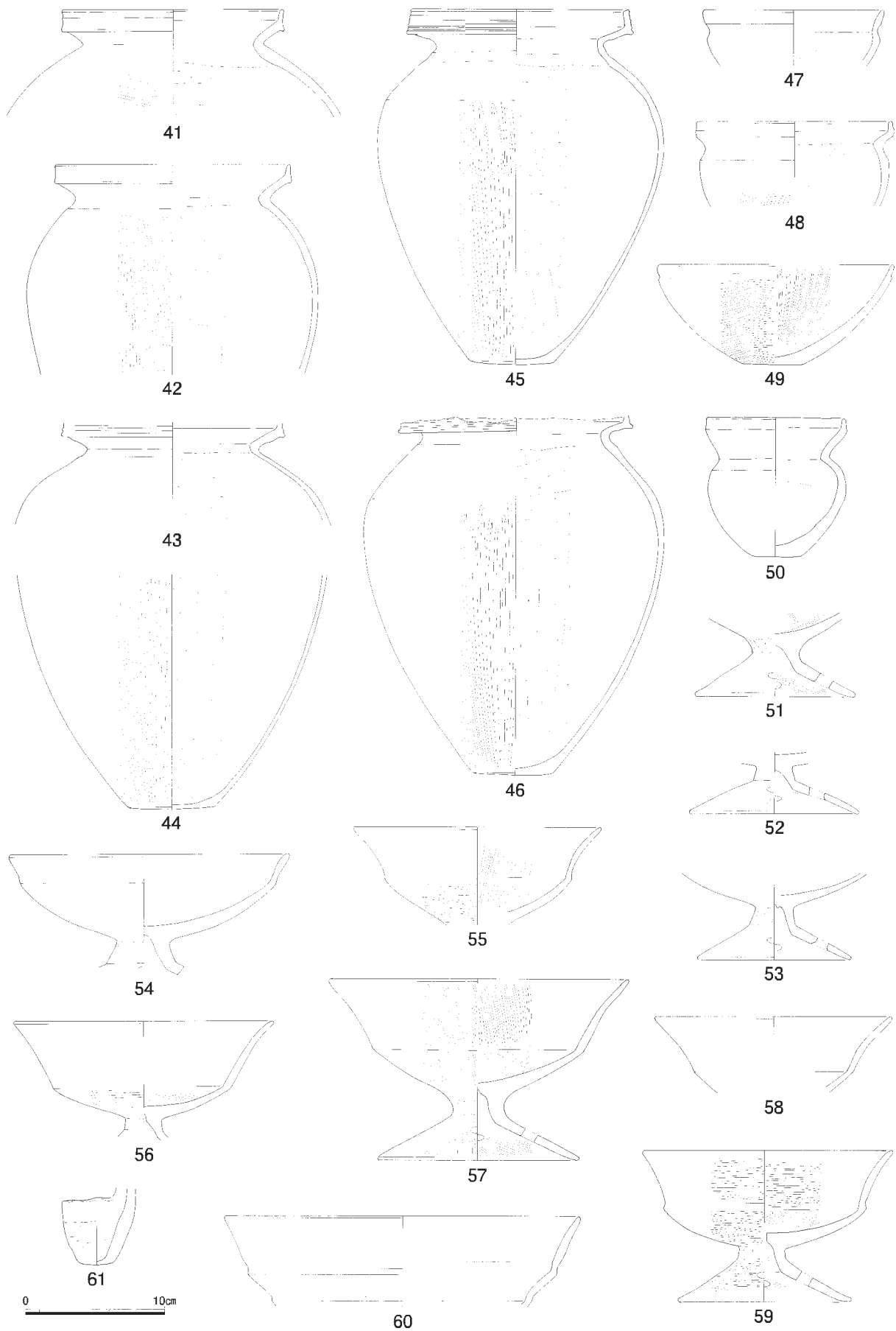
(柴田)

井戸3 (第7～9・15・16図、図版3・16)

井戸2の南2.9mに位置し、北側を土塙8によって壊されている。上面は長さ116cm、幅109cmの不整円形を呈し、深さ157cmにある底面は海拔高0.08mを測る。垂直ぎみに掘り込まれた下層には灰色砂が堆積し口縁部を欠いた甕45・46が出土したが、わずかに上方へ広がる上層では多量の弥生土器が礫



第15図 井戸3 (1/30)、出土遺物1 (1/4)



第16図 井戸3出土遺物2 (1/4)

とともに廃棄された状態で検出された。

39・40は二重口縁をもつ壺で、外面をヘラミガキで丁寧に調整する。41は頸部の短い壺で外面にヘラミガキを施し、内面を左方向にヘラケズリする。ヨコナデで仕上げた短い二重口縁をもつ甕42は、外面をタテハケ、内面を左方向にヘラケズリする。43~46は、短い二重口縁に擬凹線をめぐらす甕で、肩部内面のヘラケズリは右方向が優勢である。鉢は、口縁部が外反する47と二重口縁を備えた48、椀形の49があるが、口径は12.8~16.6cmといずれも小形である。50は口径9.8cm、器高10.0cmを測る小形の壺で、内外面をナデで調整する。高杯には、口縁部が短く浅い杯部をもつ54、深い杯部の口縁部が外反する55~59、口縁部が屈折して段をなす60がある。短い脚部はいずれも差込式で、裾部には4つの透かし孔を穿つ。61は口縁の一端に柄を取り付ける手捏ね土器である。これらの土器は弥生時代後期末に位置づけられる。 (亀山)

土壌1 (第7・8・17図)

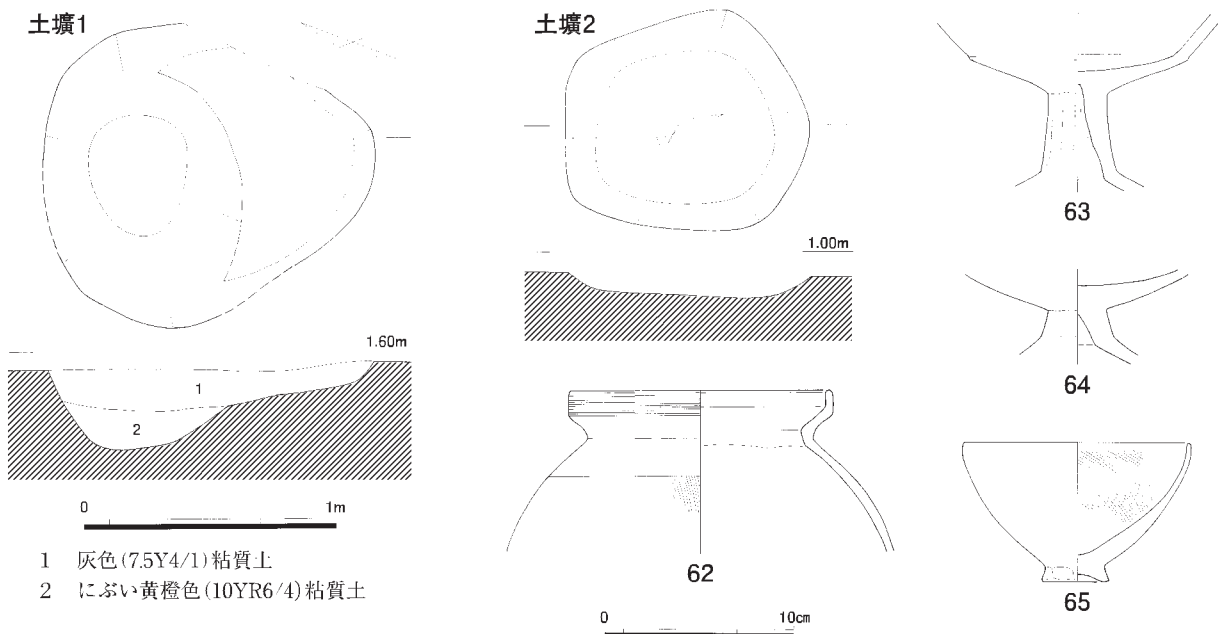
1区の南東端で検出した土壌である。遺構の東端は調査区外で、西側の一部は調査時の側溝にかかっている。遺構の掘り方は、海拔高1.6mで確認され、水田1の上に60cm以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれたことがわかる。

掘り方平面形は不整形円形を呈し、検出面での長さは131cm、幅は120cm、深さは31cmを測る。断面形は逆台形であるが、南側には平坦な段が形成され、北側が円形にくぼむ。底面の海拔高は1.21mを測る。2層から、甕62、高杯63・64、鉢65が出土した。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、古墳時代前期初頭と考えられる。 (柴田)

土壌2 (第7・8・17図)

1区の東側で検出した土壌で、土壌1から約7m西に離れて位置する。遺構の掘り方は、水田1の耕土を除去した後に確認されたが、それより高く立ち上がる可能性も残る。掘り方平面形は不整形円形を呈し、検出面での長さは96cm、幅は86cmを測る。出土遺物は、弥生土器の小片のみである。遺構の時期は、検出面から判断して、弥生時代中期~後期と考えられる。 (柴田)



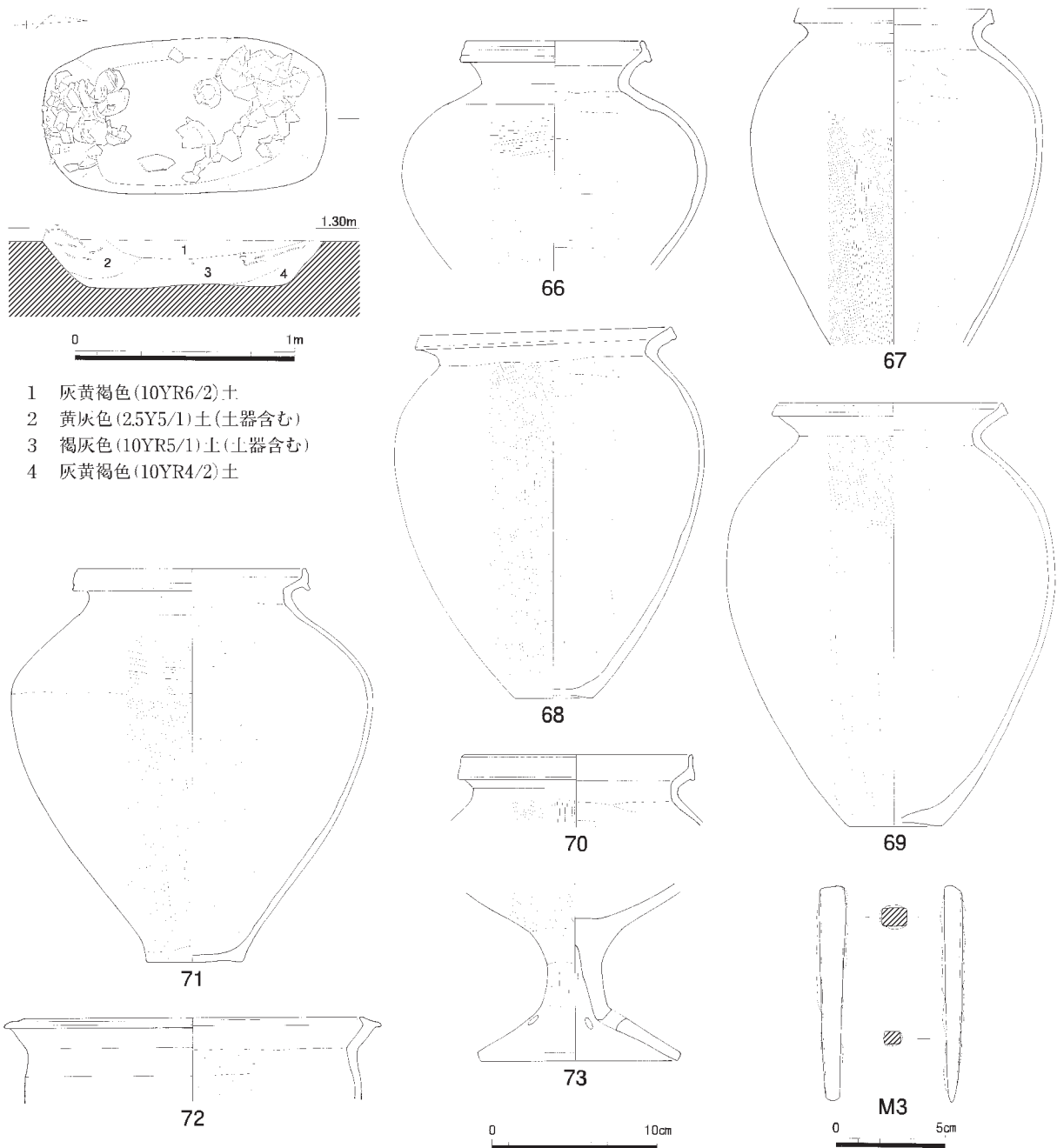
第17図 土壌1・2 (1/30)、出土遺物 (1/4)

土壌3 (第7・8・18図、図版4・16)

1区の中央付近で検出した土壌で、土壌2から約8m西に離れて位置する。遺構の掘り方は、海拔高1.25mで確認され、水田1の上に20cm以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれている。

掘り方平面形は、南北に長い隅丸長方形を呈し、検出面での長さは128cm、幅は69cmを測る。断面形は逆台形で、底面は水田1の田面近くまで到達する。

遺物は南北に分かれた状態で出土し、土層では、北側の方が南側より古いことが確認された。壺66・甕69・高杯73は北側から、甕67・68・70・71・鑿M3は南側から出土し、甕72は両方の土器片が接合した。また、1～3層中には炭粒が含まれ、特に2層には多い。壺66は短頸で、肩部の張りが強い。甕には、口縁部が短く屈曲する67・68とやや長くのびる69、上方に拡張する70・71などがある。M3



第18図 土壌3 (1/30)、出土遺物 (1/3・1/4)

は、断面形が長方形で、刃部に向かって幅は狭くなる。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期後葉と考えられる。(柴田)

土壌4 (第7～9・19図)

1区で中央で検出した土壌で、土壌3から約5m西に離れて位置する。遺構の掘り方は、海拔高1.25mで確認され、水田1の上に20cm以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれたことがわかる。

掘り方平面形は不整楕円形を呈し、検出面での長さは72cm、幅は62cmを測る。断面形は逆台形で、検出面からの深さは8cmである。底面の海拔高は1.16mで、水田1の田面には及ばない。遺構内からは、壺74が出土した。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。(柴田)

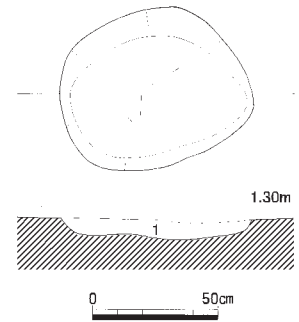
土壌5 (第7～9・20・21図、図版4)

1区の西側で検出した土壌で、土壌4から約8m西に離れて位置する。遺構の掘り方は、海拔高1.61mで確認された。

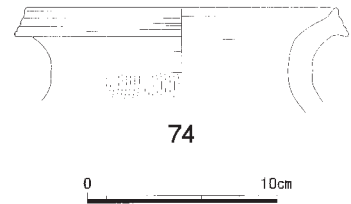
掘り方平面形は、南北に長い不整楕円形を呈し、検出面での長さは171cm、幅は87cmを測る。断面形は逆台形で、検出面からの深さは24cmであるが、北側がやや深くなっている。底面の海拔高は1.36mである。1層からは、若干の炭粒や焼土とともに多くの土器片が出土した。これらは、壺75～77、甕78～89、高杯90～96、鉢97～100など一通りの器種がそろっている。

中央付近から出土した甕81は、口縁部の欠損はないが、体部の破片はほとんど出土していない。中央東寄り出土した高杯92も、杯部に欠損はないが、脚部は出土していない。高杯95は南側で出土しているが、杯部は出土していない。その他、口縁部や体部の破片が出土しているが、これらもあまり接合しない。

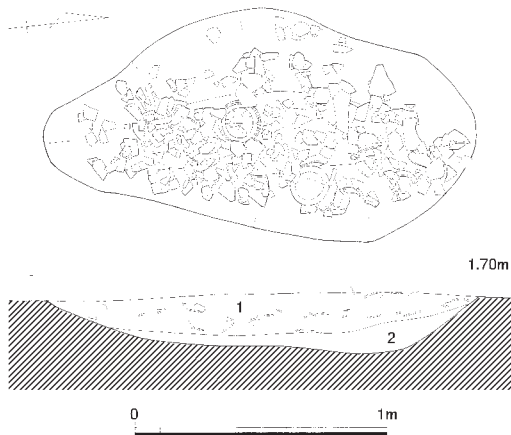
遺構の時期は、出土遺物から、弥生時代後期後葉と考えられる。(柴田)



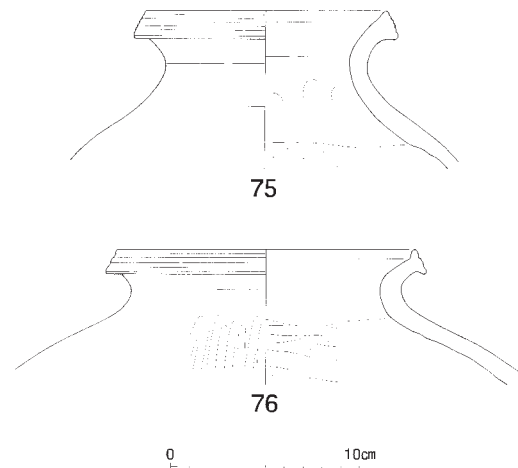
1 黄灰色(2.5Y5/2)土
(炭・焼土少し含む)



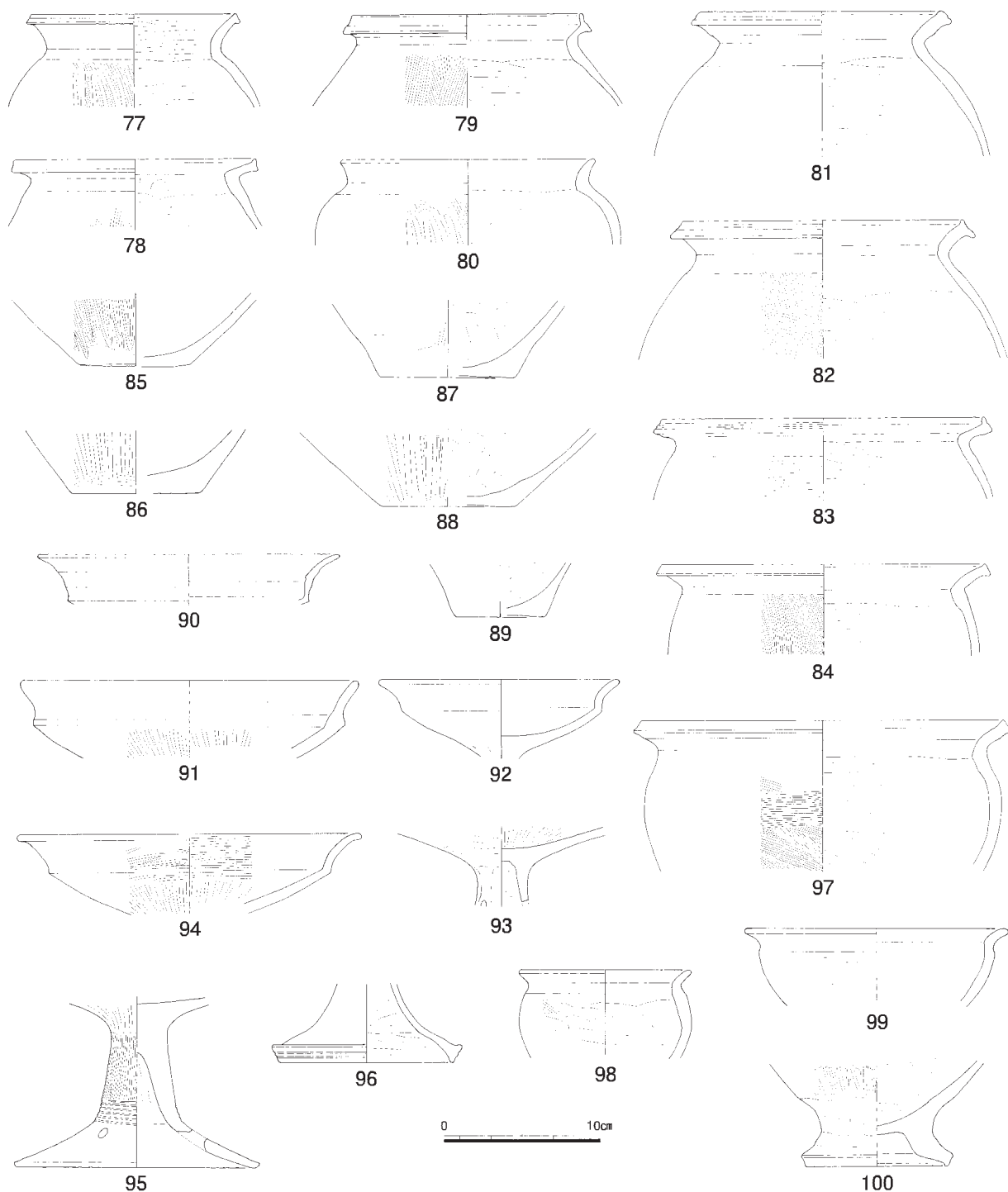
第19図 土壌4 (1/30)、
出土遺物 (1/4)



1 褐灰色(10YR4/1)土 2 灰黄褐色(10YR4/2)土



第20図 土壌5 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)

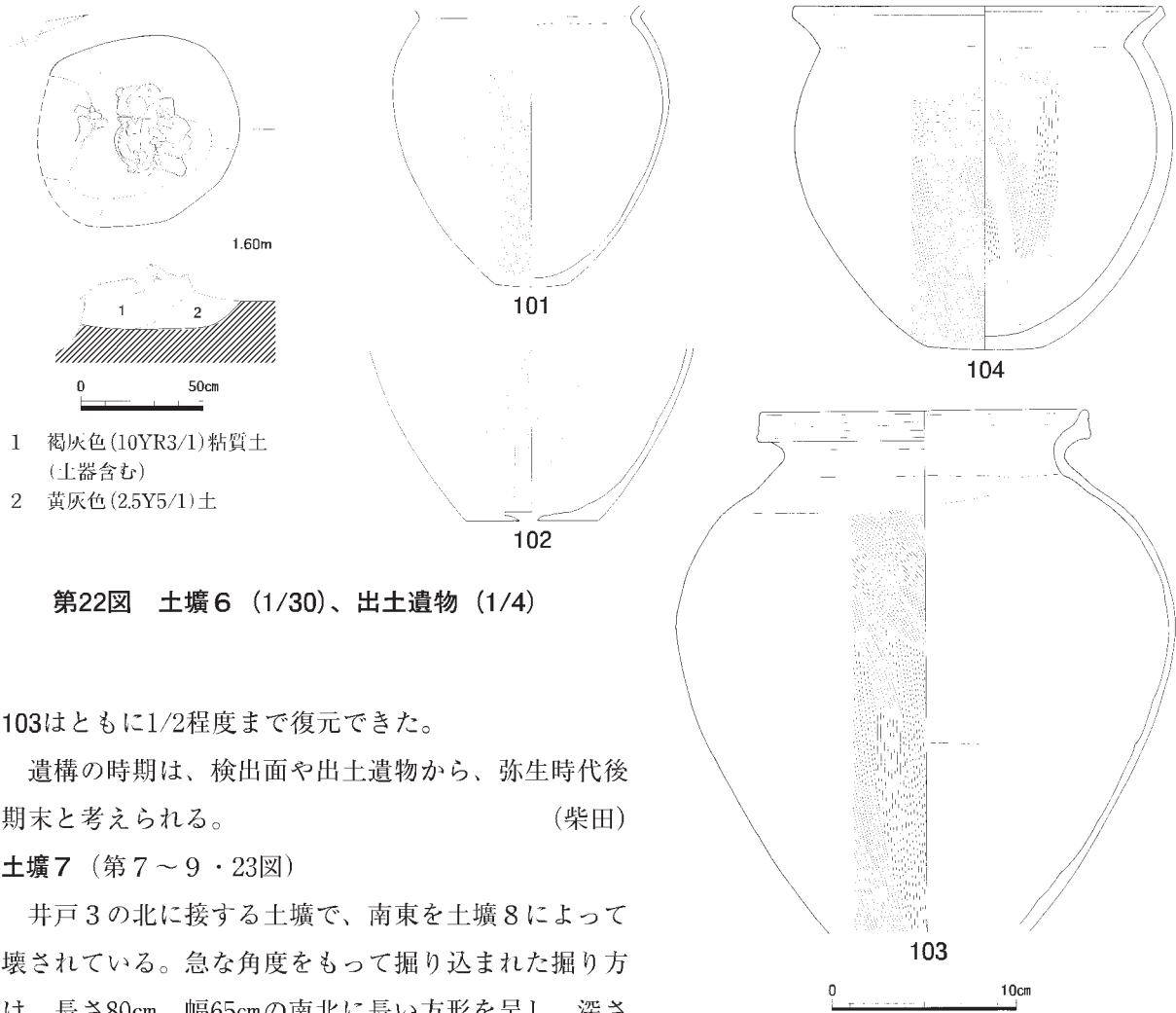


第21図 土壙5出土遺物2 (1/4)

土壙6 (第7～9・22図)

1区の南西端で検出した土壙で、井戸2の東に近接して位置する。遺構の掘り方は、海拔高1.4mで確認されたが、遺物の出土状態から、海拔高1.6m以上から掘り込まれたと考えられる。これにより、水田1の上に60cm以上の堆積層が形成された段階に掘り込まれていることがわかる。また、掘り方の南側は柱穴に切られている。

掘り方平面形は不整円形で、検出面での長さは84cm、幅は76cmを測る。断面形は皿形で、検出面からの深さは25cmである。1層からは、甕101～103や鉢104が出土した。鉢104は完形に近く、甕101・



第22図 土墳6 (1/30)、出土遺物 (1/4)

103はともに1/2程度まで復元できた。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。(柴田)

土墳7 (第7～9・23図)

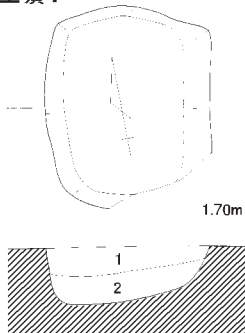
井戸3の北に接する土墳で、南東を土墳8によって壊されている。急な角度をもって掘り込まれた掘り方は、長さ80cm、幅65cmの南北に長い方形を呈し、深さは22cmを測る。

埋土は、暗灰黄色をなす上層と黄灰色の下層に分かれるが、遺物は出土しておらず、時期については明らかでない。(亀山)

土墳8 (第7～9・23図)

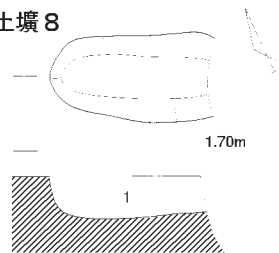
土墳7の南西に重複する土墳で、南東を柱穴により壊されているが、現状は長さ65cm、幅35cmの北西から南東に長い楕円形を呈する。検出面からの深さは17cmを測り、断面はU字形をなす。

土墳7



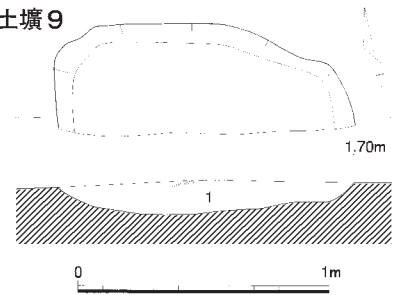
- 1 暗灰黄色(2.5Y5/2)土
- 2 黄灰色(2.5Y5/1)土

土墳8



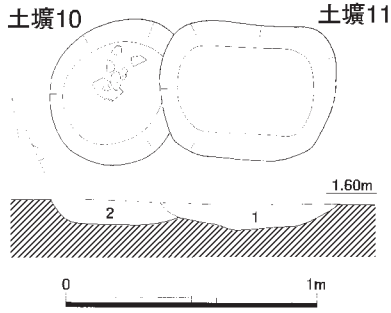
- 1 褐灰色(10YR5/1)土

土墳9

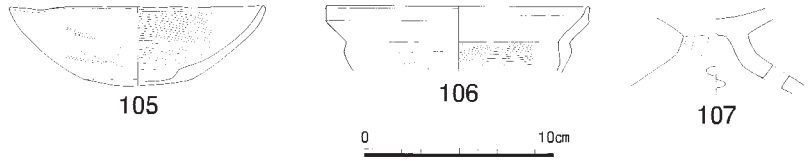


- 1 黄灰色(2.5Y5/1)土(土器・炭含む)

第23図 土墳7～9 (1/30)



- 1 褐灰色(10YR5/1)土(土器含む)
- 2 褐灰色(10YR5/1)土(土器・炭含む)



第24図 土壌10・11 (1/30)、出土遺物 (1/4)

弥生土器の小片がわずかに出土したのみで詳細な時期は明らかではないが、埋土の特徴や他遺構との関係から、弥生時代後期末と見て大過ないものと思われる。(亀山)

土壌9 (第7・9・23図)

土壌8の東3.8mに位置する土壌で、試掘坑の北壁にかかって検出したため南半は明らかではないが、現状では長さ117cm、幅44cm、深さ14cmの隅丸方形を呈する。断面は皿形を呈し、黄灰色をなす埋土からは炭化物とともに少量の弥生土器が出土した。これらは小片のため図示できなかったが、弥生時代後期末の甕・高杯と思われる。(亀山)

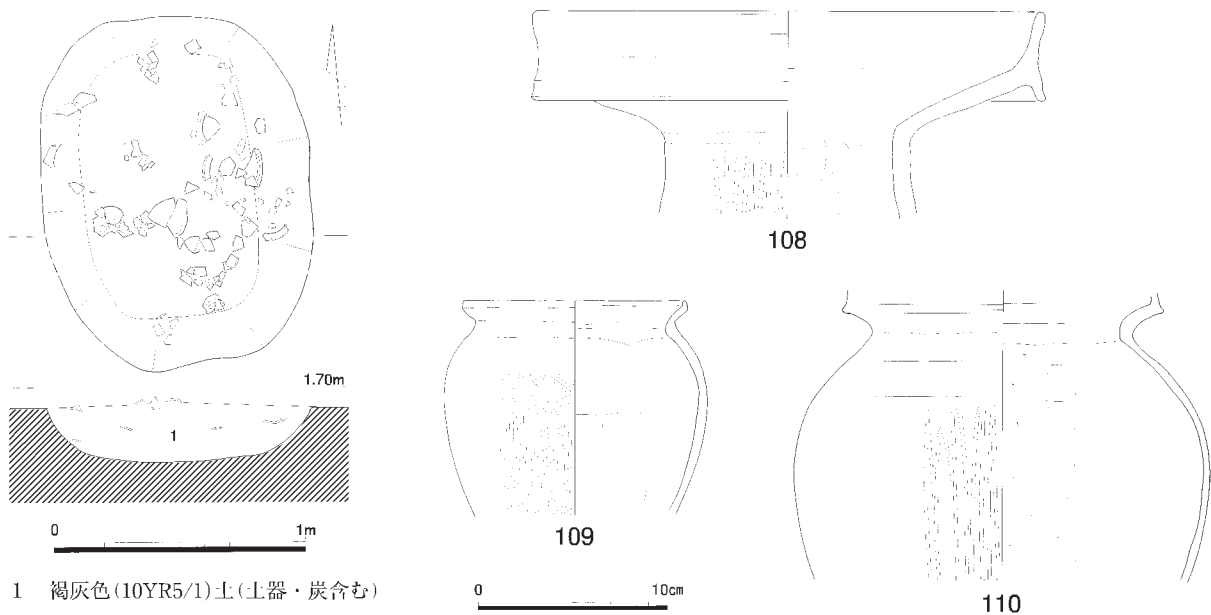
土壌10 (第7～9・24図)

土壌8の東1.4mで検出した、長さ61cm、幅53cm、深さ10cmを測る楕円形の土壌である。検出段階では東側に重複する土壌11と一連のものとも思われたが、土層断面を観察した結果、切りあい関係にある2基の土壌と判断した。埋土は褐灰色を呈し、弥生土器が少量出土した。

口径13.3cmを測る105はいびつな椀形の鉢で、外面はナデ、内面はハケメで粗く調整する。弥生時代後期末に属するものと思われる。(亀山)

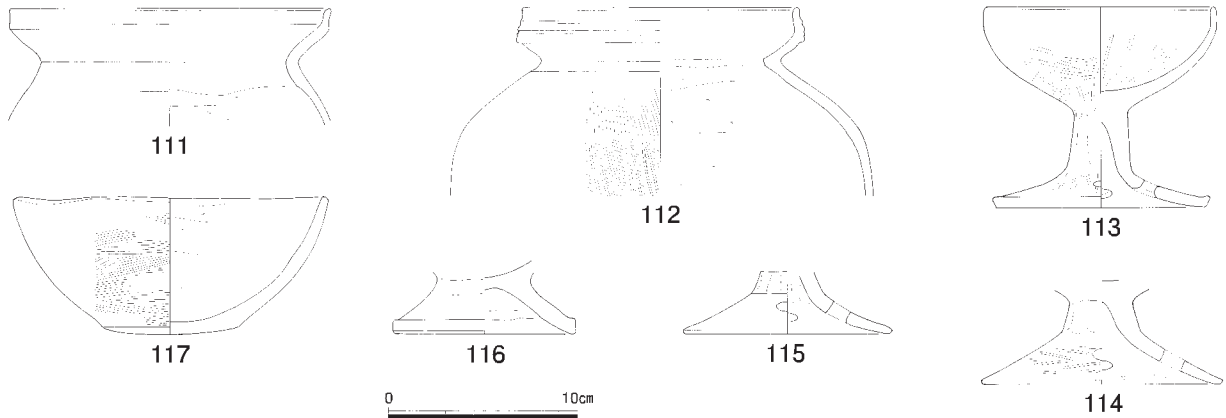
土壌11 (第7～9・24図)

土壌10の東に重複する土壌で、長さ70cm、幅53cmの隅丸方形を呈し、深さ10cmの断面は浅い皿形をなす。炭化物を含んだ埋土から弥生土器が少量出土した。



- 1 褐灰色(10YR5/1)土(土器・炭含む)

第25図 土壌12 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)



第26図 土壙12出土遺物2 (1/4)

106は口縁端部を上方に拡張する小形の鉢で、精良な胎土をもつ。107は短い脚部をもつ高杯で、裾部には4つの透かし孔を飾る。これらの土器からこの土壙は、弥生時代後期末と判断される。

(亀山)

土壙12 (第7・9・25・26図、図版4)

2区の北東に位置する土壙で、土壙11の東0.8mで検出した。長さ140cm、幅106cmの楕円形を呈し、深さ24cmある断面は逆台形をなす。炭を含む埋土は黒ずんだ褐灰色をなし、弥生時代後期末の土器108~117を出土した。

108は、筒状の頸部から大きく開く二重口縁を備えた壺である。109・111は口縁端部を上方へつまみ上げる甕で、内面をナデで調整する109に対し、111は左方向にヘラケズリする。110・112は短い二重口縁に凹線を飾る甕で、肩の張る体部は外面に筋状のヘラミガキを施し、内面を右方向にヘラケズリする。114・115は高杯の脚部で、短い柱状部と4つの透かし孔を飾る裾部からなる。口径16.2cmを測る117は椀形の鉢で、外面をハケメ、内面をナデで粗く調整する。

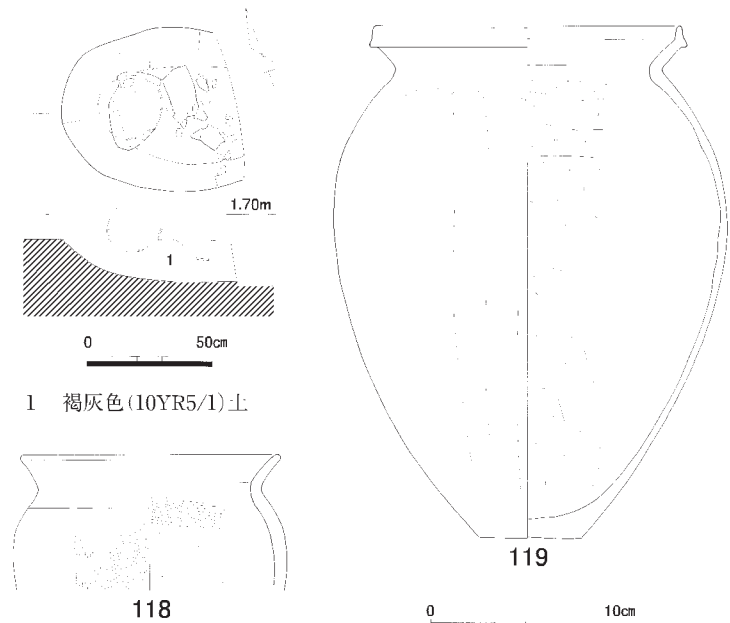
(亀山)

土壙13

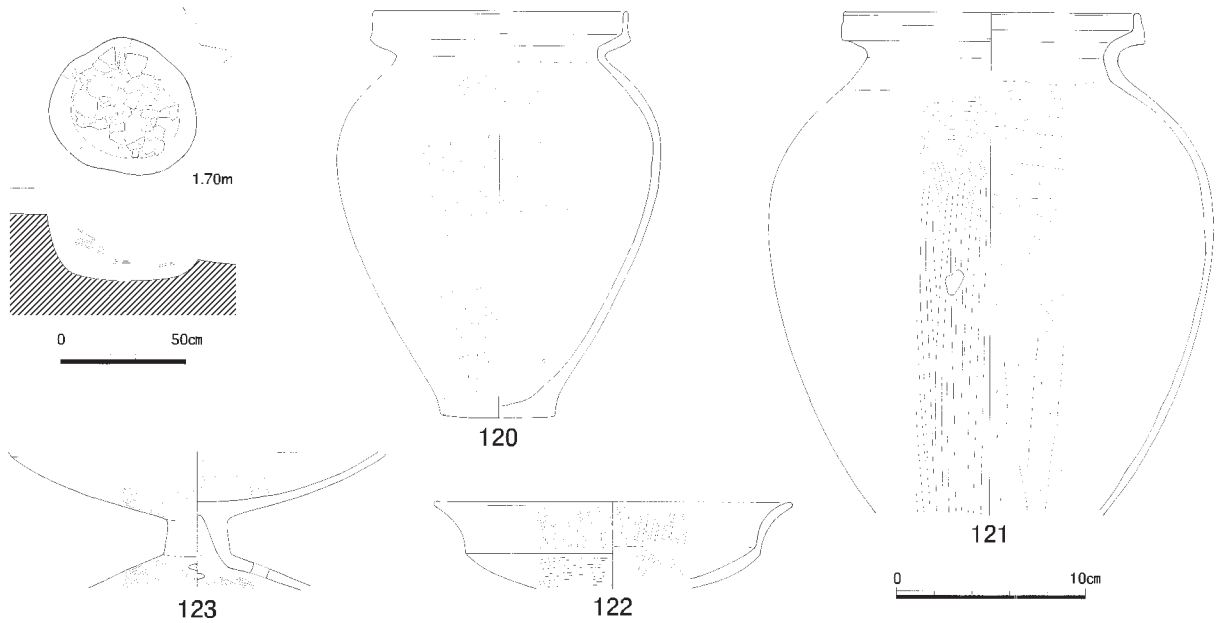
(第7・9・27図、図版5・17)

試掘坑の西壁にかかって検出した土壙で、土壙9の南西0.9mに位置する。現状は、長さ72cm、幅65cmの楕円形をなし、深さ16cmを測る。褐灰色をなす埋土からは、全形を知りうる甕119のほか甕や鉢の破片が出土した。

118はく字形の口縁部をもつ小形の甕で、体部外面はタテハケ、内面は左方向のヘラケズリで調整する。口径16.1cm、器高27.2cmを測る119は口縁端部をわずかに上方へ拡張する甕で、体部外面をナデ、内面を左方



第27図 土壙13 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第28図 土壌14 (1/30)、出土遺物 (1/4)

向のヘラケズリで調整し、肩部には不明瞭な刺突痕が残る。これらはいずれも弥生時代後期末に位置づけられる。(亀山)

土壌14 (第7・9・28図、図版5)

土壌13の西0.9mに位置する土壌で、土壌16の北西を掘り下げる過程で検出したが、本来はその埋土の上から掘り込まれていたものと判断した。長さ59cm、幅53cmの円形を呈し、深さ26cmある土壌内からは炭化物とともに弥生土器が折り重なった状態で出土した。

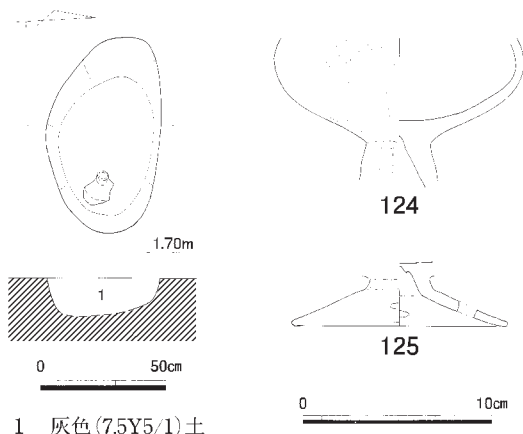
口径13.3cm、器高21.4cmを測る120は二重口縁をもつ小形の甕で、体部外面をハケメとヘラミガキ、内面を左方向のヘラケズリで調整する。121は径15.4cmの二重口縁をもつ甕で、肩部にはタタキメを残し、体部の中ほどには穿孔が施されている。口径19.0cmを測る122は高杯の杯部で、外反する短い口縁部には黒斑が残る。123は短い脚部をもつ高杯で、浅い杯部は口縁部を失っている。これらはいずれも弥生時代後期後葉に属する。(亀山)

土壌15 (第7・9・29図)

土壌14の南西0.8mに位置する土壌で、土壌16の南西を切って掘り込まれており、古代の柱穴と重複する。長さ78cm、幅45cmの不整な楕円形を呈し、深さは15cmを測る。灰色をなす埋土から弥生土器124・125が出土している。

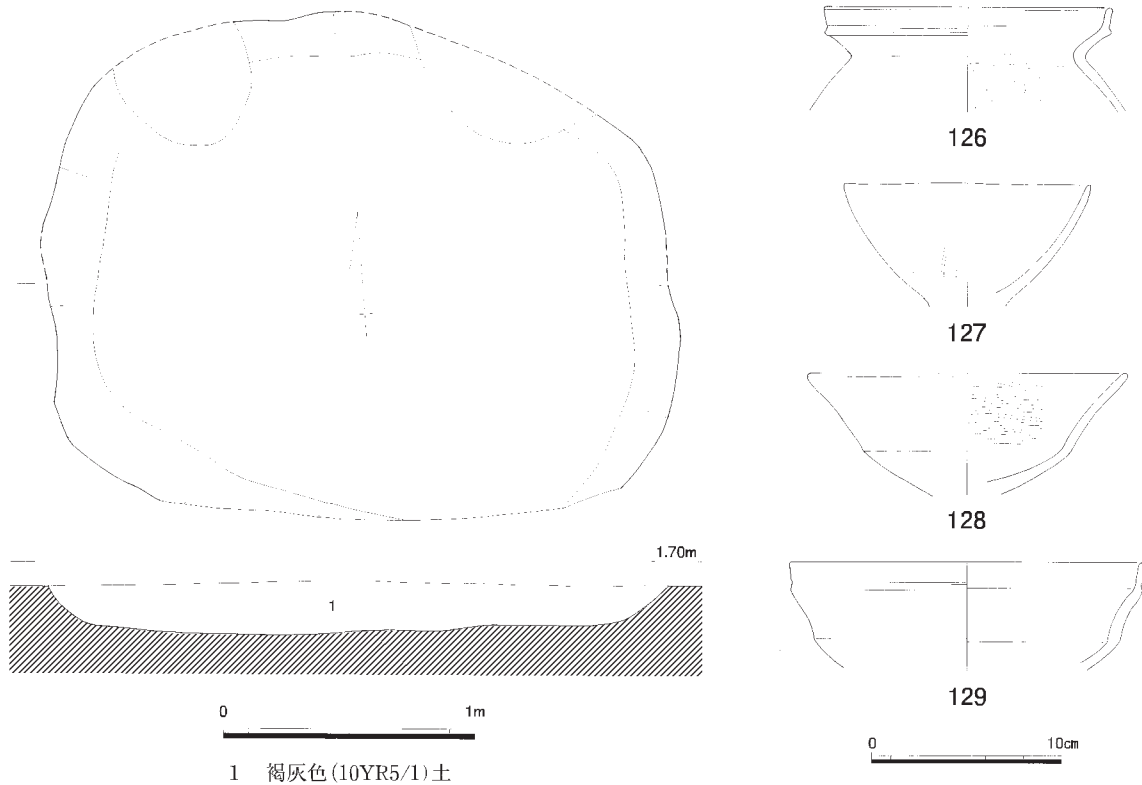
124は偏球形の体部に短い脚部を取り付けた小形の壺で、口縁部と脚裾部を欠いている。125は高杯の脚部で、短い柱状部から広がる裾部には4つの透かし孔を飾る。

これらの遺物から、時期は弥生時代後期後葉と判断される。(亀山)



1 灰色(7.5Y5/1)土

第29図 土壌15 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第30図 土壙16 (1/30)、出土遺物 (1/4)

土壙16 (第7・9・30図)

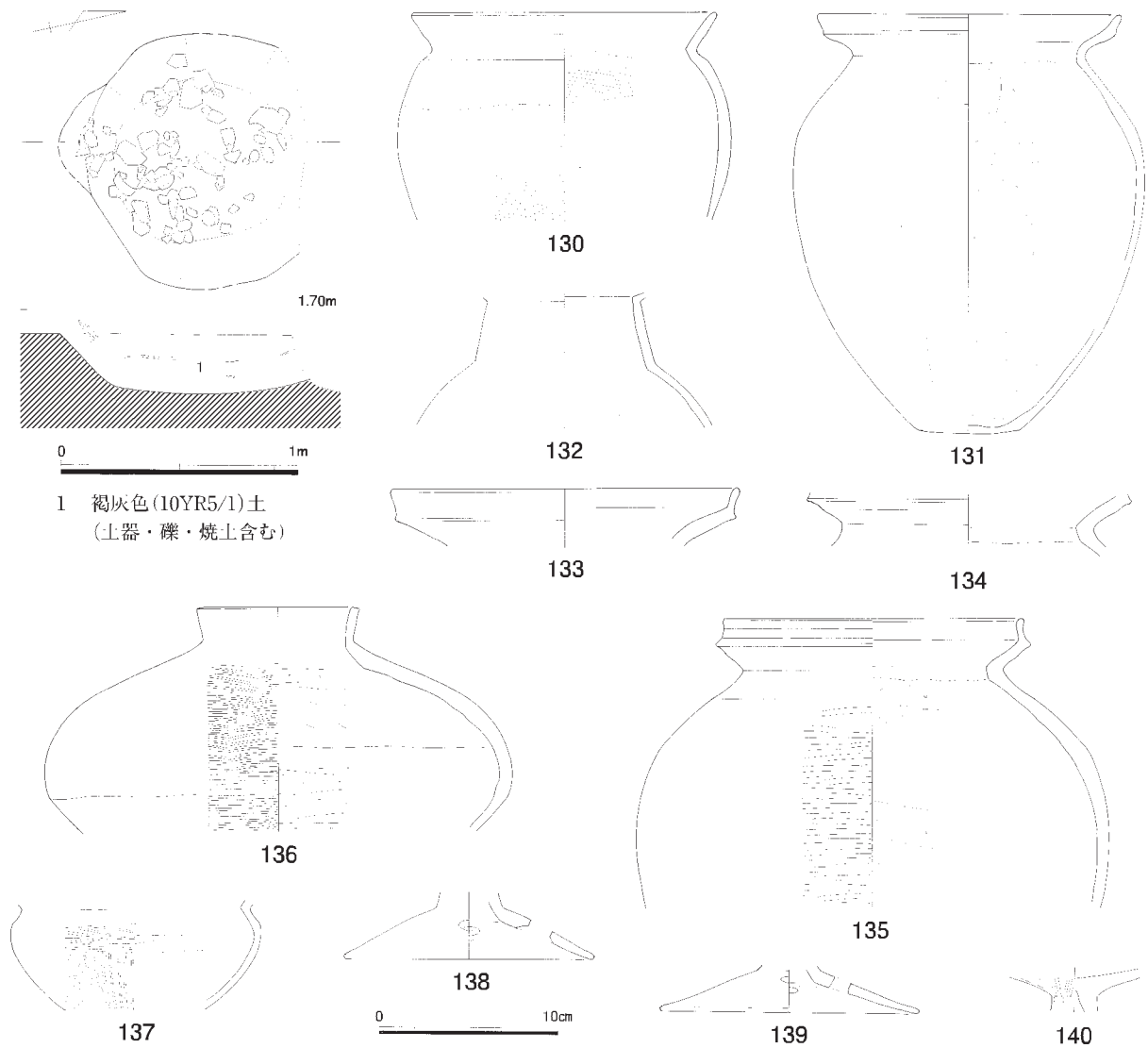
北西で土壙14、南東で土壙15と重複する大形の土壙で、土壙13の南西0.2mに位置する。他の遺構に比して掘り方は明瞭ではないが、長さ255cm、幅198cmの不整な楕円形をなすものと思われる。高さ21cmある壁面は平坦な底面から緩やかに立ち上がり、断面は皿形をなす。褐灰色を呈する埋土からは土器が少量出土した。

126は径15.0cmの二重口縁をもつ甕で、肩部内面を左方向にヘラケズりする。口径13.0cmを測る127は直線的に開く鉢で、底部を欠いているものの短い台を備えていたものと思われる。128は外反する口縁部と浅い体部からなる高杯の杯部で、口径は16.8cmを測る。129も高杯で、口径18.6cmを測る杯部は屈折して段をなす。これらの遺物から、遺構の時期は弥生時代後期末と思われる。(亀山)

土壙17 (第7・9・31図、図版5)

土壙16の南に接する土壙である。弥生土器がまとまって確認されたことからその周辺を精査したところ、長さ117cm、幅105cm、深さ25cmの不整な円形を呈する掘り方を検出した。褐灰色をなす埋土には土器とともに拳大の礫や焼土が多く含まれていた。

壺132は口縁部と体部を欠いているが、金雲母を含む褐色の胎土から讃岐東部からの搬入品と見られる。133~135は二重口縁をもつ短頸壺で、口径16.6cmを測る135は体部外面をヘラミガキ、内面を左方向のヘラケズりで調整する。136は直立する短い口頸部と偏球形の体部をもつ壺である。130はく字形の口縁部をもつ甕で、体部外面をハケメ、内面をナデで粗く調整する。口径16.8cm、器高23.5cmに復元される131は、口縁端部を斜め上方に拡張し、体部外面をナデ、内面を右方向のヘラケズりで仕上げる。137は口縁部が外反する小形の鉢、138~140は短い脚部をもった高杯である。これらの遺物はいずれも弥生時代後期末に位置づけられる。(亀山)



第31図 土壌17 (1/30)、出土遺物 (1/4)

土壌18 (第7・9・32図)

2区の中央北よりで検出した土壌で、土壌17の0.3m東に位置する。南西は古代の柱穴に切られているものの、長さ71cm、幅46cmの東西に長い楕円形を呈し、壁面は深さ17cmにある底面から西側は緩やかに、東側はやや急に立ち上る。

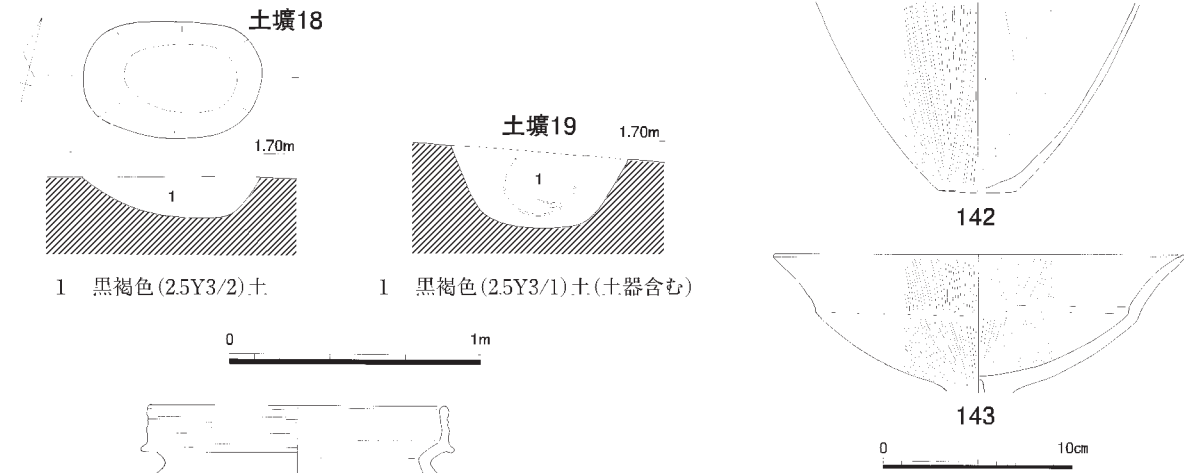
黒褐色をなす埋土から遺物は出土しておらず、詳細な時期については明らかでないが、他の遺構との関係から弥生時代後期後葉～末と推定される。(亀山)

土壌19 (第7・9・32図、図版17)

2区の中央西端で検出した、土壌17の南西5mの地点に位置する土壌である。

調査区西側の側溝掘り下げに際して弥生土器141が出土した。このため、その壁面を精査したところ土壌の掘り方を検出したが、調査区外に広がっていることから平面形は確認できなかった。断面で確認できる規模は、長さ70cm、深さ30cmを測り、逆台形を呈する内部には黒褐色土が堆積していた。

141は甕である。二重になる口縁部には凹線を飾り、倒卵形をなす体部の内面は下半のみヘラケズリで調整する。出土土器から時期は弥生時代後期後葉と考えられる。(上柵)



第32図 土壌18・19 (1/30)、
出土遺物 (1/4)

土壌20

(第7・9・33~39図、図版6・17・18)

2区の中央西寄りの地点で検出した土壌で、土壌19の東2mに位置する。

古代の柱穴を掘り下げていく過程で、その壁面に弥生土器の集積が確認された。そこで精査しながら徐々に全体の掘り下げを進めたところ、V字形を呈する掘り方を検出したが、これは2基の土壌が重複したものであることが断面観察により判明した。最初に掘削され

た土壌20aは、長さ237cm、幅111cmで、北西から南東に主軸を持つ長楕円形土壌である。深さは49cmを測り、断面は逆台形をなす。弥生土器は炭混じりの灰色砂質土が20~30cmほど堆積した段階で廃棄されており、土壌の掘削時点から意図されたものではない。出土した弥生土器はいずれも厚手で大形の器種が多い。土壌20bは重複する範囲を明確に区分できなかったが、長さ100cm、幅71cmの楕円形をなすものと推測され、検出面からの深さは30cmを測る。出土した弥生土器は薄手で小形の器種が多い点で土壌20aと異なる。

出土遺物には50個体を数える弥生土器のほか棒状の鉄器M4がある。

壺は17個体あり、このうち全形のわかるものは長頸壺11個体、倒卵形の短頸壺4個体、偏球形の短頸壺2個体がある。精良な胎土をもつ144は、二重口縁に波状文や鋸歯文を飾り、ヘラミガキで丁寧に調整する外面には器表の剥離が認められた。145は短く直立する口頸部と偏球形の体部からなる壺で、外面には煤が遺存する。多条の沈線をめぐらす二重口縁と145に似た体部をもつ146も、肩部下半に器表の剥離が見られる。長い頸部をもつ148は外表の剥落が甚だしく、内面にも器表の剥離が認められる。口縁部を欠いた長頸壺150にも器表の剥離が見られた。154は沈線をめぐらす筒状の頸部と体部の中程が張る壺で、体部に剥離が認められる。155は頸部の下端に突帯をめぐらせた壺で、受

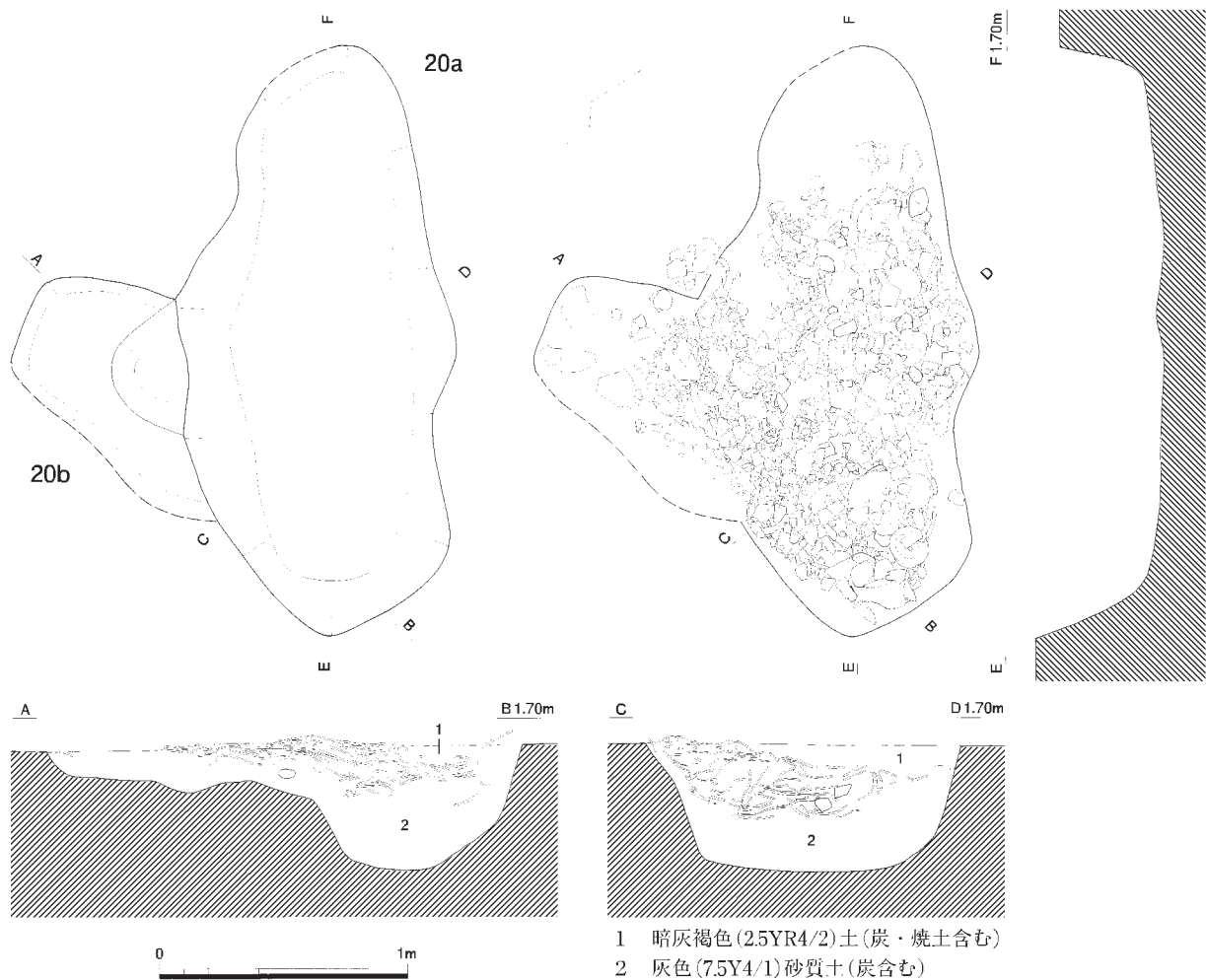
け口状の二重口縁には沈線文を飾る。球形ぎみの体部に二重口縁をもつ158は内面下半のみヘラケズリする壺で、焼成不良の器壁は剥落が顕著である。159は体部のゆがみが著しく、160も器表が剥離していた。く字形の口縁部をもつ161は肩部に穿孔が認められる。

甕は11個体あり、く字形の口縁部をもつ164・170、口縁端部をわずかに拡張する162・163・165～168、二重口縁をもつ169・172がある。このうち167に吹きこぼれの痕跡が見られるほか、168～172の外面には器表の剥離が認められた。

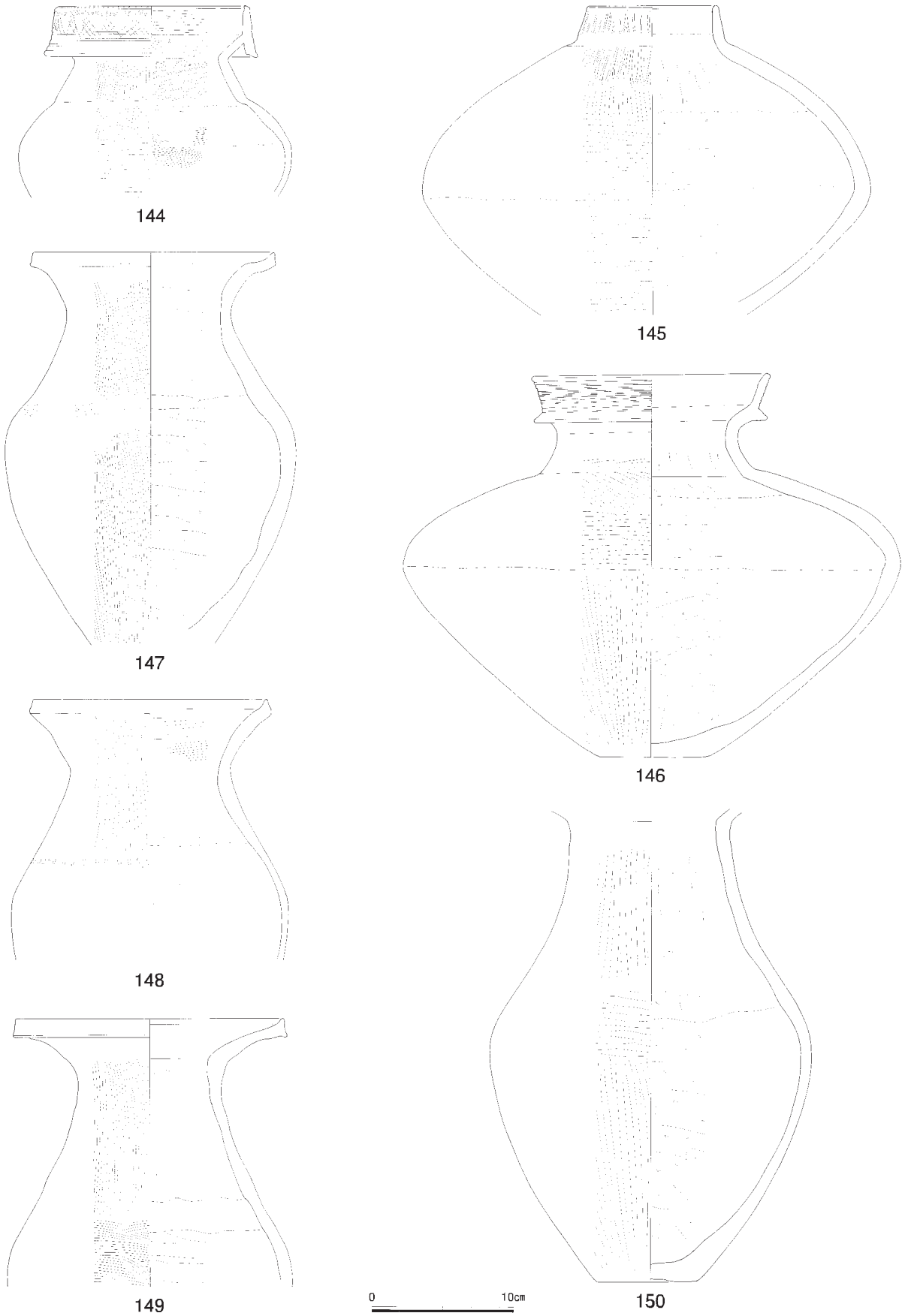
11個体ある高杯は、口縁部が外反する173・174、杯部が段をなす175、杯部が浅い176～178、椀形の杯部をもつ179に分けられるが、いずれも短い脚部に4つの透かし孔を飾る。

鉢は14個体ある。口径10.9～16.2cmを測る小形の鉢のうち183～187は厚手で粗雑なつくりとなっている。189～193は口径38.9～50.3cmを測る大形の鉢で、ひずみが見られるものが多い。また193のように軟質に焼成されたものもあり、外面は器表の剥離が顕著である。

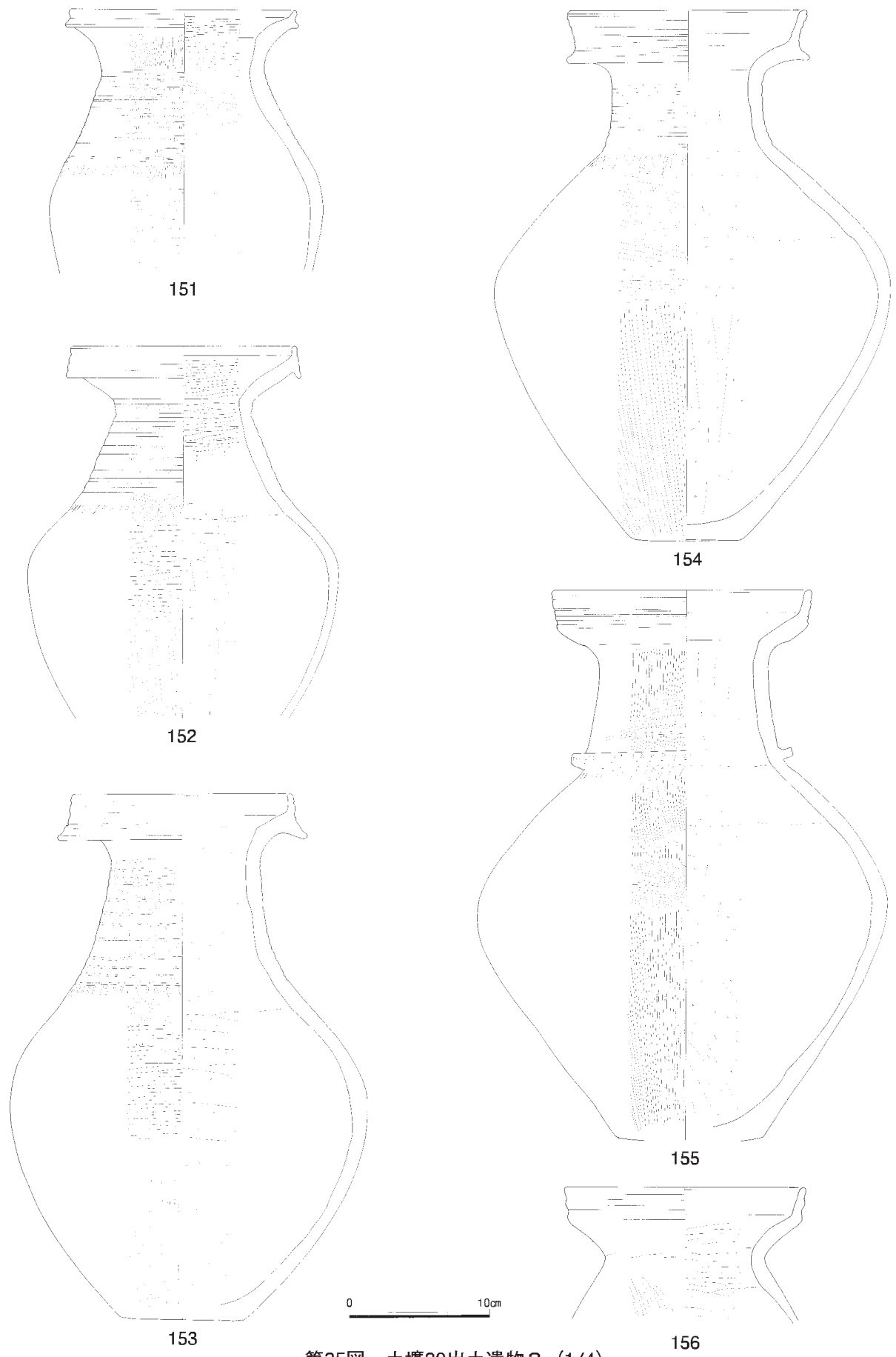
このように、土壙20から出土した弥生土器には形状の不整や軟質の焼成、器表の剥離などの特徴が見られる。器表の剥離は乾燥が不十分な土器の焼成に際してしばしば生じるもので、剥落した器面に二次的な被熱の痕跡はうかがえないものの、焼成に失敗した土器をまとめて廃棄したとも考えられる。出土土器から時期は弥生時代後期後葉と推定される。(上柙)



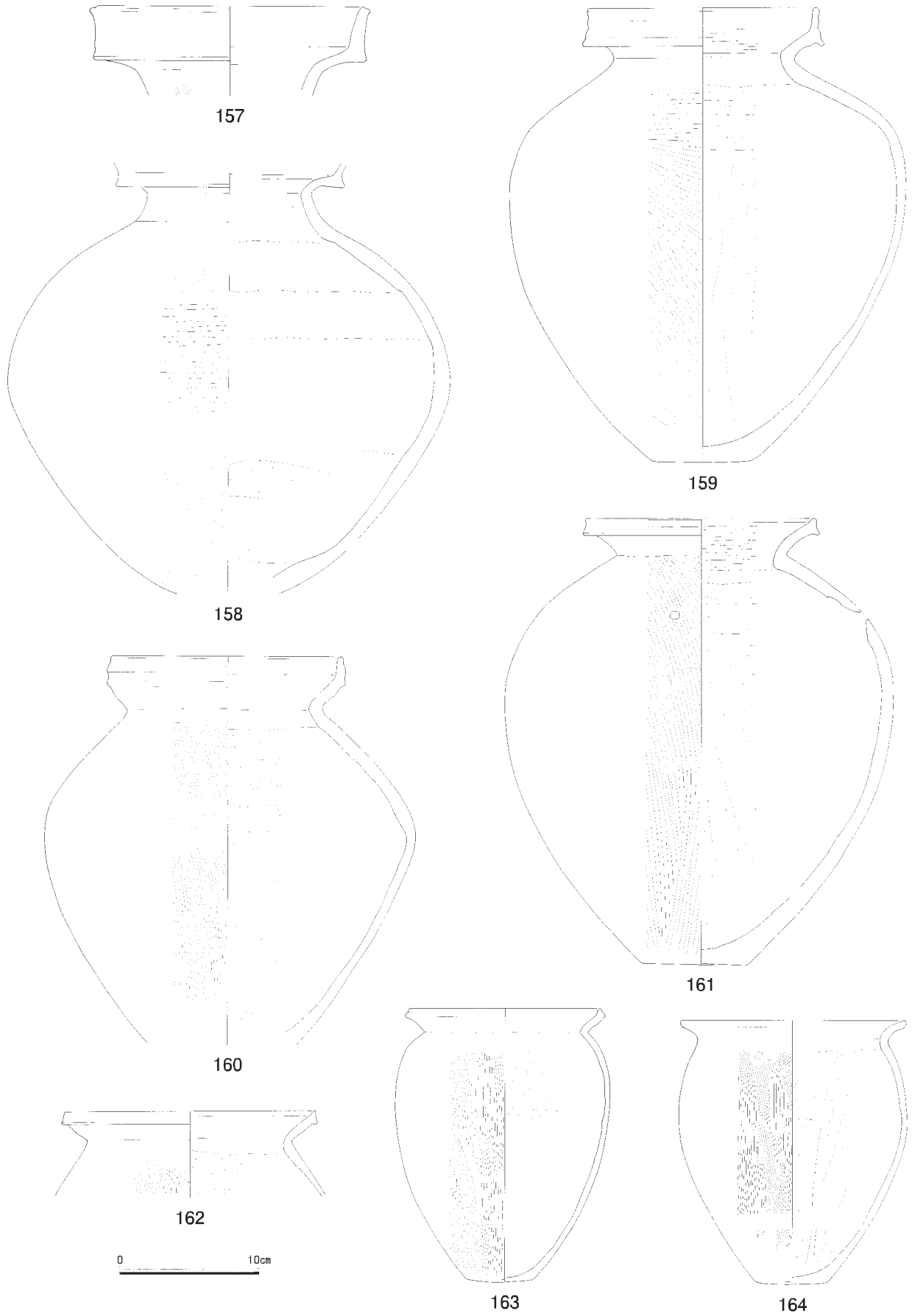
第33図 土壙20 (1/30)



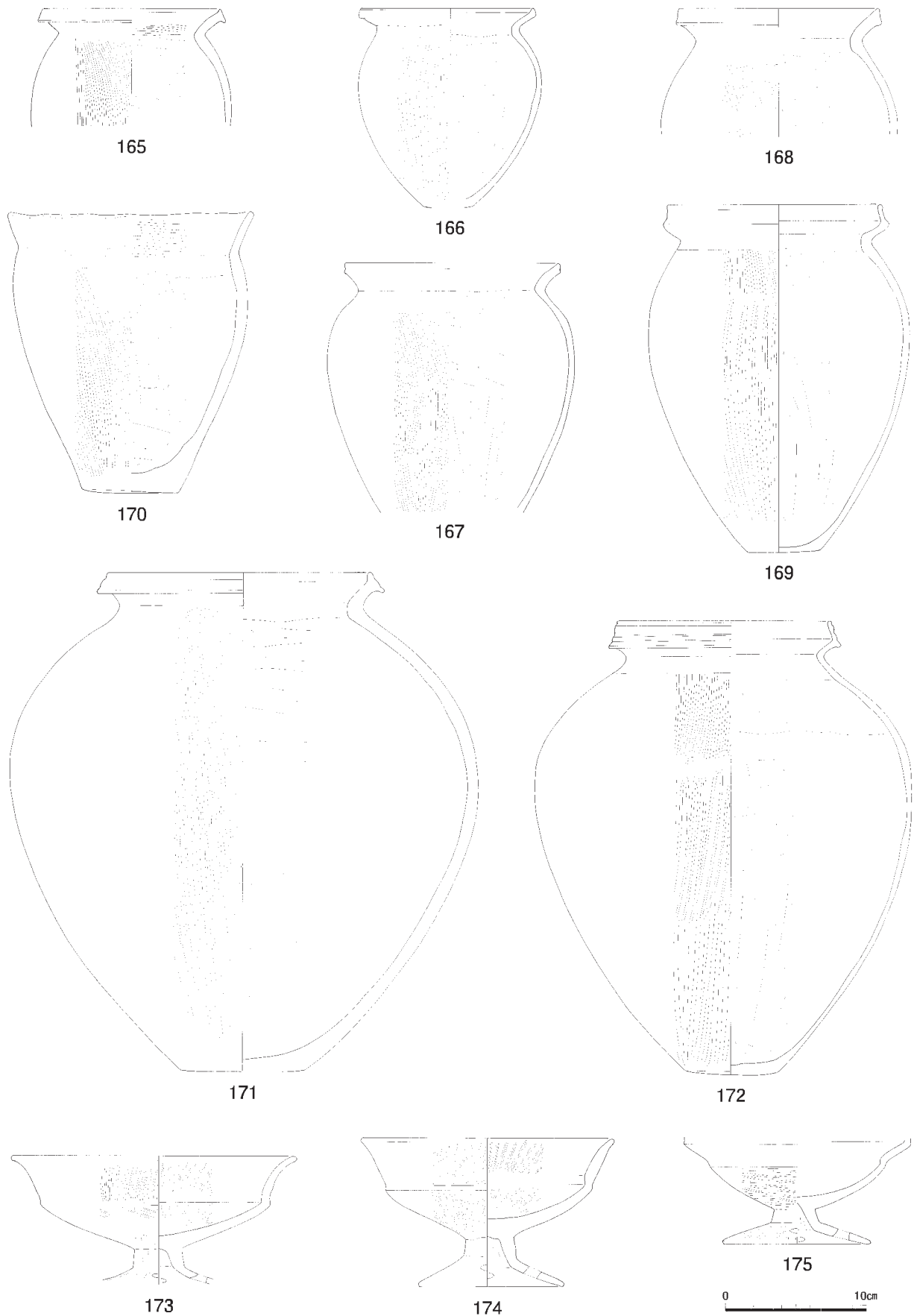
第34図 土壙20出土遺物 1 (1/4)



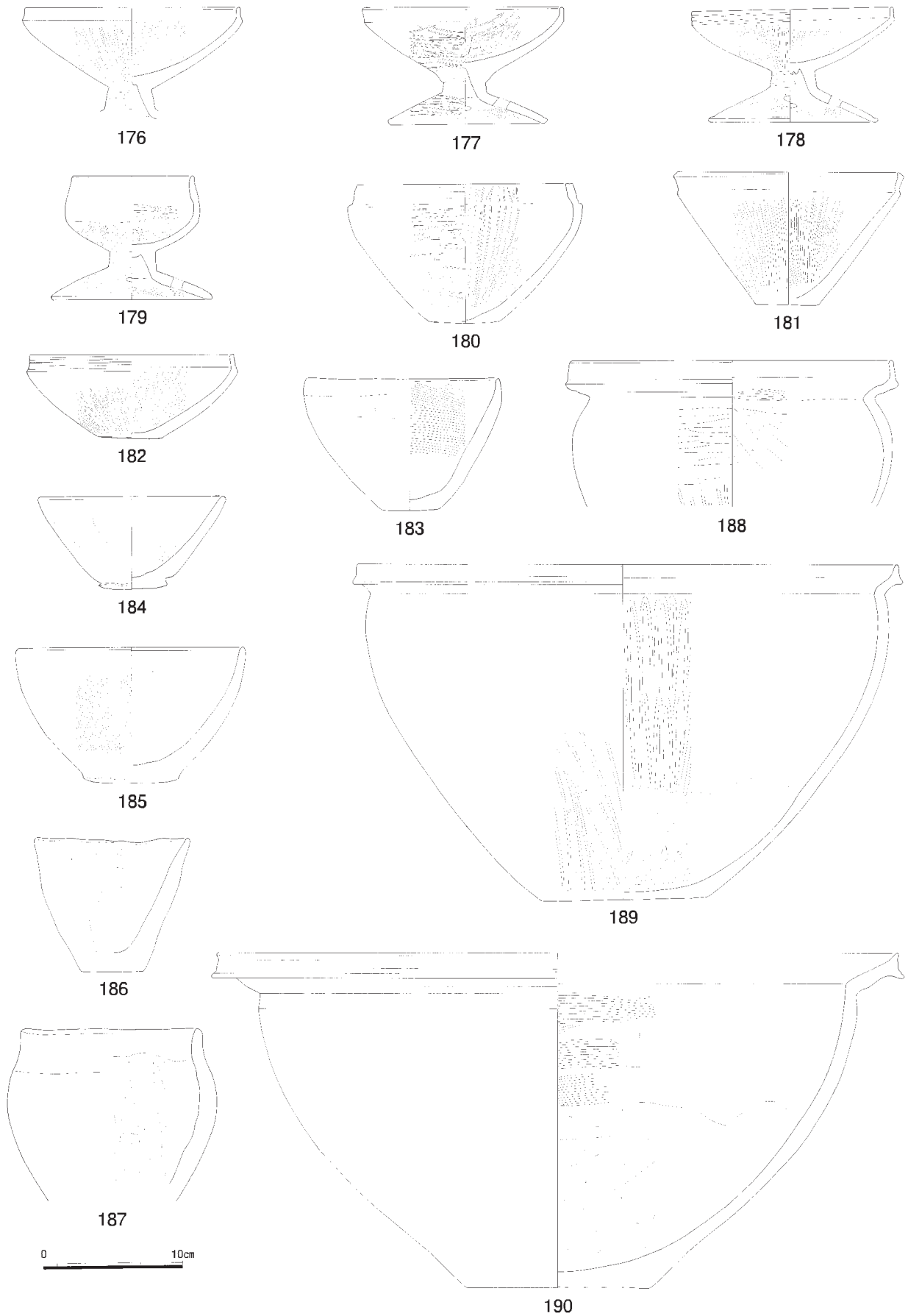
第35図 土壙20出土遺物2 (1/4)



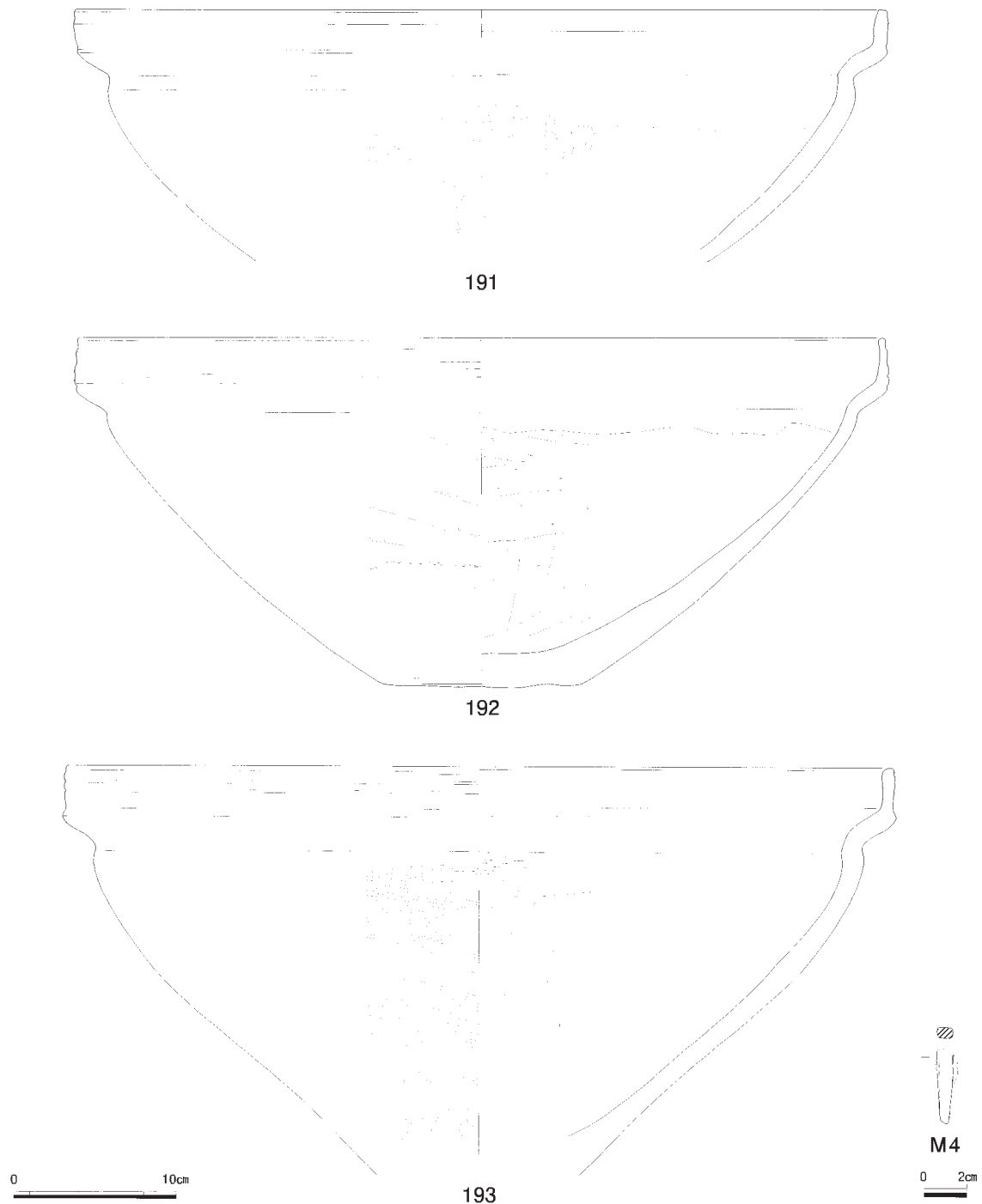
第36図 土壙20出土遺物3 (1/4)



第37図 土壙20出土遺物4 (1/4)



第38図 土壙20出土遺物5 (1/4)

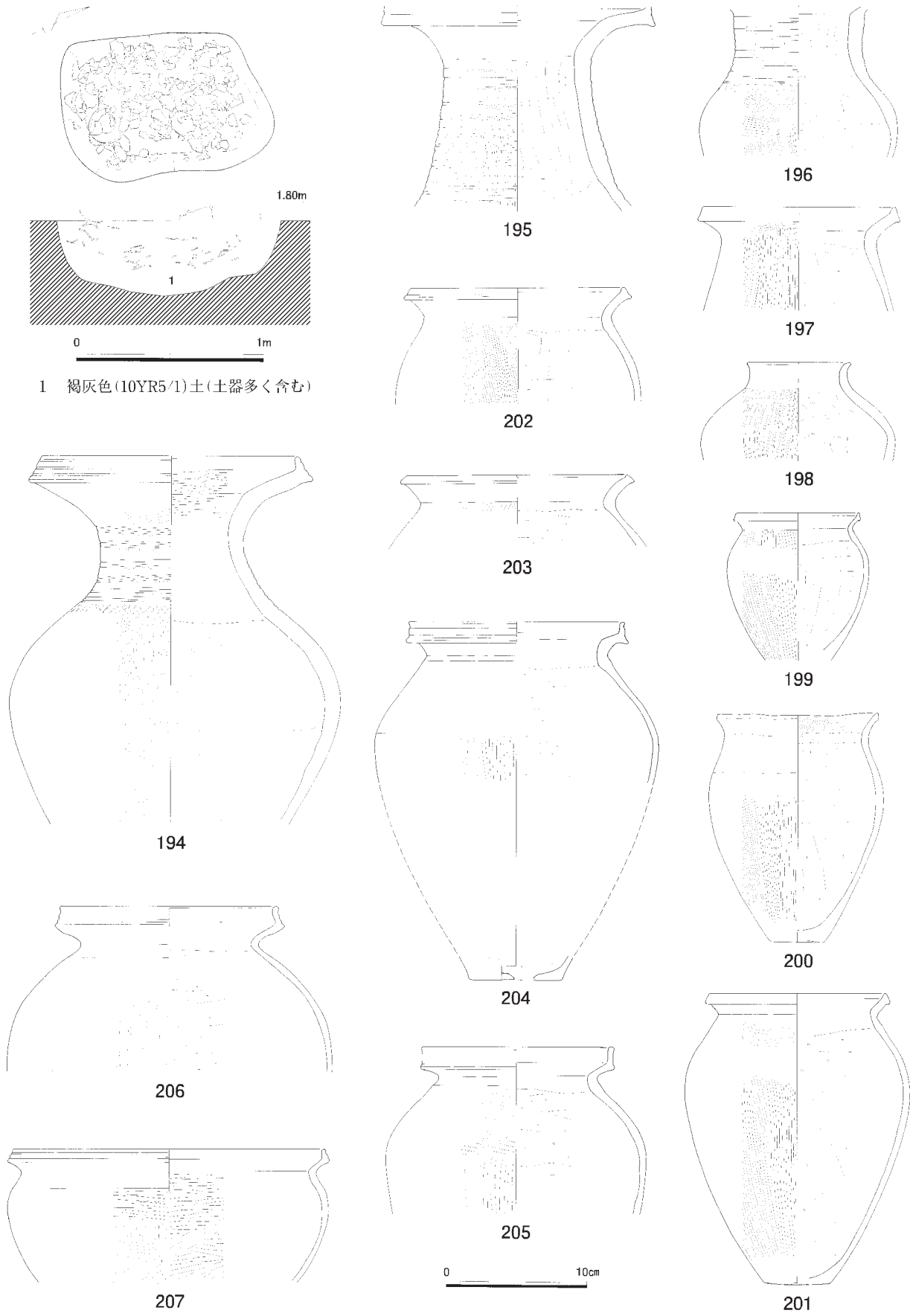


第39図 土壙20出土遺物6 (1/3・1/4)

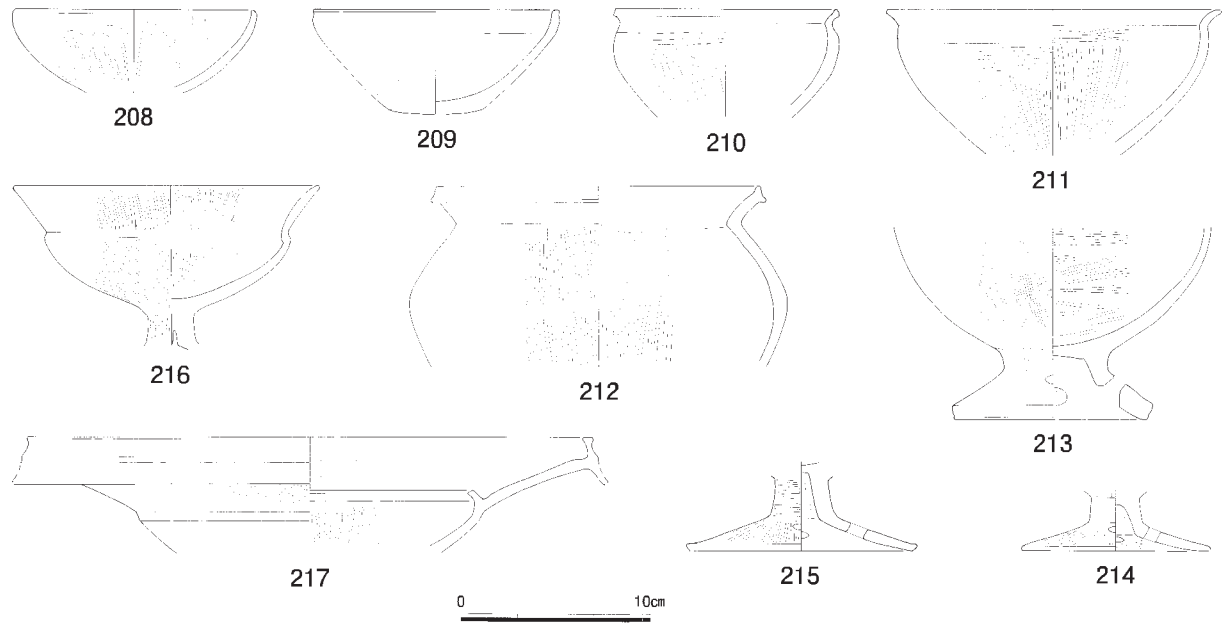
土壙21 (第7・9・40・41図、図版6)

2区中央の東寄り、土壙20の東2.7mの位置で弥生土器がまとまって出土したことから周辺を精査したところ、長さ111cm、幅76cmの不整な長方形を呈する掘り方を検出した。検出面からの深さは40cmを測り、断面は逆台形をなす。弥生土器は、底面より10cmほど高い位置から折り重なるように出土しており、土壙の掘削から土器の廃棄までの間に若干の時間差も想定しうる。

出土した弥生土器は31個体を数え、壺5個体、甕14個体、高杯6個体、鉢6個体と甕が全体の45%を占めていた。その中には土壙20のように器表が剥離したものは認められない。194~196は頸部に沈



第40図 土壌21 (1/30)、出土遺物 1 (1/4)



第41図 土壙21出土遺物2 (1/4)

線をめぐらす長頸壺、198は精良な胎土をもつ直口壺である。甕にはく字形の口縁部をもつ200、口縁端部をわずかに上下に拡張する201～203、二重口縁となる204～206があり、このうち204の底部には穿孔が見られる。鉢には、二重口縁をもつ207や小形の208～211、低い脚台を備えた212・213がある。高杯には、内外面をヘラミガキで調整する214、裾部に4つの透かし孔を飾る短い脚部215・216、杯部を二段につくる装飾高杯217がある。土壙21は弥生時代後期後葉と推定される。 (上椀)

土壙22 (第7・9・42図)

たわみの底で検出した土壙で、竪穴住居2の南西0.7mに位置する。2区の西壁にかかって検出したため全形は明らかではないが、現状では長さ281cm、幅88cmの北西から南東に長い長方形を呈する。深さ11cmある断面は逆台形をなし、底面の海拔高は1.29mを測る。灰色をなす埋土から土器片が少量出土している。

図示した218は口縁部が短く外反する弥生時代後期後葉の高杯であるが、溝22と同じく、たわみに伴って機能していた可能性も否定できない。 (亀山)

土壙23 (第7・9・42図)

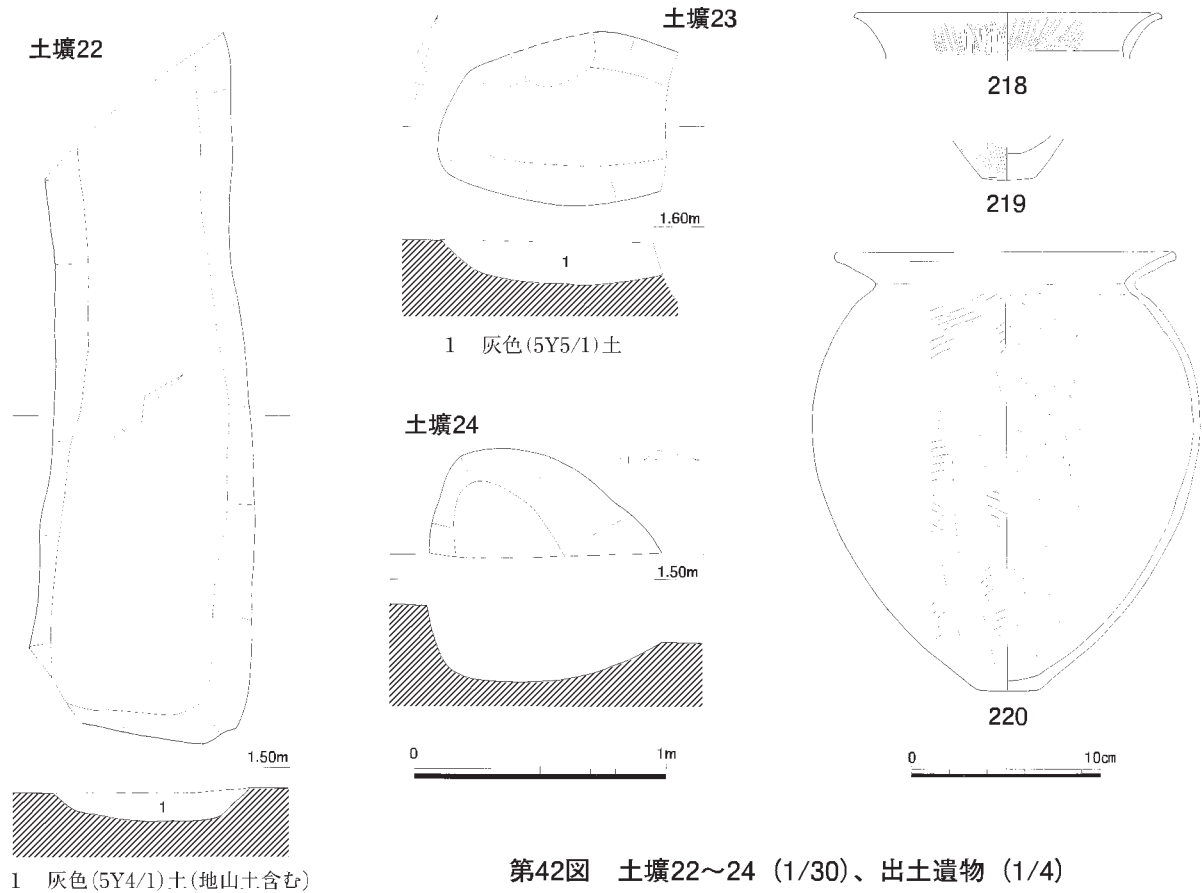
土壙19の南東2.1mに位置する土壙で、竪穴住居1の南西に接している。北東側は柱穴によって壊されているが、現状では長さ91cm、幅69cm、深さ17cmの楕円形をなす。

出土遺物は少ないが、図示した219は径2.8cmを測る小形の底部で、おおむね弥生時代後期後葉～末に属するものと思われる。 (亀山)

土壙24 (第7・9・42図)

竪穴住居3の南に重複する土壙である。側溝の掘削に際して確認されたため全形は明らかではないが、現状では長さ93cm、幅44cm、深さ30cmの楕円形を呈する。上層で出土した220は当初竪穴住居3に伴うものと考えていたが、周囲にこれを切る掘り方が検出され、その遺物と判断した。

く字形の口縁部に小さな平底を備えた甕で、外面はタタキの後ナデを施し、肩部内面を左方向にヘラケズリする。時期は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と推定される。 (亀山)



第42図 土壌22～24 (1/30)、出土遺物 (1/4)

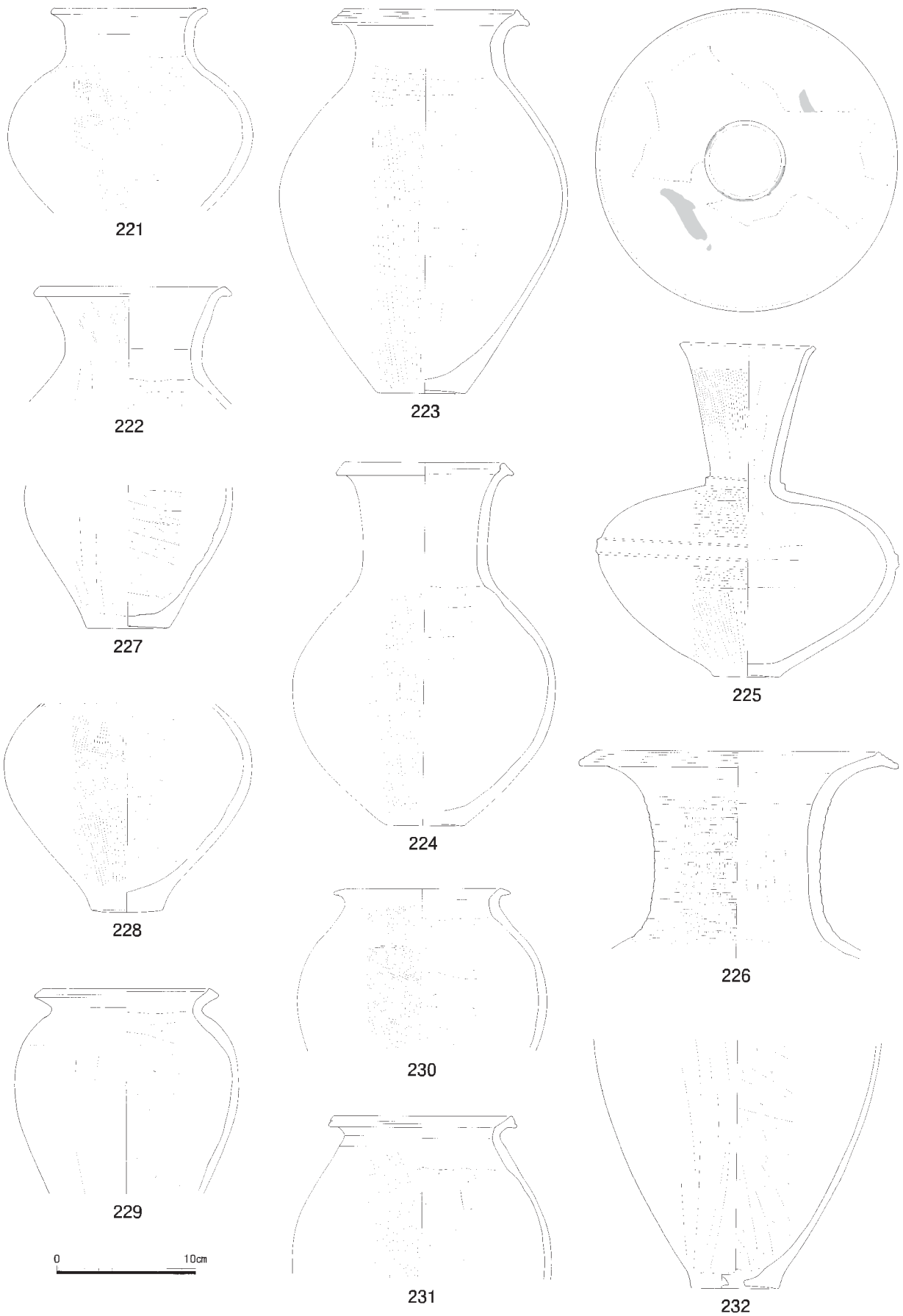
土器溜り1 (第7・8・43～46図、図版7・19)

1区の東側、調査区の南寄りで検出した土器溜りで、土壌3から約7m南東に離れて位置する。調査に着手して間もなく海拔高1.65mで遺物の出土が確認された。これに伴う人為的な掘り込みは確認されなかった。

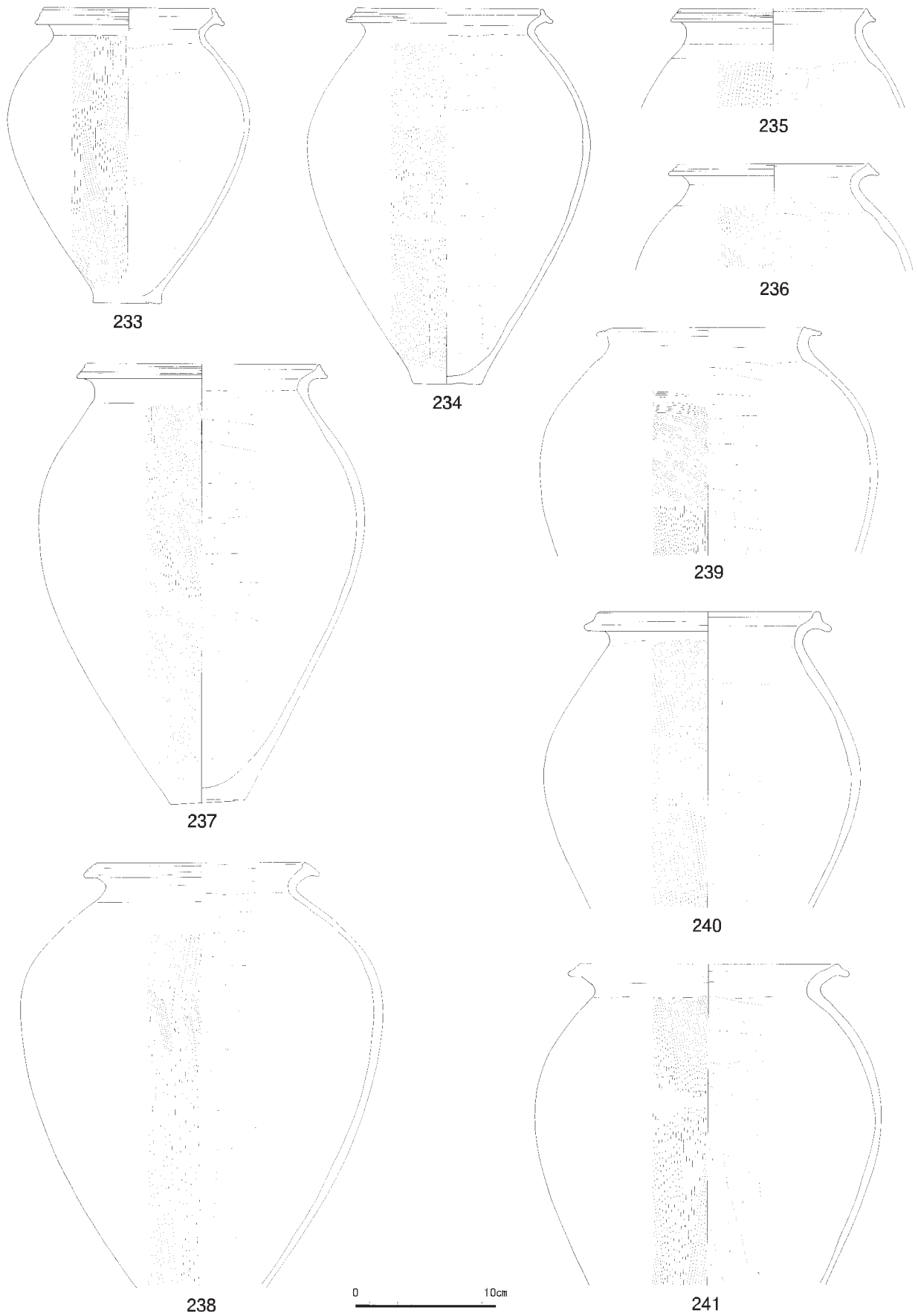
南北250cm、東西230cmの不整楕円形を呈する範囲で土器が集中して出土した。東側には、古代の井戸4があり、その部分はこのことによって攪乱を受けている。厚さは20cm程度で、溝1の掘り方にかかる部分では、その斜面に沿って南に低くなりながら、土器が出土することが確認された(10頁右下写真)。

なお、東側に分布する土器は地山に接するが、西側の一部については、地山から10cm程度高い垂直分布を示し、また土器の時期においても若干の違いが認められた。そのため、両者を異なる土器溜りとして遺物の取り上げを行った。225の体部(第43図)、256・257・259～267(第46図)がそれに該当するが、225のように両方の破片が接合するものもあった。時期が異なる土器溜りが重なっている可能性を想定しているが、間層が薄い部分もあり、明確には分離できなかった。

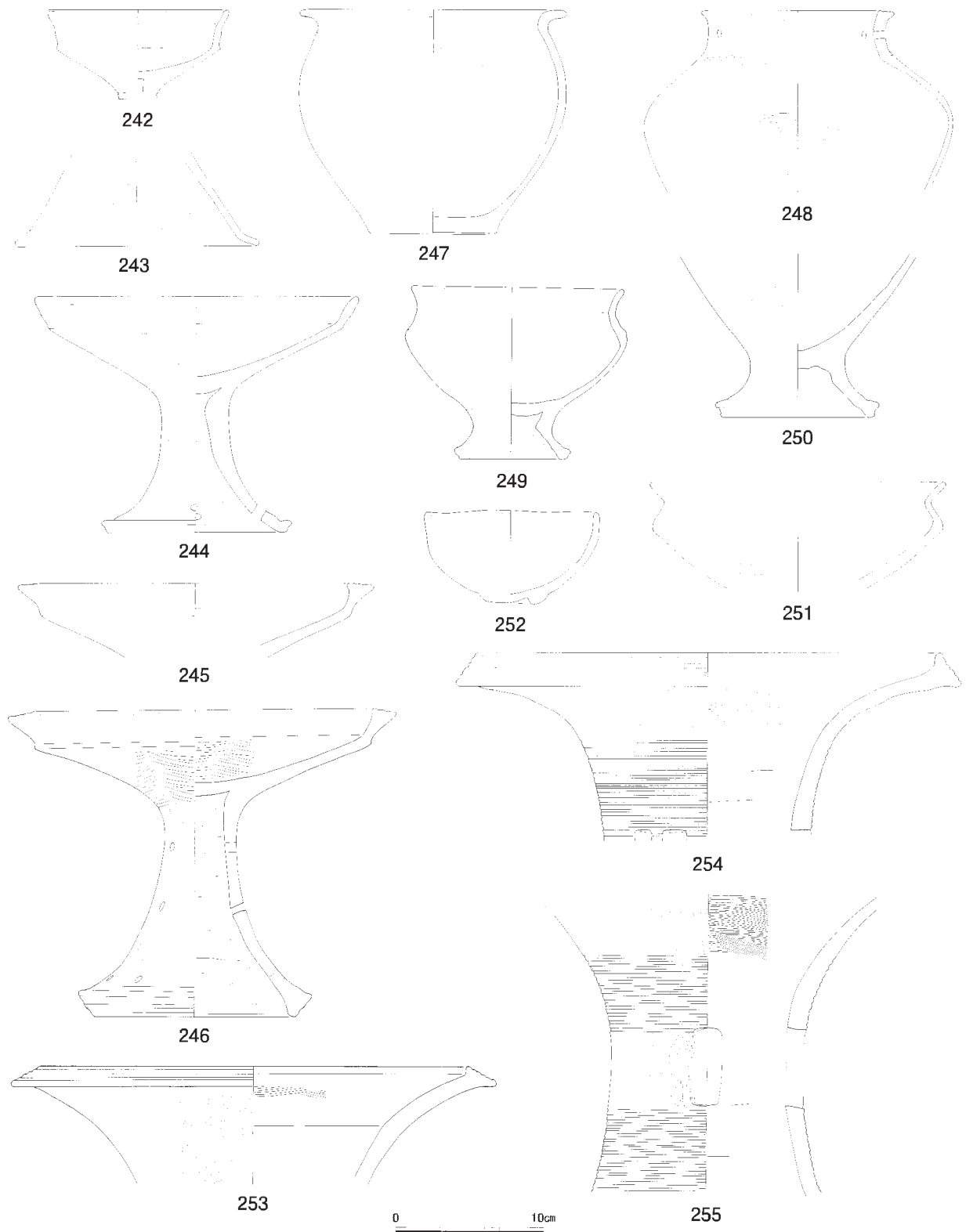
西側部分を除く出土遺物には、壺221～228、甕229～241、高杯242～246、鉢247～252、器台253～255がある。壺は、体部中央付近に最大径があるものが多く、球形や倒卵形を呈するものがある。壺や甕の口縁端部は、外反して丸く収まるもの、斜め上下に肥厚あるいは拡張するもの、斜め下方ないし水平方向へ長くのびるものがある。225は、東側から出土した口頸部と、西側から出土した体部が接合したもので、体部外面には、赤色顔料が塗布されている。高杯は、円盤充填が行われ、口縁端部は丸く収まるものや、内外へ肥厚して水平面を形成するものがある。鉢には各種あるが、口縁端部を丸く収めるものや、外側がのびて水平面を形成するものがある。



第43図 土器溜り1出土遺物1 (1/4)



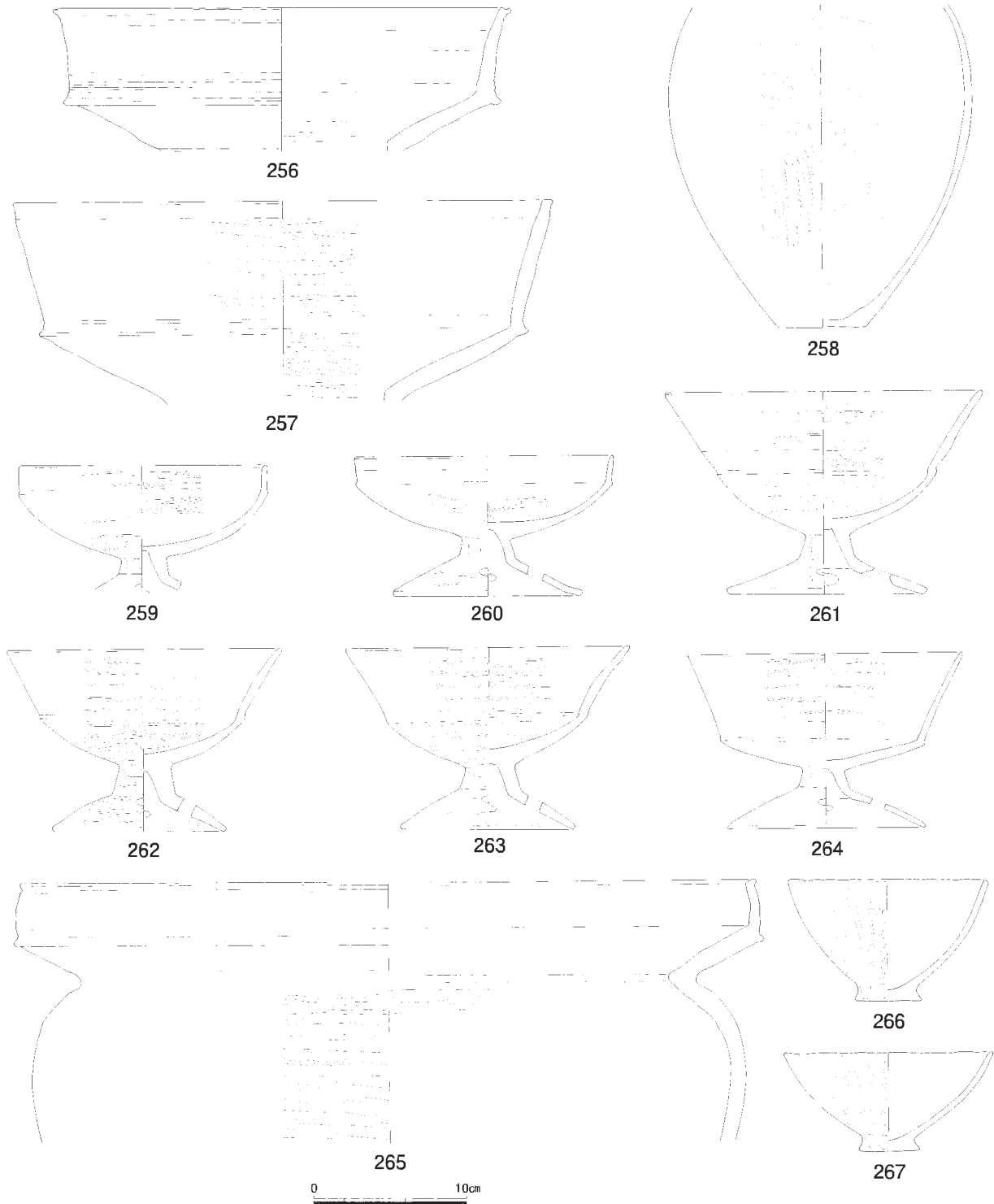
第44図 土器溜り1出土遺物2 (1/4)



第45図 土器溜り1出土遺物3 (1/4)

西側の出土遺物には、壺256・257、高杯259～264、鉢265～267がある。壺の口縁部や高杯の形態など、東側の遺物とは明らかに異なり、より新しい時期を示す。

時期は、出土遺物から、二つの形成時期があったと考えられる。一つめが、弥生時代後期前葉であり、次が後葉である。 (柴田)

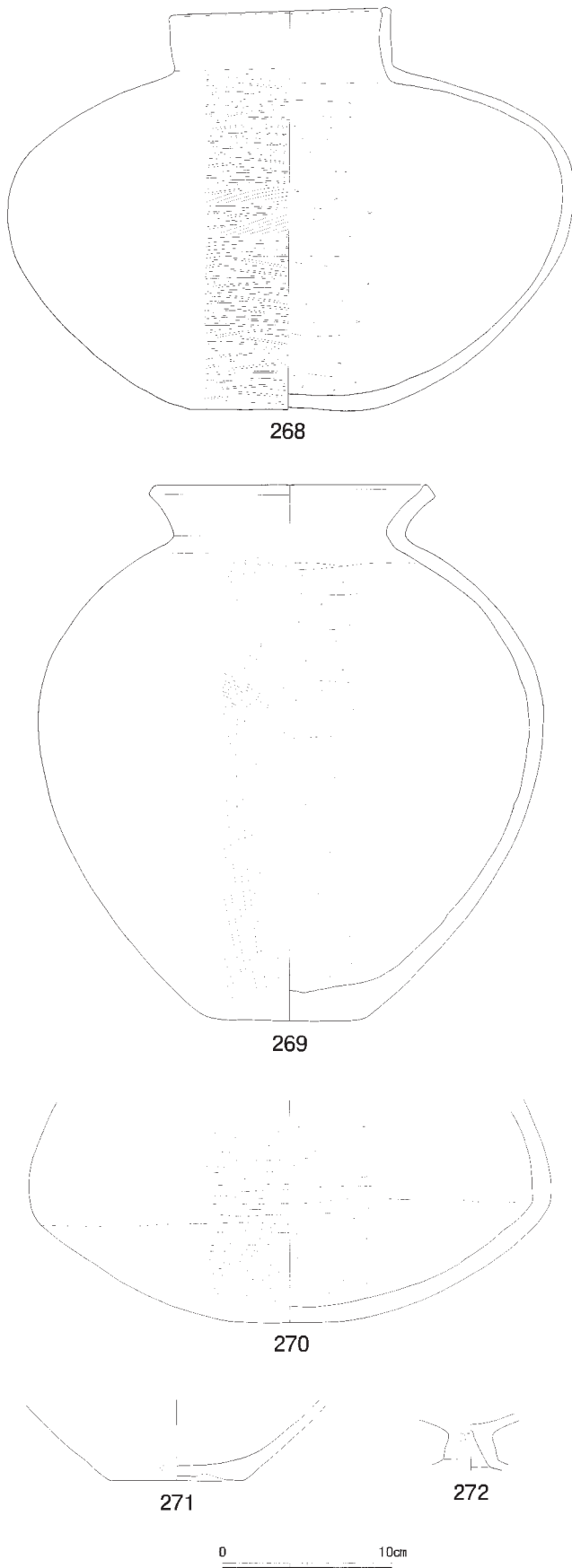


第46図 土器溜り1出土遺物4 (1/4)

土器溜り2 (第7・8・47図)

1区の東端で検出した土器溜りで、土器溜り1から約8m東に離れて位置する。

水田1が50cm程度埋没した段階である、海拔高1.5mに土器が分布する。これに伴う人為的な掘り込みは確認されなかった。東西110cm、南北82cmの不整楕円形を呈する範囲において、2個体の土器がぶれた状態で出土した(12頁左下写真)。土器棺等の可能性は低いと思われる。



壺268は直口壺で、体部は偏球形である。口縁端部は、わずかに内側へ肥厚する。口縁部から体部の1/3足らずが欠損している。甕269は、頸部がくの字に屈曲し、体部は球形を呈する。

時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期と考えられる。(柴田)

土器溜り3 (第7・9・47図)

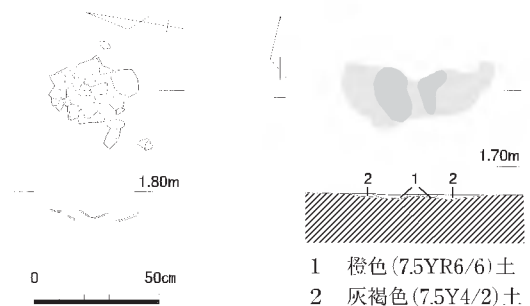
土壌21の南西1.2mで検出した弥生土器の集中箇所、2区のほぼ中央に位置する。径50cmほどの範囲に壺や高杯の破片が折り重なって出土したもので、明瞭な掘り方は確認できなかったものの、何らかの遺構が存在した可能性が高い。270は偏球形の体部をもつ壺で、外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで仕上げる。271は壺の底部、272は短い高杯の脚柱部で、いずれも弥生時代後期末に位置づけられる。(亀山)

火処 (第7・8・47図)

1区の中央付近で検出した火処で、土壌4から約3m西に離れて位置する。海拔高1.6mで確認でき、水田1が60cm程度埋没した後に形成されたことがわかる。

被熱の変色範囲は60×27cmで、東西に細長い不整形を呈する。変色の厚さは2cmで、中心部分がより強く熱を受けている。

遺構の時期は、検出面から、古代以前で弥生時代後期の可能性がある。(柴田)



第47図 土器溜り2出土遺物 (1/4)、土器溜り3 (1/30)・出土遺物 (1/4)、火処 (1/30)

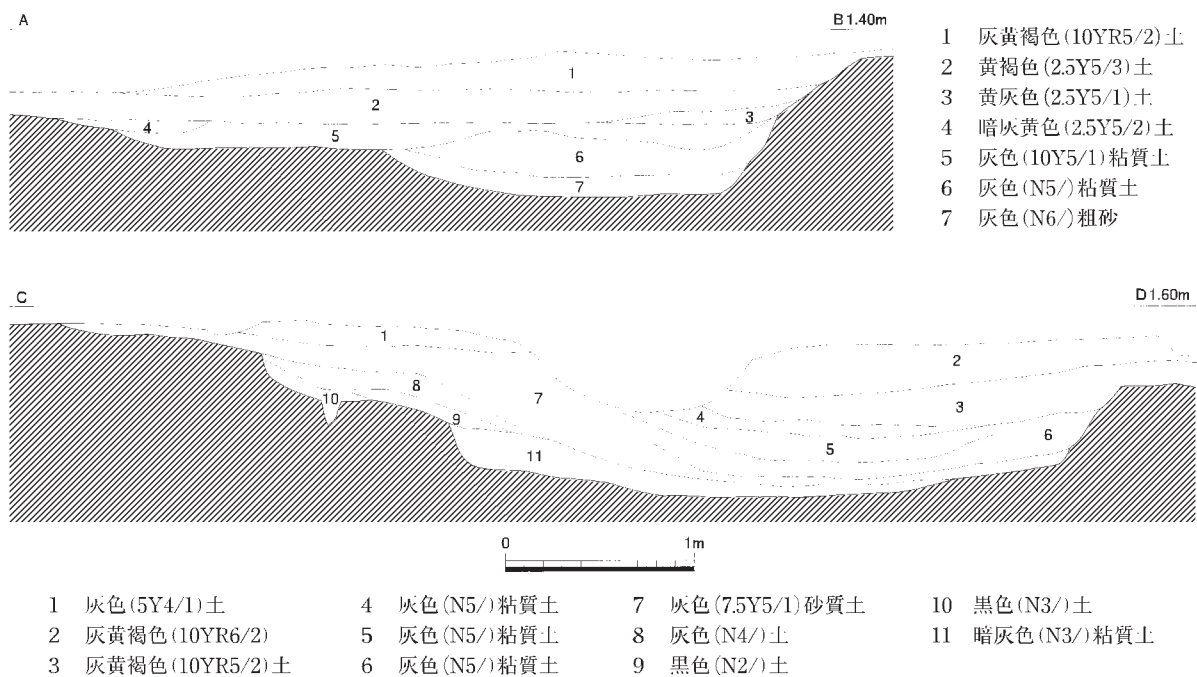
溝1 (第7～9・48～52図、図版7・8・20)

1区の南を東西方向にのびる溝である。わずかに蛇行し、調査区中央部では調査区外へ出ている。検出面での上幅は410cm、深さは90cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、西で0.6m、東で0.5mを測り、これから考えられる水流方向は西から東である。

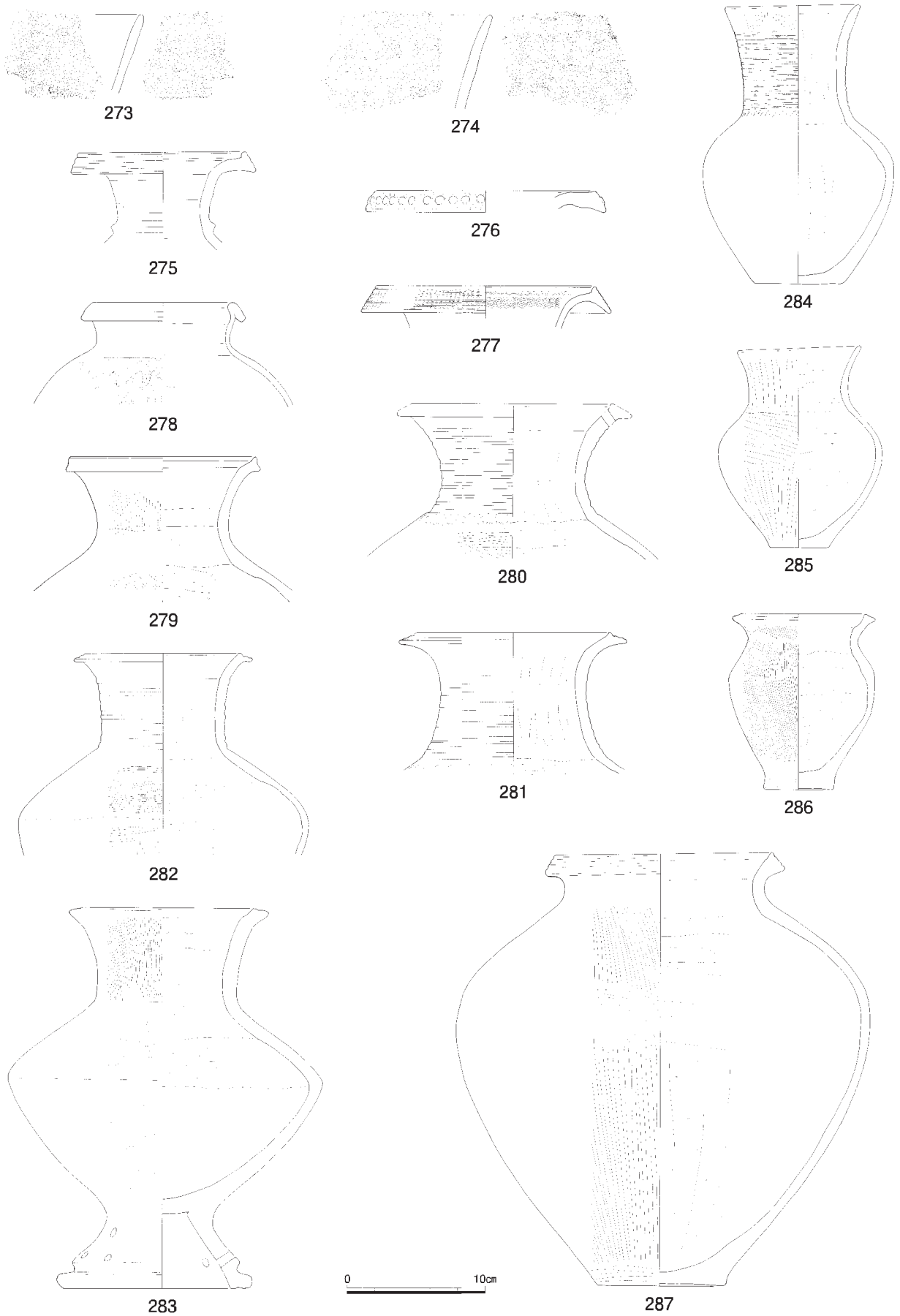
遺構の東端では、溝9に切られていることが確認された。第48図A-B断面図の4層が溝9の埋土であり、さらにこの上面は水平になっている。これは水田1である。一方、遺構の西部部分における、溝4との前後関係は不明瞭である。これは、溝4の埋土である第48図C-D断面図の10層が、9層に類似するためである。ここでは、溝4の10層を溝1が切っている可能性が高いと考えているが、溝1の底面に11層が堆積した後に9・10層が堆積した可能性も考えられる。また、遺構中央付近の北岸には、土器溜り1が形成されている。その土器の一部は、溝の斜面に沿って出土していることも確認され、両者の土器での接合も確認できた(壺280・287、甕297、鉢319・326、器台330)。

深鉢273・274は、当調査地全域に存在する、海拔高0.6m以下の土層(第6図56層)からの混入と考えられる。壺277、甕288、高杯303・306は、最下層の7層(第48図A-B)から出土した。この層は粗砂層で、若干の木片などを含む。壺284、高杯310、S2・3は、6・7層(第48図C-D)から出土した。この層からはモモの核も出土している。長頸壺は、口縁部が水平方向に開くものと、緩やかに外反するものがある。前者の275・276は、中期後葉(菰池式期)の壺である。後者の壺には、口縁下端部が水平方向に拡張する280～283などがある。甕には、内面のヘラケズリが肩部に及ばない289・291～293があり、また288は、口縁部直下に多条の櫛描き沈線が施されている中期初頭(南方式期)の甕である。高杯には、口縁部が垂直に立ち上がる303や、口縁端部が水平方向に拡張する304・305がある。その他、鉢や器台、小形製塩土器、石器が出土している。

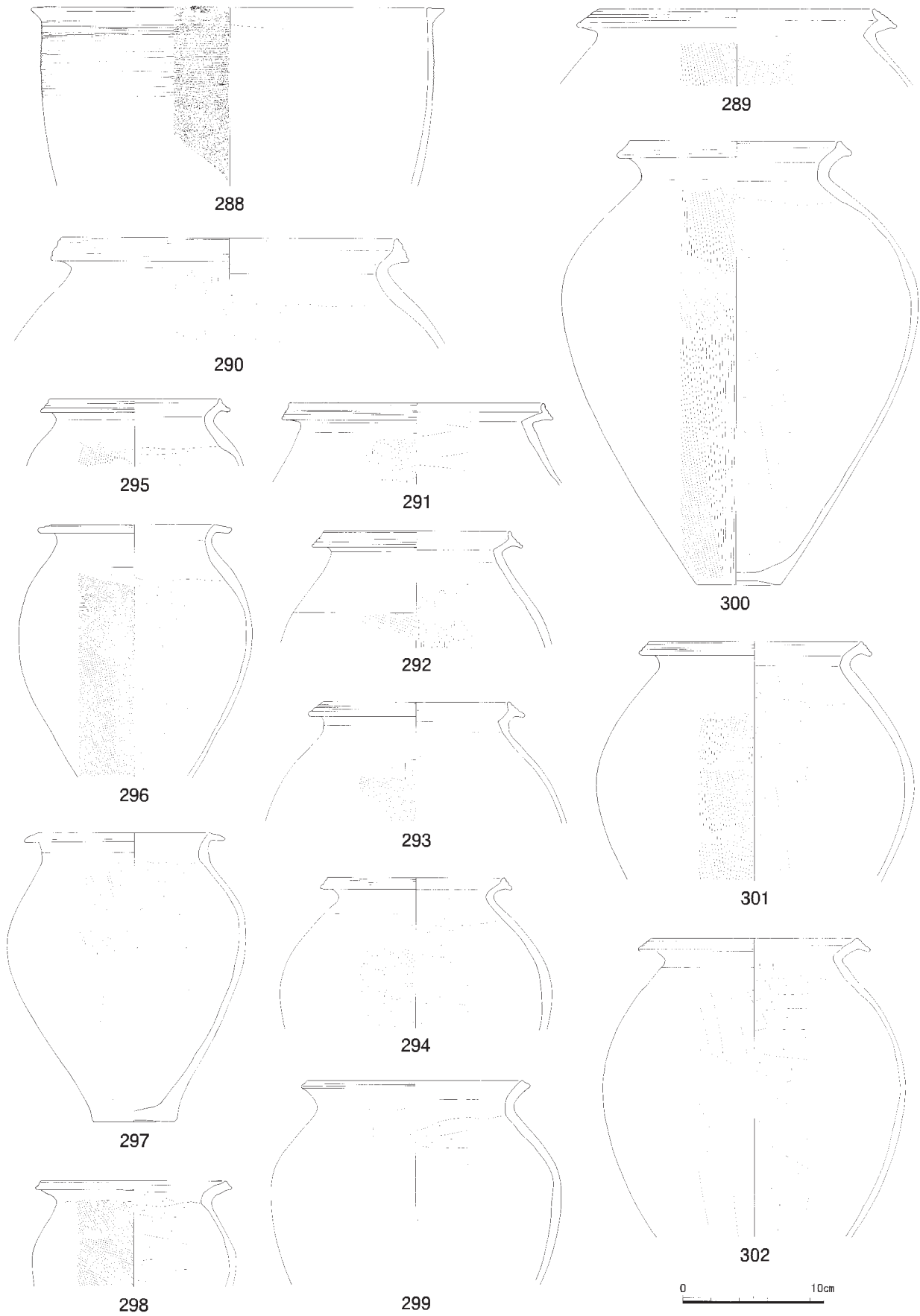
遺構の時期は、出土遺物などから、弥生時代中期～後期と考えられるが、後期末までにはほとんど埋没している可能性がある。(柴田)



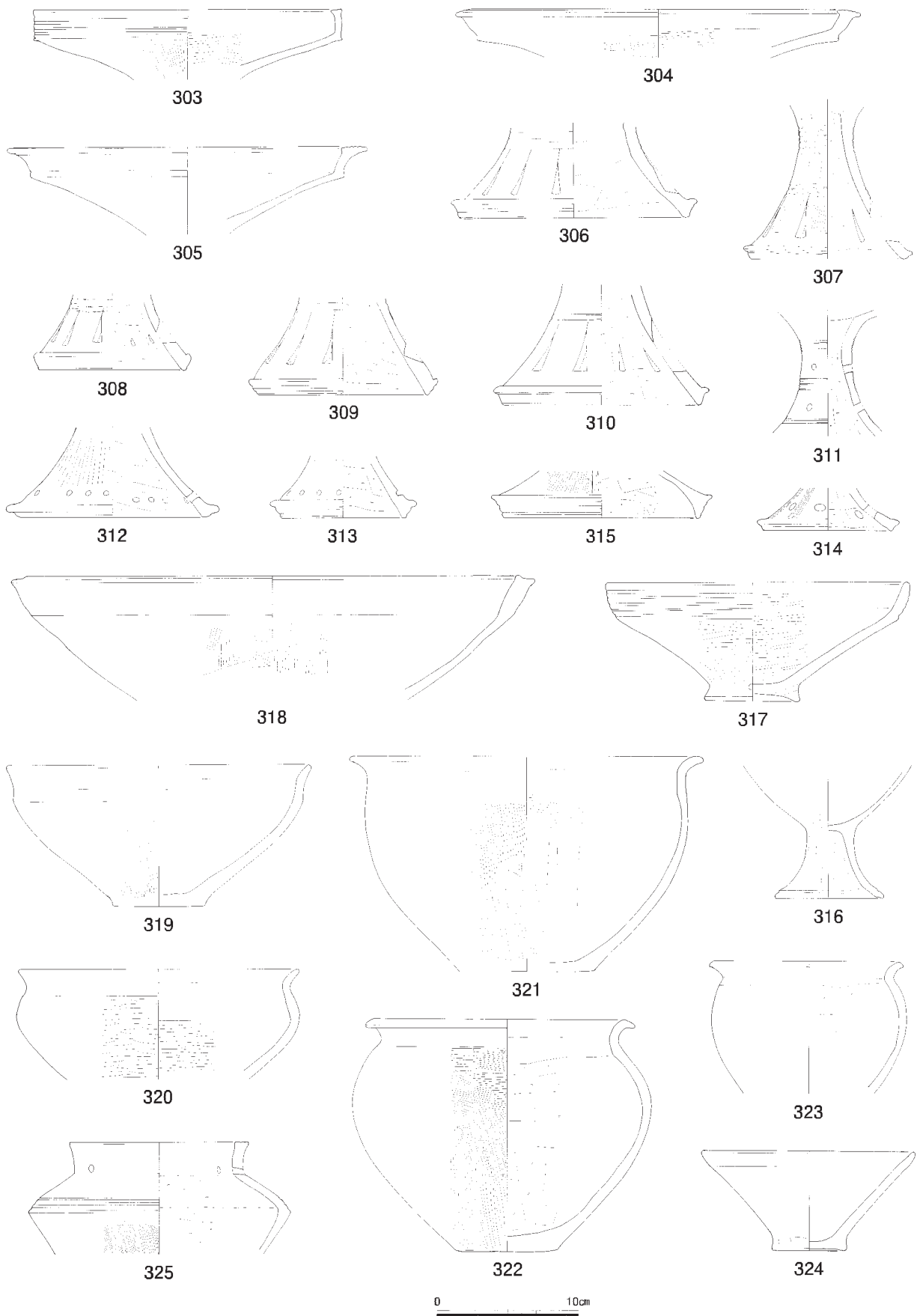
第48図 溝1 (1/40)



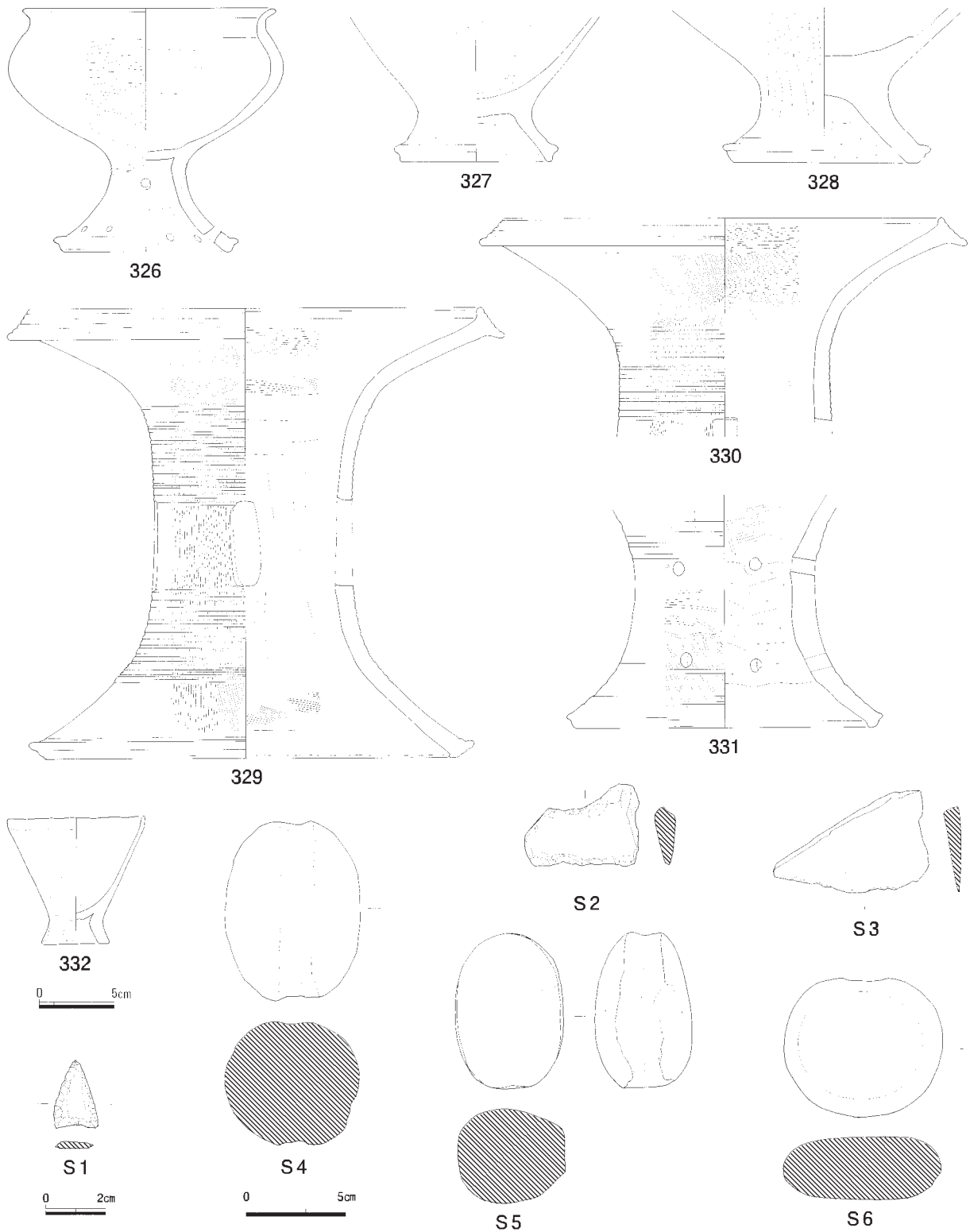
第49図 溝1出土遺物1 (1/4)



第50図 溝1出土遺物2 (1/4)



第51図 溝1出土遺物3 (1/4)



第52図 溝1出土遺物4 (1/2・1/3・1/4)

溝2 (第7～9・53図、図版8)

1区の中央を、東西方向にはほまっすぐ延びる溝である。水田1の耕土直下で検出され、東端は溝1に切られている。断面形は、椀形を呈する。底面の海拔高は、西で1.0m、東で1.02mを測り、これから考えられる水流方向は東から西となるが、比高はわずかである。

遺構の時期は、検出面などから、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝3 (第7・8・53図)

1区の東側で検出した、溝1に沿うような溝で、溝2に切られている。南側は調査区外へ延び、溝4と同じ溝の可能性もある。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、南西で1.07m、北東で1.09mを測り、これから考えられる水流方向は、北東から南西となるが、比高はわずかである。

遺構の時期は、検出面などから、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝4 (第7～9・53図)

1区の西側で検出した、溝1に沿うような溝で、溝1に切られている可能性がある。東側は調査区外へ延び、溝3と同じ溝の可能性もある。断面形は、U字形を呈する。底面の海拔高は、西で1.16m、東で1.15mを測り、これから考えられる水流方向は、西から東となるが、比高はわずかである。

遺構の時期は、検出面などから、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝5 (第7～9・53図、図版8)

1区の南西端で検出した、溝1に沿う溝で、両端は調査区外へ延びる。水田2に伴う溝の可能性が考えられる。断面形は、皿形を呈する。底面の海拔高は、西で1.03m、東で1.01mを測り、これから考えられる水流方向は西から東となるが、比高はわずかである。埋土から、甕333が出土している。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝6 (第7～9・53図、図版8)

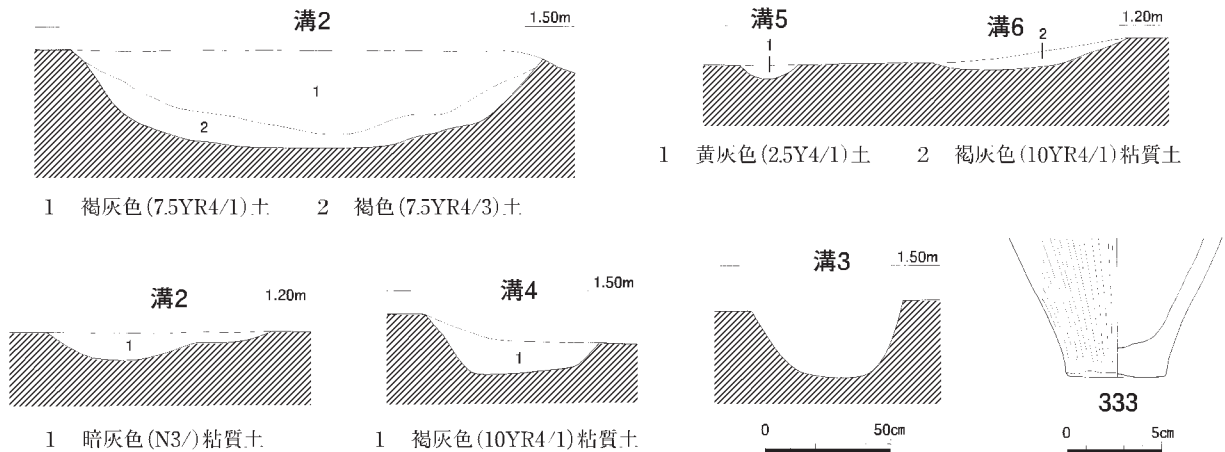
1区の南西端で検出した溝である。溝5の南に50cm離れ、それに平行して延びる。水田2に伴う溝の可能性が考えられる。断面形は、碗形を呈する。底面の海拔高は、西で1.02m、東で0.99mを測り、これから考えられる水流方向は、西から東となるが、比高はわずかである。

遺構の時期は、検出面から、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

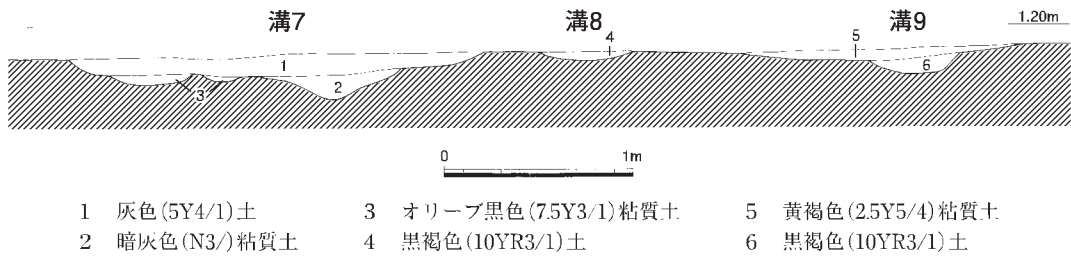
溝7 (第7・8・54図、図版8)

1区の北側を、東西方向にはほまっすぐに延びる溝である。水田1の耕土直下で検出され、深さは30cmを測る。断面形は、皿形を呈する。底面の海拔高は、西で0.76m、東で0.62mを測り、これから考えられる水流方向は、西から東となる。

遺構の時期は、検出面から、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)



第53図 溝2～6 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第54図 溝7～9 (1/40)

溝8 (第7・8・54図、図版8)

1区の北側を、東西方向にはほぼまっすぐ延びる溝である。水田1の耕土直下で検出され、深さは6cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、西で0.98m、東で0.97mを測り、これから考えられる水流方向は、西から東となるが、比高はわずかである。

遺構の時期は、検出面から、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝9 (第7～9・54図、図版8)

1区の中央を東西にのびる溝である。溝8から1.5m程度離れて南に位置し、ほぼそれに平行してまっすぐ延びるが、西端付近でゆるやかに曲がる。また、西端では溝1の埋土を切っている。

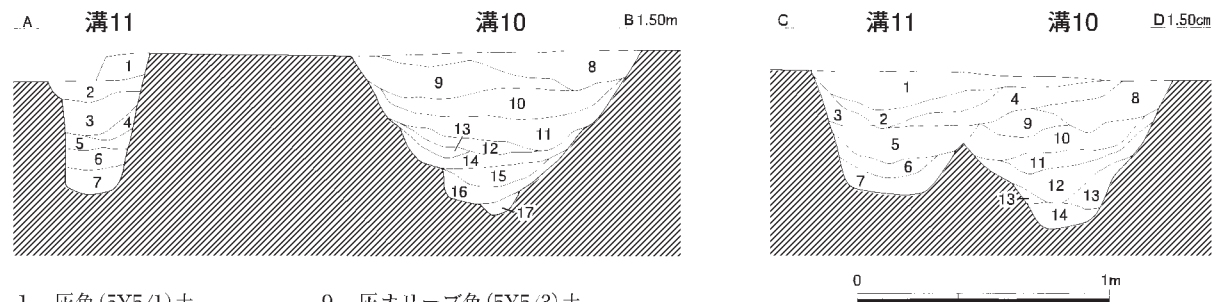
検出面からの深さは7cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、西で0.96m、東で0.85mを測り、これから考えられる水流方向は、西から東となる。

遺構の時期は、検出面などから、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

溝10 (第7・8・10・55・56図、図版7)

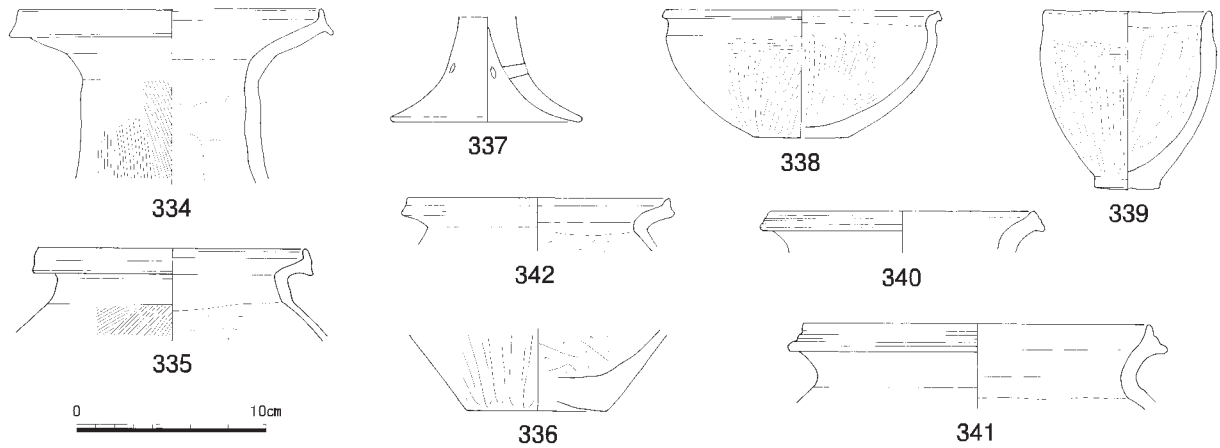
1区の中央を南北にまっすぐ延びる溝である。掘り方は、地山の高い南北端では、海拔高1.4mで確認できるが、その間の水田1部分では1.2mまで掘り下げないと確認できない。水田1の上に20cm程度の堆積層が形成された段階に掘り込まれたと考えられる。また、溝11に切られている。

検出面での上幅は115cm、深さは66cmを測る。断面形は、U字形を呈する。底面の海拔高は、北で



- | | | | |
|----------------------------|------------------|------------------|------------------|
| 1 灰色(5Y5/1)土 | 9 灰オリーブ色(5Y5/3)土 | 1 灰色(10Y5/1)土 | 8 灰オリーブ色(5Y5/3)土 |
| 2 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 10 灰色(10Y5/1)土 | 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 | 9 灰色(N4/)土 |
| 3 灰色(N4/)粘質土
(緑灰色細砂混じる) | 11 灰色(10Y4/1)粘質土 | 3 灰オリーブ色(5Y4/2)土 | 10 灰色(0Y4/1)土 |
| 4 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 12 灰色(10Y5/1)土 | 4 黄灰色(2.5Y4/1)土 | 11 灰色(10Y4/1)粘質土 |
| 5 暗オリーブ色(5Y4/3)土 | 13 灰色(N6/)細砂 | 5 灰色(N4/)粘質土 | 12 灰色(10Y4/1)粘質土 |
| 6 灰色(N4/)粘質土 | 14 灰色(10Y4/1)粘質土 | 6 灰色(N4/)粘質土 | 13 灰色(N4/)粘質土 |
| 7 暗灰色(N3/)粘質土 | 15 灰色(N4/)粘質土 | 7 暗灰色(N3/)粘質土 | 14 暗灰色(N3/)粘質土 |
| 8 灰色(5Y5/1)土 | 16 暗灰色(N3/)粘質土 | | |
| | 17 黒色(N2/)粘質土 | | |

第55図 溝10・11 (1/30)



第56図 溝10・11出土遺物 (1/4)

0.76m、南で0.7mを測り、水流方向は、北から南である。壺334は11層（A-B断面）から、高杯337と鉢339は14層（C-D断面）から出土した。他にも甕335・336、鉢338やモモの核が出土している。

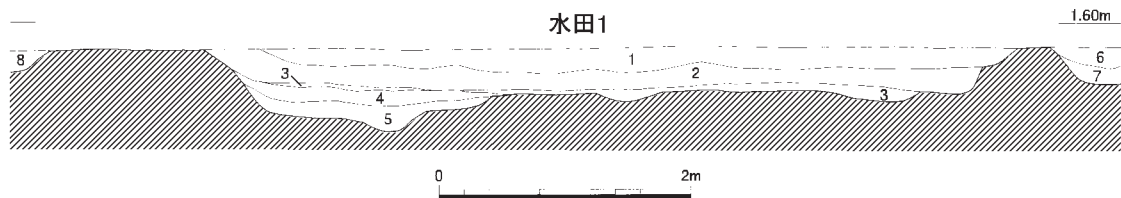
遺構の時期は、検出面と出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。（柴田）

溝11（第7・8・55・56図、図版7）

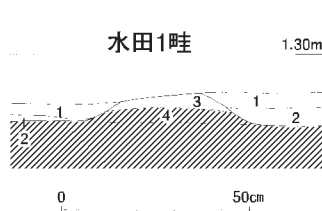
1区の中央を南北にまっすぐ延びる溝で、溝10を切っている。掘り方は、地山の高い南北端では海拔高1.4mで確認できるが、その間の水田1部分では1.25mまで掘り下げないと確認できない。

検出面での上幅は65cm、深さは55cmを測る。底面の海拔高は、北で0.74m、南で0.77mを測り、水流方向は、南から北であるが、比高はわずかである。甕340~342やモモの核が出土している。

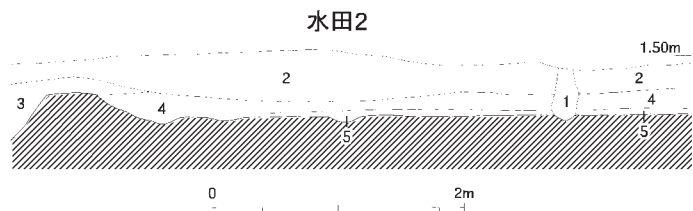
遺構の時期は、検出面や出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。（柴田）



- | | | |
|------------------|------------------|-----------------|
| 1 灰黄褐色(10YR5/6)土 | 4 灰オリーブ色(5Y5/2)土 | 7 黒褐色(10YR2/2)土 |
| 2 褐灰色(10YR5/1)土 | 5 暗灰色(N3/)粘質土 | 8 灰色(5Y4/1)土 |
| 3 褐灰色(10YR4/1)土 | 6 暗灰黄色(2.5Y5/2)土 | |

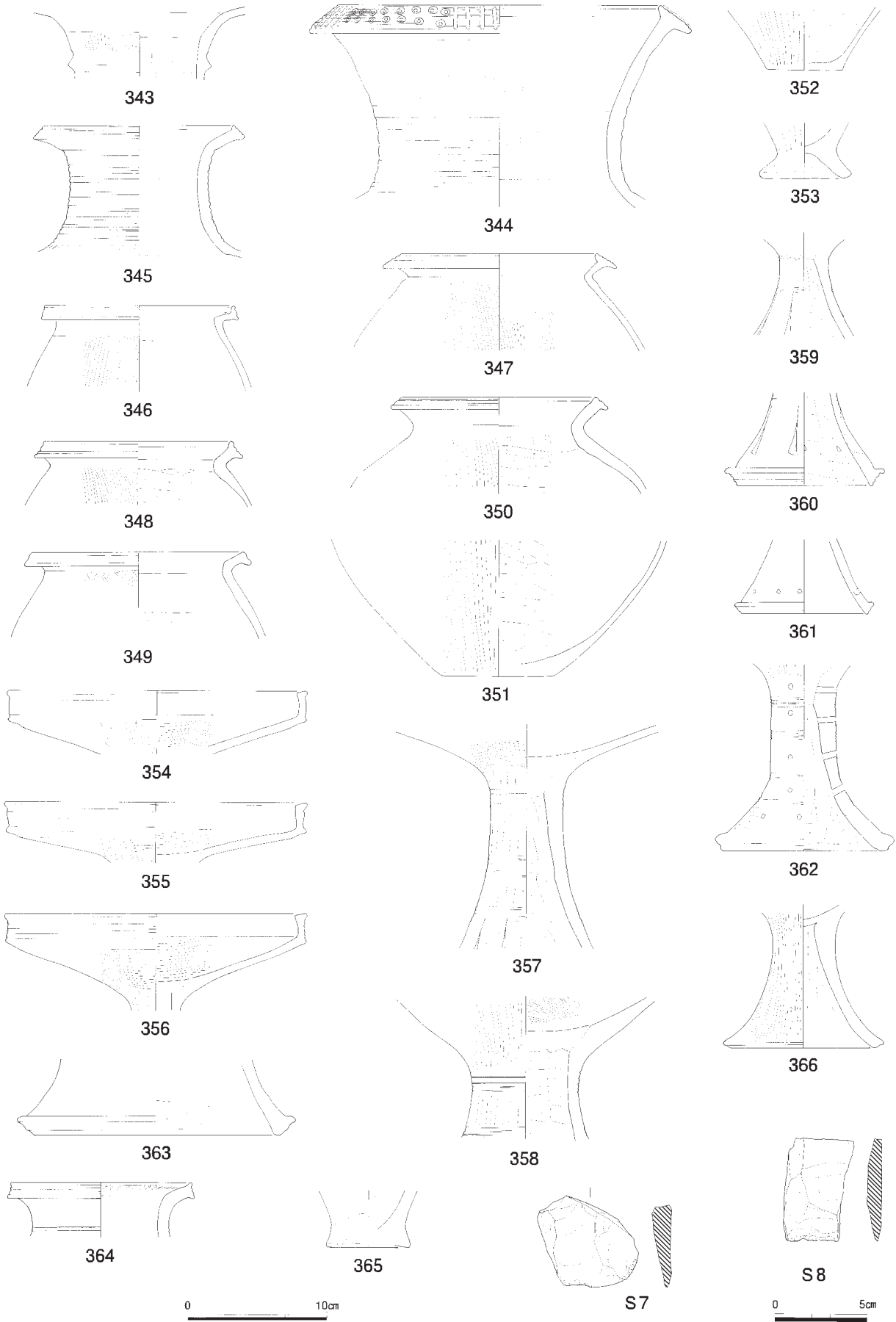


- | |
|-------------------|
| 1 褐灰色(10YR5/1)粘質土 |
| 2 褐灰色(10YR4/1)粘質土 |
| 3 黒褐色(10YR3/2)粘質土 |
| 4 黄色(5Y8/6)細砂 |



- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 攪乱 | 4 暗灰黄色(2.5Y6/2)砂質土 |
| 2 灰黄褐色(10YR6/2)土 | 5 褐灰色(10YR4/1)粘質土 |
| 3 灰黄褐色(10YR5/2)土 | |

第57図 水田1・2 (1/20・1/60)



第58図 水田1・2出土遺物 (1/3・1/4)

水田1 (第7～9・57・58図、図版8・9)

溝1の北側にひろがる水田である。溝1北岸と、そこから北へ5～7m離れた位置に、それぞれ幅2～3m前後の東西方向にのびる堤状地形が存在する。その周囲の平坦な地形を水田と考えた。南側の水田面は海拔高1.05m前後、北東側は1.15mで、堤状地形との比高は25～35cmを測る。厚さ3～4cmの3層が耕土と考えられ、その植物珪酸体分析を行った(第3章第4節)。溝2・7～9は水田以前のもので、南東部では溝1を切っている。中央付近で、北に延びる畦を検出した。これは、田面からの高さが5cm、上面での幅22cm、下面での幅45cmを測る。

水田上の堆積土から、壺343～345・351、甕346～350・352、高杯354～362、鉢353・363、スクレイパーS8が出土している。溝1の埋土中から混入したものも多い。

遺構の時期は、検出面や出土遺物などから、弥生時代後期前葉と考えられる。(柴田)

水田2 (第7～9・57・58図、図版8)

溝1南岸に、幅1mの堤状地形が存在し、その南の平坦な地形を水田と考えた。水田面は海拔高1.07m、堤状地形との比高は13cmを測る。厚さ5cmの5層が耕土と考えられ、下面には鉄分とマンガンの沈着が認められた。溝5・6は水田に関連する可能性がある。水田上の堆積土から、壺364、甕365、高杯366、スクレイパーS7が出土している。

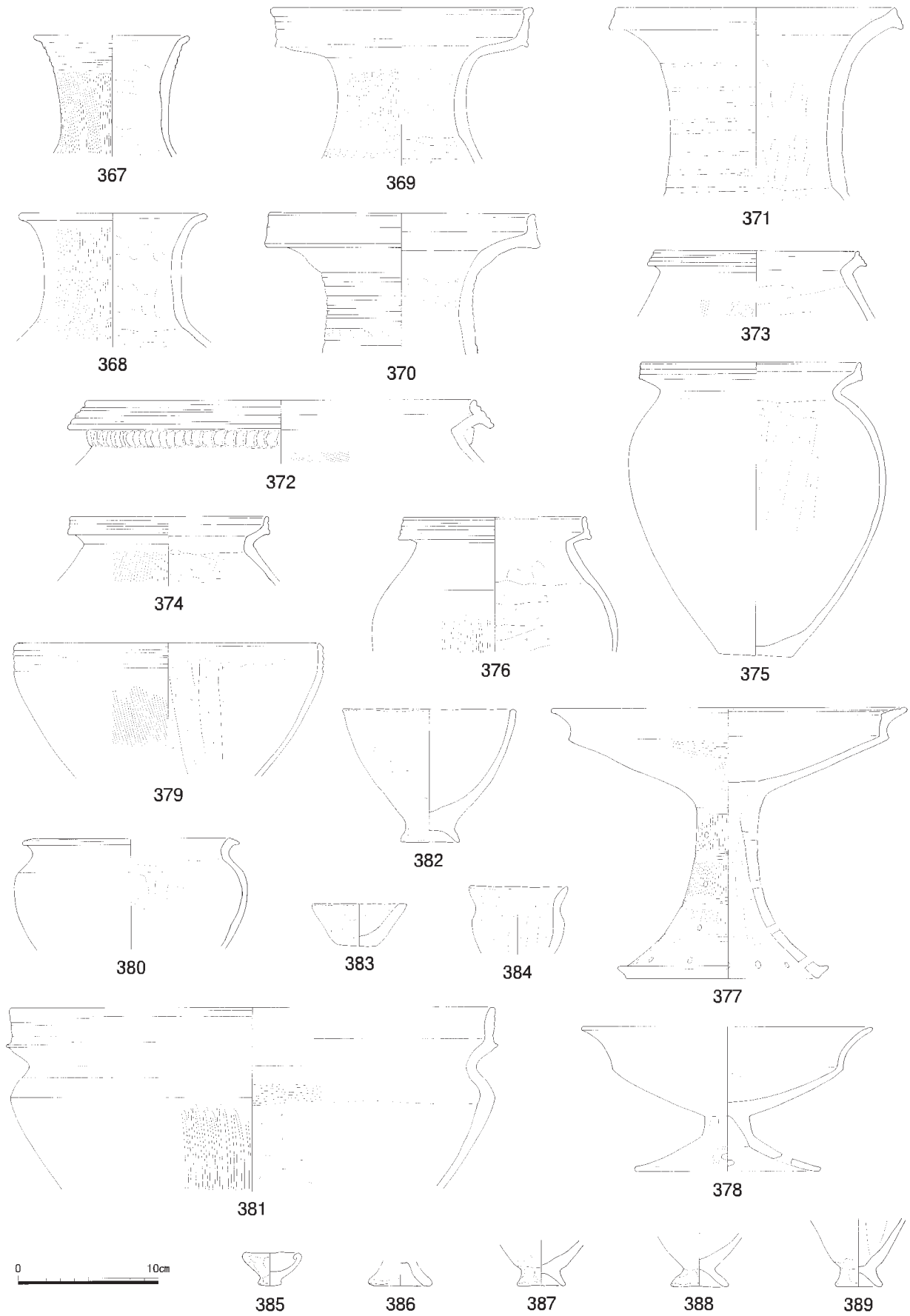
遺構の時期は、検出面や出土遺物などから、弥生時代中期～後期と考えられる。(柴田)

その他の遺構・遺物 (第7～9・59・60図、図版22)

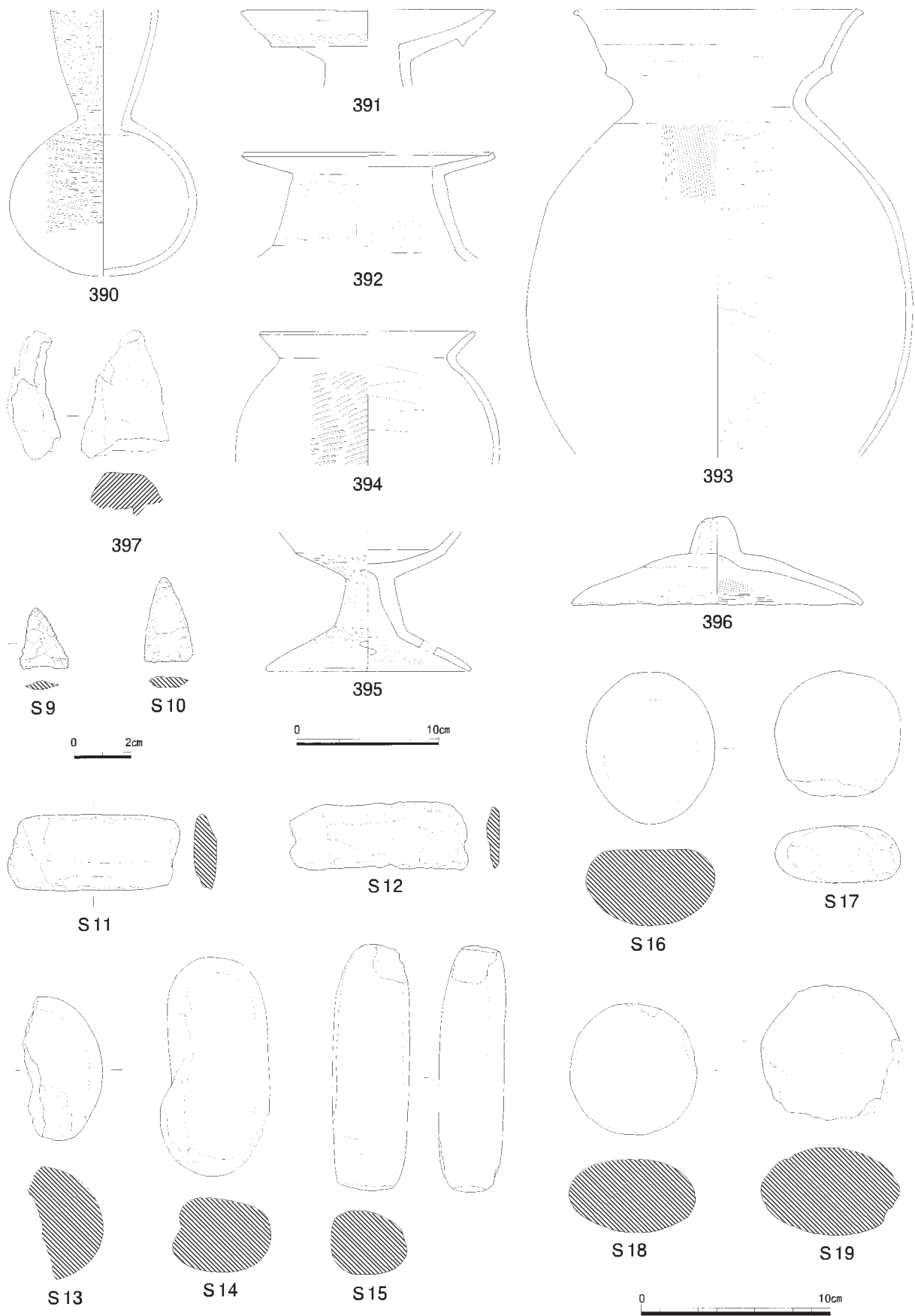
これまで報告してきた遺構のほかに、2区の中央にまとまって径30～40cmの柱穴70本余りが検出されている。柱の抜き痕に遺棄された高杯395などからすると、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前半の間に何らかの建物が存在していた可能性がある。

また、古墳時代以前の遺物には、遺構を検出する過程で出土した、あるいは奈良時代以後の遺構に混入した土器や石器がある。平安時代の井戸4から出土した弥生時代後期前葉の直口壺367と鉢380は本来、土器溜り1もしくは溝1に伴うものと思われる。口径27.8cmを測る372は頸部にユビオサエを施した突帯を貼り付ける弥生時代中期末(仁伍式期)の甕で、やはり溝1に伴う可能性が高い。土壙20から出土した379は径21.6cmを測る口縁下に凹線をめぐらす弥生時代中期末の鉢で、水田2にかかわるものと思われる。ほぼ完存する弥生時代後期後葉の甕375は、竪穴住居2の東側より出土したが明確な遺構は検出できなかった。口径24.9cm、器高19.2cmを測る377は外面に丹塗りを施す後期前葉の高杯である。高杯378や土製支脚397は水田1が埋まる過程で形成された1区南東の窪みから出土した。二重口縁をもつ381は口径34.4cmを測る大形の鉢で、強く肩の張る器形は備中西部から備後に類例が多い。2区から出土した386～389は径3.2～4.5cmの脚台をもつ製塩土器で、このうち胎土に金雲母を含む389は讃岐からの搬入品と見られる。精良な胎土をもつ390は讃岐に系譜をもつ直口壺である。391は筒状の頸部から大きく開く二重口縁に波状文を飾る近畿系の壺、392は褐色の胎土に金雲母を含む讃岐からの搬入品である。外反する二重口縁をもつ壺393や体部外面にタタキメを残す甕394はいずれも古墳時代前期前半の土師器で2区のたわみから出土した。

石製品には石鏃、石包丁、石錘、叩き石がある。S9・10はサヌカイト製の平基鏃で溝1に伴うものと思われる。包含層から出土したS11・12は粘板岩を用いた粗雑なつくりの打製石包丁である。S13は有溝石錘の半製品を叩き石に転用したものである。叩き石には棒状の泥質片岩を利用したS15と花崗岩の円礫を用いたS14・16～19がある。(亀山)



第59図 その他の遺物 1 (1/4)



第60図 その他の遺物2 (1/2・1/3・1/4)

第3節 奈良～平安時代の遺構・遺物

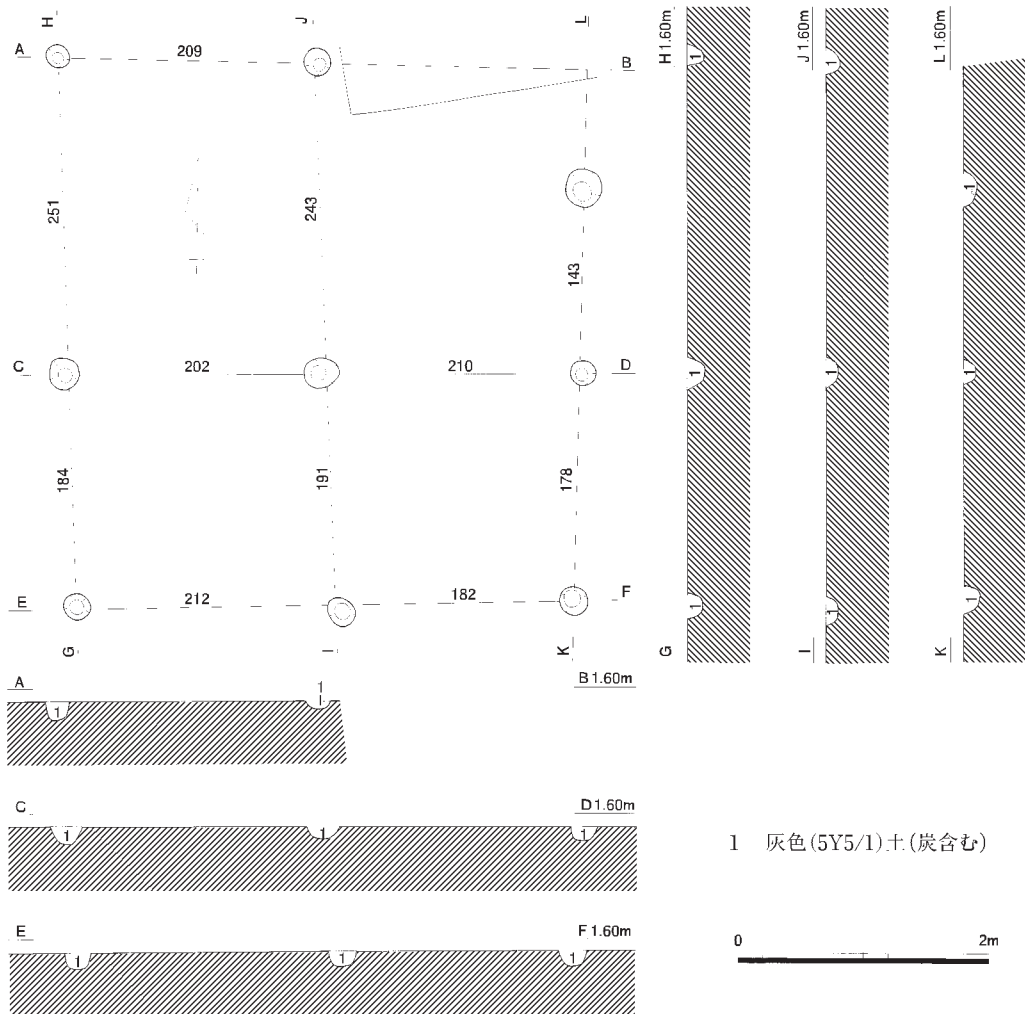
掘立柱建物1 (第61～63図、図版10)

1区の東側で検出した、2×2間の総柱掘立柱建物である。北東隅の柱は、攪乱を受けたために検出されなかったと推測している。また、北東隅近くの柱穴は、埋土等が他と類似するので、この建物に関連すると考えた。棟方向は南北方向で、規模は桁行435cm、梁行384cmを測る。桁の柱間は、178～251cmを測り、総じて南側より北側の方が長い。梁の柱間は、182～210cmである。柱穴は、径18～30cmの円形を呈する掘り方で、深さは10～15cmである。検出されたのは、柱根の深くなった部分の可能性も考えられる。柱穴内の出土遺物は、土師器の小片が認められるにすぎない。

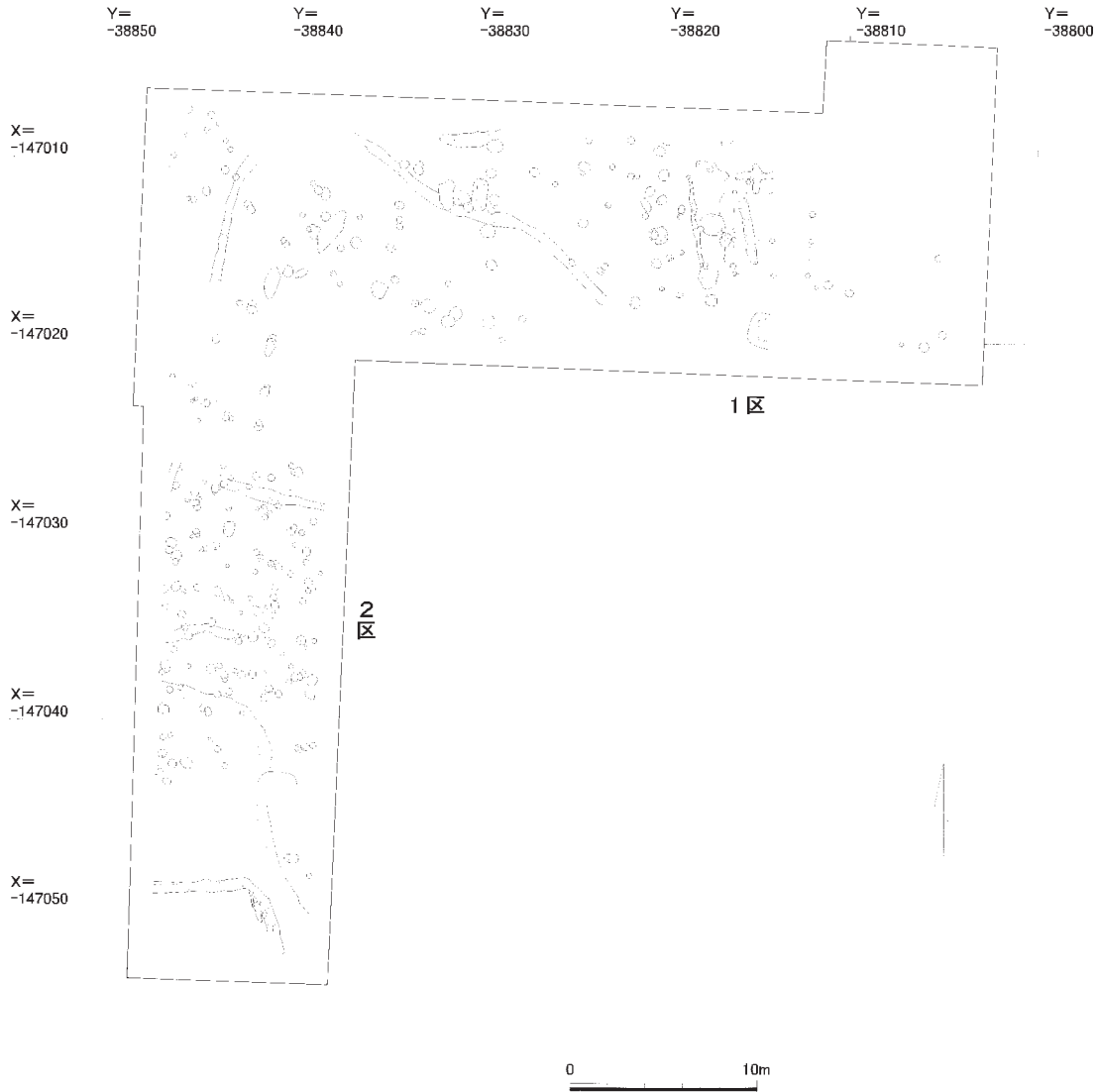
遺構の時期は、検出面や出土遺物から、平安時代末と考えられる。(柴田)

井戸4 (第62・63・65～67図、図版11・12・21)

1区の東側で検出した、縦板組みの方形隅柱横棧型の井戸である。掘立柱建物の南約2m離れて位置する。掘り方および井側の東部分は、大きく攪乱を受けている。



第61図 掘立柱建物1 (1/60)



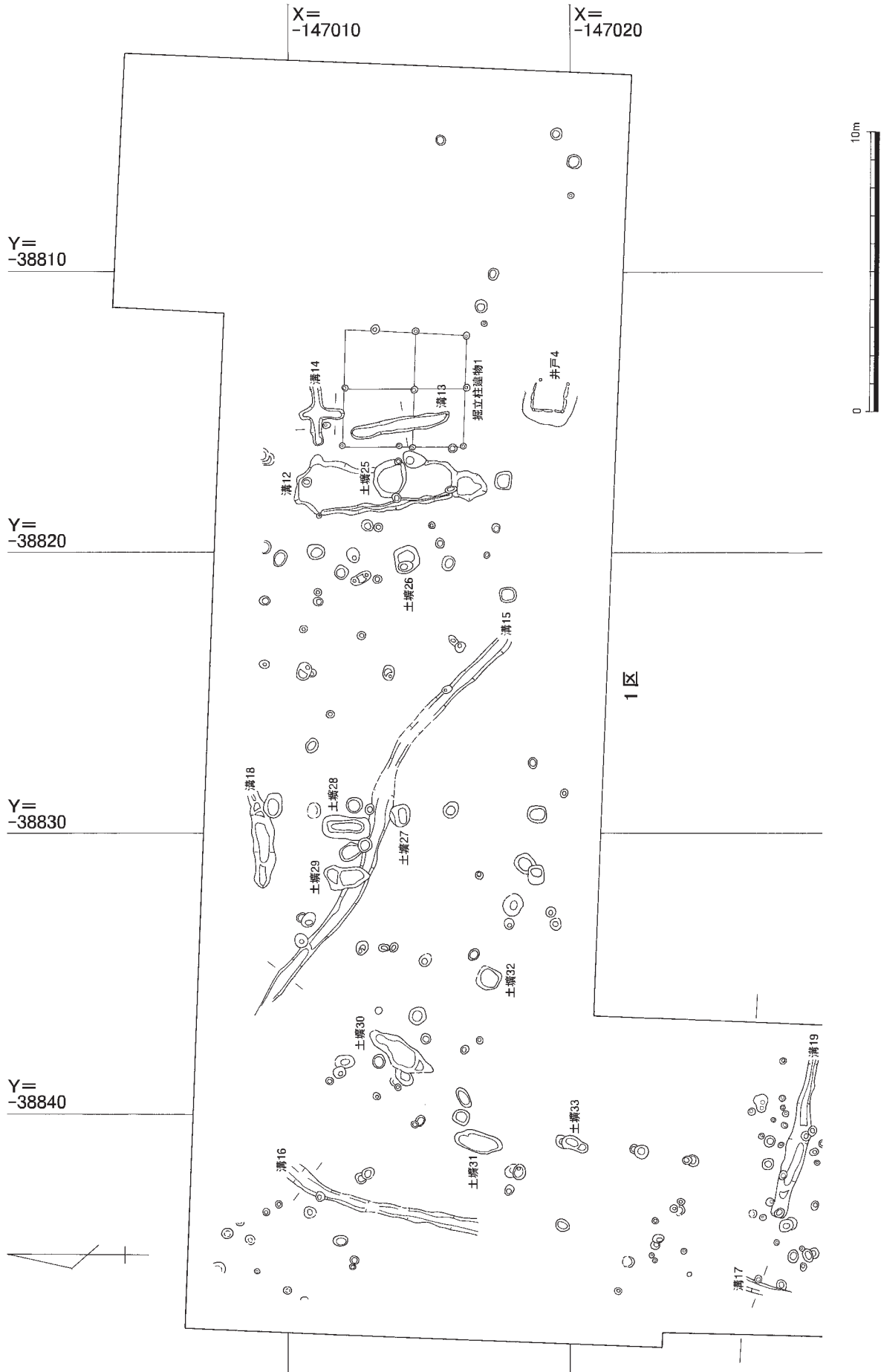
第62図 奈良時代～平安時代遺構全体図 (1/400)

掘り方平面形は、隅丸長方形を呈し、南北方向の長さは183cmを測る。底面の海拔高は-0.08mである。井側は若干外傾し、長さは南北方向で130cmを測る。隅柱は、下端が平らな径10～12cmの丸木（カキノキ属）である。北東の隅柱には、ほぞ穴が穿たれ、横棧が差し込まれている。縦板は、幅20～32cm、厚さ2cmの板材（モミ属）で、各辺3～4枚使用している。なお、隅柱と縦板下端の海拔高は、北辺のみが19cmと低い。井筒との関係から、北辺以外の井側は、使用中に新たに構築された可能性がある。この際、大甕が設置されたと考えるが、土層ではこれを明らかにできなかった。

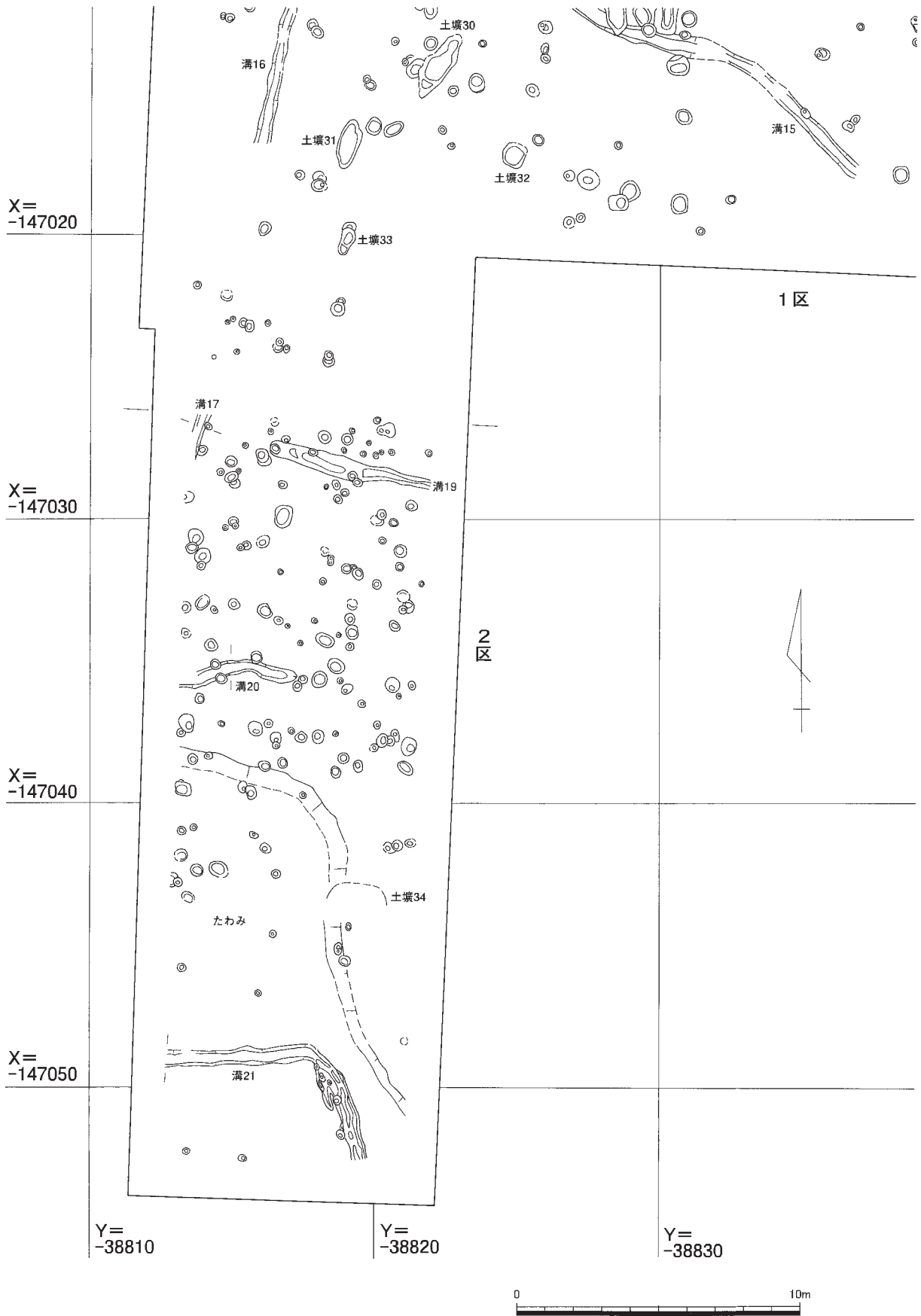
井筒には、須恵器大甕416が使用されている。この下に接して、本来隅柱や横棧であった可能性のある材木が出土しており、甕の設置に際して利用されたと思われる。また、曲物片も散乱している。9層には砂が多く、礫がまとまって出土しており、これは浄水機能を有する可能性もある。

甕がほぼ埋没した、6層上面で8点の土師器杯が出土した（398・399・401・402・405・406・407・412）。いずれも口縁が上になっており、401と407は重なっている。井戸の廃棄に際して据え置かれた可能性が考えられる。1～8層に関して、人為的な埋土を示す根拠は確認できなかった。

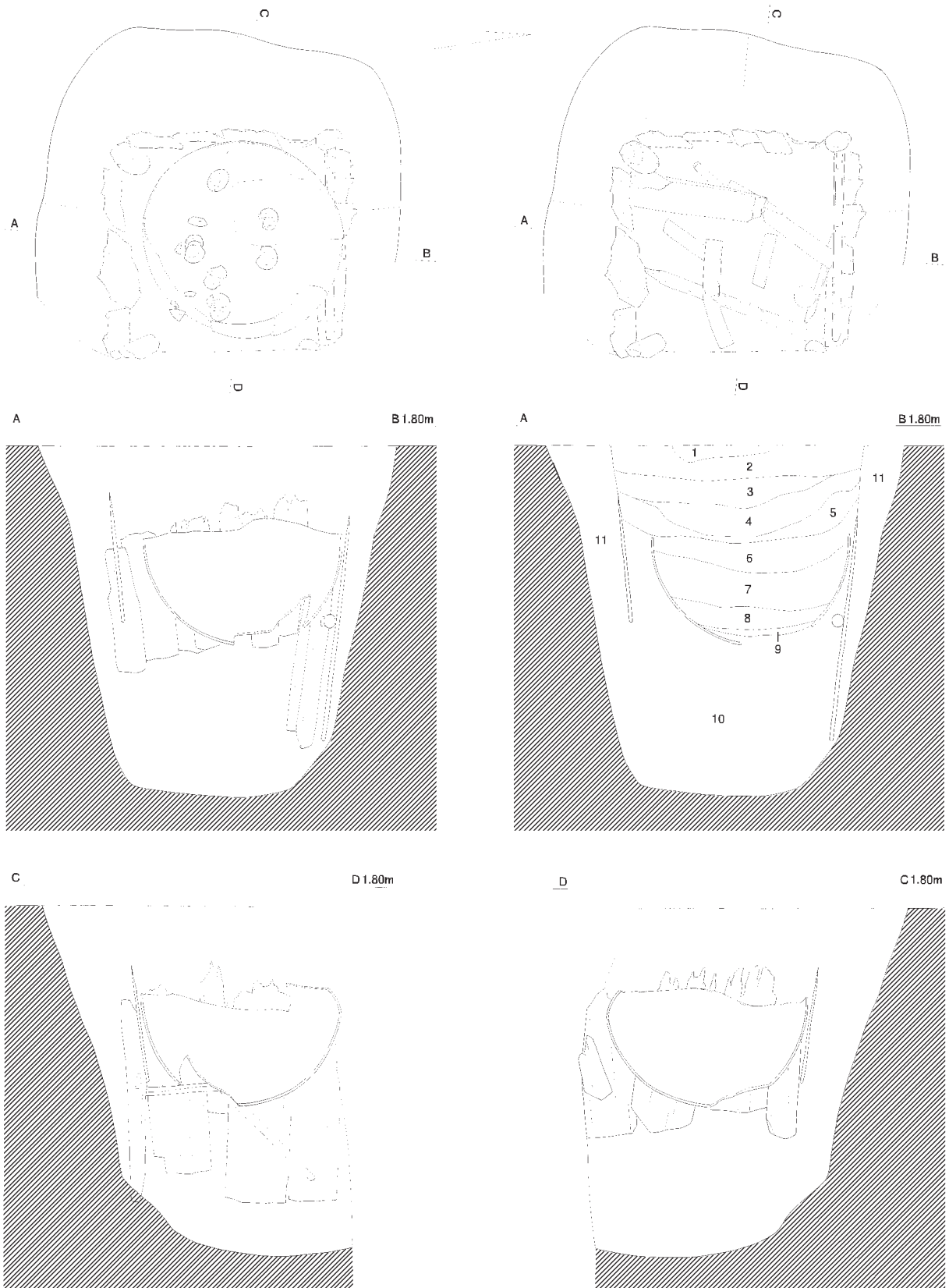
遺構の時期は、検出面や出土遺物から、平安時代前期と考えられる。 (柴田)



第63図 奈良時代～平安時代遺構配置図1 (1/200)



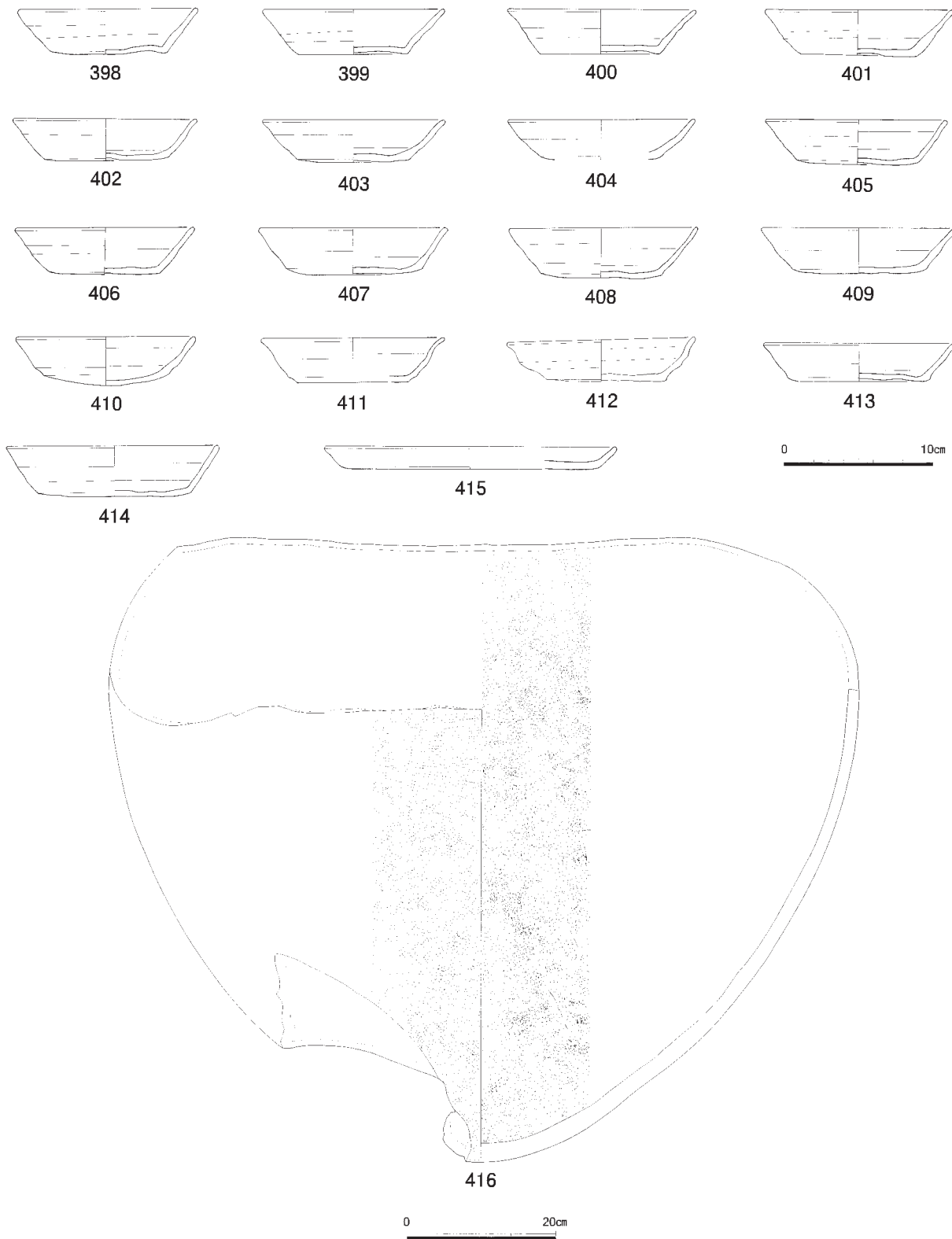
第64図 奈良時代～平安時代遺構配置図2 (1/200)



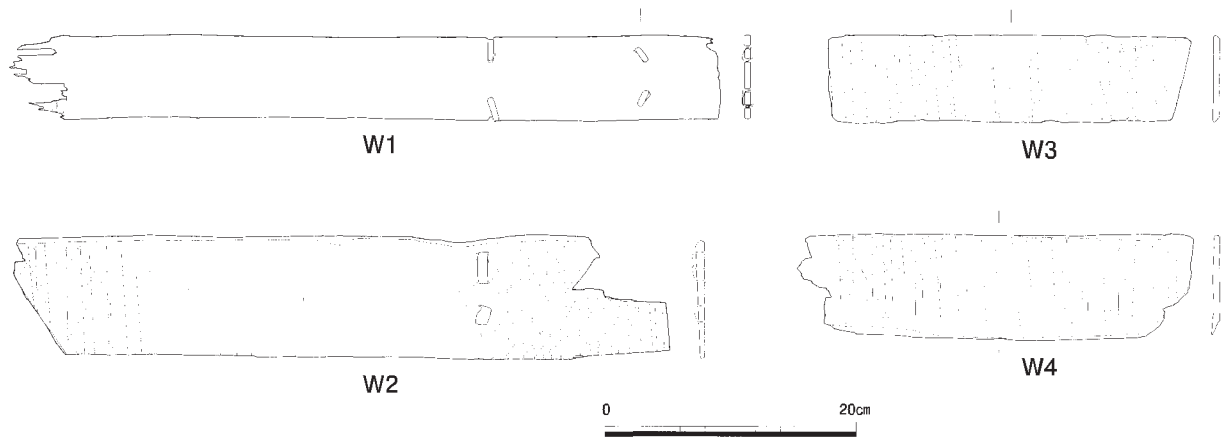
第65図 井戸4 (1/30)

第2章 調査の概要

- | | | |
|-----------------|----------------------|-----------------------|
| 1 灰色(N6/)土 | 5 灰色(5Y5/1)土 | 9 褐灰色(5Y6/1)土 |
| 2 褐灰色(10YR5/1)土 | 6 灰色(N5/)粘質土 | 10 灰色(N4/)粘質土(木片多く含む) |
| 3 黄褐色(7.5Y5/1)土 | 7 灰色(N4/)粘質土(木片多く含む) | 11 オリーブ黒色(5Y3/1)土 |
| 4 灰色(4N/)粘質土 | 8 オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土 | |



第66図 井戸4出土遺物1 (1/4・1/8)



第67図 井戸4出土遺物2 (1/6)

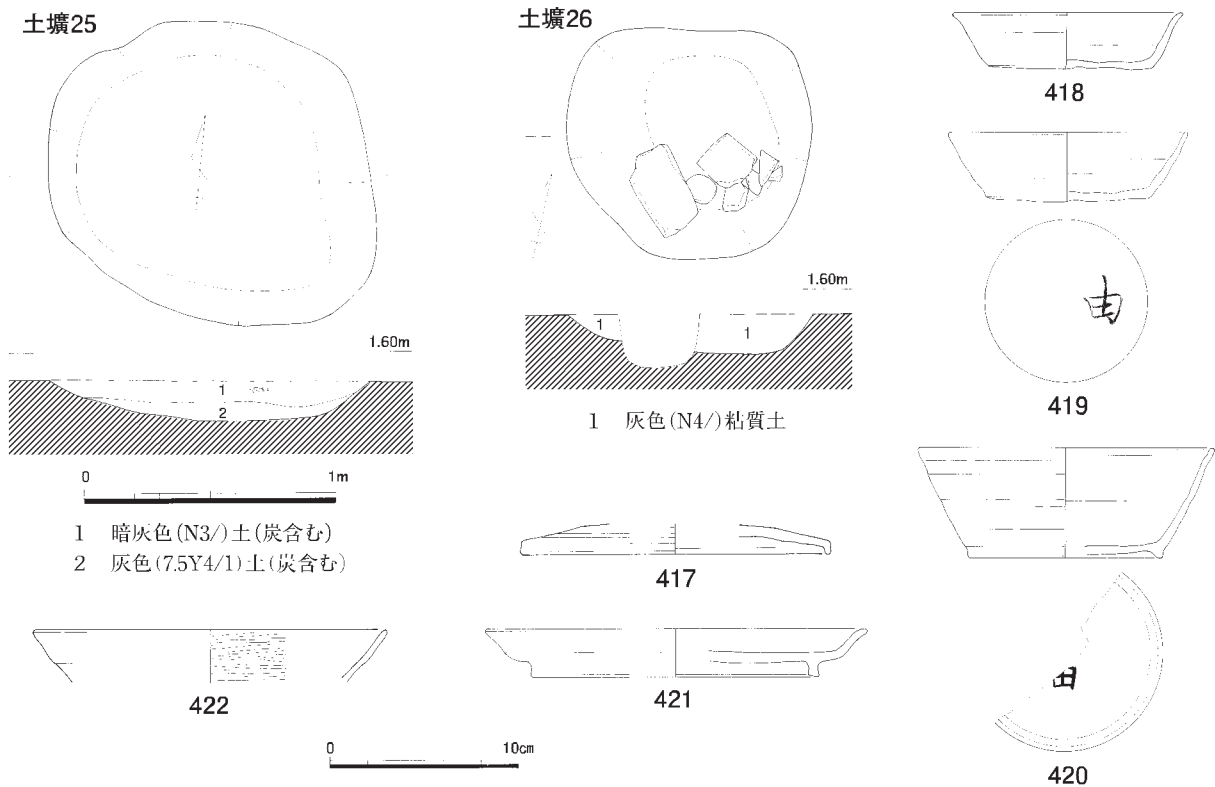
土壙25 (第62・63・68図、図版12・21)

1区の東側で検出した土壙で、掘立柱建物1の西に近接する。溝12を切っているが、両者の埋土は比較的類似する。掘り方平面形は、不整楕円形を呈し、検出面での長さは127cm、幅は118cmを測る。断面形は皿形で、深さは17cmである。埋土中から、須恵器の蓋417や杯419・420、土師器の杯418や皿421、黒色土器422などが出土しているが、蓋や皿などは混入していると思われる。図示していないが、他にも須恵器甕片などもある。

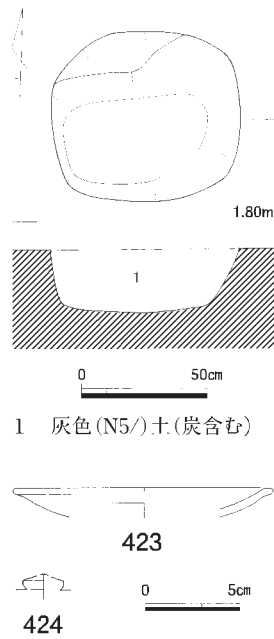
杯419は完形近くまで復元され、底部外面の中央右寄りに「由」の墨書がある。杯420の底部外面には、中央のわずかに下に「由」の可能性のある墨書が認められる。

遺構の時期は、出土遺物から、平安時代前期と考えられる。

(柴田)



第68図 土壙25・26 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第69図 土壌27 (1/30)、
出土遺物 (1/4)

土壌26 (第62・63・68図)

1区の中央付近で検出した土壌で、土壌25から約2m西に離れて位置する。掘り方平面形は、不整楕円形を呈し、検出面での長さは96cm、幅は90cmを測る。断面形は逆台形で、深さは16cmである。埋土中に角礫がまとまって出土しているが、出土遺物は認められなかった。

時期は、検出面や埋土から、奈良～平安時代の可能性がある。(柴田)

土壌27 (第62～64・69図)

1区の中央付近で検出した土壌で、土壌26から約8m西に離れて位置する。掘り方平面形は、隅丸方形を呈し、検出面での長さは75cm、幅は66cmを測る。断面形は逆台形で、深さは25cmである。炭を含む埋土には、灰オリーブ(7.5Y6/2)色の砂質土塊が混じる。埋土中から、緑釉陶器皿423、須恵器蓋424が出土した。

時期は、検出面や出土遺物から、平安時代前期と考えられる。(柴田)

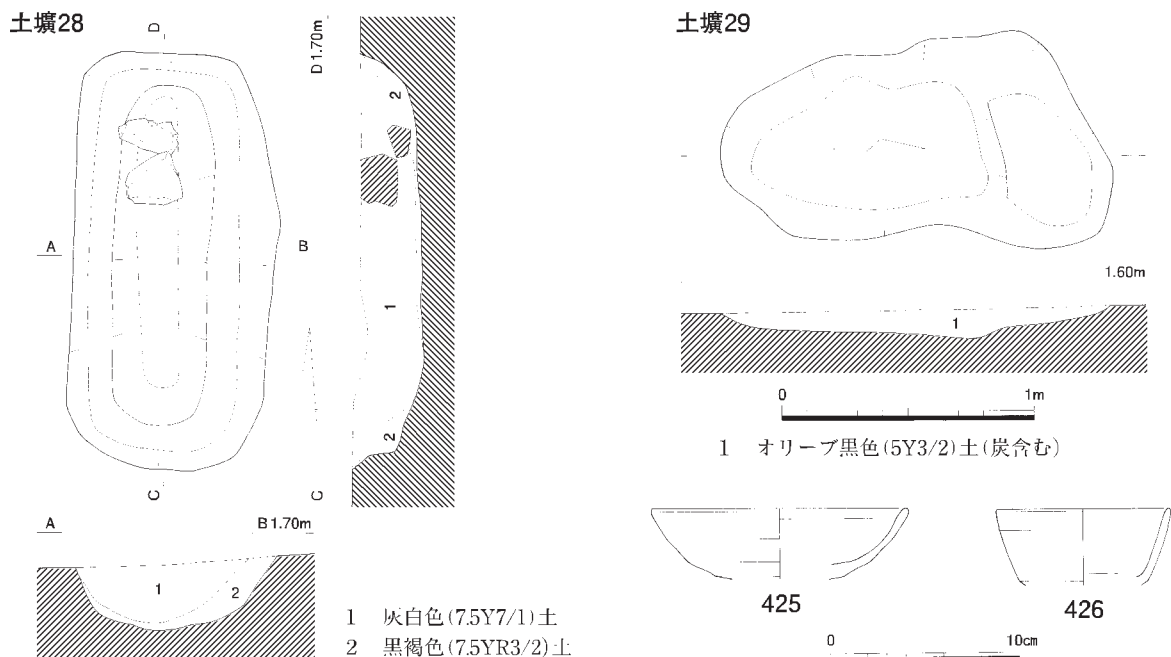
土壌28 (第62・63・70図、図版13)

1区の中央付近で検出した土壌で、土壌27の北に近接する。埋土に粗砂が多く混じり、遺構内の掘り下げは容易であった。掘り方平面形は、南北方向に長い長方形を呈し、検出面での長さは167cm、幅は81cmを測る。底面にごく浅い長楕円形の凹みが認められる。土壌墓の可能性も考えたが、確定はできなかった。

周囲の古代と考える埋土とは異なるが、古代を含め中世までの可能性がある。(柴田)

土壌29 (第62・63・70図)

1区の中央付近で検出した土壌で、土壌28から約1m西に離れて位置する。海拔高1.6mでたわみ状の掘り方を検出したが、不明瞭であったため、海拔高1.5mまで掘り下げてあらためて検出した。



第70図 土壌28・29 (1/30)、出土遺物 (1/4)

掘り方平面形は、南北に長い不整楕円形を呈し、検出面での長さは156cm、幅は83cmを測る。断面形は皿形であるが、北側に段が形成されている。検出面からの深さは12cmを測る。埋土中から、須恵器の高杯425や杯426が出土している。

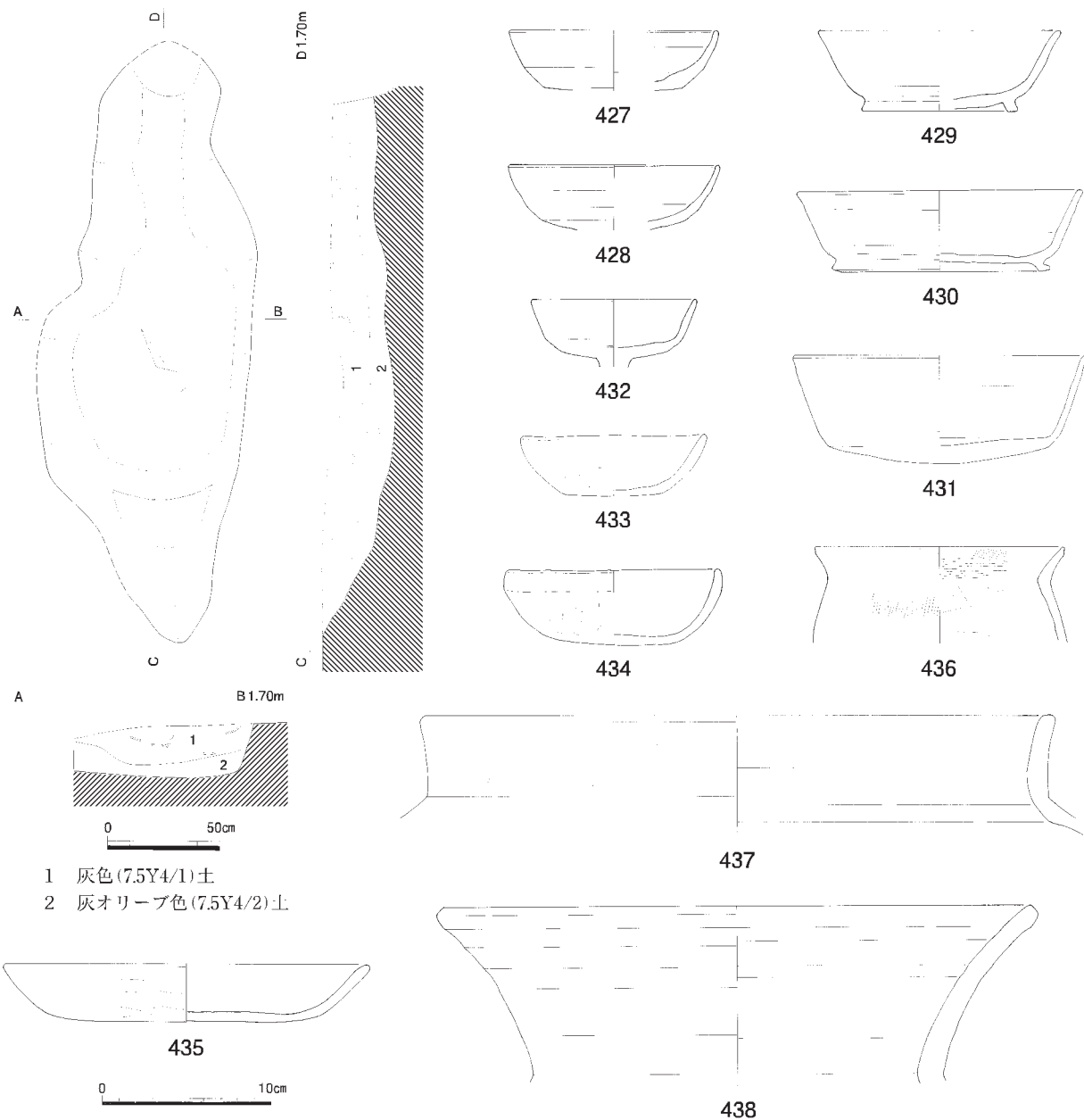
遺構の時期は、検出面や出土遺物などから、奈良時代後期と考えられる。 (柴田)

土壇30 (第62～64・71図、図版13・21)

1区の西側で検出した土壇で、土壇29から約5m西に離れて位置する。

掘り方平面形は、南北に長い不整楕円形を呈し、北東端は柱穴に切られている。中央付近は広くて深いが、両端にかけて幅が狭くなり、深さも浅くなる。検出面での長さは現状で260cm、幅は91cmを測る。断面形は皿形で、深さは22cmである。底面には、凹凸が認められる。

1層には、炭や焼土が含まれるとともに、多くの土器が出土した。須恵器の杯427～431、高杯432、



第71図 土壇30 (1/30)、出土遺物 (1/4)

甕437・438、土師器の椀433・434、皿435、甕436などがある。なお、431は底部外面の中央に「×」のヘラ描きが認められる。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、奈良時代後期と考えられる。(柴田)

土壙31 (第62～64・72図、図版13・14・21)

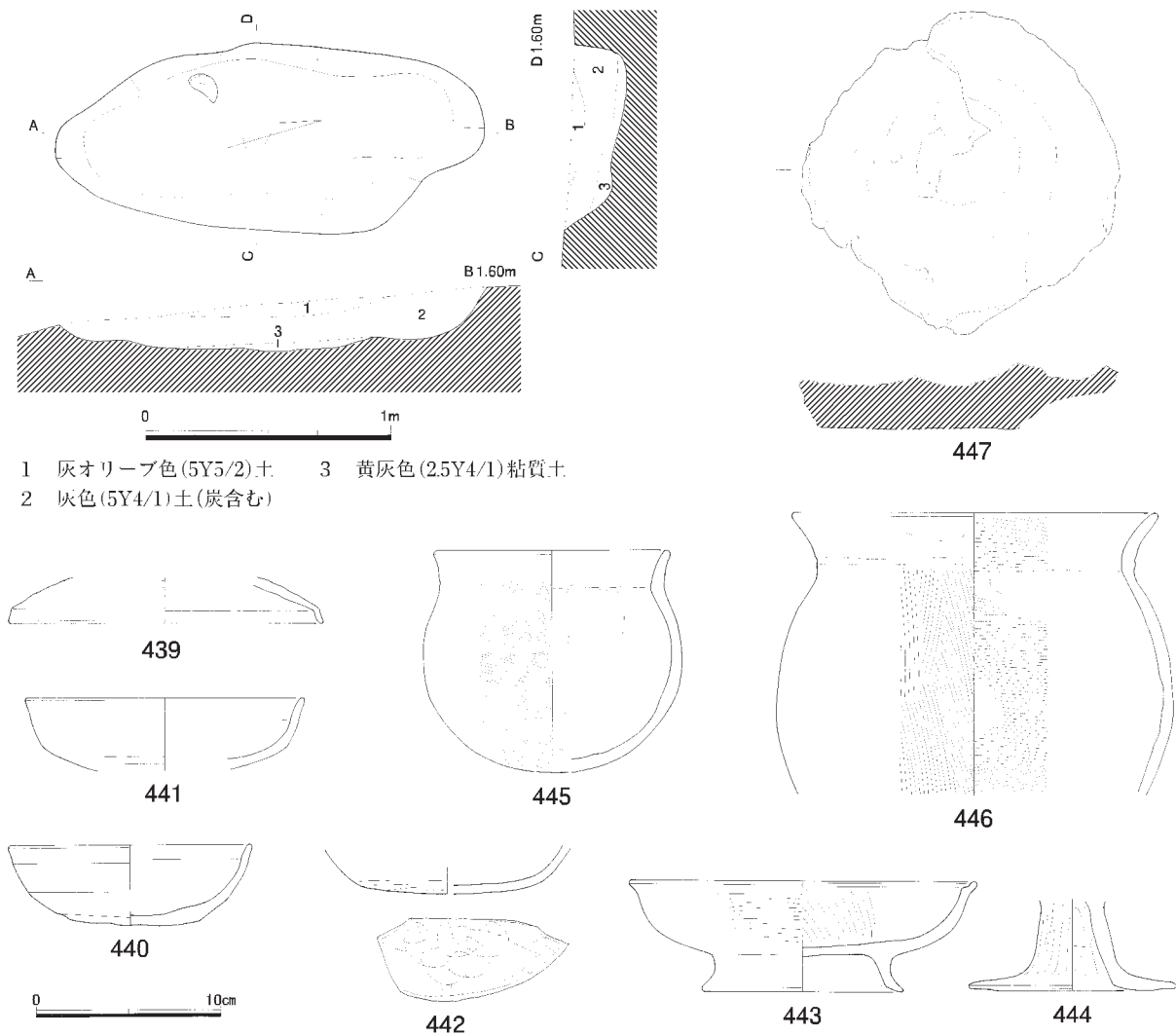
1区の西側で検出した土壙で、土壙30から約3m南西に離れて位置する。南側は、攪乱を受けており、遺構検出ができた高さは低い。掘り方平面形は、南北に長い不整楕円形を呈し、検出面での長さは175cm、幅は76cmを測る。断面形は逆台形で、深さは26cmである。底面には、凹凸が認められる。形態から判断して、溝30と同様な遺構と考えられる。

1・2層を中心に、土器が出土した。須恵器の蓋439、杯440、高杯441、器種不明447、土師器の杯442、皿443、高杯444、甕445・446などがある。447の上面は、中央の凹み周囲の粘土が剥離しているが、図の右端にはわずかにナデによる内傾面が残存する。下面は、工具によるナデが認められる。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、奈良時代後期と考えられる。(柴田)

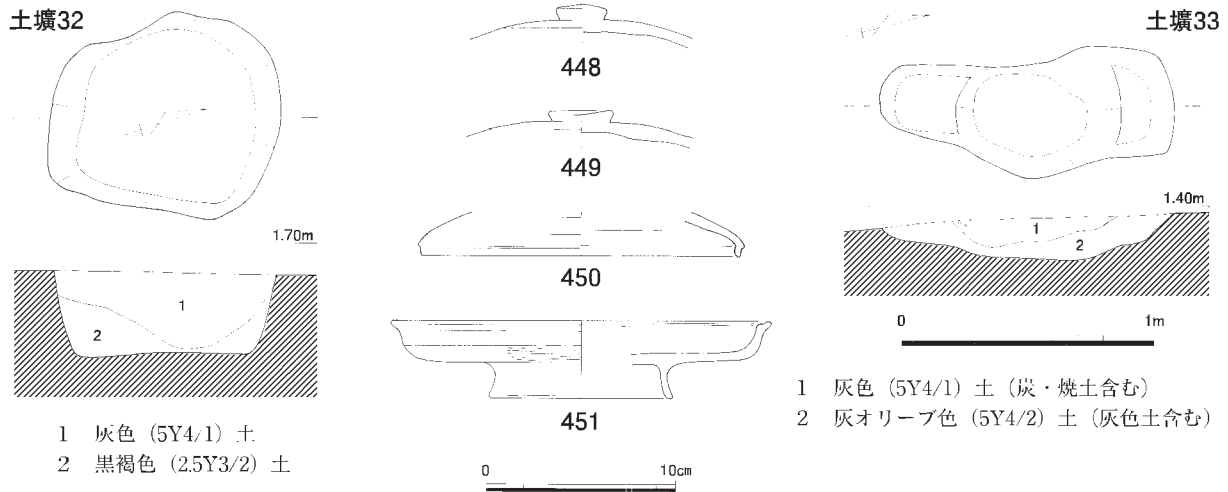
土壙32 (第62～64・73図)

1区の西側で検出した土壙で、土壙30から約3m南東に離れて位置する。



- 1 灰オリーブ色(5Y5/2)土
- 2 灰色(5Y4/1)土(炭含む)
- 3 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土

第72図 土壙31 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第73図 土壌32・33 (1/30)、出土遺物 (1/4)

掘り方平面形は、不整長方形を呈し、検出面での長さは91cm、幅は79cmを測る。断面形は逆台形で、深さは35cmである。柱穴の可能性も考えられる。

1層には炭粒が含まれ、2層には黄色土塊が混じる。遺物は、1層中に多く、須恵器の蓋448～450、土師器の皿451などが出土した。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、奈良時代後期と考えられる。(柴田)

土壌33 (第62～64・73図)

1区の西側で検出した土壌で、土壌31から約2m南に離れて位置する。上面は攪乱を受けており、遺構検出面は他の遺構よりも低くなっている。

掘り方平面形は、南北に長い不整長方形を呈する。中央付近は広くて深い、両端にかけて浅くなる。検出面での長さは116cm、幅は45cmを測る。断面形は皿形で、底面には、凹凸が認められる。形態から判断して、溝30と同様な遺構と考えられる。埋土中からは、小片の土師器が出土した。

遺構の時期は、出土遺物や遺構形態などから、奈良時代後期の可能性がある。(柴田)

土壌34 (第62・64・74図、巻頭図版2)

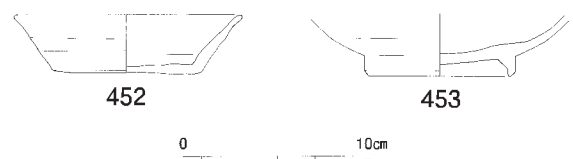
2区の南西に位置する土壌で、長さ238cm、深さ18cmを測るが、北側は浄化槽によって壊され、南側も建物の基礎による攪乱を受けていたため幅83cmを検出したにすぎず、全容は判然としない。

出土遺物は少ないが、ここでは452・453を図示した。452は口径12.0cm、器高3.2cmを測る土師器の杯で、底面にヘラ記号が見られる。灰釉陶器453は釉をハケ塗りした三日月高台をもつ椀で、見込みには重ね焼きの痕が残る。猿投古窯址群の黒笹95号窯式に相当し、9世紀後半に位置づけられる。

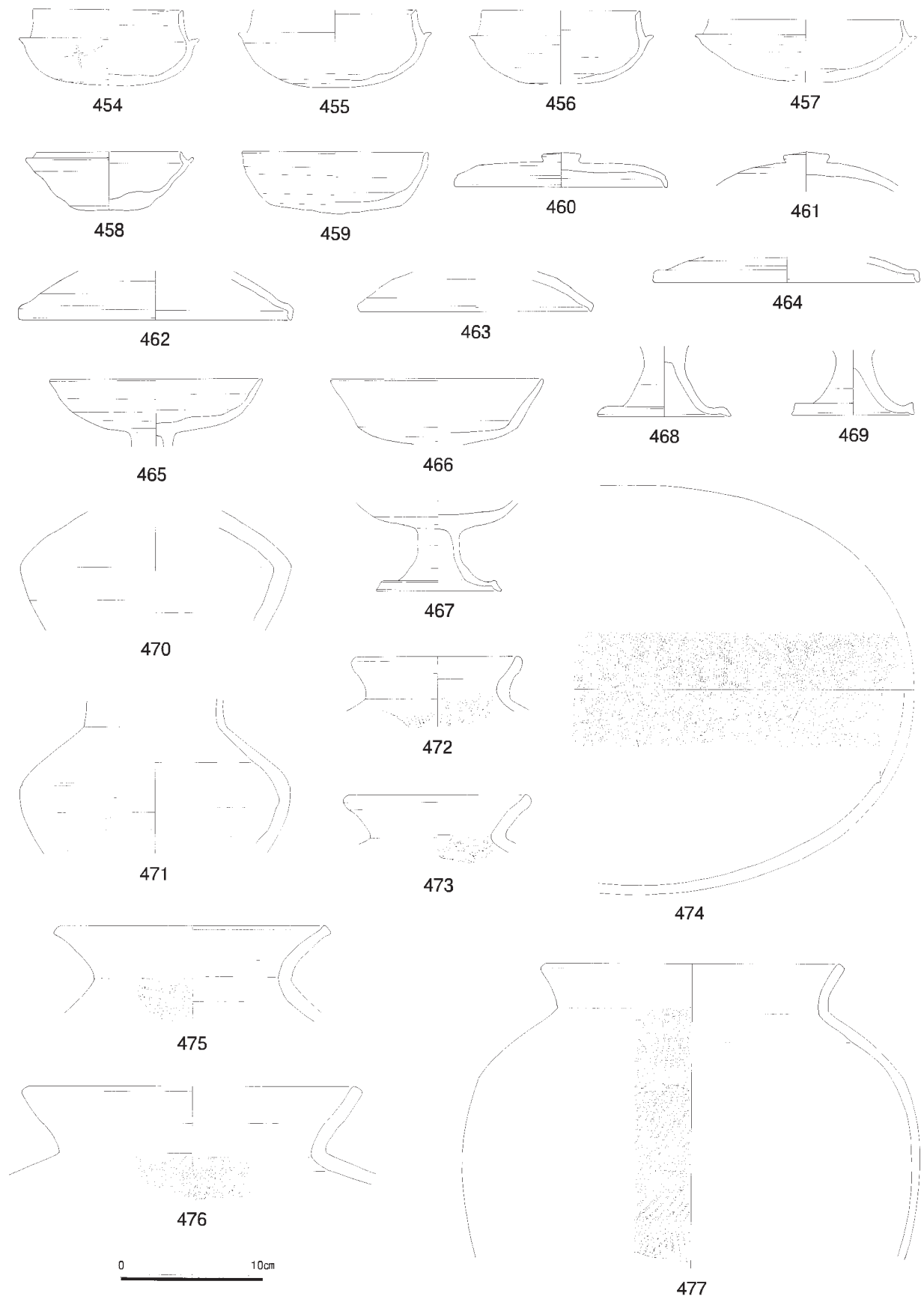
(亀山)

たわみ (第62・64・75・76図、図版15)

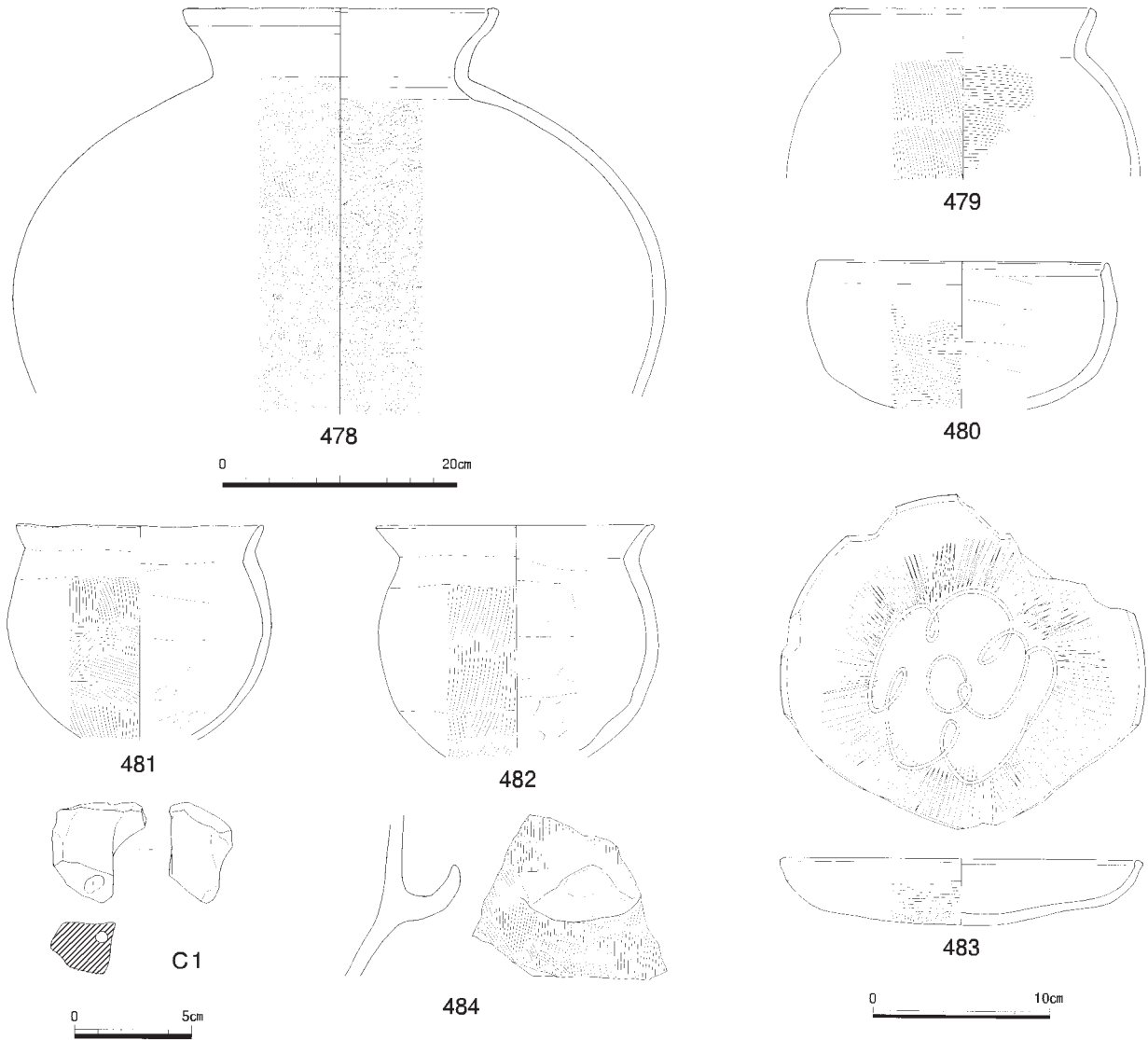
2区の南半に広がる低位部で、その肩口は北西から南東にかけて鍵形に延びる。海拔1.2mの底面には鍵形に走る溝21が掘り込まれており、水田として利用された可能性も考えられる。褐灰色をなす埋土には、人頭大の礫やウマ・シカなどの遺体



第74図 土壌34出土遺物 (1/4)



第75図 たわみ出土遺物1 (1/4)



第76図 たわみ出土遺物2 (1/3・1/4・1/6)

とともに古墳～奈良時代にわたる土師器や須恵器が含まれており、この低位部の形成が古墳時代まで遡る可能性を示している。また、平安時代前期の柱穴が埋土の上面から掘り込まれていることからすると、このころには完全に埋積していたものと思われる。

出土遺物には、須恵器454～478や土師器479～484のほか土馬C1がある。蓋杯454～458のうち、立ち上がりが直立し端部に内傾する面をもつ454～456は5世紀後半、立ち上がりが内傾し径13.6cmを測る457は6世紀後半、径10.2cmを測る立ち上がりが短く底部の調整を省略する458は7世紀中葉に位置づけられる。口径12.8cmを測る杯459は口縁の一部を欠いているが、暗紋を施した土師器の皿483の上に伏せた状態で出土した。460～464は蓋で、460・461には碁石状のつまみが残る。高杯の杯部には椀形をなす465と杯形の466があり、低い脚部467～469はいずれも端部を斜め下方に折り曲げる。470・471は肩の張る壺の体部で、前者は長頸壺、後者は短頸壺になるものと思われる。472～474は横瓶で、径11.4～12.4cmを測る口縁端部はわずかに肥厚する。479は短く外反する口縁部をもつ5世紀後半の甕で、480は外面を粗いハケメで調整する7世紀前半の鉢である。481・482は口径13.8～15.5cmを測る小形の甕で、外面には煤が付着する。484は上方へ折り曲げた三角形の把手をもつ鍋である。C1は土馬の脚部で、軸木を用いて胴部と接合した様子がうかがえる。(亀山)

溝12 (第62・63・77図、図版10・14・21)

1区の東側で検出された溝で、井戸4の北西に位置する。南北に延びる溝であるが、掘り方の南北端は土壇状に閉じている。海拔高1.6mから遺物の出土が認められたが、1.5mまで掘り下げないと掘り方の検出はできなかった。溝13・14との関連も検討が必要と考えられる遺構である。

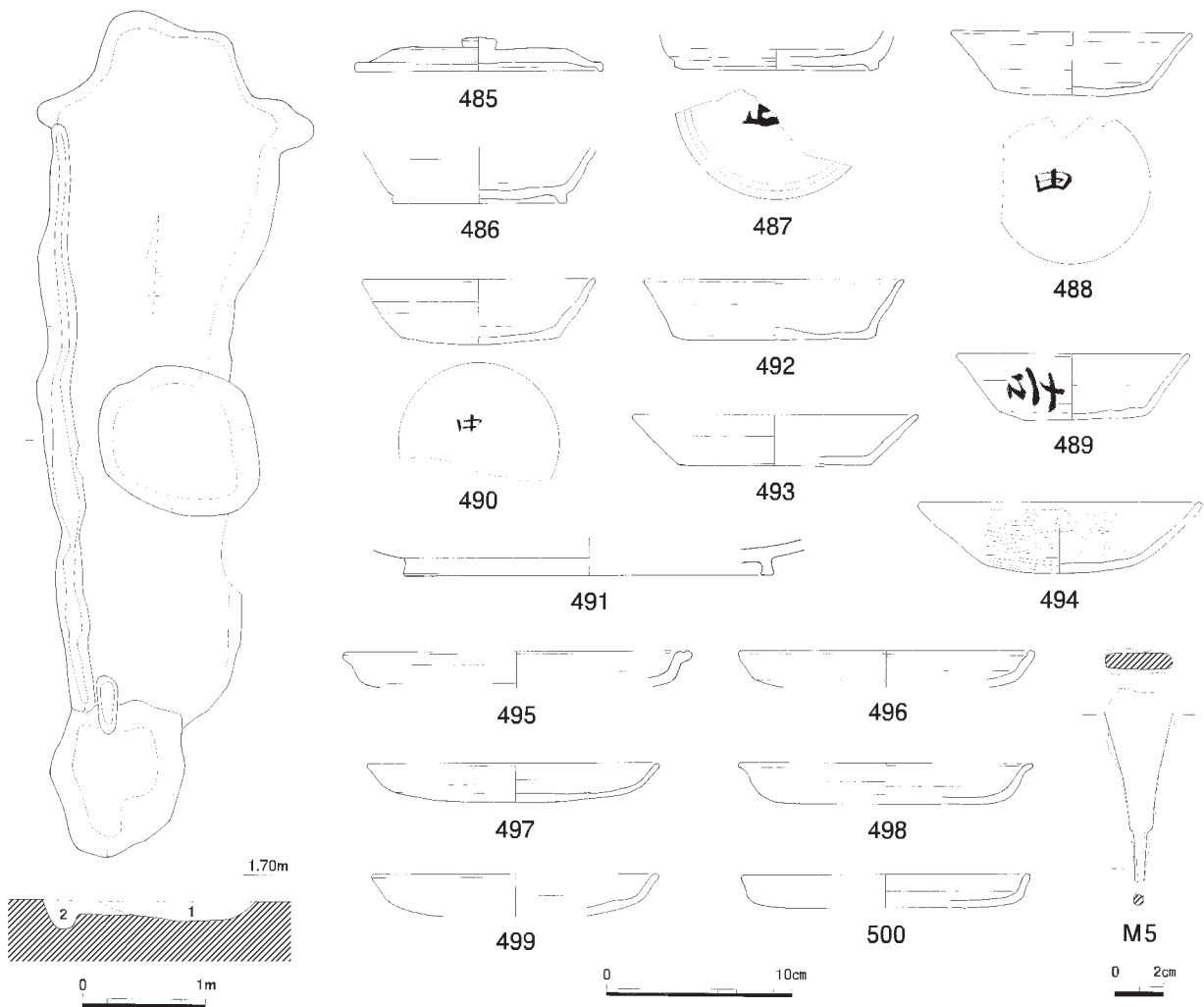
検出面での上幅は142cm、深さは17cmを測る。断面形は皿形を呈するが、西端に幅20~28cm、深さ10cm程度の細い溝が伴う。埋土中からは、供膳具を中心とした須恵器や土師器、黒色土器、鉄鎌M5などが出土している。出土遺物には時期幅が認められるが、491・495・496など奈良時代とみられるものには小片のものが多く、混入と考えられる。

須恵器の蓋485は、転用硯とみられる。須恵器の杯487・488・490は、いずれも底部外面の中央付近に墨書が認められる。杯489は、体部外面に横位で「吉」の字が墨書されている。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、平安時代前期と考えられる。(柴田)

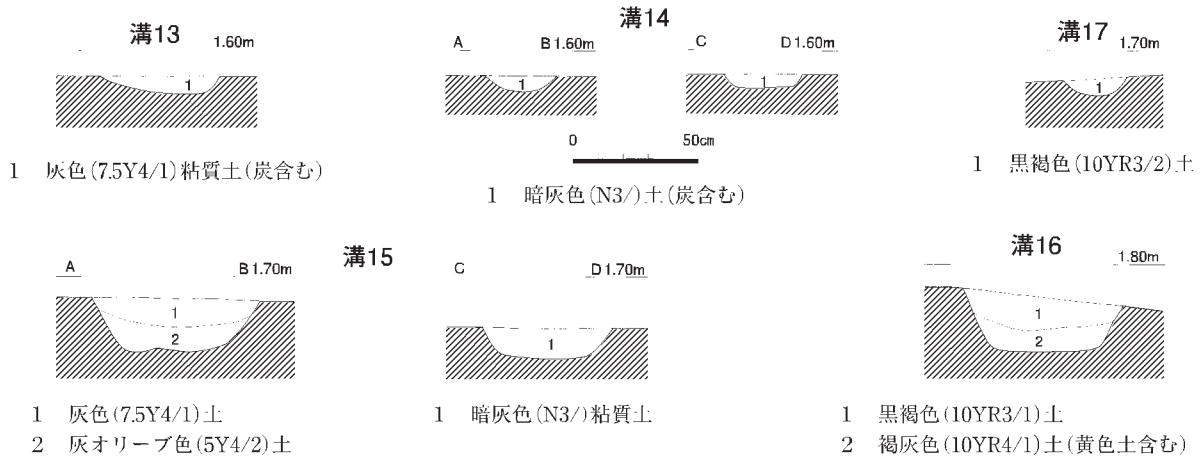
溝13 (第62・63・78図、図版10)

1区の東側で検出された南北に延びる溝である。溝12から1m程度離れて東に位置し、ほぼそれに平行している。検出面での上幅は47cm、深さは7cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。溝12との関連も検討が必要と考えられる遺構である。



- 1 土壇25埋土
- 2 暗灰色(N3/)粘質土(炭含む)

第77図 溝12 (1/60)、出土遺物 (1/3・1/4)



第78図 溝13～17 (1/30)

遺構の時期は、検出面や埋土から、奈良～平安時代の可能性がある。(柴田)

溝14 (第62・63・78図、図版10)

1区の東側で検出された溝で、溝13から1m程度離れて北に位置する。掘り方平面形は、十字形を呈し、東端は攪乱を受けている。検出面での上幅は29cm、深さは6cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。東西方向の溝は、溝12の掘り方の北東隅にある突出部分につながる可能性もある。

遺構の時期は、検出面や埋土から、奈良～平安時代の可能性がある。(柴田)

溝15 (第62～64・78図、図版10)

1区の中央付近を、北西から南東に蛇行しながら流走する溝である。土壙29などに切られ、両端は攪乱を受けている。検出面での上幅は71cm、深さは22cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、中央が高く1.49m、東端1.44m、西端1.39mと両端へ下がる。

遺構の時期は、検出面や出土遺物などから、古墳時代後期以降、古代までの間におさまる。(柴田)

溝16 (第62～64・78図、図版10)

1区の西端を南北に流走する溝である。土壙30から5m程度離れて西に位置し、両端は攪乱を受けている。溝15と同一の可能性も考えられる。検出面での上幅は62cm、深さは25cmを測る。断面形は、逆台形を呈する。底面の海拔高は、北端が1.45m、南端が1.39mである。

遺構の時期は、検出面などから古墳時代後期以降、古代までの間におさまる可能性がある。(柴田)

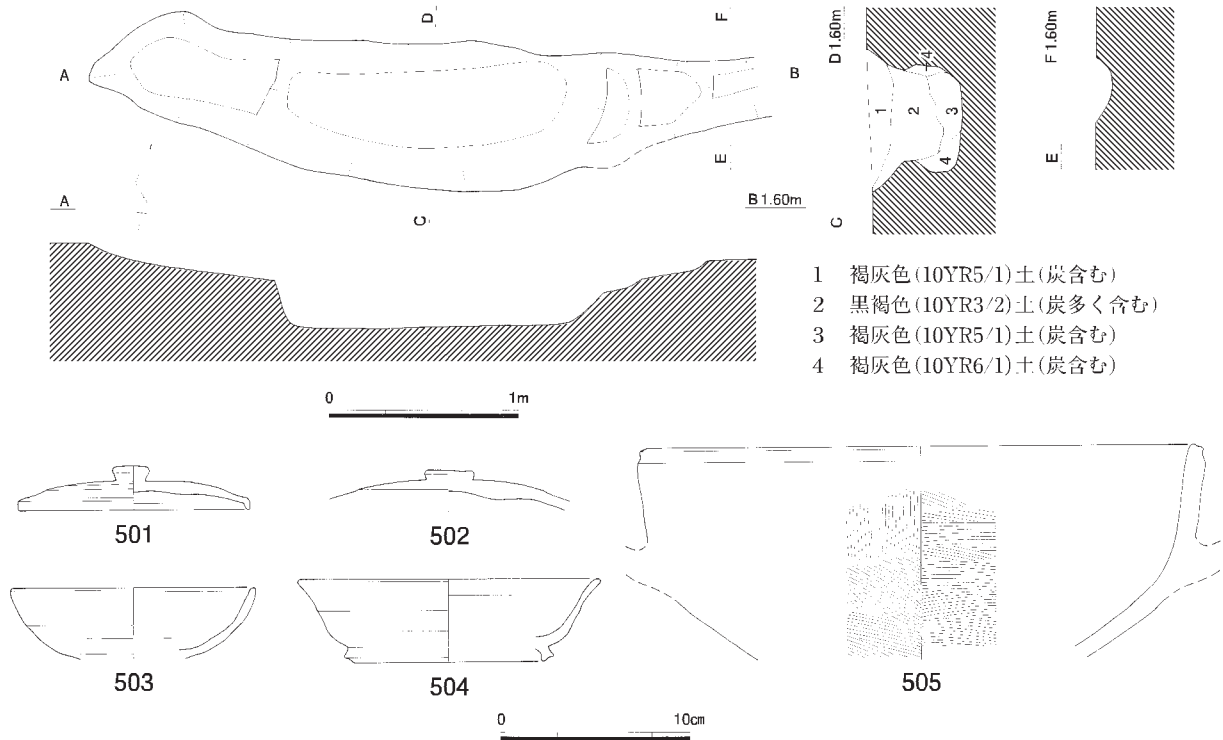
溝17 (第62～64・78図)

2区の北東を北北東から南南西に走る溝で、検出長187cm、幅40cm、深さ7cmを測る。北側は攪乱により失われ南側は調査区外に延びているが、黒褐色をなす埋土の特徴から、9.7m北へ離れた溝16と繋がる可能性が高い。

弥生土器の小片が若干出土しているが、溝16との関係から古代に属するものと思われる。(亀山)

溝18 (第62・63・79図、図版14)

1区の北、中央付近で検出された、東西方向に延びる溝である。土壙29から2m程度離れて北に位置し、東端は攪乱を受けている。中央付近は広くて深い、両端にかけて幅が狭くなり、深さも浅くなる。検出面での上幅は80cm、深さは49cmを測る。断面形は、U字形を呈するが、一部では袋状となる。いずれの埋土にも炭が含まれるが、2層では特に多く、小木片も混じる。また、4層の堆積以降、再度掘り込みを行っていることが断面で認められた。形態は、溝19に類似する。埋土中から、須恵器



第79図 溝18 (1/40)、出土遺物 (1/4)

の蓋501・502、高杯503、杯504、土師器の鍋505などが出土している。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、奈良時代後期と考えられる。

(柴田)

溝19 (第62～64・80図、図版15)

溝17の東2.3mをほぼ東西に走る溝で、2区の北東壁にかかって検出した。長さ346cm、幅83cm、深さ79cmの長楕円形を呈する土壌に、幅48cm、深さ28cmの溝が接続する形態をとる。土壌部分は断面U字形をなし、黄褐色の粘土を貼った底面の上には炭化物と焼土が互層に堆積する。埋土からは、土師器や須恵器のほかウシの基節骨が出土している。

土師器は、放射状の暗紋を飾る506や全面をヘラミガキで仕上げる507のような丹塗りを施す杯のほか甕が少量出土している。須恵器には、ボタン状のつまみをもつ蓋508や口径11.6cmを測る杯509、高杯の脚部510、長方形の透かしを穿つ円面硯の脚台部512のほか、壺や甕の小片がある。このうち512は溝20から出土した513と同一個体と見られる。

(亀山)

溝20 (第62・64・81図)

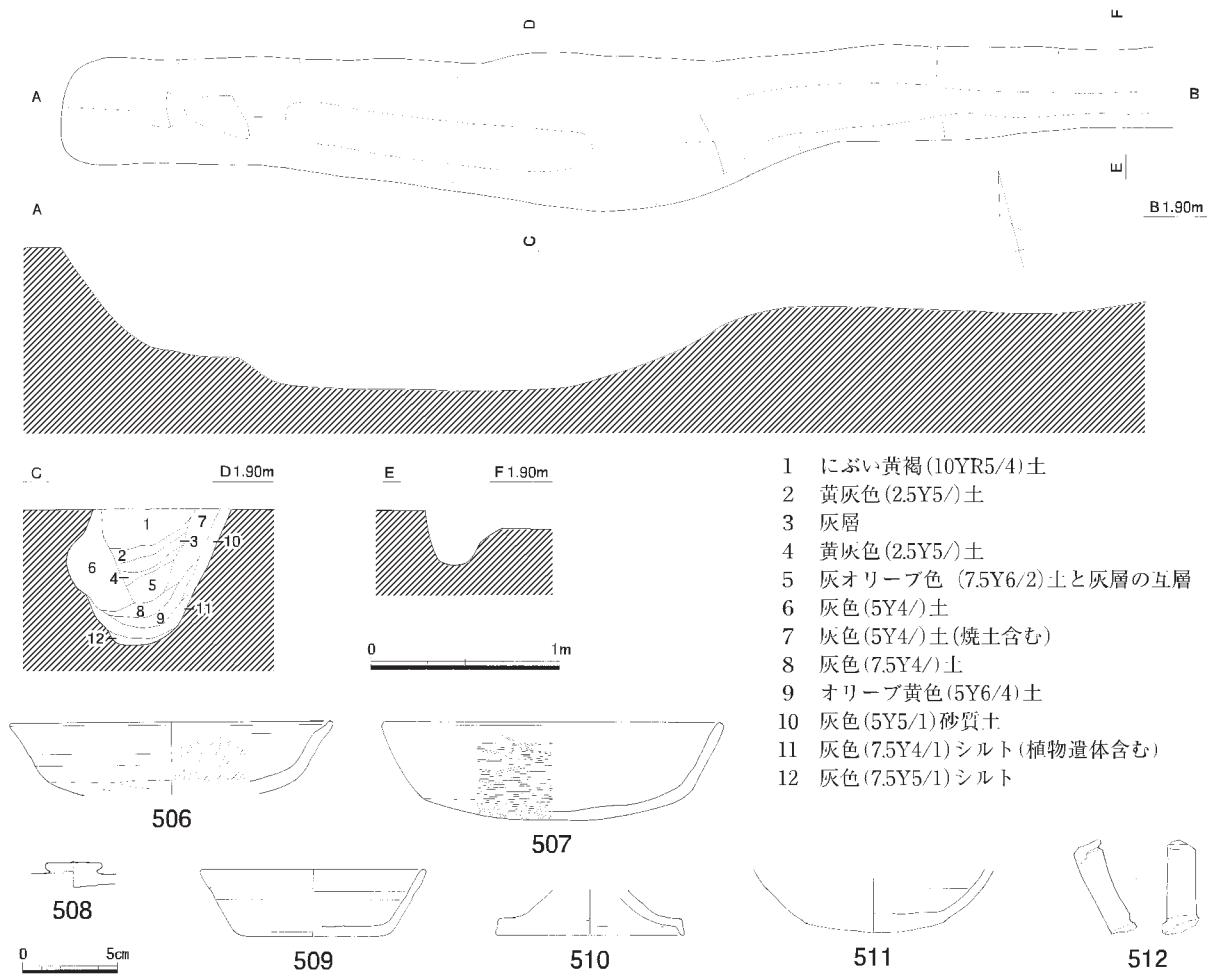
溝19の南西6.9mの地点で円面硯513が出土したことからその周囲を精査したところ、わずかに蛇行しながら東西に走る溝を検出した。西側は調査区外に延びているが、現状で長さ411cm、幅52cmを測り、深さは7cmと遺存は悪い。

脚台径21.0cmに復元される513は長方形の透かしを飾る圈足硯である。硯部を欠いているが、精良な胎土をもち、外面には褐色の自然釉がかかる。このほか、須恵器の杯や丹塗り土師器の皿の小片が出土しており、8世紀中葉の遺構と思われる。

(亀山)

溝21 (第62・64・81図)

2区の南側に広がるたわみの底で検出した鍵形をなす溝である。東から西へ延びる溝は幅64cm、深さ7cmで、断面は皿形をなし、褐灰色をなす埋土から須恵器の平瓶514が出土した。一方、北西から



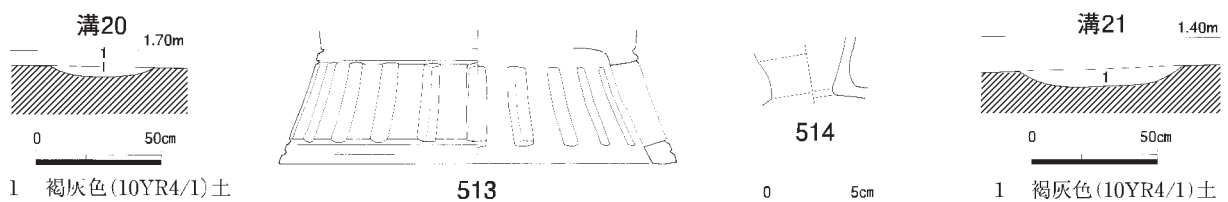
第80図 溝19 (1/40)、出土遺物 (1/4)

南東に走る溝は幅33cm、深さ17cmの断面U字形をなす溝2～3条が重複した形状をとり、埋土から獣骨が出土している。

東西に走る溝から出土した平瓶514は頸部の小片で、おおむね7世紀前半に位置づけられることから、このころには機能していたものと思われる。(亀山)

その他の遺構・遺物 (第62～64・82～85図、図版21・22)

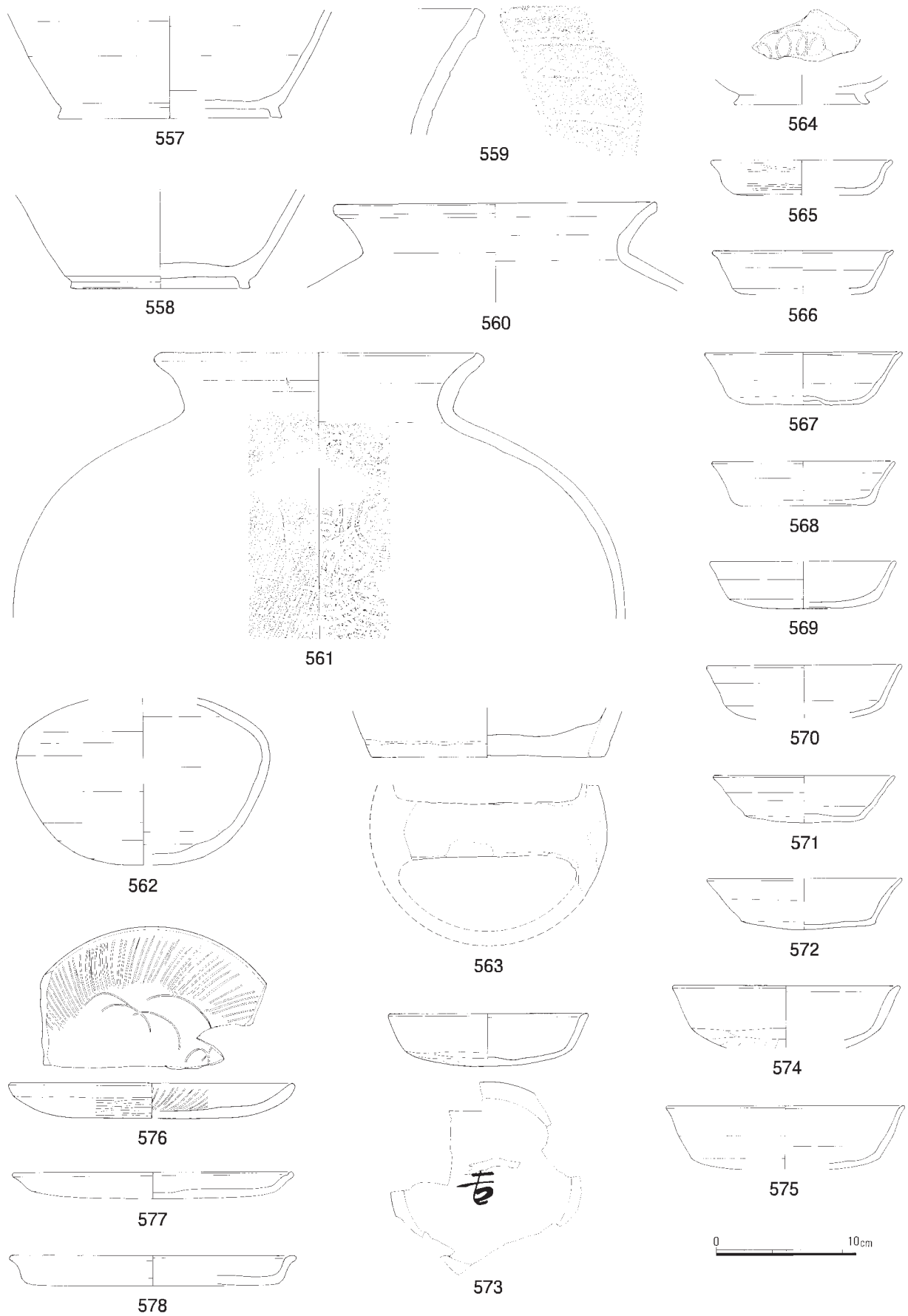
1区の東端と2区の南端を除く全面に240本余りの柱穴が確認された。径30cm前後の円形をなすものが多いが、まれに隅丸方形を呈するものも見られた。これらの中には列をなすものもあるが、建物としてまとめることはできなかった。柱穴からは須恵器のほか丹塗り土師器や黒色土器、緑釉陶器が出土しており、平安時代前期に中心があるものと思われる。



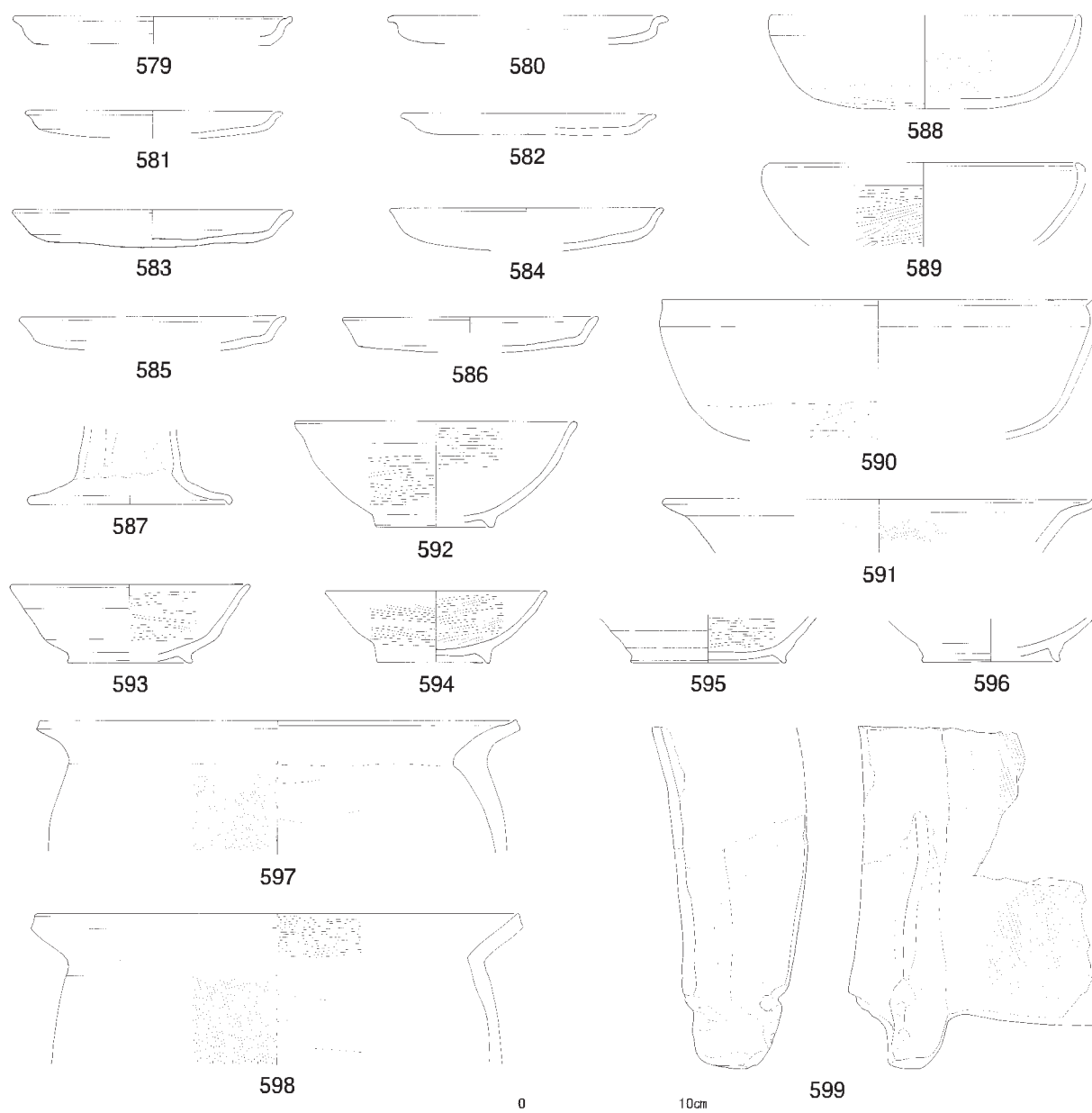
第81図 溝20・21 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第82図 その他の遺物1 (1/4)

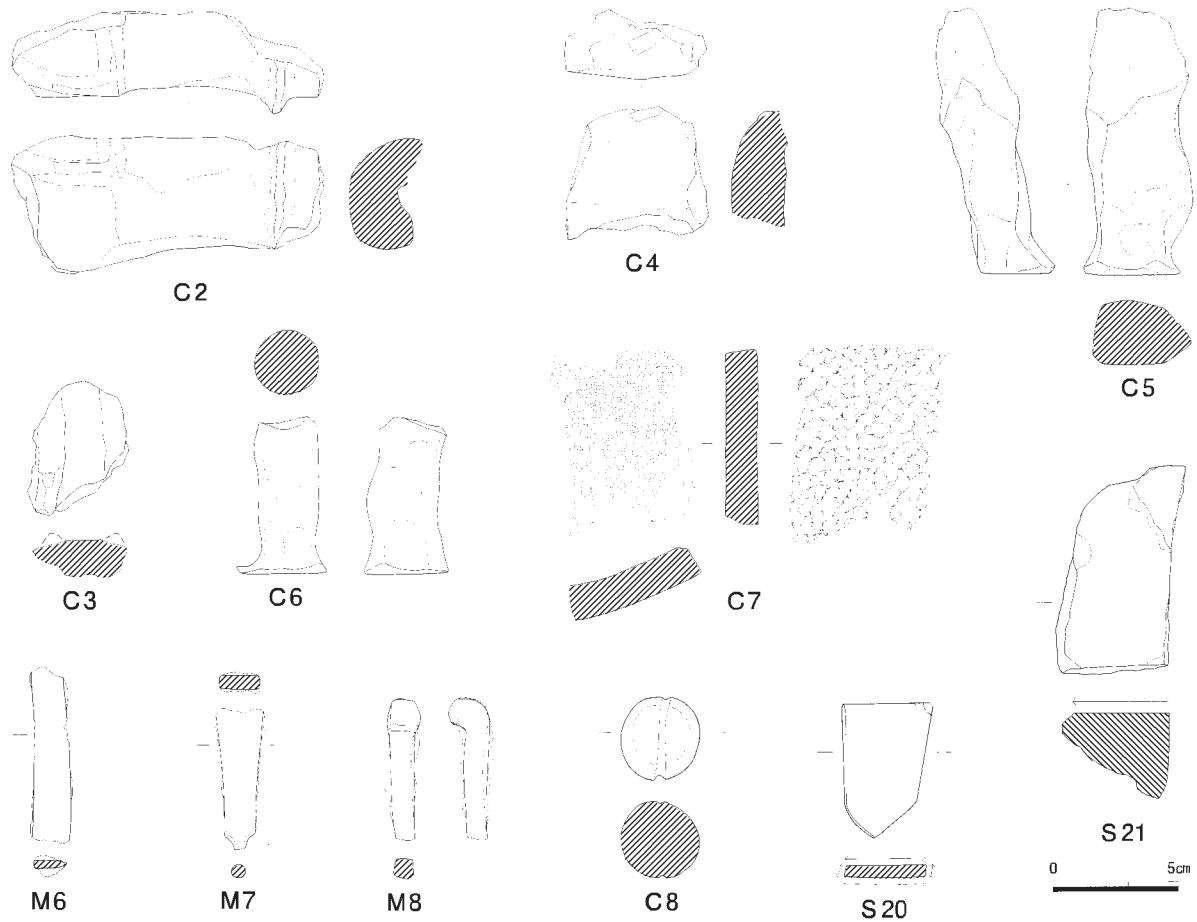


第83図 その他の遺物2 (1/4)



第84図 その他の遺物3 (1/4)

遺構に伴わない遺物として須恵器や土師器、土製品、石製品、金属製品などがあるが、その多くは鎌倉～室町時代の水田層に混じって出土した。須恵器には蓋、杯、高杯、鉢、盤、甕、壺、甕、甌がある。蓋は口径14.5～14.6cmの515・517と15.4～16.3cmの516・518があり、碁石状のつまみをもつものが多い。高台をもつ杯は、口縁部が屈曲しながら立ち上がる519～525と直線的に斜め上方へのびる526～530がある。531～544は口径11.7～13.0cmを測る杯で、ヘラ切りした底部をユビオサエする540～544のうち543・544には「由」もしくは「田」の墨書が見られる。551は口径39.4cmに復元される盤である。体部の張る552は短頸壺、553は水瓶の口頸部で、長頸壺の肩部と見られる554にはヘラ描きが施されている。555・557・558は断面矩形の高台を備えた壺の底部、556は環状の耳を貼り付ける壺の肩部である。562は口頸部を失っているが、たわみの上層から出土した平瓶である。甕には長い口頸部に波状文を飾る559や、頸部に「上」のヘラ描きを施す561がある。このほか、底部に一对の半月形の孔を穿つ甌563もある。土師器には杯、皿、鉢、高杯、甕、甗がある。564は高台をもつ杯で、



第85図 その他の遺物4 (1/3)

見込みに螺旋状の暗紋を飾る。565～572は丹塗りを施す杯で、565～567の口縁端部には浅い沈線がめぐり、567・571・572の底部にはユビオサエが施される。573・574は底部をヘラケズりする杯で、573には「吉」の墨書が見られる。576～586は丹塗りを施す皿で、576は放射状と螺旋状の暗紋を飾り、577・579の口縁端部には浅い沈線をめぐらす。587は丹塗りを施す高杯で、脚柱部をヘラで粗く面取りする。鉢には口径18.0～20.4cmの588・589と口径25.2cmの590があり、いずれも丹塗りが施されている。591は口縁部が屈折して水平にのびる盤で、把手が付く可能性がある。597・598は甕で、径28.0～28.5cmを測る口縁の端部は角ばっておわる。甕599は鐔状の庇を貼り付けた焚口の破片である。黒色土器は、2区の柱穴から出土した椀形の592～594と、包含層から出土した杯形の596・597を図示した。546～549は1区の柱穴や包含層から出土した緑釉陶器で、軟質の胎土に黄緑色の釉が全面に施されており、9世紀後半の京都産と見られる。

土製品には土馬や瓦、土錘がある。土馬は1・2区にわたって複数個体の破片が出土した。胴部には厚さ2cmの粘土板を折り曲げてつくったC2・4と中実につくられたC3があるが、いずれも粘土紐を貼り付けて鞍や手綱を表現する。脚部は、角ばった断面をなす大形のC5と、円形の断面をもつ小形のC6がある。C7は2区の柱穴から出土した平瓦で、凸面には格子目タタキを残す。C8は径3.3cmの球形をなす粘土塊に紐掛かりの溝をめぐらせた有溝土錘で、重量は35.4gある。砥石には、扁平な粘板岩製のS20と方柱形をなす流紋岩製のS21がある。金属製品には2区の柱穴から出土した刀子M6や鉄釘M8、水田層に混入していた鉄鏝M7がある。(亀山)

第4節 鎌倉時代以後の遺構・遺物

土壙35 (第86・87図)

1区の南東隅で検出された土壙である。掘り方の東端は攪乱を受けており、西側は調査時の側溝にあたっている。また、北端は、水田3の上層部分に切られている。

掘り方平面形は、南北方向に長い不整楕円形を呈する。検出面での長さは181cm、幅は95cm、深さは25cmを測る。断面形は、逆台形である。

埋土中から、肥前陶器の皿600が出土した。胎土目積みの痕跡が認められる。

遺構の時期は、検出面や出土遺物から、江戸時代前期と考えられる。(柴田)

溝22 (第87・88図)

2区中央の南西よりの地点を北西から南東方向に走る溝で、水田3の肩口とほぼ平行する。南東端は削平を受けているが、北西端は調査区外へ延びており、検出長は538cmを測る。幅114cm、深さ15cmと幅36cm、深さ10cmを測る溝2条が併走しているが、前者が後者を切る状況を確認した。

明褐灰色の埋土から灰白色の土師器碗が出土しており、鎌倉時代に比定できる。(上柘)

溝23 (第87・88図)

2区中央の南よりで検出した幅47cm、深さ7cmを測る溝で、溝22の65cm南を併走することから両者の関連がうかがわれる。北西端は調査区外に延び、南東端は攪乱による削平されているため、検出長は150cmにすぎない。古代の土師器や須恵器が少量出土しているが、明褐灰色をなす埋土の特徴から溝22と同じ鎌倉時代の遺構と考えられる。(上柘)

溝24 (第87・88図)

1区の東側で検出された、北西から南東にかけて流走する溝である。検出された長さは463cmで、北西端は攪乱を受けている。位置や検出面から、水田3に伴う溝と考えられる。

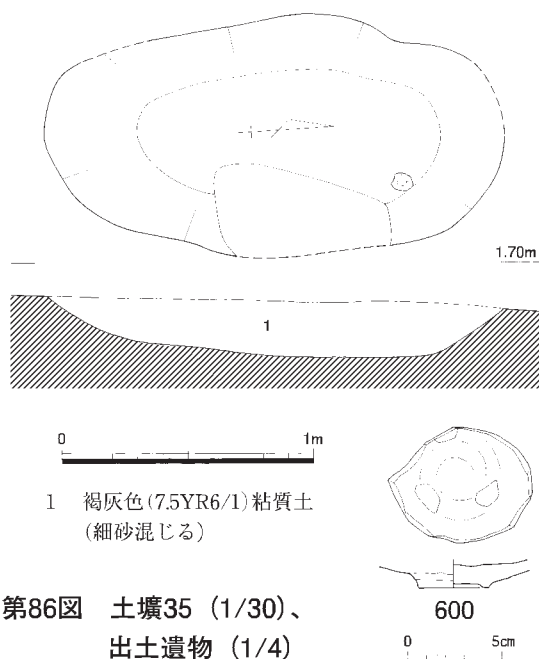
検出面での上幅は、最大で41cm、深さは6cmを測る。断面形は皿形を呈する。

遺構の時期は、検出面などから鎌倉時代以降と考えられる。(柴田)

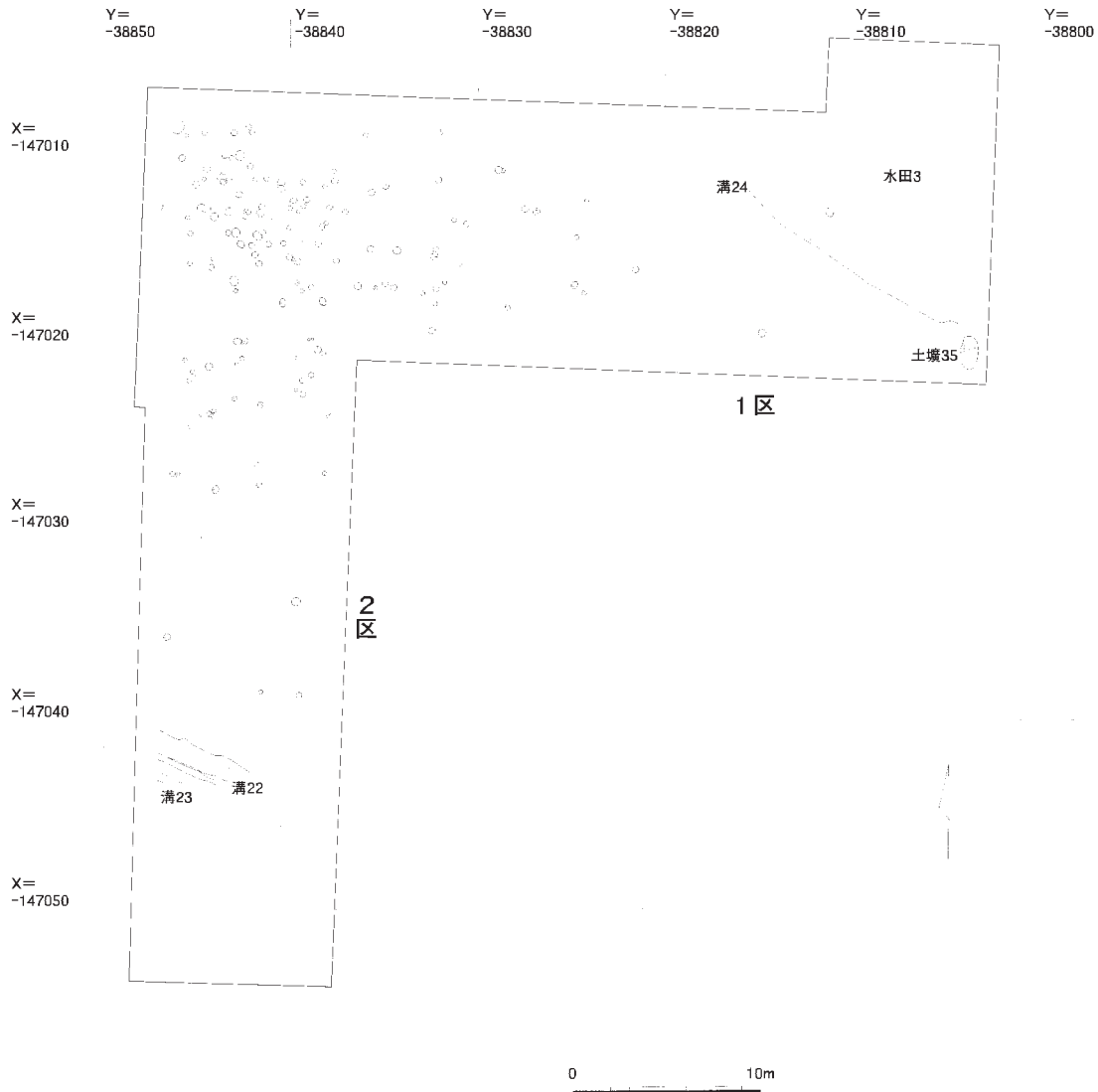
水田3 (第87・88図)

1区の東側で検出された水田である。明確な耕土は確認されないが、北東方向に向かって、比較的平坦な低い地形が認められたことから水田と判断した。図示した肩口は、検出した海拔高1.8mでのものであり、土壙35を切っている。堆積土は2層に分けることができ、この肩口は1層に対応する。2層に対応する肩口は明確ではないが、溝24がこれに対応するものと考えている。

1・2層、特に1層からは、古代～中世の遺物が比較的多く、また混在して出土している。土師器の



第86図 土壙35 (1/30)、
出土遺物 (1/4)



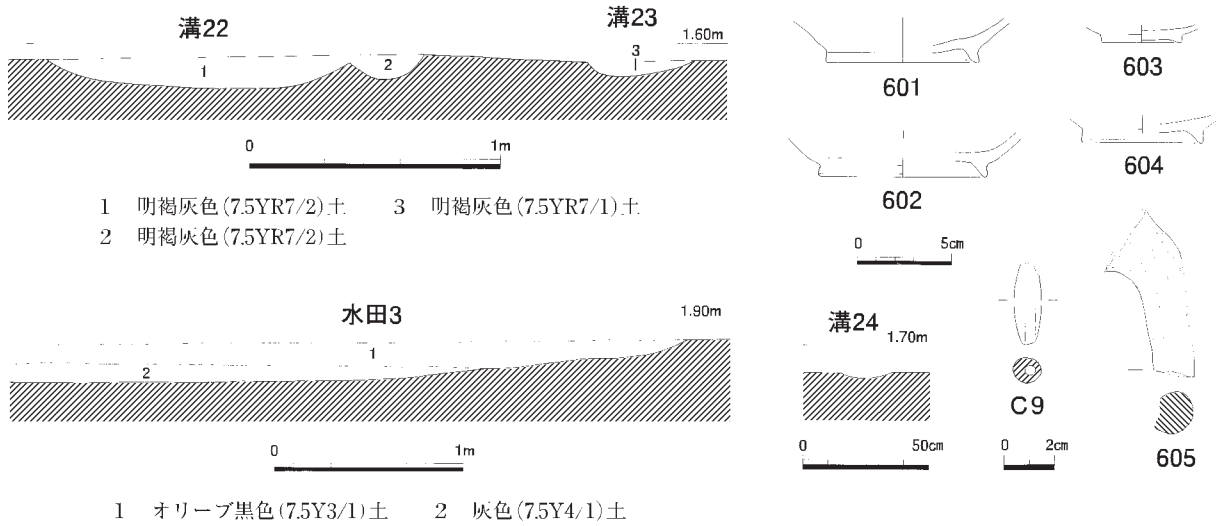
第87図 鎌倉時代以後遺構全体図 (1/400)

椀603・604、鍋605、土錘C9は1層出土の遺物である。この二つの層を、遺物によって時期を分けることは困難であるが、遺構の切り合い関係などから、2層が鎌倉時代以降、1層が江戸時代前期以降と考えられる。(柴田)

その他の遺構・遺物 (第87・89図、図版22)

建物としてまとまらなかったが、1区の西側から2区の北側にかけて140本余りの柱穴が検出されている。これらは径20cm前後と奈良～平安時代の柱穴に比べてやや小さく、埋土も灰色を呈するものが多い。出土遺物には、灰白色をなす土師器の椀607・608や底部をヘラ切りする小皿、内外を粗いハケメで調整する土鍋616などがあり、おおむね13～14世紀に比定される。

また、上層の遺構を検出する過程でも中世の遺物が若干出土している。606は口径10.7cmを測る灰白色の土師器椀で、底部には矮小化した高台を貼り付ける。609～612は口径6.5～7.8cmを測る土師器の小皿で、いずれも底部をヘラ切りする。口径13.7cmを測る613は底部を糸切りする備前焼Ⅱ期の小皿である。口縁端部が肥厚して段をなす614は東播系の片口鉢で14世紀前半に位置づけられる。外面に粗い左下がりの平行タタキを施す615は初期の亀山焼の甕である。617は瓦質の鍋で、径27.8cmを測

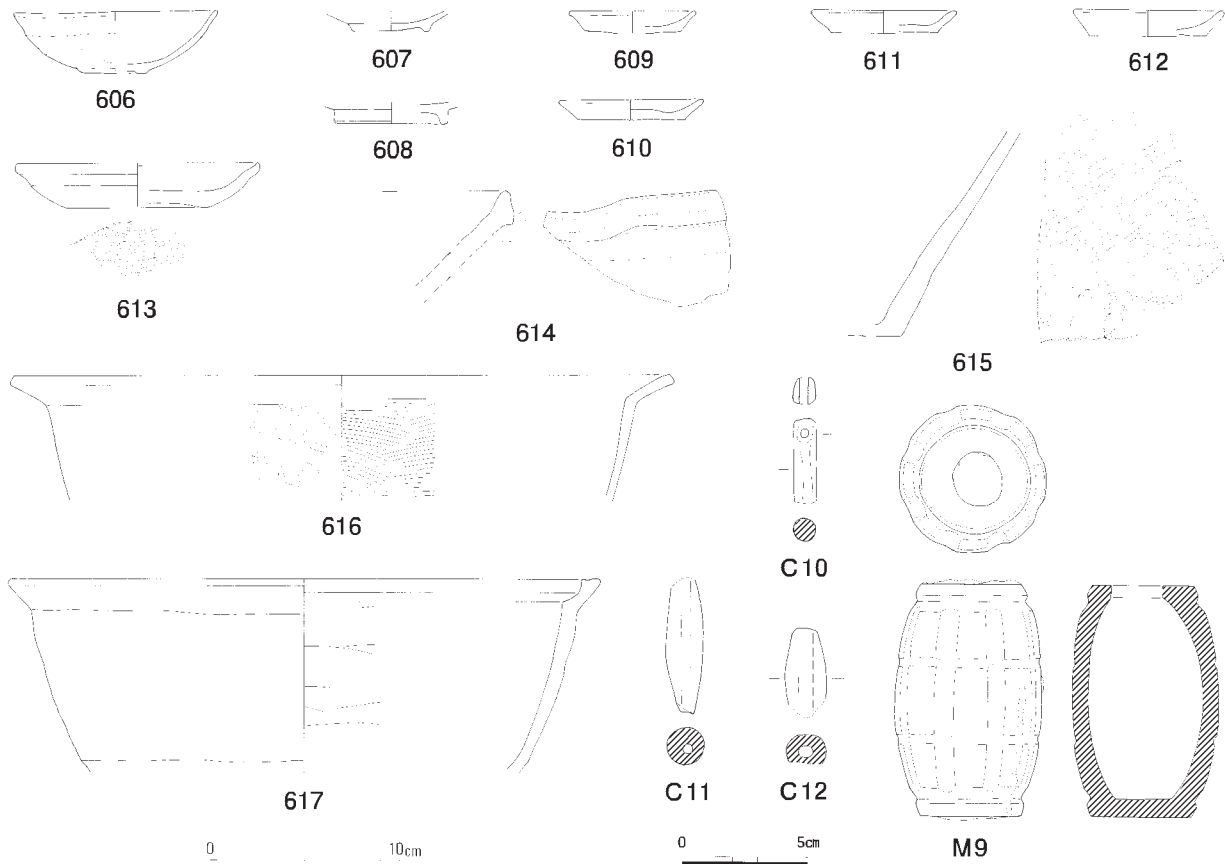


第88図 溝22~24 (1/30)、水田3 (1/40)、出土遺物 (1/3・1/4)

る口縁部は受け口状をなす。土錘には端部に穿孔する棒状のC10と紡錘形を呈する管状のC11・12があるがいずれも欠損している。

このほか、攪乱から出土したM9は铸铁製の手榴弾で、高さ9.2cm、径5.8cm、重量610gを測る。信管を装着した痕跡が見られないことからすると、教練に用いられた模擬弾の可能性が高い。

(亀山)



第89図 その他の遺物 (1/3・1/4)

第3章 総括

第1節 調査地の変遷

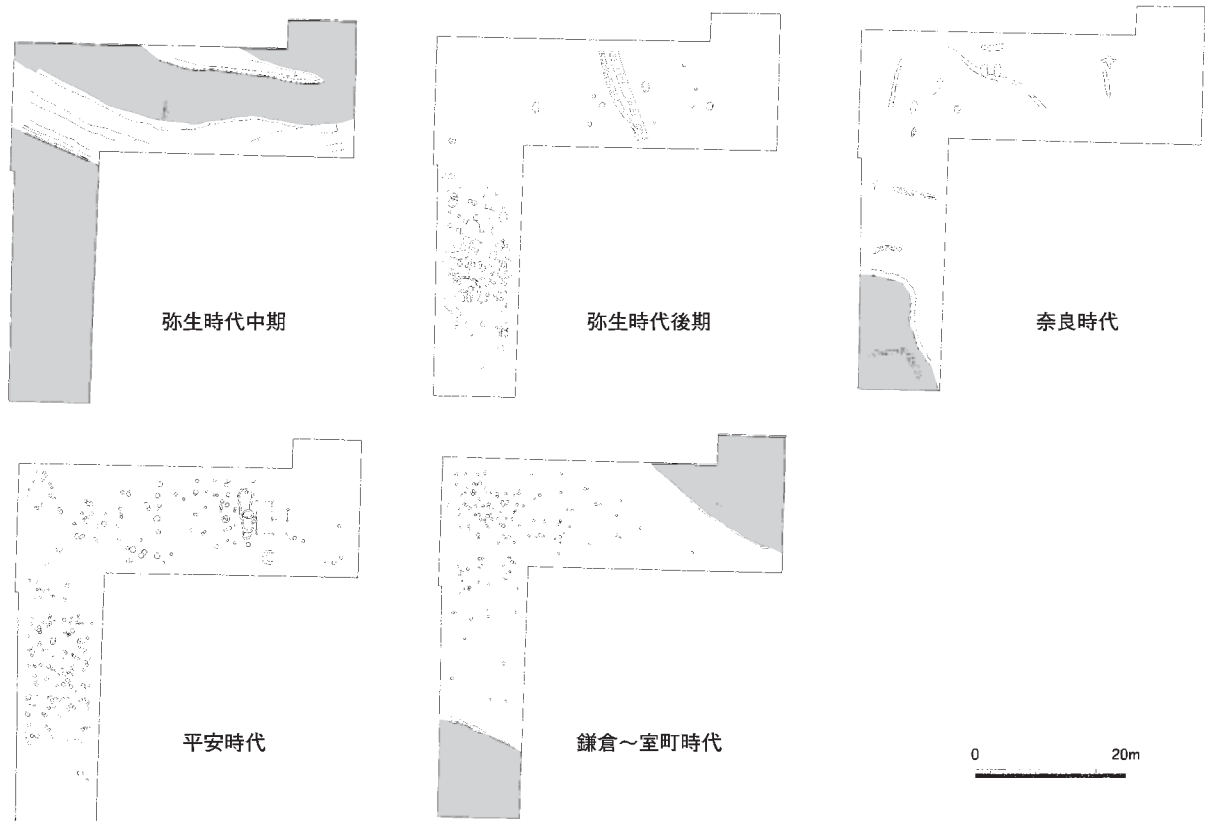
1 遺跡の形成

今回の調査で確認した最深部（海拔高0.7m）の黒褐色砂質土層（第6図56層）は、植物遺体を挟むシルト層で、上面に微砂の堆積が認められた。この植物遺体についてAMS法による放射性炭素年代測定を行ったところ、 3870 ± 30 年BPの結果が得られたが、これは溝1に混入していた縄文時代後期後半の粗製深鉢273・274の年代観ともおおむね合致することから、この時期には流れの穏やかな河口干潟のような環境にあったものと思われる^[4]。また周辺の植生は、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹に、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹やマツ属維管束亜属などの針葉樹を加えた森林が分布していたものと想定されている^[2]。これは、県立岡山工業高等学校（以下、岡山工業高校）の調査^[3]で土壌分析が行われた海拔高0.7mのオリーブ黒色粗砂層（XI層）の植生とも一致する。この黒褐色砂質土層を覆う明黄褐色土層（第6図54層）は海拔高1.3mまでほぼ水平に堆積していたようであるが、東西方向からの強い水流により2筋の堤状地形を残すように削り取られている。その上には湿地に生育したヨシ属やスキ属に由来する黒褐色土層（第6図52層）^[4]が堆積するが、低位部の堆積は水田の開削によって失われ、現状では堤状地形の上部にのみ遺存する。

水田1は、この2筋の堤状地形に挟まれた幅5～7mの帯状をなす低位部を利用して開かれており、これを仕切るように設けられた畦畔も検出されている。水田面は1.05～1.15mで西側がわずかに低い。水田2は、溝1の南岸を幅70cm、高さ20cmの畦状に削り残していることから、これと同時に機能していたものと思われる。海拔高1.07mを測る水田面は、2区のほぼ全域に広がるものの南端はわずかに南西に傾斜していて、水田はここまで及んでいないようである。溝1はこうした水田への給排水を目的とした水路と考えられ、堤状地形を斜めに横断している様子からすると人工的に掘削された可能性が高い。こうした水田や溝は、堤状地形の上面にあたる海拔高1.5mまで厚さ40cmの灰黄色ないし灰黄褐色砂質土層（第6図29～32層）で厚く覆われ、微高地が形成される。その時期は出土遺物から後期前葉（上東・鬼川市Ⅰ式期）と思われるが、この段階の遺構は南側の岡山工業高校でも確認されていない。

2 弥生集落の展開

この微高地上に集落が展開するのは後期後葉（上東・鬼川市Ⅲ式期）のことで、中期末（仁伍式期）から急速に進んだ砂質土の堆積によって形成された微高地が、この時期に至ってようやく居住が可能なまでに安定化したことを示している。しかし、依然として地下水位が高く軟弱な基盤であったようで、竪穴住居の柱穴に据えられた礎板や^[5]、その周りに数多く掘られた井戸がこの事実を物語る。



第90図 遺構の変遷 (1/1,000)

このたびの調査で検出した後期後葉の遺構は土壙7基を数えるのみであるが、後期末（才の町Ⅰ・Ⅱ式期）には竪穴住居3軒のほか井戸3基、土壙10基と増加する。南側の岡山工業高校においても、竪穴住居は後期後葉の14軒から後期末の23軒と増えており、後期末をこの遺跡の最盛期と考えてよい。

3軒検出した竪穴住居のうち全形のわかる竪穴住居2は、長さ4m余りの隅丸方形に復元される4本柱の住居で、規模・構造ともに岡山工業高校で検出された竪穴住居とさほど違いはない。井戸は、3基とも海拔高0mの黒褐色砂質土まで掘り込まれているものの、さほどの湧水は認められず、むしろ不透水層をなす弥生時代の水田層より湧出する浸透水を集めていたのかもしれない。土壙の中で特に注目されるのは、器表の剥離した土器がまとまって出土した土壙20で、焼成時に破損した土器を一括して廃棄したものとも考えられる。出土遺物では、岡山工業高校ではあまり見られなかった讃岐系の土器が多くあり（壺132・392、甕10、製塩土器389）、岡山平野の他遺跡と同様の様相がうかがわれる⁶⁾。このほか、岡山工業高校では人形土製品C16や鹿角製の刻骨H1、石杵S21など特殊な遺物も出土している。

3 希薄な古墳時代の遺構

古墳時代に入ると一転して遺構の数は減少する。岡山工業高校において、前期初頭（下田所式期）～前半（亀川上層式期）の遺構は竪穴住居22軒、井戸2基、土壙22基を数えるが、このたびの調査では土壙1基のほかわずかな柱穴があるばかりで、集落の中心からはずれたことを示している。岡山工業高校では、竪穴住居が方形ないし長方形の平面形に統一され、壁際に掘り込まれた方形土壙や壁体

に沿って設けられた高床部などの付属施設が新たに加わる。このうち、出入口との関係が推測される方形土壙は東辺ないし南辺に接して設けられ、浅くなった中央穴には被熱痕跡が認められる。遺物では、近畿系の壺45・46・109・110・157・159・543・544・546や山陰系の小形壺549・壺542・器台632、四国（西部瀬戸内）系の壺534・鉢180・土製支脚634、東海系の甕151・566などがまとまって出土し⁷⁾、吉備の中核を形成した集落の姿を彷彿とさせる。しかし、この集落も前期後半には姿を消し、中期には若干の遺物の出土を見るものの、どの調査地点でも遺構はほとんど確認できない。

後期は、東側の岡山家庭裁判所所長宿舎で製鉄関連遺物を伴う竪穴住居12軒を確認しているが、岡山工業高校では窪み状の遺構を検出するに留まっている。今回の調査でもたわみから少量の遺物を出土したにすぎず、居住地として使用された形跡は依然として認められない。

4 古代伊福郷の一画

古代の遺構は、土壙10基、溝9条のほか多数の柱穴を検出しているが、8世紀にまでさかのぼる柱穴はそれほど多くはない。土壙も不定形なものが多く、窪み状の地形を利用して遺物が廃棄されたのかも知れない。8世紀の遺構の中で特に注意されるのは、東西に走る溝18・19である。いずれも長楕円形の土壙に溝を接続させたような形態をとり、溝19では粘土を貼った壁面の内側に炭化物と焼土の互層をなす堆積が認められたことから、何らかの生産にかかわる施設の一部とも考えられる。また、広範囲にわたって出土した土馬の破片は、あたかも打ち壊されて一帯に廃棄されたかのようであり⁸⁾、皿に杯を伏せ置いた状態でたわみに放置された土器も、遺跡の中心から離れたこの場所で執り行われた儀礼にかかわる遺物と考えられる。

9世紀には多数の柱穴が見られるが、出土遺物にあまり時期幅が見られないことからすると、複数の建物が同時に存在していた可能性が高い。こうした遺物の中には、緑釉陶器や灰釉陶器、墨書土器⁹⁾などが見られることから、一般の集落とはやや異なった性格も想定し得る。古代伊福郷の実態については不明な点が多いが、微高地の縁辺にあたる立地を考慮すれば、郷衙といった公的施設よりはむしろ在地の有力者の居宅などを想定すべきかも知れない。

5 中世以後の伊福村

中世に入ると再び集落が営まれるが、その時期は13世紀後半～14世紀後半に限定される。南側には河道が蛇行しながら東西に走り、岡山工業高校ではこの河道に接続する、幅3.7m、深さ0.7mの南北溝が検出されている。この溝は底面が平坦に整えられており、なおかつ短期間のうちに廃絶していることから、居住域の区画施設として機能したものと推定されている¹⁰⁾。しかし、検出された建物はいずれも小規模で、その棟筋も溝の流走方向とは一致しない¹¹⁾。

15世紀以後は、どの調査地点においても顕著な遺構を確認できなくなり、水田層から僅かな遺物を出土するに留まっている。集落は現在位置に移り、微高地土はもっぱら耕地として利用されたものと考えられる。
(亀山)

註

- (1) 岡山市南方遺跡では、珪藻や植物遺体の分析の結果、3820±40年BP頃には地表面付近まで海が入っていたことが明らかにされている。

第3章 総括

鈴木茂之「岡山平野における最終氷期最盛期以降の海水準変動」『岡山大学地球科学研究報告』11
岡山大学 2004

(2) 本書第3章第4節参照

(3) パリノ・サーヴェイ株式会社「伊福定国前遺跡における古環境解析」『伊福定国前遺跡』2 岡山県
教育委員会 2005

(4) 津島遺跡周辺で確認されている縄文時代晩期末～弥生時代前期の基盤層と類似する。

(5) 金田善敬「礎板について」『伊福定国前遺跡』2 岡山県教育委員会 2005

(6) 水田貴士「讃岐系土器について」『南方遺跡』岡山県教育委員会 2006

(7) 百間川米田遺跡や津寺遺跡、足守川遺跡群などの搬入土器と比較すると、近畿系や山陰系の甕が見られない点で異なる。

(8) 苫田郡鏡野町の久田原遺跡では、集落をとりまく溝から土馬や陶馬が打ち壊された状態で出土している。
「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 岡山県教育委員会 2004

(9) 本書第3章第3節参照

(10) 杉山一雄「古代・中世の遺構と遺物 溝-2」『伊福定国前遺跡』岡山県教育委員会 1998

(11) これらの建物の棟筋がN-2～6°-Eにまとまることから、条里制地割の影響を想定する向きもある。
金田善敬「発掘調査の成果」『伊福定国前遺跡』2 岡山県教育委員会 2005

第2節 古代の井戸

伊福定国前遺跡で検出した平安時代前期の井戸4は、掘り方内に隅柱を立てて、隅柱同士を横棧で繋ぎ、横棧の裏に縦板の井戸枠を設置するという構造で、井戸枠内に肩部から上が損壊しかつ底部に穴が開いた須恵器大甕416を設置していた。本節では上記構造を示す井戸4の古代井戸における位置づけを試みたい。

1 古代井戸の分類

まず、岡山県で発掘された奈良・平安時代（8～12世紀）井戸の形態分類を行い、比較対象を明確にしておく。分類に際しては〔黒崎1976、1995〕、〔宇野1982〕、〔鐘方2003〕を参考にした。

素掘り井戸（第91図1）

穴を掘っただけの単純な構造で、底部が湧水層に達する点を条件とする。弥生時代に構築が始まり、奈良・平安時代、さらに中世にも構築された。現在のところ、平安時代前半の資料は見つかっていないが、平安時代後半や中世に比定される資料もあり、平安時代前半にも存在すると考える。平面形では円形や楕円形のような円形指向のタイプと方形タイプに細分でき、さらに断面形では全体がU字形もしくは逆台形のタイプと上部のみが大きく開くY字形のタイプ、集水施設を設置する逆凸字形のタイプがある。平面形、断面形は構造が複雑な井戸の掘り方にもおおむね共通する。また、底部に集水施設を設置するか否かでも分類できる。集水施設としては曲物を設置する事例が確認できた。

矢板打ち込み井戸（第91図2）

矢板状に先端を尖らせた板を土壌内に打ち込む構造。赤磐市馬屋遺跡井戸-1（表1文献21）が唯一の該当例である。馬屋遺跡井戸-1は、隅丸方形の掘り方壁面に沿うように矢板を打ち込む構造である。矢板の材質はコウヤマキで、固定するためにコナラの杭も打ち込んでいた。ただ、時期を特定する遺物は出土しておらず、報告書では形態等から奈良時代頃と推定されているため、時期比定の方法に問題が残ると言わざるを得ない。

円形丸太刳り抜き井戸（第91図3）

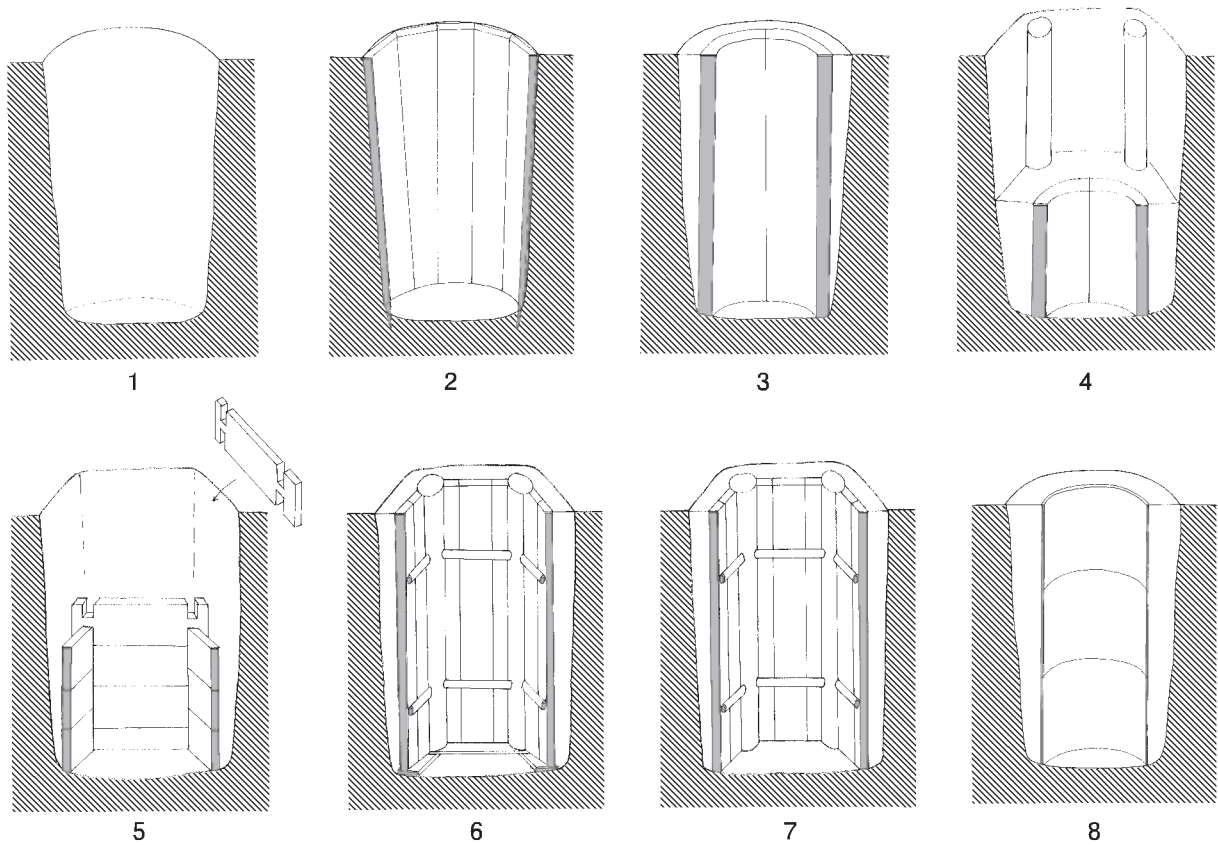
丸太刳り抜き部材を組み合わせた構造の井戸。弥生時代以降、資料数は少ないながらも構築され続け、古代の事例もある（岡山市鹿田遺跡井戸4、表1文献3）。

二段構造井戸（第91図4）

上下二段の異なる構造から構成される井戸枠である。岡山市川入遺跡井戸302-B（表1文献9）は下段に半裁刳り抜きのスギ部材を円形に立て並べ、上段として隅柱4本を検出した。ただ、上段構造の詳細については不明である。時期は出土土器から7世紀末に比定されている。

方形相欠き仕口横板組井戸（第91図5）

掘り方内に、両端近くに仕口を切り込んだ横板を交互に組み合わせて平面方形の井戸枠に仕上げる構造で、備前市長縄手遺跡（表1文献24）で確認された。長縄手遺跡の井戸は掘り方底部に角礫を置き、その上に井戸枠を設置。井戸枠の最下段は表皮が残る丸太を半裁した材で、2段目には建築用材を転用した横板を積み重ねていた。井戸内部の埋土上層から須恵器や土師器が出土しており、それらから井戸の時期は奈良時代の範疇に収まると判断できる。



第91図 古代井戸の形態分類模式図

方形土井桁隅柱縦板組井戸（第91図6）

掘り方内に土井桁（井字形に組まれた井戸枠の基礎構造物〔鐘方2003〕）を設置し、土井桁の交差点に隅柱を立てる、もしくは交差点に柄穴を穿ち隅柱を貫通させる。隅柱には、基本的には柄穴が穿たれており、そこに横棧を嵌めて隅柱同士を固定し、横棧の外側に縦板を並べて井戸枠とする。

方形隅柱縦板組井戸（第91図7）

土井桁を設置せず、隅柱を掘り方底部に直接立てる。奈良時代まで遡る資料は認められず、8世紀末～9世紀初頭の岡山市鹿田遺跡のI区井戸20（表1文献3）が最も古い。川入・中撫川遺跡では方形隅柱縦板組井戸を入れ子状に二重に設える特異な構造（井戸6）が確認されている（表1文献11）。

曲物組井戸（第91図8）

曲物を重ねて井戸枠とした構造。奈良、平安時代を通して使用される。百間川米田遺跡井戸119（表1文献15）は曲物を6段重ねにしており、さらに痕跡から7段目の存在が推測されている。

2 古代井戸の特質

古代井戸を構造から8分類した。基準は井戸枠の有無やその構造で、それぞれに系譜の差が考えられる。大きくは前代から辿れるタイプと古代に出現したタイプに分かれる。前者には素掘り井戸や矢板打ち込み井戸、円形丸太刳り抜き井戸があり、これらは弥生時代からの継続として古代にも構築、使用された。素掘り井戸は弥生時代から古墳時代前期に主流で、この段階は平面円形指向と指摘されている〔中野1988〕。古代には平面円形素掘り井戸に加えて、平面方形素掘り井戸も認められた。ただ、平面方形の素掘り井戸は、井戸枠が抜き取られた可能性にも留意しなければならない。他方、後者の

表1 岡山県下の古代井戸

遺跡名	所在地	遺構名	井戸枠構造	集水施設	時期	備考	文献	
伊福定岡前遺跡	岡山市北区伊福町	井戸4	方形隅柱縦板組		平安前期	改修-大甕設置	本書	
鹿田遺跡	岡山市北区鹿田本町	井戸1	曲物組	曲物	10~11世紀	曲物6~7段	1	
		井戸2	曲物組	曲物	12世紀	曲物2段		
		井戸3	素掘り	—	—	10世紀末~11世紀初		
		井戸4	曲物組	曲物	—	10世紀末~11世紀初		曲物2段
		井戸5	素掘り	曲物	—	11世紀初頭		曲物を板石で固定
		井戸6	—	—	—	11世紀前半		井戸枠抜き取り痕
		井戸7a	—	曲物	—	—		井戸枠抜き取り痕
		井戸7b	方形隅柱縦板組	—	—	10世紀中頃~12世紀		
		井戸9	方形隅柱縦板組	曲物	—	10~11世紀		
		井戸1	素掘り	—	—	10世紀末~11世紀前半	埋土に焼土塊	2
		井戸2	素掘り	—	—	10世紀末~11世紀前半	埋土に焼土塊	
		井戸3	素掘り	曲物	—	10世紀末~11世紀前半		
		井戸4	素掘り	—	—	10世紀末~11世紀前半	曲物設置の可能性	
		井戸5	素掘り	曲物	—	10世紀末~11世紀前半	埋土に焼土塊	
		井戸20 I区	方形隅柱縦板組	六角形丸太割抜	—	8世紀後半~9世紀初	礎敷	3
		井戸21 I区	方形隅柱縦板組	—	—	11世紀後半		
		井戸22 I区	素掘り	—	—	11世紀末~12世紀前半		
		井戸23 I区	素掘り	—	—	12世紀代		
		井戸24 I区	素掘り	—	—	12世紀代		
		井戸26 I区	素掘り	—	—	12世紀代		
		井戸27 I区	素掘り	—	—	12世紀代		
		井戸4 II区	円形丸太割り抜き	—	—	8世紀後半~9世紀		
		井戸1	素掘り	—	—	12世紀代		4
井戸2	素掘り	—	—	12世紀代				
井戸2	素掘り	—	—	12世紀末		5		
新道遺跡	岡山市北区新道	井戸3	方形隅柱縦板組	—	—	12世紀後半~末	6	
加茂政所遺跡	岡山市北区加茂	井戸1	素掘り	—	—	古代	7	
		井戸2	方形板組	—	—	平安末		
三手向原遺跡	岡山市北区三手	井戸1	方形隅柱縦板組	曲物	—	12世紀末	8	
川入遺跡	岡山市北区川入	井戸302-B	二段構造	—	—	7世紀末	打ち込み	9
川入・中撫川遺跡	岡山市北区中撫川	井戸	二段構造(下段丸太割抜)	—	—	奈良	下段上面に礎敷	10
		井戸6	二重方形隅柱縦板組	—	—	9世紀後半	礎敷	11
鍛冶屋D遺跡	岡山市東区瀬戸町鍛冶屋	井戸1	須忠器大甕転用	曲物	—	9世紀前半		12
ハガ遺跡	岡山市中区国府市場	井戸1	方形隅柱縦板組	—	—	11~12世紀		13
赤田東遺跡	岡山市中区赤田	井戸2	素掘り	曲物	—	12世紀末	改修-素掘り井戸	14
百間川米田遺跡	岡山市中区米田	井戸118	方形土井桁隅柱縦板組	曲物(改修後)	—	8世紀後半~9世紀	改修-曲物設置	15
		井戸119	曲物組	曲物	—	奈良	曲物5段残存	
		井戸126	方形土井桁隅柱縦板組	—	—	平安		
		井戸128	素掘り	—	—	平安末		
		井戸140	素掘り	—	—	平安末		
百間川沢田遺跡	岡山市中区沢田	井戸10	素掘り	—	—	奈良	16	
百間川原尾島遺跡	岡山市中区原尾島	井戸9	素掘り	—	—	古代末	底部は整方形、曲物抜き取りか	17
雄町遺跡	岡山市中区雄町	井戸	横板組	—	—	奈良以降		18
森木遺跡	総社市森木	井戸9	素掘り	—	—	古代	底部は方形	19
		井戸-1	木組み	—	—	古代	礎敷	20
菅生小学校裏山遺跡	倉敷市菅生	井戸-2	曲物組	曲物	—	古代		
		井戸-3	曲物組	曲物	—	古代	礎敷、曲物を杭で固定	
		井戸-1	矢板打ち込み	—	—	奈良?		
馬屋遺跡	赤磐市馬屋	井戸-2	素掘り	—	—	平安中期~後期	底部四隅にビット、隅柱抜き取りか	21
		井戸	方形隅柱縦板組	曲物	—	9世紀後半		22
堂免遺跡	瀬戸内市邑久町尾張	P120	方形隅柱縦板組	曲物	—	9世紀後半		22
助三畑遺跡	瀬戸内市邑久町尾張	井戸4	素掘り	(曲物)	—	12世紀末	曲物片出土	23
長縄手遺跡	備前市西片上	井戸	方形相欠き仕口横板組	—	—	奈良時代	角礎上に設置、建築用材を転用	24
美作国府	津山市総社	井戸I	方形縦板組	割抜分割丸太	—	奈良	井筒接合部に漆喰、礎敷	25
		井戸II	素掘り	—	—	奈良~平安前期?		
		井戸III	方形板組	?	—	平安		
		井戸IV-a	方形土井桁隅柱縦板組	曲物	—	奈良		
		井戸IV-b	方形土井桁隅柱縦板組	曲物	—	奈良	中央に曲物	
		井戸V	方形隅柱縦板組	曲物	—	平安末	曲物2	
		SX605	素掘り	—	—	7世紀末~奈良時代	建物に切られる、未完掘	26
宮尾遺跡	津山市宮尾	井戸址	素掘り	—	—	平安		27
領家遺跡	津山市領家	S10	素掘り	曲物	—	奈良末~平安	曲物の周囲に石をつめる	28
下山瀬遺跡	真庭市下山瀬	井戸I	方形土井桁隅柱縦板組	曲物(黒漆塗り)	—	平安	作り換え	29

古代に出現した井戸は5タイプ（二段構造、方形相欠き仕口横板組、方形土井桁隅柱縦板組、方形隅柱縦板組、曲物組）あり、これらが古代井戸を特徴付ける構造と言える。

二段構造井戸は、川入遺跡（表1文献9、7世紀末）と、川入・中撫川遺跡（表1文献11、奈良時代）で確認された。同構造には飛鳥池遺跡SE42〔花谷・毛利光編1978〕、平城京右京八条一坊四坪SE1700〔千田編1989〕がある。飛鳥池遺跡のSE42は藤原宮期に、平城京右京八条一坊四坪SE1700は奈良時代に比定され、岡山県の二段構造井戸の系譜を考える上で重要と言える。ところで、川入遺跡、川入・中撫川遺跡は7世紀前半から8・9世紀の公的港湾施設の可能性が指摘されている。岡田博は築地状遺構の存在や平城宮6633型式の軒平瓦などの存在、遺跡の立地などから備中国の外港と位置づけた〔岡田1992〕。草原孝典はさらなる調査成果を加味して考察を進め、中心官衙域（倉庫、工房）、居住域（館など）、寺院から構成される備中国津と理解している〔草原2006〕。なお、二段構造井戸は、上段の井戸枠のみが抜き取られ、現在ではそれと認識できない資料の存在も考えられ、留意すべきである。

方形相欠き仕口横板組井戸は、長縄手遺跡（表1文献24）で確認された。黒崎直によると藤原宮では方形相欠き仕口横板組井戸が主流で、平城宮では井籠横板組井戸（横板の両端部に凸形あるいは凹形の仕口を作り、仕口同士を組み合わせて積み上げる井戸枠）が一般的という〔黒崎1995〕。方形相欠き仕口横板組井戸は、黒崎の研究段階では平城宮において確認されていない。この点から岡山県の方形相欠き仕口横板組井戸は、藤原宮期の井戸構築技術が移植された可能性が推測される。長縄手遺跡は、内陸に深く入り込む片上湾の最奥部に注ぐ流川が形成した扇状地上に立地する。当初、邑久郡に属した片上は、766年に藤野郡へ編入される。美作国津として重要な役割を果たし、長縄手遺跡は藤野駅までの途次に位置する〔亀山2005〕。片上湾は、その地形から天然の良港と評価することができ、美作国津として整備される以前から港湾施設としての機能を果たしてきた可能性が考えられる。

方形土井桁隅柱縦板組井戸は、管見の限り藤原宮、平城京では確認されていない構造である。ただ、土井桁の設置や隅柱縦板組は藤原宮や平城京でも確認できるため、岡山県内での発現というよりは都城からの移植技術と考えたい。美作国府（表1文献25）で奈良時代、百間川米田遺跡（表1文献15）で8世紀後半～9世紀の事例が報告されている。美作国府は、713年に美作国が備前国から分立されたことにより整備された。国府建物群の整備に伴い、土井桁隅柱縦板組井戸の構築技術が移植されたと考える。また、百間川米田遺跡では古代の掘立柱建物群が検出され、銅製帯金具や陶硯、押印須恵器（「官」）、墨書土器（「上三宅」）が出土し、8世紀後半主体の公的機関とされた〔井上1982〕。岡田は備前国府との位置関係や立地などから備前国津あるいは上道郡の郡津の可能性を考えている〔岡田1992〕。

方形隅柱縦板組井戸は、8世紀後半に出現し中世まで継続する。平城京、長岡京で8世紀の事例が確認され、長岡京の井戸についてまとめた山本輝雄は、縦板組の井戸が奈良・平安時代の都城から集落遺跡まで普及度の高い井戸であるとした〔山本1986〕。方形隅柱縦板組井戸については、都城からの技術移植と方形土井桁隅柱縦板組井戸の改良という2つの可能性が推測される。

まず、都城から技術移植の可能性は、方形土井桁隅柱縦板組井戸の存在が認められず、方形隅柱縦板組井戸のみが存在する遺跡から考えられる。鹿田遺跡では古代の井戸が24基確認された。素掘り井戸が15基、円形丸太割り抜き井戸が1基で、古代新出の井戸は方形隅柱縦板組井戸4基、曲物組井戸3基である。方形隅柱縦板組井戸は8世紀後半～9世紀初頭に比定されたI区井戸20が最古で、およそ美作国府や百間川米田遺跡で方形土井桁隅柱縦板組井戸が出現した段階に相当する。鹿田遺跡で

は方形隅柱縦板組井戸が当初から移植された可能性を考えたい。

他方、井戸構築技術変容の可能性は美作国府で見ることができる。美作国府では奈良時代から中世に方形土井桁隅柱縦板組井戸が、平安時代から中世に方形隅柱縦板組井戸が使用された。前者から土井桁が消失した構造が後者で、地域での技術変容の可能性を考えたい。このような合理化を図るような技術変容は、さらに進行していくものと推察される。

曲物組井戸は、8世紀中頃が現在のところの最古例だという〔鐘方2003〕。ただ、底を抜いた曲物を積み重ねるという単純な構造であるため、曲物が存在すれば各地独自の工夫でも十分構築し得る構造である。曲物組井戸は技術移植、地域内での独自工夫という2つの可能性があり、どちらとも決しがたい。古代以降に構築されるようになった井戸としてのみ位置づけたい。

古代には弥生時代以降に継続する構造の井戸と都城から移植された新来技術の井戸が存在した。後者は藤原宮期～奈良初頭の二段構造井戸・方形相欠き仕口横板組井戸、奈良時代の方形土井桁隅柱縦板組井戸・方形隅柱縦板組井戸と少なくとも技術移植に二段階想定できた。技術移植された遺跡は国津や国府など公的機関が多く、都城からの直接移植が考えられる。他方、公的機関とは考えられない遺跡でも新来の井戸が確認でき、地方でも役所から集落へ、さらに集落間での技術移植が推測される。

3 伊福定国前遺跡井戸4の位置づけ

岡山県で発掘調査が実施された古代井戸について検討し、構造で8分類した。最後に上記の分類に即して伊福定国前遺跡で検出した平安時代前期の井戸4について検討し、その位置づけを試みたい。

井戸4は掘り方を掘削し、隅柱を立てて、縦板を並べて井戸枠を完成させた。隅柱の下には土井桁は設置していない。その点から井戸4は上記分類の方形隅柱縦板組井戸の範疇に入る。

ただ、特異な点もある。井戸4の隅柱は南北で下端の海拔高の差が著しく、北西隅柱がおおよそ20cm、南西隅柱が60cmとその差は40cmである。また、同様の差は縦板にも言えることで、北側が最も長く下端の海拔高はおおよそ20cmで、西側および南側は60～70cmを測る。横棧の有無にも差があり、横棧は北側壁にのみ残存していた。横棧を固定する柄穴は北西隅柱にしか認められなかった。ただ、北西隅柱の柄穴は、横棧が固定されていた東西方向に1か所とそれに直行する南北方向に1か所穿たれていたが、南北方向の柄穴に横棧は固定されていない(図版12-2)。上記のことから、井戸4は一度改修が行われた可能性を考える。この改修で井戸を埋め戻し、ある程度浅くなった状態で、少なくとも西側および南側の井戸枠を付け替えた。埋め戻しの後、取り外した横棧や曲物の破片などを井戸内に放置し、それから須恵器大甕416の設置となる。横棧や曲物の破片などを置いた理由は、埋め戻しで脆弱になった部分に大甕を据えるため、地盤を強化、安定を意図したものと考えられる。

当初、井戸4は平城京や長岡京の井戸に系譜が求められる、方形隅柱縦板組井戸として活用された。ただ、その技術は都城からの直接移植というより、集落間の間接移植と推測する。そして、一定期間の使用の後、何らかの理由で井戸4は改修された。結果、井戸としての機能は低減し、集水施設としての役割に比重が傾いた。それでも416の底部を打ち抜いていることから、湧水を集める機能は、ある程度具備させた。井戸はそれ「自体が崩れずに長持ちさせるための工夫と、綺麗な水を恒常的に確保する欲求のもとに成り立つ装置」〔堀2008〕と定義されているように、綺麗な水の確保が重要な役割であった。416および416内の砂や礫は浄水を目的として設置したと推測する。(上椿)

参考文献

- ・井上 弘1982「まとめ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 岡山県教育委員会
- ・宇野隆夫1982「井戸考」『史林』65-5 史学研究会
- ・岡田 博1992「官衙」『吉備の考古学的研究』下 山陽新聞社
- ・鐘方正樹2003『井戸の考古学』同成社
- ・亀山行雄2005「遺跡の位置と環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189 岡山県教育委員会
- ・草原孝典2006「古代（8・9世紀）」『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会
- ・黒崎 直1976「平城宮の井戸」『月刊 文化財』151号
- ・黒崎 直1995「藤原宮の井戸」『文化財論叢』Ⅱ 奈良国立文化財研究所
- ・千田剛道編1989『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
- ・中野雅美1988「弥生・古墳時代初頭の井戸－岡山県南部の沖積地集落を中心に－」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論集刊行会
- ・花谷 浩・毛利光俊彦編1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- ・堀 大介2008「井戸の総論と諸問題」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』埋蔵文化財研究会
- ・山本輝雄1986「長岡京の井戸」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編

表1文献

- 1 「鹿田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』207 岡山県教育委員会 2007
- 2 「鹿田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』210 岡山県教育委員会 2007
- 3 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 4 「鹿田遺跡Ⅱ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990
- 5 「鹿田遺跡5」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』23 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2007
- 6 『新道遺跡』岡山市教育委員会 2002
- 7 「加茂政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』138 岡山県教育委員会 1999
- 8 『三手向原遺跡』岡山市教育委員会 2001
- 9 「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会 1974
- 10 「川入・中撫川遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報』1 岡山市教育委員会 2002
- 11 『川入・中撫川遺跡』岡山市教育委員会 2006
- 12 「鍛冶屋D遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』219 岡山県教育委員会 2009
- 13 『ハガ遺跡』岡山市教育委員会 2004
- 14 『赤田東遺跡』岡山市教育委員会 2005
- 15 「百間川米田遺跡3（旧当麻遺跡）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 岡山県教育委員会 1989
- 16 「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会 1993
- 17 「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会 1993
- 18 「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972
- 19 「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120 岡山県教育委員会 1997
- 20 「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 岡山県教育委員会 1993
- 21 「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995
- 22 「堂免遺跡」『邑久町史 考古編』邑久町 2006
- 23 「助三畑遺跡」『邑久町史 考古編』邑久町 2006
- 24 「長縄手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189 岡山県教育委員会 2005
- 25 「美作国府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6 岡山県教育委員会 1973
- 26 「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』50 津山市教育委員会 1994
- 27 「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4 岡山県教育委員会 1973
- 28 「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- 29 「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 岡山県教育委員会 1973

第3節 墨書土器について

1 出土遺構と時期について

土壙25と溝12の周囲には、掘立柱建物1や井戸4などが存在する。出土遺物から判断すると、土壙25や溝12は掘立柱建物1よりも古いが、井戸4との併存期間が存在した可能性はある⁽¹⁾。溝12は、浅い土壙状を呈する遺構で、西側に幅の細い溝を有する。この具体的な機能については明らかでないが、区画を目的とした遺構の可能性もある。この場合、溝14との関連も考えると、この位置には、井戸を含めた何らかの空間や施設が存在した可能性も考えられるが、あくまでも憶測に過ぎない。いずれにしても、当地は生活域あるいは何らかの施設の縁辺であったと思われる⁽²⁾。

土壙25と溝12の出土土器は、完形に近いもの（復元によるものも含めて）は少なく、また奈良時代から平安時代のものが混在している。出土状態は、破片が散在する傾向にあり、完形品の一括廃棄や埋納をうかがうことはできない。ただし、奈良時代の土器の方は小片がやや多く、墨書土器はすべて平安時代の須恵器である。

なお、遺構の切り合い関係からは、溝よりも土壙の方が新しいことが判明している。しかし、両者の遺物は、時期や内容が類似していることから、本来は溝内の遺物であったものが土壙内に混入している可能性が考えられる。また、遺構との関係が不明の墨書土器543・544も、溝内の遺物であった可能性も十分に考えられる。そこで、両遺構の土器を合わせると、須恵器16～19点と土師器7～9点となり、割合はおおむね2：1となる⁽³⁾。

以上の点から、平安時代の墨書土器すべてが、溝12を中心に集中して出土している点が、特徴として指摘できる。他地域では、同一遺構で完形の墨書土器が多く出土する事例があるが、本遺跡の場合は、すべての土器は破片であり、多くは小片である。そこに意図的な損壊や器種選択を確認できないので、両者がまったく同じ現象とは考えにくい。この原因が、遺跡での墨書土器量の投影にあるのか、やはり廃棄行為に由来するのか、また遺構との関連などについて、今後検討が必要である。

次に、土壙25や溝12、井戸4の時期を検討する。これらから出土した須恵器や土師器の杯は、底部外面に指頭押圧が認められることから、おおむね9世紀代のものと考えられる⁽⁴⁾。他の遺跡の土師器杯や皿についてみると、口径や器高の縮小傾向から、「津寺遺跡（岡山市）野上田6区の土器溜り」→「中撫川遺跡（岡山市）のたわみ4」→「妹尾住田遺跡（岡山市）の溝4」→「津寺遺跡（岡山市）丸田調査区の土壙36」の組列が想定できる⁽⁵⁾。当遺跡の土壙25、溝12、井戸4上層の土師器は、前二者が「中撫川遺跡のたわみ4」に、後者は「妹尾住田遺跡の溝4」に類似する。

それぞれの遺跡では、緑釉陶器や灰釉陶器が出土しており、年代の上限を推定することが可能である。ただし、それらよりも新しい様相を示すものに似た、土師器や黒色土器などが一部存在すると思われる。このことから、土壙25と溝12は9世紀中葉を含む後半、井戸4上層は9世紀後半～末を前後する時期と考える⁽⁶⁾。

2 墨書土器

出土した墨書土器の総数は9点で、その内573は8世紀後半の奈良時代、残り8点は9世紀中葉～

後葉の平安時代のものである。文字が明らかなものは、419・488・490の「由」と489・573の「吉」であり、いずれも一文字のみが記されている。その他も「由」一文字の可能性を考えているが、欠落部分があるので、「田」などの可能性や複数文字の可能性もある。「由」の筆跡は、どれも異なるように思われ、書き手が複数であったことを感じさせる。

平安時代の墨書土器は、2種類の須恵器杯に限られ、文字は、489のみが体部外面に横位で書かれ、他は底部外面に書かれている。高台付杯の2点は、どちらも中心のやや下に文字が書かれているが、無高台の杯では、419が中心の右、543が中心の左、他は中心の左上となっている。このように墨書土器の文字は、器面全体に大きく書く場合を除くと、器の中心をはずして書かれることが多い⁷⁾。

墨書される土器は、杯・皿等の供膳具が極めて多いことはよく知られている。また、平城宮では、須恵器が土師器の2倍近くを占め、部位については、須恵器杯で底部外面が80%、体部外面が13%を占める⁸⁾。当遺跡の例も、こうした傾向に一致している。なお、さまざまな出土例から、体部外面の場合は、文字が横位で書かれることも少なくないようである。

次に文字であるが、「由」一文字の墨書土器は、近畿・中国地方では、当遺跡を除くと平城宮跡で1点しか確認できない⁹⁾。一方、下総国匝瑳郡の集落である千葉県南借当遺跡では5点、同じく中内原遺跡では136点も出土している¹⁰⁾。全国的には多い文字ではないようであるが、東日本にやや偏って出土しているとみられる。「吉」一文字の墨書土器についても、必ずしも多いとは言えないようであるが、出土遺跡は全国広範囲に分布する。「由」同様に、平城宮跡や平城京跡（以下、宮都と称する）ではかなり少ない反面、地方の官衙や寺院では上位に位置する文字のようである。

このように、「由」と「吉」は、宮都での出土数が少ない文字であり、「由」に関しては、今のところ東日本に多く分布する文字の可能性がある。

3 量的地域差と文字構成

おもに奈良時代から平安時代にかけての、全国的な墨書土器の点数や出土遺跡数を概観した場合、東日本が圧倒的に多く（特に千葉県が多い）、西日本（奈良県を除く）はかなり少ない状況である¹¹⁾。西日本の官衙や寺院でも、ある程度の出土量が認められるが、やはり東日本よりは少ない。また、集落においては、その実態が明らかでない場合もあるが、それでも西日本の墨書土器数はかなり少ないとみられる。こうした点は中国・四国地方に顕著であり、この両地方は西日本の中でも一段と少なく、岡山県もその例外ではない。

このような墨書土器量における東西の地域差は、ひとつには、遺跡ごとの出土点数の差に原因があるが、それ以上に遺跡数の差が大きく影響していると思われる。これが妥当であれば、墨書行為は、基本量において比較的均質である可能性が考えられる。

では、日本の東西で認められる遺跡数の差は何を示すのか。官衙や寺院が東日本に偏在しないのであれば、それは、墨書を行う集落数の差と考えざるを得ない。

次に、いくつかの遺跡を取り上げ、主に一文字の墨書について、遺跡種類をみながら文字構成について考えてみたい¹²⁾。

墨書には、さまざまな文字が認められるが、遺跡種類にあまり関係なく頻繁に使用されるものと、それぞれに特有なものが存在する。前者は「大・上・十・中・万・井・吉」などであり、また官衙や寺院では「厨」などが共通してよくみられる。後者では、官衙の場合は「一・水・官・長・酒」、寺

表2 岡山県内出土の墨書土器一覧

※古代未以降除く

旧国名	釈文	種別	器種	部位	所在地	遺跡名	文献	備考
備前国	┌東┐	須恵器	杯	体部	外面	瀬戸内市	門田遺跡	邑久町史 考古編 2006
	判	須恵器	杯	底部	外面			
	□	土師器	高台付杯	体部	外面	瀬戸内市	堂免遺跡	邑久町史 考古編 2006
	寺寺	土師器	杯	体部	外面	岡山市中区	ハガ遺跡	2004
	□	土師器	杯	体部	外面	岡山市中区	天神河原遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 221 2009
	□(呂?官?)家	須恵器	杯	体部	外面	岡山市中区	百間川原尾島遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106 1996
	□□	須恵器	杯	底部	外面			
	酒	須恵器	杯	底部	内面			
	下	土師器	杯	底部	外面			
	大	土師器	皿	底部	外面	岡山市中区	百間川沢田遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 59 1985
	□	須恵器	蓋	天井部	外面	岡山市中区	百間川米田遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 164 2002
	□	須恵器	蓋	天井部	外面			
	馳丸	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	市	土師器	杯	底部	外面			
	上三宅	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	上三宅	須恵器	杯	底部	外面			
	□(三)宅	須恵器	杯	底部	外面			
	□	須恵器	杯	底部	外面			
	□(北?)	須恵器	杯	底部	外面			
	□	須恵器	杯	底部	内面			
	下?	須恵器	杯	底部	外面	岡山市北区	北方旗田遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 126 1989
	□定	土師器	杯	底部	外面	岡山市北区	北方中溝遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 126 1989
	□□	須恵器	杯	体部	外面	岡山市北区	津島遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 173 2002
	□	須恵器	杯	底部	内面			
	□	須恵器	杯	底部	外面	岡山市北区	津島岡大遺跡	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 9 1995
	□	須恵器	杯	底部	外面			
	□	須恵器	杯	底部	外面	岡山市北区	伊福定国前遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 224 2010
	由	須恵器	杯	底部	外面			
	□(由?)	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	□(由?)	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	由	須恵器	杯	底部	外面			
	吉	須恵器	杯	体部	外面			
	由	須恵器	杯	底部	外面			
	□(由?)	須恵器	杯	底部	外面			
	□(由?)	須恵器	杯	底部	外面			
	吉	土師器	杯	底部	外面			
	□	土師器	高台付杯	底部	外面	岡山市北区	鹿田遺跡	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 4 1990
	□	土師器	杯	体部	外面			
	□	土師器	杯	底部	外面			
	□	土師器	杯	底部	外面			
	□	土師器	杯	底部	外面			
	□	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	玉	土師器	杯	底部	外面			
	専	土師器	杯	体部	外面			
	□	土師器	杯	底部	外面			
田	土師器	杯	底部	内面				
□	土師器	杯	底部	内面				
□	須恵器	蓋	天井部	外面	岡山市北区	大供奉町遺跡	大供奉町遺跡発掘調査現地説明会資料 2006 岡山市埋蔵文化財センター年報 8 2009	
藍原	須恵器	高台付杯	底部	外面				
備中国	十	土師器	杯	体部	外面	岡山市北区	加茂遺跡	吉備の考古学的研究(下)1992
	八	須恵器	稜腕	底部	外面	岡山市北区	川入遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 2 1974
	┌	須恵器	蓋	天井部	外面	岡山市北区	吉野口遺跡	吉野口遺跡 - 岡山市立鯉山小学校給食棟建築事業に伴う発掘調査報告 - 1997
	左大	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	新盆?	土師器	高台付杯	底部	外面			
	中男(田?)	土師器	杯	底部	内面			
	井?	黒色土器	高台付腕	底部	外面	岡山市北区	津寺遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 90 1994
	□(記号)	須恵器	高台付杯	底部	外面			
	井?	黒色土器	高台付腕	底部	外面			
	川本	黒色土器	高台付腕	底部	外面			
	倉	土師器	杯	底部	外面			
	上扇	土師器	杯	底部	外面			
	吉	土師器	杯	底部	外面			
	用	土師器	杯	底部	外面			
	□(墨痕?)	土師器	杯	底部	外面			
	□(墨痕?)	土師器	杯	底部	外面			
	□	土師器	皿	底部	外面			
	用	土師器	皿	底部	外面			
	井上	土師器	高台付杯	底部	外面			
	壽?(□□?)	土師器	高台付杯	底部	外面			
年	須恵器	高杯	杯部	内面	岡山市北区	津寺三本木遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 142 1999	

第3章 総括

旧国名	积文	種別	器種	部位		所在地	遺跡名	文献	備考
備 中 国	十	土師器	杯	底部	外面	岡山市北区	加茂政所遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138 1999	
	女?	須恵器	杯	底部	外面	倉敷市	菅生小学校裏山遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 81 1993	
	畷	須恵器	杯	底部	内面				
	畷	須恵器	杯	底部	内面				
	V	須恵器	高台付杯	体部	外面				
	九	須恵器	杯	底部	内面	総社市	三須河原遺跡	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 16 2003	
	郡殿	須恵器	蓋	天井部	外面				
	郡殿	須恵器	蓋	天井部	外面				
	郡殿	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	郡殿	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	郡殿	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	□万	土師器	杯	底部	外面				
	賀夜	土師器	杯	底部	外面				
	□(大?)□	土師器	杯	底部	外面	総社市	三須中所遺跡	総社市埋蔵文化財調査年報 14 2005	
	□□(厨?)	土師器	杯	底部	外面				
	八邊	土師器	杯	底部	外面	総社市	南溝子遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 214 2008	
	□	土師器	皿	底部	外面	総社市	北溝子遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 209 2007	
	今刀白	須恵器	蓋	天井部	外面	総社市	宮ノ前遺跡	総社市埋蔵文化財調査年報 10 2001	他に5点
	衣女	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	刀日								
□	須恵器	高台付杯	底部	外面	総社市	横寺遺跡	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 15 1999		
吉祥	須恵器	蓋	天井部	外面	真庭市	備中平遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 12 1976		
美 作 国	大	土師器	杯・皿	底部	外面	津山市	美作国府跡	津山市埋蔵文化財発掘調査報告 15 1984	
	大	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	少目	土師器	杯	底部	外面				
	秀?(杵・杵)	須恵器	杯	底部	外面				
	高(商)・□	土師器	碗	底部	内面				
	□(戯画?)	須恵器	蓋	天井部	内面				
	苦田	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	相	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	井	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	清□	須恵器	杯	体部	外面				
	郡□	須恵器	皿	底部	外面				
	□	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	□	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	□	須恵器	杯	底部	外面				
	□□	土師器	高台付碗	底部	外面				
	□(渦巻き)	土師器	杯	底部	外面				
	□□	土師器	皿	底部	外面				
	□	土師器	皿	底部	外面				
	厨	須恵器	高杯	脚部	内面				
	□福		杯	底部	外面	津山市	美作国分寺跡	美作国分寺跡発掘調査報告 1980	
□	須恵器	蓋	天井部	外面	津山市	久米庵寺	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 4 1973 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 24 1978		
□(皿?)	土師器	杯	底部	外面	津山市	宮尾遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 4 1973		
中家	須恵器	杯	体部	外面	津山市	法事坊遺跡	久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1) 1979		
□	須恵器	杯	底部	外面					
中家	須恵器	杯	体部	外面					
□氣	須恵器	杯	底部	外面					
中家	須恵器	杯	底部	外面					
□	須恵器	杯							
□家	土師器	杯	底部						
◎?	須恵器	杯	底部	外面					
◎	須恵器	杯	底部	外面					
□	須恵器	杯	体部	外面					
□	須恵器	杯	底部	外面					
□	須恵器	杯	体部	外面					
史			底部		津山市	須家遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 8 1975		
中□□	須恵器	杯	底部	外面	津山市	山ノ奥遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 180 2004		
西仁之	須恵器	杯	体部	外面					
□	須恵器	杯	体部	外面	美作市	高木遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 8 1975		
郡	須恵器	蓋	天井部	内面	美作市	今岡院寺	大原町埋蔵文化財発掘調査報告 2 2002		
讚	須恵器	杯	体部	外面	美作市	稲穂遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 216 2008		
□	須恵器	杯	底部	外面	勝田郡勝央町	平遺跡	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 8 1975		
大	須恵器								
厨	須恵器		底部	外面	苦田郡鏡野町	久田原古墳群	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 184 2004		
□□	須恵器	蓋	天井部	外面					
×(記号)	須恵器	杯	底部	外面					

旧国名	积文	種別	器種	部位	所在地	遺跡名	文献	備考	
美作国	平	須恵器	蓋?	天井部	外面	真庭市 西口A遺跡			
	平	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	平	須恵器	高台付杯?	底部	外面				
	平	須恵器	蓋?	天井部	外面				
	内	須恵器	蓋?	天井部	外面				
	内	須恵器	蓋?	天井部	外面				
	□	須恵器	皿	底部	外面				
	□(内?)	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	□	須恵器	杯?	底部	外面				
	□(内?)	土師器	皿?	底部	外面				
	千人	須恵器	高台付杯	底部	外面				
	□	須恵器	蓋	天井部	外面				真庭市

院の場合は「院・法・浄・花・寺」などである。また、地域ごとに遺跡種類で比較した場合、点数や文字種類数は、官衙関連→寺院→集落の順に少なくなると推測される。

このことから、墨書行為には、全体を通して、また遺跡種類ごとに一定の共通する側面があり、その頻度や量には、遺跡の性格や規模に応じて階層差が存在することがわかる。なお、集落相互で比較した場合には、上記の文字を除き、互いに共通する文字は少ないようである¹³⁾。これは、集落での出土点数が少ないことも一因と考えられるが、むしろ、一定の共通性が認められる官衙や寺院の墨書文字と、集落で使われる墨書文字との間に何らかの違いがあることを示していると思われ、この点に注目したい。

一つの遺跡から出土する文字種類は、宮都をはじめとして東西日本とも国衙等で特に多いが、一般的には10数種類まで、多くても20~30種類の場合が多いようである。その中で、点数の多い順に文字を並べた場合、1ないし数文字が突出して多いことがわかる(表3)。それに基づいて文字種類の構成を分類すると、以下のようになる¹⁴⁾。

類型Ⅰ：最多と次点の文字で、点数の差が小さいもの。

(平城宮跡、大覚寺御所跡、伯耆国庁跡、出雲国府跡、出雲国分尼寺など、官衙や寺院が多く、種類も豊富である。)

類型Ⅱ：最多と次点の文字で、点数の差が大きいもの。

(中内原遺跡、村上込の内遺跡、多功南原遺跡など、集落に多いが、大御堂廃寺跡などの寺院も認められる。文字種類数の多いものと少ないものがある。)

類型Ⅲ：点数の差が顕著でなく、種類が多いもの。

このように、類型Ⅰ・Ⅱが、それぞれ遺跡種類に対応する可能性があることは興味深い。しかし、大きな組織としての性格を持つ遺跡が類型Ⅰであることから、それは、基本的な文字構成において類型Ⅱと大きな相違があるわけではなく、あくまでも量の差と捉えるべきであろう。ここでも、墨書行為の一定の共通性が認められ、類型Ⅱは基本的な文字構成と考えられる。

また、類型Ⅱの遺跡でも、量的な差を除くと、文字構成に大きな地域差を見ることはできないことがわかる。墨書行為が、基本単位において比較的均質であるということである。最多あるいは次点の文字は、その遺跡を最もよく表す可能性も想定できるであろう。

以上の観点から、当遺跡の文字構成は、確定できない文字の多くが「由」であれば、類型Ⅱに分類できる。また、出土量が少なく、官衙や寺院に特有な文字がないことから、当遺跡が集落遺跡である可能性が考えられる。ただし、現段階では、実態が不明な官衙の末端組織も、そこに含まざるを得ないと考える。

表3 遺跡種別で見た墨書文字の種類と出土点数

府県名	遺跡名	種別	1文字の墨書										2～3文字の墨書				文献	
			文字種類と点数										全種類数	文字種類と点数				その他
			大	十	上	厨	一	二	三	四	五	六		大家	常大	常大家		
奈良県	平城宮跡	官	大 48	十 34	上 26	厨 21	一 19	二 11	三 11	四 9	五 9	六 9	大家 8	常大 7	常大家 2		1	
滋賀県	小荒路十寺遺跡	官	大 3	十 1	上 1	厨 1	一 1	二 1	三 1	四 1	五 1	六 1	大家 8	常大 7	常大家 2		2	
山形県	今塚遺跡	官	大 53	十 29	上 15	厨 13	一 9	二 8	三 8	四 49	五 50	六 16	田高 5	山高 5	9	3		
岡山県	美作国府跡	官	大 2	厨 1	井 1	相 1	秀 ⁹⁾ 1						少日 1	苦田 1	高□ 1	2	4	
鳥取県	伯耆国府跡	官	厨 4	国 4	南 2	上 1	井 1	新 1	21	事事 2	山守酒殿 1	山守 1	7	5				
鳥根県	出雲国府跡	官	大 5	館 4	本 4	高 4	官 3	国 3	43	意字 2	三太三 2	國厨 1	17	6				
鳥根県	芝原遺跡	官	美 4	毘 1						2	校尉 3	出雲家 1	出雲 1	1	7			
鳥根県	三田谷Ⅰ遺跡	官	坂 3	井 1	上 1	宅 1	法 1	直 1	15	上井 2	麻奈井 1	坂□ 1	3	8				
京都府	大覚寺御所跡	寺	中 2	大 2	御 2	萬 1	庄 1	前 1	19	御膳□ 1	東庄 1	前□ 1	10	9				
石川県	浄水寺跡	寺	弥 59	集 38	南 16	徳 10	富 10	寺 9	46	浄水 53	浄水寺 20	南房 19	34	10				
鳥取県	大御堂庵寺跡	寺	寺 6	吉 2	井 1	廿 1	浄 1	上 1	17	久寺 14	久米寺 3	浄私 1	4	11				
鳥根県	出雲国分尼寺	寺	牛 1	勝 1						2	東室 2	堂東 1	東房 1	5	12			
山形県	生石Ⅱ遺跡	集落	井 257	工 22	才 15	大 14	子 10	主 8	38	大井 4	白方呂 3	白□ 3	8	13				
千葉県	中内原遺跡	集落	市 136	奉 1						2				14				
千葉県	南借当遺跡	集落	出 5	金 2	木 2	大 1	十 1	南 1	20	大万 1	□万 1	八万 1	4	15				
千葉県	村上込の内遺跡	集落	来 98	毛 30	山 10	林 6	家 3	大 2	31	利多 7	子春 3	六万 3	8	16				
栃木県	多功南原遺跡	集落	干 99	白 13	大 6	上 5	七 3	門 3	33	秋刀 4	立麻呂 2	立万呂 2	13	17				
岡山県	法事坊遺跡	集落							2	中家 5				18				
鳥取県	岩古遺跡	集落	草 77	田 53	廿 38	角 4	好 3	高 1	17	草田 99	草□ 18	高位 4	10	19				
鳥根県	三井Ⅱ遺跡	集落	井 6	両 3	総 2				3	三井 2	□井 1	□井□ 1		20				
宮崎県	余り田遺跡	集落	古 8	寺 2	大 2	木 2	内 2	定 1	37	口万 20	波太 3	伊益奉 1		21				

- 1 註(9)と同じ
- 2 滋賀県教育委員会ほか『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅻ-8 1985
- 3 植松暁彦「今塚遺跡の再検討とその性格について」『研究紀要』創刊号 山形県埋蔵文化財センター 2003 から引用
- 4 表2参照
- 5 倉吉市教育委員会「伯耆国府跡発掘調査概報」(第3次) 1975、同(第4次) 1976、同(第5・6次) 1978
倉吉市教育委員会「史跡伯耆国府跡国府跡発掘調査報告書」(第8～11次) 2007
- 6 鳥根県古代文化センター「山陰古代出土文字資料集成Ⅰ(出雲・石見・隠岐編)『鳥根県古代文化センター調査研究報告書』第14 2003
- 7 松江市教育委員会「芝原遺跡」1989
- 8 鳥根県教育委員会「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」Ⅴ 1999、同Ⅷ 2000、同Ⅸ 2000
- 9 大覚寺「史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査」1994
- 10 石川県立埋蔵文化財センター「浄水寺墨書資料集 浄水寺跡発掘調査報告書 第1分冊」1989
- 11 倉吉市教育委員会「倉吉市文化財調査報告書」第107集 2000
- 12 6と同じ
- 13 山形県 山形県教育委員会『山形県埋蔵文化財調査報告書』第89集 1985
- 14 註(10)と同じ
- 15 註(10)と同じ
- 16 註(27)から引用
- 17 栃木県教育委員会ほか『栃木県埋蔵文化財調査報告』第222集 1999
- 18 表2参照
- 19 財団法人鳥取市教育福祉振興会「岩古遺跡Ⅳ」1997
- 20 斐川町教育委員会「斐川中央工業団地造成に伴う杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書」2001
- 21 宮崎県埋蔵文化財センター「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第1集 1997

4 一文字墨書の機能と目的

土器に対する墨書の機能と目的を検討することは、最も基本的な作業であり、その結果は遺跡の評価にもつながる。これについては、文字内容、土器の器種や書かれた部位、遺跡内容等の分析を通して、これまでも検討が行われているところであるが⁹⁶⁾、大きく分けると2つの考え方が示されている。その一つは、官衙における墨書が、土器の管理や供給に際して行われ、その文字は土器の帰属を示すと考えるもの⁹⁶⁾で、集落ではそれを模倣したとするものである。もう一つは、官衙でのあり方を認めた上で、関東の集落遺跡の分析から、墨書が祭祀や儀式に際して行われ、その文字は呪的な意味を持つ記号であるという見解である⁹⁷⁾。

一文字の墨書文字について、その意味を確定できる場合は少ない。そこには、さまざまな可能性があることから、墨書の機能や目的を限定することが、非常に困難であることは間違いない。ただ、複

数文字の墨書が存在する例を見ると、一文字がその省略形であることが多いようである。その場合、官職名、施設名や地名、あるいはそれらの通称と考えられるものが目立つ。

墨書土器の機能は、他の土器と同様に容器であることは疑いない。そこへ向けて、書かれた文字の情報を伝達・表現する媒体という機能が加わるが、これは土器の主體的な機能ではなく、墨書の結果として備わるものである。この場合、紙や木とは異なると考えるからである。すると、墨書の機能は、対象となった土器に関する情報の表示と考えるほうが妥当である。その情報が、土器自体の用途に直接関係するような場合もあるが、官職や施設や地名のような場合が多いということである。

土器への墨書の目的、あるいは地域性を考える上で、出土点数にして全国で数万点と言われるものが、どれくらいの頻度で行われたのかを検討することも重要である。これを墨書率としてみた場合、平城宮跡では多くても5.5～6.7%⁸⁸、千葉県山田水呑遺跡では1.7%⁸⁹である。これらは、遺構単位の出土土器に関して試算されたもので、それ以外の土器量も考慮すると、非常に低い率と言わざるを得ない状況であろう。遺跡によっては、もっと高い数値を示すこともあると考えられるが、一般的には、かなり低いとみるべきである。この点などから、役所における墨書の目的が、物品管理ではなく、分配先を示すことにあり、幾つかの重ね単位ごとに場所を記したとする考え方が提示されている⁹⁰。現段階では、これが最も合理的であると考えられ、前述した文字の共通性は、官職名や施設名等の共通性やその表現方法の共通性に由来すると推測する。

また、祭祀や儀式に限定しなくても、土器使用に際して墨書が必要であるとすれば、墨書率の低さは、そのような使用が特別な場合であったか、あるいは極めて限定的なものにしか書かれなかったことを示すと言える。この場合、墨書の目的は、特殊事情に起因するものであり、それを一般化して取り扱うことはできないことになる。ただし、東日本の集落では、祭祀に関わると考えられる墨書土器も多く出土しており、それが量的な地域差に影響している可能性は否定できない。

このような点から、土器への墨書の一般的な目的は、役所や寺院などに代表されるような組織・施設内での土器分配にあり、分配先を一部の土器に文字で表示した（官職・組織・施設名やそれらの通称など）と考える。集落でも同様な方法が採用された可能性もあるが、同一文字の点数が著しく多い場合や、器の中央に大きく文字を墨書する場合などは、墨書が土器の帰属を示す目的に転じて行われたものではないだろうか⁹¹。集落では、施設数が限られていることから、その名称を表示する必要性が低いと推測され、表示内容は集団や特定個人、地名そのもの、つまり帰属表示の場合が多いと考える。

すでに述べた、文字種類の共通性における官衙・寺院と集落での相違や、量的な階層性が生じる点は、ここに原因があるとみられる。つまり、官衙・寺院では表示対象の共通性が高い上に数量が多く、一方の集落は共通性が低い上に数量が少ないということである。

5 地域性について

ここまで、墨書を行う集落数の差が、日本の東西で存在すること、官衙・寺院での墨書行為が、集落でも目的を拡大させながら行われた可能性を述べたが、これだけでは、東日本と西日本の地域性は理解できない。官衙・寺院に一般的に関与する人口や集落への影響力の東西差が認められなければならないからである。この点に関して、次のことを提案する。

それは、物資の管理や帰属に関して、より厳格になりがちな軍隊のような組織の影響を考えてみてはどうであろうかということである。特に東日本の多くの集落成員は、奈良時代を中心とする蝦夷鎮

定に際し、軍士として徴発されていたことから、この点を検討する価値はあると考える⁽²²⁾。さらに、この観点からすれば、徴兵の件を除いたとしても、軍需物資の提供に伴う役所との関わりが他地域より強く、頻繁であったことも影響しているかもしれない。

東日本の集落での墨書土器は、8世紀前半に出現し、9世紀中葉から飛躍的に展開し、10世紀の内に急速に減少すると指摘されている⁽²³⁾。この飛躍的な展開時期は、征夷中止により東日本の諸国がそれまでの重い負担から開放された直後である。8世紀から9世紀初頭までに行われた蝦夷鎮定に際して、東国（特に坂東諸国）は兵士や物資調達でかなりの負担を強いられていた⁽²⁴⁾。そのような環境下、東国の人びとは、墨書土器に接する機会が多く、その影響を受けやすい立場にあったのかもしれない。また、それを受け入れる社会的要件が存在していたのかもしれない。

いずれにしても、さまざまな負担から解放されると、一気に集落活動が活発になることは必然で、墨書土器の出土量はそのような集落動向を強く反映していると考ええる。

また、今回は十分な検討ができないが、地域ごとの墨書土器の衰退をみることも重要である。奈良時代の墨書土器は、平城宮で圧倒的に多いが、他地域での遺跡間の差は比較的小さい可能性がある。一方、平安京での墨書土器量は、平城京や長岡京と比較するとかなり少ないことが注目される。前述のとおり、東日本の集落での墨書土器は、9世紀中葉から飛躍的に展開し、10世紀に減少する。つまり9世紀になると、土器への墨書は、中央ではあまり行われず、東日本では逆に盛行していたことになる。中央で墨書が衰退する理由はよくわからないが⁽²⁵⁾、東日本の地域的特色は、やはりこの時期から顕著に現れるようである。

6 まとめ

当遺跡は、墨書土器を検討したところ、文字構成から「由」に象徴される集落である可能性が考えられた。ただし、「由」が東日本に多く分布する墨書文字であることをことさらに取り上げて、当遺跡とその地域との関係を推し量るつもりはない。今後、文字の意味を十分吟味し、地名や人名などさまざまな観点から可能性を考えていくことが必要である⁽²⁶⁾。

また、墨書土器に関わる課題として、その目的や地域性について見通しを述べた。土器に対して行う墨書が、基本的に分配先表示という均質なものと捉えた場合、墨書土器の量における地域性は、集落での帰属表示という異なる目的が加わることや、墨書を行う集落が平安時代に急増するという東国社会の特徴を示す可能性が考えられた。

しかし、最も基本的な墨書の目的を具体的に明らかにすることは十分にできなかった。中央において、平安時代に墨書土器が激減する理由、東日本で衰退時期が大きくずれる理由などを検討することが、それを解明する道のひとつであると考ええる。

墨書土器の終焉については、信仰形態や儀式の変化を挙げる考え方⁽²⁷⁾もある。しかし、土器への墨書が、本来律令制のもとで行われた物品供給に関する一手段と仮定すれば、中央においてはその手段に大きな変化が生じた可能性を考えなければならないであろう。また、東日本をはじめとする集落においては、中央での変化が時間差を置いて現れたのか、10世紀頃までに土器の帰属表示を行う必要性あるいは慣習が失われたなどの可能性などを考えたい。いずれにしても今後、資料の分析・検討が望まれる。

(柴田)

狩野久氏には、当遺跡の墨書文字やその解釈等について多くの御教示をいただいた。また、岡田博氏には県内出土の墨書土器集成に際して資料の提供にあずかり、池上博氏には未報告資料の実見、記載について御配慮をいただいた。記して厚くお礼を申し上げる。

註

- (1) 土壙25と溝12の墨書土器は、9世紀中葉～後葉と考えられる。井戸4の廃絶時期は、上層の土師器から9世紀末とみられ、井戸が機能していた期間がそれ以前とすると、両遺構が併存していた可能性も考えられる。
- (2) 9世紀代では、墨書土器や緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。8世紀代では、溝18・19のような特異な遺構が検出されているが、その性格は明らかでない。遺物では、墨書土器や丹塗り土師器、土馬、円面硯などが出土しており、奈良時代から平安時代まで類似した性格の遺跡であった可能性が考えられる。
- (3) 小片が多く一括性が低いいため、個体数を割り出すには適当な事例ではないが、口縁部を中心にして、各遺構の平安時代の供膳具について、参考までに個体数の推計を行った。土壙25では、須恵器の高台付杯1～2点・杯3点、黒色土器1～2点である。溝12では、須恵器の蓋1～2点・高台付杯5点・杯6点、土師器の杯3点・皿4～6点、黒色土器1点である。供膳具以外では、須恵器や土師器の甕の破片が両遺構で、須恵器甌や土師器カマドの破片は溝12で認められる。
- (4) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察(1) - 鐘鋳場1号窯の遺物を中心に -」『古代吉備』第11集 1989
- (5) 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9 三手遺跡 津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 岡山県教育委員会ほか 1994
「中撫川遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』182 岡山県教育委員会 2004
「妹尾住田遺跡 - 古代の公的港湾施設関連遺跡の発掘調査報告 -」岡山市教育委員会 2003
- (6) 津寺遺跡野上田6区の土器溜りの黒色土器皿には、灰釉陶器(K14窯式・9世紀前半)に似たものが認められる。中撫川遺跡のたわみ4の黒色土器には、須恵器や灰釉陶器(K90窯式・9世紀後半)に似たものが含まれる。緑釉陶器と灰釉陶器は9世紀前半であるので、若干のズレが生じる。妹尾住田遺跡の溝4の緑釉陶器は9世紀後葉～末、灰釉陶器も9世紀後半とみられる。津寺遺跡丸田調査区の土壙36の黒色土器には、10世紀前半の灰釉陶器O53窯式に似たものが含まれる。
- (7) 器の中心をはずすかどうかは示されていないが、墨書の初期段階は底部に比較的小さく記す傾向にあるなどの指摘がある。
松村恵司「古代の集落と墨書土器」『シンポジウム律令国家の成立と東国』駿台史学会 1993
- (8) 巽淳一郎「I・4 墨書土器・刻書土器」『古代の官衙Ⅱ 遺物・遺跡編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2004
- (9) 「平城宮出土墨書土器集成Ⅰ」『奈良国立文化財研究所史料』第25冊奈良国立文化財研究所 1983
「平城宮出土墨書土器集成Ⅱ」『奈良国立文化財研究所史料』第31冊奈良国立文化財研究所 1989
「平城宮出土墨書土器集成Ⅲ」『奈良国立文化財研究所史料』第59冊奈良国立文化財研究所 2003
- (10) 「多古町南借当遺跡 - 県単橋梁架換(借当橋)事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 -」『千葉県文化財センター調査報告』第195集 財団法人千葉県文化財センター 1991
「中内原遺跡・北の内遺跡」『(財)香取郡市文化財センター調査報告書』第70集 (財)香取郡市文化財センター 2000
他にも、山形県道伝遺跡(出羽国置賜郡衙)、新潟県八幡林遺跡(越後国古志郡衙)などでも出土している。
- (11) 明治大学古代学研究所『全国墨書・刻書土器データベース』(日本学術振興会の平成16～18年度科学研究費補助金〈基盤研究B2〉「文字瓦・墨書土器のデータベース構築と地域社会の研究」研究代表吉村武彦)を参照した。

- (12) 一文字の墨書は、同一遺跡の複数文字の墨書を見ると、その略称であることが多い。このことから、一文字を代表させて分析する方法は有効と考えられる。もちろん、複数文字のものや不明文字などを加えて検討することが必要であることは言うまでもない。
- (13) 東日本の集落で、限定された共通文字が多いとする見解もある。
平川南「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991
- (14) ただし、多くの場合は、出土した種類や点数が少ないので、今後の資料の蓄積や遺跡の実態が明らかにされたうえで分類対象となる。現段階で類型Ⅲとされる遺跡でも、今後の資料の蓄積によって他の類型に変更される可能性は大きい。
- (15) 平川氏は、文字の分類（官司・官職名、人名、地名、吉祥句、土器の器種、方角、数字、習書など）に力点を置くことに疑問を呈している。筆者も、極めて具体性のある文字を、このように細分することは、必ずしも有益とは思えないからである。
平川南「地下から発見された文字」木下正史・石上英一編『新版古代の日本』第10巻 1993
- (16) 食器回収を目的とする考え方には、清水みき・山中章「長岡京跡の墨書土器」『月刊文化財』362 1993がある。また、役所外での使用に際して器の帰属先を示す考え方には、平川南「『厨』墨書土器論」『山梨県史研究』創刊号 山梨県教育庁学術文化課 1993 がある。
- (17) 註(13) 平川1991
高島英之『古代出土文字資料の研究』2000
- (18) 註(8)に同じ。
- (19) 註(7) 松村1993に同じ。
- (20) 註(8)に同じ。巽氏は、墨書が分配先を示すため幾つかの重ねの単位ごとに記された場所を示すという解釈を提示している。筆者は、文字が比較的小振りで、また中央をはずして書かれていることに注目したい。
- (21) ただし、集落での土器供給や分配のありかたを検討する必要がある。また、役所や寺院での分配先表示が、結果として第三者にとって土器の帰属表示と映る可能性も想定される。
- (22) ただし、軍での物資の管理や帰属表示の実態に関して検討する必要がある。
- (23) 註(17) 高島2000に同じ。この中で、墨書土器が東日本各地で多いのは、東国村落の特質のひとつとしている。また、西日本では少ないが、出土状況・文字種類・方向・内容は東国に類似しているとも指摘されている。
- (24) 川尻秋生「坂東の成立」『千葉県立中央博物館研究報告－人文科学－』12 1999
鈴木拓也『蝦夷と東北戦争』戦争の日本史3 吉川弘文館 2008
- (25) 古瀬氏は、律令制の官僚機構が最も整備された時期は、平安時代初期であると指摘している。
古瀬奈津子「宮の構造と政務運営法－内裏・朝堂院分離に関する一考察－」『史学雑誌』93-7 1984
古瀬奈津子「平安時代の「儀式」と天皇」『歴史学研究』560 1986
このような変化が、末端機構やさまざまな仕組み・方法とも連動していると仮定した上で、その観点から墨書との関係に注目したいと考える。
- (26) 「由」や「吉」の意味を知ることが、遺跡の性格を考える上では重要である。当遺跡の所在する地名「伊福郷」やこれに関連する氏姓、さらに彼らの職などから、さまざまな可能性を考えることが可能であるが、想像の域を出ない。
狩野氏によると、備前国に関する史料に、「由」に関する地名や人名は確認されないとのことである。また、「由」の解釈として、「湯・弓・斎（いみ、忌み）」などがあり、墨書土器と祭祀との関係を支持する立場から、ここでは「斎」の可能性が高く、「由加」「斎瓮」との関連も考慮されるとの教示を得た。
- (27) 平川南『墨書土器の研究』2000

第4節 伊福定国前遺跡における環境考古学分析

環境考古研究会

1 試料

分析試料は、井戸4直下の黒褐色砂質土層から採取された試料1点、水田下の黒褐色砂質土層（第6図第56層）から採取された試料1点、水田1東側と西側の耕土（第57図3層）から採取された試料2点、水田2の耕土（第57図5層）から採取された試料1点、堤状地形上部の黒褐色土層（第6図第52層）から採取された試料1点の計6点である。

2 花粉分析

井戸4直下

周辺には、コナラ属アカガシ亜属を主としシイ属が伴われる照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属、クリ、クマシデ属-アサダなどの落葉広葉樹と、マツ属複維管束亜属、モミ属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹がその要素としてかあるいは森林として分布していた。イネ科、ヨモギ属などの草本は多くはないが、林縁などに分布していたと考えられる。森林の林床としてあるいは人為干渉地にシダ植物が生育していたと考えられる。

水田直下

コナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とする優勢な照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹と、マツ属複維管束亜属などの針葉樹がその要素としてかあるいは森林として分布していた。草本は多くはないが、林縁にイネ科、ヨモギ属などが生育していた。

水田1

いずれの試料においても花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境が考えられ、冬場に乾燥する乾田に近い栽培形態が示唆される。

水田2

花粉密度が極めて低く、水田1同様に、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥あるいは乾湿を繰り返すような堆積環境が考えられ、冬場に乾燥する乾田に近い栽培形態が考えられる。

3 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

水田1

東側と西側の耕土について分析を行った。その結果、いずれの試料からもイネが検出された。このうち、東側の耕土では密度が4,700個/gと比較的高い値である。したがって、この地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。西側の耕土では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

水田2

耕土について分析を行った。その結果、イネが検出されたが、密度は2,600個/gと比較的低い値で

表4 伊福定国前遺跡における花粉分析結果

分類群		井戸4	水田	水田1		水田2	堤状地形
学名	和名	直下	直下	東側	西側		
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>	マキ属	1					
<i>Abies</i>	モミ属	15	4				
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	5				
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	18	37				
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	12	5				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	14	10		1		1
<i>Salix</i>	ヤナギ属	2	2				
<i>Juglans</i>	クルミ属		2				
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1	2				
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5	7				
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	1				
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	2				
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	10	10				
<i>Castanea crenata</i>	クリ	14	9	3			
<i>Castanopsis</i>	シイ属	20	23				
<i>Fagus</i>	ブナ属	7	3				
<i>Fagus japonica</i>	イヌブナ		3				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	57	45	3	3	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	135	189	1	1	2	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	10	9		1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	9	22				
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	1					
<i>Acer</i>	カエデ属		1				
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	8	9				
<i>Cornus</i>	ミズキ属	1					
<i>Styrax</i>	エゴノキ属		1				
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	1				
Leguminosae	マメ科	2					
Araliaceae	ウコギ科		1				
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属		1	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1				
Hydrocharitaceae	トチカガミ科						1
Gramineae	イネ科	36	38	4	2	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	5	3	1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1					
Caryophyllaceae	ナデシコ科				1		
Cruciferae	アブラナ科				2		
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	1					
Apioidae	セリ亜科		1				1
Asteroidae	キク亜科	2					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	18	12	3	13	3	3
Fern spore	シダ植物胞子						
Monolate type spore	単条溝胞子	42	17	1	12	5	
Trilate type spore	三条溝胞子	8	2		5	2	
Arboreal pollen	樹木花粉	344	401	7	6	3	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	7	3	1	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	62	57	10	19	6	3
Total pollen	花粉総数	413	461	18	25	9	4
Pollen frequencies of 1 cm ²	試料1 cm ² 中の花粉密度	2.9	4.9	1.3	1.8	8.4	2.8
		× 10 ³	× 10 ³	× 10 ²	× 10 ²	× 10	× 10
Unknown pollen	未同定花粉	20	17	0	0	3	0
Fern spore	シダ植物胞子	50	19	1	17	7	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物				(+)		(+)

ある。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。
植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

以上の結果から、弥生時代とされる層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境が支配的であったと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには、ススキ属やチガヤ属、メダケ属(ネザサ節)、ササ属(ミヤコザサ節)などが分布していたと考えられる。

4 まとめ

井戸直下の黒褐色砂質土層の時期は、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が主に周辺に分布していた。水田等の農耕が近隣で行われた様相はない。水田下の黒褐色砂質土層では、出土の自然木から3870±30年BPの年代が得られたが、コナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とする照葉樹林の分布が示唆され、周辺は森林が優勢な環境であった。

水田1と水田2では、花粉が分解されほとんど検出されず、水田1東側と水田2から、イネとヨシ属の植物珪酸体(プラント・オパール)がやや多量に検出され、水田1西側と堤状地形ではヨシ属が検出された。水田1東側と水田2では、稲作が行われていたことが分析的に検証され、花粉の分解から、耕作時期は湿潤であるが、冬期に乾燥する乾田に近い水田であった可能性が示唆された。

表5 伊福定国前遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料		水田2	堤状地形
		水田1	水田1		
		東側	西側		
イネ科	Gramineae				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	47	7	26	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	20	14	19	22
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7		6	14
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		7	13	29
タケ亜科	Bambusoideae				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	14			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	27	21	39	29
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	14		19	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	14	35	39	7
未分類等	Others	34	28	52	7
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin		14	13	7
棒状珪酸体	Rod-shaped	74	56	58	50
未分類等	Others	142	154	206	173
(海綿骨針)	Sponge	14			7
植物珪酸体総数	Total	393	337	490	339

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.39	0.21	0.76	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.28	0.89	1.22	1.36
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.08		0.08	0.18
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.16			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.13	0.10	0.19	0.14
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.10		0.15	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.04	0.11	0.12	0.02

遺構一覽表

竪穴住居

掲載番号	旧遺構名		竪穴				主柱		床面海拔高 (cm)	出土遺物	時期
	区	No	平面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	本数	柱間距離 (cm)			
1	2	32		(473)	(89)	40	1 /		140	弥生土器	弥生後期末
2	2	31	隅丸方形	(355)	(312)	5	4 4	177~218	140	弥生土器	弥生後期末
3	2	35					1 /			弥生土器・鉄器	

掘立柱建物

掲載番号	旧遺構名		規模			柱穴			面積 (㎡)	棟方向	出土遺物	時期	
	区	No	間数	桁行 (cm)	梁行 (cm)	平面形	径 (cm)	桁間 (cm)					梁間 (cm)
1	1	4	2×2	435	384	円形	30~18	178~251	182~210	17.5	N-1°-W	土師器	平安末

井戸

掲載番号	旧遺構名		掘り方				井側				底面海拔高 (cm)	出土遺物	時期
	区	No	平面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)			
1	1	40	不整円形	90	77	111					38	弥生土器・種実	弥生後期末
2	1	47		(195)	(60)	140					8	弥生土器	弥生後期末
3	2	24	不整楕円形	(116)	109	157					8	弥生土器・種実	弥生後期末
4	1	3	隅丸方形	183	(168)	188	方形	130	(108)	(150)	-8	土師器・須恵器	平安前期

土壌

掲載番号	旧遺構名		平面形	規模 (cm)			断面形	底面海拔高 (cm)	出土遺物	時期
	区	No		長さ	幅	深さ				
1	1	15	不整凹形	131	120	31	逆台形	121	土師器	古墳前期初頭
2	1	26	不整凹形	96	86	9	逆台形	92	弥生土器	弥生中~後期
3	1	16	隅丸長方形	128	69	22	逆台形	102	弥生土器・鉄鏝	弥生後期後葉
4	1	39	不整楕円形	72	62	8	逆台形	116	弥生土器	弥生後期末
5	1	36	不整楕円形	171	87	24	逆台形	136	弥生土器	弥生後期後葉
6	1	42	不整凹形	(84)	76	25	皿形	129	弥生土器	弥生後期末
7	2	25	不整方形	80	65	22	逆台形	137	弥生土器	弥生後期
8	2	p169	長楕円形	(65)	35	17	逆台形	143	弥生土器	弥生後期末
9	2	22		117	(44)	14	皿形	146	弥生土器	弥生後期末
10	2	27	楕円形	61	53	10	逆台形	148	弥生土器	弥生後期末
11	2	18	隅丸方形	70	53	10	皿形	146	弥生土器	弥生後期末
12	2	17	楕円形	140	106	24	逆台形	140	弥生土器	弥生後期末
13	2	20	楕円形	(72)	65	16	逆台形	143	弥生土器	弥生後期末
14	2	29	不整凹形	59	53	26	逆台形	133	弥生土器	弥生後期後葉
15	2	19	不整楕円形	78	45	15	逆台形	145	弥生土器	弥生後期後葉
16	2	16	不整楕円形	255	(198)	21	皿形	141	弥生土器	弥生後期末
17	2	15	不整凹形	117	(105)	25	逆台形	134	弥生土器	弥生後期末
18	2	26	楕円形	71	46	17	皿形	144	弥生土器	弥生後期後葉~末
19	2	34		(70)		30	逆台形	135	弥生土器	弥生後期後葉
20a	2	14a	不整楕円形	237	111	49	逆台形	107	弥生土器・鉄器	弥生後期後葉
20b	2	14b		(100)	(71)	30		20	弥生土器	弥生後期後葉
21	2	13	不整方形	111	76	40	逆台形	130	弥生土器	弥生後期後葉
22	2	33	長方形	(281)	88	11	逆台形	129	弥生土器	弥生後期後葉
23	2	28	不整楕円形	(91)	69	17	逆台形	137	弥生土器	弥生後期後葉~末
24	2	36		(93)	(44)	30	逆台形	109	弥生土器	弥生後期末
25	1	5	不整楕円形	127	118	17	皿形	133	土師器・須恵器	平安前期
26	1	9	不整楕円形	96	90	16	逆台形	134	土師器・須恵器	古代
27	1	27	隅丸方形	75	66	25	逆台形	144	土師器・須恵器・緑釉陶器	平安前期
28	1	28	長方形	167	81	29	逆台形	131	土師器・須恵器	古代~中世
29	1	29	不整楕円形	156	83	12	皿形	138	土師器・須恵器	奈良後期
30	1	30	不整楕円形	(260)	91	22	皿形	132	土師器・須恵器	奈良後期
31	1	33	不整楕円形	175	76	26	逆台形	121	土師器・須恵器・獣骨	奈良後期
32	1	35	不整長方形	91	79	35	逆台形	125	土師器・須恵器・獣骨	奈良後期
33	1	34	不整長方形	116	45	19	皿形	118	土師器・須恵器	奈良後期
34	2	4		(238)	(83)	18		160	土師器・須恵器・灰釉陶器	平安前期
35	1	2	不整楕円形	181	(95)	25	逆台形	143	肥前陶器	江戸前期

溝

掲載 番号	旧遺構名		規模(cm)			断面形	流走方向	出土遺物	時期
	区	No	検出長	幅	深さ				
1	1	24	3180	410	90	逆台形	西 → 東	弥生土器・石鏃・石錘・種実(モモ)	弥生中～後期
2	1	21・43	2780	208	40	碗形	東 → 西	弥生土器	弥生中～後期
3	1	25	210	60	30	逆台形	北東 → 南西	弥生土器	弥生中～後期
4	1	41	2320	70	24	U字形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
5	1	45	990	78	12	皿形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
6	1	46	980	23	5	碗形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
7	1	23	2730	120	30	皿形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
8	1	17	2780	55	6	逆台形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
9	1	22	2300	80	7	逆台形	西 → 東	弥生土器	弥生中～後期
10	1	18	1290	115	66	U字形	北 → 南	弥生土器・種実(モモ)	弥生後期末
11	1	19	1300	(65)	55	U字形	北 → 南	弥生土器・種実(モモ)	弥生後期末
12	1	6	684	(142)	17	皿形	北 — 南	土師器・須恵器・鉄鏃・獣骨	平安前期
13	1	7	310	47	7	逆台形	北北西 — 南南東	土師器・須恵器	古代
14	1	8	210	29	6	逆台形	北—南・東—西	土師器・須恵器	古代
15	1	32	1060	71	22	逆台形	西 → 東	土師器・須恵器	古代
16	1	38	720	62	25	逆台形	北 → 南	土師器・須恵器	古代
17	2	9	187	40	7	皿形	北北東 — 南南西	土師器・須恵器	古代
18	1	31	363	80	49	U字形	東 → 西	土師器・須恵器	奈良後期
19	2	5	582	83	79	U字形	東 → 西	土師器・須恵器・円面硯・獣骨	奈良後期
20	2	6	411	52	7	皿形	東 → 西	土師器・須恵器・円面硯	奈良後期
21a	2	37a	545	64	7	皿形	東 → 西	土師器・須恵器・獣骨	古墳後期
21b	2	37b	414	93	17	碗形	北北西 → 南南東	土師器・須恵器・獣骨	古墳後期
22	2	1a	538	114	15	皿形	北西 — 南東	土師器・須恵器	鎌倉時代
	2	1b	356	36	10	碗形	北西 — 南東	土師器・須恵器	鎌倉時代
23	2	2	150	47	7	皿形	北西 — 南東	土師器・須恵器	鎌倉時代
24	1	1	465	41	6	皿形	北西 — 南東	土師器・須恵器	鎌倉時代

遺物観察表

土器・陶器

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底-脚径	器高				
1	竪穴住居 2	弥生土器	甕			6.6	(4.8)	灰黄褐色(10YR6/2)		底部1/3	外面に煤
2	竪穴住居 2	弥生土器	鉢	12.6		3.0	5.6	橙色(5YR6/6)		1/3	
3	竪穴住居 2	弥生土器	高杯				(4.1)	橙色(5YR6/6)		口縁、脚部欠	差込接合
4	井戸 1	弥生土器	壺	13.5	21.3	3.2	21.1	灰オリーブ色(5Y6/6)		完形	底部に黒斑
5	井戸 2	弥生土器	壺	24.8	31.2		(36.7)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	下半部欠	肩部に黒斑、口縁部に波状文
6	井戸 2	弥生土器	壺	23.9			(14.5)	橙色(5YR6/6)		口頸部のみ	
7	井戸 2	弥生土器	壺	18.8			(6.6)	浅黄褐色(7.5YR8/1)	赤色土粒含む	口縁部1/8	
8	井戸 2	弥生土器	壺	14.0	20.7		(14.3)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	底部欠	
9	井戸 2	弥生土器	壺	14.9	24.0		(19.2)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		底部欠	底部に黒斑
10	井戸 2	弥生土器	甕	14.5	21.2		(15.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	金雲母含む	口縁部2/3	讃岐産、外面に煤
11	井戸 2	弥生土器	甕	14.5	16.4		(8.1)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む		
12	井戸 2	弥生土器	甕	15.6			(4.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/4	外面に煤
13	井戸 2	弥生土器	甕	16.0			(7.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		口縁部1/2	外面に煤
14	井戸 2	弥生土器	甕	13.8	15.4	5.1	19.4	褐色(10YR5/1)		完形	風化顕著、底部に黒斑
15	井戸 2	弥生土器	甕	16.7			(4.4)	橙色(7.5YR7/6)	赤色土粒含む	口縁部1/4	外面に煤
16	井戸 2	弥生土器	甕	16.5			(6.4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/4	外面に煤
17	井戸 2	弥生土器	甕	14.6			(4.1)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/4	
18	井戸 2	弥生土器	甕	15.1			(2.9)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		口縁部1/4	外面に煤
19	井戸 2	弥生土器	甕	15.2	20.2		(17.1)	橙色(7.5YR6/6)		下半部欠	
20	井戸 2	弥生土器	甕	15.2			(8.0)	橙色(5YR6/6)		上半部のみ	外面に煤
21	井戸 2	弥生土器	甕			6.4	(11.7)	灰黄褐色(10YR6/2)		下半部のみ	外面に煤
22	井戸 2	弥生土器	甕			3.6	(6.6)	浅黄褐色(10YR8/3)		底部1/2	
23	井戸 2	弥生土器	甕			5.7	(4.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		底部1/4	底部に黒斑
24	井戸 2	弥生土器	甕			7.9	(5.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		底部1/3	底部に黒斑
25	井戸 2	弥生土器	高杯	19.6			(6.3)	橙色(5YR7/6)		口縁部1/2	
26	井戸 2	弥生土器	高杯	16.7			(5.5)	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部1/4	
27	井戸 2	弥生土器	高杯				(4.9)	橙色(5YR7/6)	精良	口縁、脚部欠	差込接合
28	井戸 2	弥生土器	高杯			10.9	(5.4)	明赤褐色(5YR5/6)	赤色土粒含む	口縁、脚部欠	差込接合
29	井戸 2	弥生土器	高杯				(4.7)	明赤褐色(5YR5/6)	赤色土粒含む	口縁、脚部欠	差込接合
30	井戸 2	弥生土器	高杯				(4.3)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	口縁、脚部欠	差込接合
31	井戸 2	弥生土器	高杯				(4.7)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	口縁、脚部欠	脚部に黒斑、差込接合
32	井戸 2	弥生土器	高杯			16.6	(4.1)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	精良	脚部2/3	差込接合
33	井戸 2	弥生土器	壺		12.0		(9.2)	橙色(7.5YR6/6)		口縁、脚部欠	
34	井戸 2	弥生土器	鉢	19.4	18.6		(11.5)	にぶい橙色(5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/5	外面に煤
35	井戸 2	弥生土器	鉢		13.4		(6.0)	にぶい橙色(5YR6/4)		体部1/3	
36	井戸 2	弥生土器	鉢			3.0	(5.8)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		底部のみ	
37	井戸 2	弥生土器	鉢	14.0		3.9	7.3	橙色(5YR6/6)		完形	
38	井戸 2	弥生土器	鉢			6.7	(9.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		体部1/2	
39	井戸 3	弥生土器	壺	20.2			(8.5)	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口頸部1/3	
40	井戸 3	弥生土器	壺	23.2	32.0		(34.0)	明褐色(7.5YR7/2)		1/2	口縁部に黒斑
41	井戸 3	弥生土器	甕	15.8			(7.8)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		上半部1/4	
42	井戸 3	弥生土器	甕	16.8	21.0		(15.0)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		上半部1/3	外面に煤
43	井戸 3	弥生土器	甕				(7.3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		上半部3/4	
44	井戸 3	弥生土器	甕			6.2	(16.8)	黒色(N2/)		上半部欠	外面に煤
45	井戸 3	弥生土器	甕	15.2	20.5	6.0	25.5	灰黄色(2.5Y7/2)		口縁部1/3欠	底部に黒斑
46	井戸 3	弥生土器	甕		21.5	5.6	(25.8)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		口縁部欠	口縁部打ち欠き、外面に煤
47	井戸 3	弥生土器	鉢	12.8			(3.9)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	口縁部1/8	
48	井戸 3	弥生土器	鉢	13.7			(5.8)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		口縁部1/4	
49	井戸 3	弥生土器	鉢	16.6		4.3	7.7	にぶい橙色(7.5YR7/4)		1/3	
50	井戸 3	弥生土器	壺	9.8	10.0	3.5	10.0	褐色(10YR4/1)		口縁部1/3欠	
51	井戸 3	弥生土器	高杯			11.1	(6.0)	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部欠	差込接合
52	井戸 3	弥生土器	高杯			11.9	(4.4)	橙色(5YR7/8)		脚部1/3	差込接合
53	井戸 3	弥生土器	高杯			10.9	(6.3)	橙色(5YR6/8)	赤色土粒含む	口縁部欠	差込接合
54	井戸 3	弥生土器	高杯	19.9			(8.6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	脚部欠	風化顕著、口縁部に黒斑、差込接合
55	井戸 3	弥生土器	高杯	17.8			(7.0)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	杯部1/2	
56	井戸 3	弥生土器	高杯	18.5			(8.5)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	脚部欠	口縁部に黒斑、差込接合
57	井戸 3	弥生土器	高杯	21.4		14.2	13.0	にぶい橙色(5YR6/3)		完形	風化顕著、差込接合
58	井戸 3	弥生土器	高杯	16.8			(5.6)	橙色(5YR6/8)	赤色土粒含む	口縁部1/3	風化顕著
59	井戸 3	弥生土器	高杯	17.7		12.0	10.8	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部3/4欠	風化顕著、口縁・脚部に黒斑、差込接合
60	井戸 3	弥生土器	高杯	26.0			(6.5)	橙色(5YR7/6)		口縁部1/3	
61	井戸 3	弥生土器	杓	5.0			(4.9)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		柄部欠	手捏ね土器、口縁部に黒斑

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底-脚径	器高				
62	土壙1	土師器	甕	13.6			(8.5)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/5	
63	土壙1	土師器	高杯				(9.3)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	杯底部・脚柱部	差込接合
64	土壙1	土師器	高杯				(4.4)	にぶい橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	杯底部・脚柱部	差込接合
65	土壙1	土師器	鉢	11.8		3.1	7.4	にぶい黄橙色(10YR7/2)	赤色土粒含む		2/3
66	土壙3	弥生土器	壺	10.6	18.6		(13.8)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	口縁部1/1	
67	土壙3	弥生土器	甕	11.7	17.8		(20.8)	浅黄色(2.5Y7/3)	赤色土粒含む	底部欠	外面に煤
68	土壙3	弥生土器	甕	15.2	19.0	4.9	23.7	にぶい黄橙色(10YR6/3)	赤色土粒含む		外面に煤、肩に部黒斑
69	土壙3	弥生土器	甕	13.5	20.1	5.7	25.8	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/2欠	外面に煤
70	土壙3	弥生土器	甕	13.8			(4.3)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部2/3	
71	土壙3	弥生土器	甕	13.7	22.0	5.7	24.0	褐色(5YR6/6)		口縁部5/6	外面に煤、底部に黒斑
72	土壙3	弥生土器	甕	20.6			(5.3)	褐色(7.5YR7/6)		口縁部1/3	
73	土壙3	弥生土器	高杯			11.9	(10.7)	にぶい橙色(5YR7/4)	赤色土粒含む	脚部	
74	土壙4	弥生土器	壺	16.3			(5.6)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	赤色土粒含む	口縁部1/2	
75	土壙5	弥生土器	壺	12.6			(8.3)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	口縁部1/2	
76	土壙5	弥生土器	壺	15.7			(7.1)	褐色(7.5YR6/6)		口縁部1/3	
77	土壙5	弥生土器	壺	13.0			(3.5)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/8	
78	土壙5	弥生土器	甕	15.4			(4.5)	にぶい黄橙色(10YR7/4)		口縁部1/4	
79	土壙5	弥生土器	甕	14.6			(5.9)	褐色(5YR7/6)		口縁部1/8	
80	土壙5	弥生土器	甕	16.0	19.5		(6.1)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	口縁部1/6	
81	土壙5	弥生土器	甕	15.1			(9.4)	赤褐色(10R6/8)		上半部	
82	土壙5	弥生土器	甕	18.0			(8.8)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		口縁部1/4	
83	土壙5	弥生土器	甕	20.6			(5.3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		口縁部1/8	
84	土壙5	弥生土器	甕	20.8	20.0		(5.8)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/6	
85	土壙5	弥生土器	甕			6.8	(4.7)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		底部1/2	底部に黒斑
86	土壙5	弥生土器	甕			8.0	(4.1)	浅黄褐色(10YR8/3)		底部1/3	底部に黒斑
87	土壙5	弥生土器	甕			8.6	(5.0)	灰色(5Y5/1)		底部1/4	
88	土壙5	弥生土器	甕			8.6	(5.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	底部1/2	
89	土壙5	弥生土器	甕			5.6	(3.5)	黄灰色(2.5Y5/1)		底部1/3	
90	土壙5	弥生土器	高杯	19.0			(3.2)	褐色(5YR6/8)	赤色土粒含む	口縁部1/2	
91	土壙5	弥生土器	高杯	21.0			(5.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		口縁部1/4	口縁部に黒斑
92	土壙5	弥生土器	高杯	15.0			(5.2)	にぶい橙色(2.5YR6/4)	赤色土粒含む	杯部のみ	
93	土壙5	弥生土器	高杯				(4.7)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	杯底部・脚柱部	
94	土壙5	弥生土器	高杯	21.8			(5.1)	にぶい橙色(5YR6/4)	赤色土粒含む	杯部1/5	
95	土壙5	弥生土器	高杯			15.4	(11.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	脚部のみ	差込接合
96	土壙5	弥生土器	高杯			11.0	(5.4)	明赤褐色(5YR5/6)		脚部1/2	
97	土壙5	弥生土器	鉢	23.0	22.9		(9.7)	褐色(7.5YR6/6)		口縁部1/4	外面に煤
98	土壙5	弥生土器	鉢	10.8	11.0		(5.6)	にぶい褐色(7.5YR7/4)		口縁部1/3	
99	土壙5	弥生土器	鉢	16.4			(5.0)	明赤褐色(5YR5/6)		1/8	
100	土壙5	弥生土器	鉢			9.0	(6.7)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		脚部のみ	
101	土壙6	弥生土器	甕		15.2	3.4	(15.3)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	体部1/2	外面に煤
102	土壙6	弥生土器	甕			7.5	(9.4)	褐灰色(10YR6/1)	赤色土粒含む	底部のみ	底面穿孔
103	土壙6	弥生土器	甕	17.6	27.2		(28.3)	褐色(7.5YR6/6)		底部欠	
104	土壙6	弥生土器	鉢	18.7	20.5	6.3	18.7	にぶい褐色(7.5YR7/3)		口縁部1/2欠	外面に煤、底部に黒斑
105	土壙10	弥生土器	鉢	13.3		3.5	4.2	褐灰色(7.5YR4/1)		1/3	
106	土壙11	弥生土器	鉢	13.8			(3.6)	灰褐色(7.5YR4/2)		口縁部1/8	
107	土壙11	弥生土器	高杯				(4.8)	褐色(5YR6/6)		口縁・脚部欠	差込接合
108	土壙12	弥生土器	甕	26.4			(11.0)	褐色(7.5YR6/6)	赤色土粒含む	口頸部1/3	
109	土壙12	弥生土器	甕	11.7	13.9		(11.3)	褐色(7.5YR6/6)		上半部2/3	
110	土壙12	弥生土器	甕		21.9		(15.3)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	上半部1/4	
111	土壙12	弥生土器	甕	16.8			(6.3)	にぶい褐色(7.5YR7/4)		上半部1/4	
112	土壙12	弥生土器	甕	14.5			(10.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		上半部2/3	
113	土壙12	弥生土器	高杯	11.9		11.0	10.9	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	杯部3/4欠	差込接合
114	土壙12	弥生土器	高杯			12.4	(7.5)	褐色(2.5YR6/6)	赤色土粒含む	脚部2/3	差込接合
115	土壙12	弥生土器	高杯			10.8	(3.3)	浅黄褐色(7.5YR8/1)	赤色土粒含む	脚部1/3	裾部に黒斑
116	土壙12	弥生土器	鉢			9.4	(3.9)	明褐色(7.5YR7/2)		脚部のみ	
117	土壙12	弥生土器	鉢	16.2		7.2	7.3	にぶい黄褐色(10YR7/2)		1/3	底部に黒斑
118	土壙13	弥生土器	甕	13.4	14.4		(7.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	上半部1/4	
119	土壙13	弥生土器	甕	16.1	20.7	5.3	27.2	にぶい黄褐色(10YR7/4)	赤色土粒含む	上半部1/2欠	外面に煤
120	土壙14	弥生土器	甕	13.3	17.1	6.0	21.4	灰黄褐色(10YR6/2)		上半部1/3欠	底部に黒斑
121	土壙14	弥生土器	甕	15.4	23.6		(26.6)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	底部欠	外面に煤、胴部穿孔
122	土壙14	弥生土器	高杯	19.0			(4.8)	褐色(5YR6/6)		杯部1/6	口縁部に黒斑
123	土壙14	弥生土器	高杯				(8.5)	褐色(5YR6/6)		口縁・脚部欠	差込接合
124	土壙15	弥生土器	壺		13.2		(7.8)	褐色(5YR6/8)		口縁・脚部欠	
125	土壙15	弥生土器	高杯			10.2	(3.4)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	脚部1/4	差込接合
126	土壙16	弥生土器	甕	15.0			(5.6)	にぶい褐色(7.5YR7/3)		上半部1/8	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底脚径	器高				
127	土壇16	弥生土器	鉢	13.0			(6.5)	褐色(2.5YR6/6)		1/2	風化顕著
128	土壇16	弥生土器	高杯	16.8			(6.3)	灰褐色(7.5YR5/2)		杯部1/6	口縁部に黒斑
129	土壇16	弥生土器	高杯	18.6			(5.7)	褐色(5YR6/6)		口縁部1/10	風化顕著
130	土壇17	弥生土器	甕	16.8	18.8		(11.7)	にぶい褐色(5YR7/4)		口縁部1/3	肩部に黒斑
131	土壇17	弥生土器	甕	16.8	19.7	5.8	(23.5)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	赤色土粒含む	1/3	外面に煤
132	土壇17	弥生土器	壺				(7.6)	褐色(5YR6/6)	金雲母含む	上半部1/4	遺跡産
133	土壇17	弥生土器	壺	19.2			(3.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/7	
134	土壇17	弥生土器	壺				(3.5)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/5	
135	土壇17	弥生土器	壺	16.6	26.5		(16.2)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	上半部1/2	肩部に黒斑
136	土壇17	弥生土器	壺	8.4	26.2		(12.6)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部1/8	肩部に黒斑
137	土壇17	弥生土器	鉢		13.9		(6.3)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		体部1/3	
138	土壇17	弥生土器	高杯			13.8	(3.7)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		脚部部1/4	
139	土壇17	弥生土器	高杯			13.6	(2.6)	明赤褐色(5YR5/6)	精良	脚部部1/4	
140	土壇17	弥生土器	高杯				(2.3)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		杯底部	差込接合
141	土壇19	弥生土器	甕	15.6	30.4	9.4	35.5	浅黄褐色(10YR8/4)	赤色土粒含む	口縁部1/7	体部に黒斑
142	土壇19	弥生土器	甕			4.0	(10.8)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	赤色土粒含む	下半部1/3	底部に黒斑
143	土壇19	弥生土器	高杯	21.7			(7.2)	明赤褐色(5YR5/6)		脚部欠	差込接合
144	土壇20	弥生土器	壺	13.2	19.4		(13.4)	にぶい褐色(7.5YR5/4)		上半部2/3	口縁部に鋸歯文
145	土壇20	弥生土器	壺	8.9	31.6		(21.8)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	金雲母含む	上半部3/4	外面に煤
146	土壇20	弥生土器	壺	16.4	15.0	7.6	27.0	にぶい褐色(7.5YR7/4)		3/4	底部に黒斑
147	土壇20	弥生土器	壺	16.6	20.4		(27.6)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	3/5	体部に黒斑
148	土壇20	弥生土器	壺	16.5	19.5		(18.4)	褐色(5YR6/8)	赤色土粒含む	口頭部4/5	
149	土壇20	弥生土器	壺	18.8	20.1		(18.8)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		上半部1/4	
150	土壇20	弥生土器	壺		22.6	7.1	(33.7)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	赤色土粒含む	1/2	肩・底部に黒斑
151	土壇20	弥生土器	壺	11.9	19.6		(18.6)	にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	下半部欠	頸部に沈線文、刺突文
152	土壇20	弥生土器	壺	15.8	22.3		(26.1)	褐色(7.5YR7/6)		底部欠	頸部に沈線文、刺突文
153	土壇20	弥生土器	壺	15.4	25.5	9.0	37.6	褐色(7.5YR6/6)		1/2	頸部に沈線文、肩部に黒斑
154	土壇20	弥生土器	壺	16.9	28.3	7.6	37.8	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口頭部1/2欠	頸部に沈線文、刺突文
155	土壇20	弥生土器	壺	18.3	29.4	10.5	39.3	にぶい黄褐色(10YR6/3)		3/4	頸部に突帯、体部に黒斑
156	土壇20	弥生土器	壺	16.8			(9.7)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	口頭部1/4	
157	土壇20	弥生土器	壺	19.0			(6.4)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部1/5	
158	土壇20	弥生土器	壺		31.8		(31.0)	明褐色(7.5YR7/2)		1/3	
159	土壇20	弥生土器	壺	16.4	28.5	7.2	32.5	にぶい黄褐色(10YR7/2)		4/5	体・底部に黒斑
160	土壇20	弥生土器	壺	16.3	26.7		(27.9)	にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	上半部1/2	体・底部に黒斑
161	土壇20	弥生土器	壺	15.4	28.0	7.5	32.0	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	3/5	肩・底部に黒斑
162	土壇20	弥生土器	甕	17.9			(6.1)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	上半部1/2	
163	土壇20	弥生土器	甕	13.8	15.3	4.9	19.8	赤褐色(10R6/8)		下半部1/2欠	外面に煤
164	土壇20	弥生土器	甕	16.0	16.4	5.2	19.1	赤褐色(10YR6/6)		1/4	体・底部に黒斑
165	土壇20	弥生土器	甕	12.6	14.2		(8.4)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	上半部3/4	
166	土壇20	弥生土器	甕	12.3	13.0	(3.2)	14.2	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	底部欠	風化顕著
167	土壇20	弥生土器	甕	15.1	17.5		(17.7)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		2/3	肩部に吹きこぼれ痕
168	土壇20	弥生土器	甕	14.0	16.7		(9.0)	にぶい褐色(7.5YR6/3)		上半部1/4	
169	土壇20	弥生土器	甕	15.0	18.5	5.2	24.6	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	4/5	
170	土壇20	弥生土器	甕	17.2	16.5	6.9	20.0	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	3/4	体・底部に黒斑
171	土壇20	弥生土器	甕	18.7	33.4	8.8	35.4	にぶい褐色(7.5YR6/3)	赤色土粒含む	体部1/4欠	外面に黒斑
172	土壇20	弥生土器	甕	15.0	26.9	6.6	32.2	にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	4/5	肩・底部に黒斑
173	土壇20	弥生土器	高杯	20.0			(9.1)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	杯部3/4	差込接合、透かし孔四方
174	土壇20	弥生土器	高杯	17.9		10.0	10.6	褐色(2.5YR6/6)		4/5	差込接合、透かし孔四方
175	土壇20	弥生土器	高杯			10.2	(7.7)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部3/4欠	差込接合、透かし孔四方
176	土壇20	弥生土器	高杯	15.3			(8.0)	にぶい赤褐色(5YR5/4)	精良	杯部2/3	差込接合
177	土壇20	弥生土器	高杯	14.2		11.0	8.4	灰褐色(7.5YR4/2)	精良	3/5	差込接合
178	土壇20	弥生土器	高杯	14.4		12.0	8.3	褐色(5YR6/6)		脚部部1/3欠	差込接合、透かし孔四方
179	土壇20	弥生土器	高杯	8.9		11.4	8.9	にぶい黄褐色(10YR7/3)	精良	杯部1/2欠	
180	土壇20	弥生土器	鉢	15.4		4.9	10.0	にぶい褐色(5YR6/4)	精良	1/2	外面に煤、底部に黒斑
181	土壇20	弥生土器	鉢	15.9		4.5	9.6	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	1/2	
182	土壇20	弥生土器	鉢	14.4		4.4	6.1	褐色(2.5YR6/6)	赤色土粒含む	1/3	底部に黒斑
183	土壇20	弥生土器	鉢	14.0		4.1	9.5	にぶい黄褐色(10YR7/3)		ほぼ完形	
184	土壇20	弥生土器	鉢	13.3		4.9	6.7	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/4欠	側面に黒斑
185	土壇20	弥生土器	鉢	16.2		9.7	6.8	にぶい黄褐色(10YR7/4)		完形	
186	土壇20	弥生土器	鉢	10.9		4.5	9.6	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	ほぼ完形	
187	土壇20	弥生土器	鉢	12.3	15.1		(12.4)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	1/4	口縁部に黒斑
188	土壇20	弥生土器	鉢	23.0	23.1		(10.1)	褐色(7.5YR7/6)	赤色土粒含む	1/3	内面黒変
189	土壇20	弥生土器	鉢	38.9		12.0	24.3	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	2/3	体部に黒斑、内面黒変
190	土壇20	弥生土器	鉢	48.8		13.2	(25.0)	にぶい褐色(7.5YR7/4)		1/3	体部に黒斑
191	土壇20	弥生土器	鉢	50.0			(15.5)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	赤色土粒含む	1/4	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底脚径	器高				
192	土壇20	弥生土器	鉢	49.6		12.3	21.9	にぶい橙色(75YR7/4)		1/4	内外面黒変
193	土壇20	弥生土器	鉢	50.3			(25.1)	にぶい橙色(75YR6/4)	赤色土粒含む	1/3	
194	土壇21	弥生土器	壺	18.0	23.5		(26.2)	にぶい黄橙色(10YR7/4)		上半部3/4	頸部に沈線文、刺突文
195	土壇21	弥生土器	壺	18.6			(14.8)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		口頸部のみ	頸部に沈線文、刺突文
196	土壇21	弥生土器	壺		14.0		(10.6)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	赤色土粒含む	上半部1/2	頸部に沈線文、刺突文
197	土壇21	弥生土器	壺	13.6			(7.4)	にぶい褐色(75YR5/3)		口頸部1/3	
198	土壇21	弥生土器	壺	7.1	13.8		(7.0)	灰黄褐色(10YR6/2)		上半部1/3	肩部に黒斑
199	土壇21	弥生土器	甕	8.6	10.1		(10.5)	にぶい橙色(75YR7/4)	赤色土粒含む	1/2	
200	土壇21	弥生土器	甕	11.4	12.4	3.7	16.2	にぶい橙色(75YR7/4)		上半部1/3欠	腰部に黒斑
201	土壇21	弥生土器	甕	12.4	16.0	4.6	20.6	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	1/2	
202	土壇21	弥生土器	甕	15.0			(8.3)	橙色(75YR6/6)		上半部1/4	
203	土壇21	弥生土器	甕	15.7			(5.1)	灰白色(10YR7/3)		口縁部1/5	
204	土壇21	弥生土器	甕	15.0	20.2	6.5	(25.5)	にぶい橙色(75YR6/4)		下半部欠	外面に煤、底部穿孔・黒斑
205	土壇21	弥生土器	甕	13.4	18.6		(11.8)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	赤色土粒含む	上半部4/5	平行タタキ、外面に煤
206	土壇21	弥生土器	甕	15.2	23.0		(11.8)	灰白色(10YR7/1)		上半部1/4	外面に煤
207	土壇21	弥生土器	鉢	22.0	23.0		(9.4)	にぶい橙色(75YR7/4)	赤色土粒含む	1/3	肩部に黒斑
208	土壇21	弥生土器	鉢	12.4			(4.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		1/5	側面に黒斑
209	土壇21	弥生土器	鉢	12.7		3.4	5.4	にぶい黄橙色(10YR7/4)		1/5	
210	土壇21	弥生土器	鉢	11.7			(5.6)	にぶい橙色(75YR6/4)		1/6	
211	土壇21	弥生土器	鉢	17.6			(7.7)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	1/3	
212	土壇21	弥生土器	鉢	17.0	19.8		(9.5)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		上半部1/4	肩部に黒斑
213	土壇21	弥生土器	鉢	10.1			(10.3)	灰白色(75YR8/2)	赤色土粒含む	下半部2/3	
214	土壇21	弥生土器	高杯			9.8	(3.2)	にぶい褐色(75YR6/3)		脚部のみ	差込接合
215	土壇21	弥生土器	高杯			11.6	(4.8)	褐色(5YR6/6)		脚部のみ	差込接合
216	土壇21	弥生土器	高杯	15.9			(8.3)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	赤色土粒含む	脚部欠	差込接合
217	土壇21	弥生土器	高杯	30.0			(6.2)	にぶい橙色(75YR7/4)		口縁部1/8	
218	土壇22	弥生土器	高杯	16.0			(2.5)	にぶい黄橙色(10YR7/3)		口縁部1/8	
219	土壇23	弥生土器	壺			2.8	(2.3)	灰黄褐色(10YR6/2)		底部1/1	外面に煤
220	土壇24	弥生土器	甕	17.7	20.4	3.3	23.2	灰白色(10YR8/2)		1/4	外面に煤、肩・底部に黒斑、平行タタキ
221	土器溜り1	弥生土器	壺	10.8	17.6		(14.7)	にぶい褐色(75YR7/3)	赤色土粒含む	底部欠	頸部に刺突文
222	土器溜り1	弥生土器	壺	13.2			(8.4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口頸部のみ	肩部に黒斑、風化顕著
223	土器溜り1	弥生土器	壺	12.3	20.8	6.4	27.6	にぶい橙色(75YR7/4)		上半部1/2欠	肩・底部に黒斑
224	土器溜り1	弥生土器	壺	11.4	18.9	3.6	26.1	にぶい黄橙色(10YR7/3)		1/3	口縁・肩・底部に黒斑
225	土器溜り1	弥生土器	壺	9.6	21.8	4.8	24.0	にぶい橙色(75YR6/4)		体部1/3	赤彩文、体部に黒斑
226	土器溜り1	弥生土器	壺	20.0			(14.1)	にぶい黄褐色(2.5Y7/3)	赤色土粒含む	口縁部2/3	頸部に沈線文、刺突文
227	土器溜り1	弥生土器	壺		15.0	5.8	(10.3)	浅黄褐色(10YR8/3)	赤色土粒含む	下半部1/2	底部に黒斑
228	土器溜り1	弥生土器	壺		17.9	4.9	(15.0)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	赤色土粒含む	下半部1/2	頸部に刺突文
229	土器溜り1	弥生土器	甕	12.0	16.1		(14.7)	浅黄色(2.5Y7/3)	赤色土粒含む	底部欠	外面に煤
230	土器溜り1	弥生土器	甕	12.7	18.0		(11.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	上半部1/4	外面に煤
231	土器溜り1	弥生土器	甕	12.8	18.6		(11.9)	にぶい褐色(75YR5/3)		上半部1/3	
232	土器溜り1	弥生土器	甕			6.0	(18.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		下半部1/3	底面穿孔
233	土器溜り1	弥生土器	甕	12.0	17.2	4.9	21.0	にぶい褐色(75YR6/3)		1/2	外面に煤
234	土器溜り1	弥生土器	甕	13.2	17.6	4.8	26.8	にぶい黄褐色(10YR7/3)		上半部1/8欠	外面に煤、肩・底部に黒斑
235	土器溜り1	弥生土器	甕	13.3			(7.2)	灰黄色(2.5Y7/2)		上半部のみ	
236	土器溜り1	弥生土器	甕	13.5			(7.6)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	下半部欠	外面に煤
237	土器溜り1	弥生土器	甕	16.5	23.1	5.4	21.3	にぶい褐色(75YR6/3)	赤色土粒含む	上半部1/3欠	外面に煤
238	土器溜り1	弥生土器	甕	14.8	25.8		(30.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	1/3	肩部に黒斑
239	土器溜り1	弥生土器	甕	13.6	24.0		(16.2)	にぶい褐色(75YR7/4)	赤色土粒含む	上半部1/4	肩部に黒斑
240	土器溜り1	弥生土器	甕	15.5	22.5		(21.1)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	上半部1/2	外面に煤
241	土器溜り1	弥生土器	甕	18.4	24.5		(22.7)	にぶい褐色(5YR7/4)	赤色土粒含む	下半部欠	外面に煤、肩部に黒斑
242	土器溜り1	弥生土器	高杯	12.0			(6.2)	にぶい褐色(75YR7/4)		杯部2/3	円盤充填
243	土器溜り1	弥生土器	高杯			16.0	(6.3)	にぶい褐色(75YR7/3)		脚部3/4	黒斑
244	土器溜り1	弥生土器	高杯	21.6		12.1	15.8	明褐色(75YR7/2)	赤色土粒含む	口縁部1/4欠	円盤充填、脚部に黒斑
245	土器溜り1	弥生土器	高杯	24.0			(5.0)	にぶい褐色(75YR7/4)		杯部1/5	
246	土器溜り1	弥生土器	高杯	22.8		13.4	20.9	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	完形	円盤充填
247	土器溜り1	弥生土器	鉢	17.8	17.9	8.3	15.2	にぶい褐色(75YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部3/4欠	
248	土器溜り1	弥生土器	鉢	11.0	20.9		(12.2)	にぶい褐色(75YR7/3)	赤色土粒含む	下半部欠	紐孔一对、頸部に刺突文
249	土器溜り1	弥生土器	鉢	14.1	15.0	7.0	11.8	にぶい黄褐色(10YR7/4)	赤色土粒含む	3/4	円盤充填
250	土器溜り1	弥生土器	鉢			9.8	(11.0)	浅黄褐色(75YR8/3)	赤色土粒含む	下半部のみ	円盤充填
251	土器溜り1	弥生土器	鉢	19.8	19.6		(7.3)	褐色(5YR5/3)	赤色土粒含む	鉢部1/8	側面に黒斑
252	土器溜り1	弥生土器	鉢	11.5		3.3	6.5	にぶい黄褐色(10YR7/4)	赤色土粒含む	完形	側面に黒斑
253	土器溜り1	弥生土器	器台	29.0			(8.0)	にぶい褐色(75YR6/4)		受け部1/2	
254	土器溜り1	弥生土器	器台	31.0			(12.8)	にぶい褐色(75YR6/4)	赤色土粒含む	上半部1/2	筒部に沈線文、長方形透かし
255	土器溜り1	弥生土器	器台				(20.2)	浅黄色(2.5Y7/3)	赤色土粒含む	脚部2/3	筒部に沈線文、長方形透かし

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底・脚径	器高				
256	土器溜り1	弥生土器	壺	28.8			(9.4)	褐色(7.5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部1/2	
257	土器溜り1	弥生土器	壺	35.0			(13.3)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部1/5	
258	土器溜り1	弥生土器	壺		19.9	5.8	(21.1)	暗灰黄色(2.5Y5/2)		口頸部欠	外面に煤
259	土器溜り1	弥生土器	高杯	16.0			(8.6)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	脚部欠	差込接合
260	土器溜り1	弥生土器	高杯	16.6		12.1	9.2	にぶい黄褐色(10YR7/3)		杯部1/2欠	差込接合
261	土器溜り1	弥生土器	高杯	20.6		12.6	13.3	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	脚部2/3欠	口縁・脚部に黒斑、差込接合
262	土器溜り1	弥生土器	高杯	17.8		11.3	12.0	褐色(7.5YR6/6)		完形	脚部に黒斑、差込接合
263	土器溜り1	弥生土器	高杯	18.3		11.3	12.1	にぶい褐色(7.5YR7/4)	精良	脚部1/10欠	差込接合
264	土器溜り1	弥生土器	高杯	17.8	20.2	12.8	11.4	褐色(7.5YR7/6)	赤色土粒含む	2/3	外面に煤、口縁部に黒斑
265	土器溜り1	弥生土器	鉢	62.6	61.6		(17.0)	褐色(2.5YR6/6)	赤色土粒含む	上半部1/8	
266	土器溜り1	弥生土器	鉢	12.8		4.3	8.0	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	2/3	
267	土器溜り1	弥生土器	鉢	13.4		3.9	6.5	にぶい褐色(7.5YR7/4)		1/3	
268	土器溜り2	弥生土器	壺	13.1	33.2	11.4	23.6	褐色(5YR7/6)		2/3	
269	土器溜り2	弥生土器	壺	16.0	29.9	9.2	31.5	褐色(7.5YR6/6)	赤色土粒含む	口縁部2/3欠	底部に黒斑
270	土器溜り3	弥生土器	壺		31.0		(13.1)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	下半部1/3	底部に黒斑
271	土器溜り3	弥生土器	甕			7.9	(4.7)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	底部のみ1/3	
272	土器溜り3	弥生土器	高杯				(3.4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	精良	脚部のみ	差込接合
273	溝1	縄文土器	深鉢				(5.2)	灰黄褐色(10YR6/2)		口縁部片	粗製
274	溝1	縄文土器	深鉢				(6.7)	灰黄褐色(10YR6/2)		口縁部片	粗製
275	溝1	弥生土器	壺	11.8			(7.1)	浅黄褐色(10YR8/8)		口縁部1/5	頸部に貼り付け突帯
276	溝1	弥生土器	壺	15.8			(1.5)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	金雲母含む	口縁部1/4	口縁部に凹形浮文、刻み目
277	溝1	弥生土器	壺	16.0			(3.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		口縁部1/4	口縁部に竹管文
278	溝1	弥生土器	壺	10.0			(7.5)	褐色(5YR6/6)		上半部1/4	玉縁状口縁、肩部に波状文
279	溝1	弥生土器	壺	13.3			(10.7)	灰白色(10YR8/3)	赤色土粒含む	上半部1/4	内面黒変
280	溝1	弥生土器	壺				(11.0)	褐色(5YR7/6)	赤色土粒含む	上半部のみ	頸部に沈線文、刺突文
281	溝1	弥生土器	壺	14.0			(10.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口頸部1/3	頸部に沈線文、刺突文
282	溝1	弥生土器	壺	11.4	21.0		(14.5)	浅黄褐色(10YR8/3)		下半部欠	頸部に沈線文
283	溝1	弥生土器	壺	11.9	22.8	8.3	27.5	にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	脚部1/8欠	風化顕著
284	溝1	弥生土器	壺	9.5	13.8	6.3	20.3	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	完形	底に黒斑、風化顕著、頸部に沈線文、刺突文
285	溝1	弥生土器	壺	8.9	11.9	4.2	14.5	灰黄褐色(10YR6/2)		口頸部1/2欠	側面に黒斑
286	溝1	弥生土器	壺	9.0	10.5	5.1	14.8	にぶい黄褐色(10YR7/3)		口縁部1/2欠	
287	溝1	弥生土器	壺	15.5	29.0	9.2	31.2	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む	2/3	肩・底部に黒斑
288	溝1	弥生土器	壺	27.0			(12.7)	浅黄褐色(7.5YR8/3)			口縁下に細溝沈線
289	溝1	弥生土器	壺	19.4			(5.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	金雲母含む	口縁部1/7	
290	溝1	弥生土器	壺	23.6			(7.8)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/3	
291	溝1	弥生土器	甕	18.0			(5.6)	浅黄褐色(10YR8/3)	赤色土粒含む	口縁部1/4	
292	溝1	弥生土器	甕	13.0			(8.2)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		上半部1/6	外面に煤
293	溝1	弥生土器	甕	13.1			(8.6)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		上半部1/3	外面に煤
294	溝1	弥生土器	甕	12.6	19.2		(10.8)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		上半部1/2	外面に煤
295	溝1	弥生土器	甕	12.8			(7.5)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	口縁部4/5	肩部に黒斑
296	溝1	弥生土器	壺	11.4	16.6		(17.9)	にぶい黄褐色(10YR7/1)		1/6	外面に煤
297	溝1	弥生土器	壺	12.3	16.9	5.8	20.4	明赤褐色(5YR5/8)	赤色土粒含む	口縁部1/3欠	
298	溝1	弥生土器	壺	13.0	14.5		(7.5)	にぶい黄褐色(10YR7/1)		上半部1/2	外面に煤
299	溝1	弥生土器	壺	15.2	10.6		(14.5)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	上半部1/3	外面に煤
300	溝1	弥生土器	甕	14.8	25.3	5.9	31.5	にぶい黄色(2.5Y6/3)	赤色土粒含む	体部1/4欠	外面に煤
301	溝1	弥生土器	甕	15.0	22.4		(17.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		上半部1/4	外面に煤
302	溝1	弥生土器	甕	14.5	21.4		(21.4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	上半部1/2	外面に煤
303	溝1	弥生土器	高杯	21.7			(5.0)	灰黄色(2.5Y7/2)		杯部1/8	口縁部に黒斑
304	溝1	弥生土器	高杯	25.6			(3.4)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	杯部1/3	
305	溝1	弥生土器	高杯	21.9			(6.2)	赤褐色(2.5YR5/6)	赤色土粒含む	杯部1/12	丹塗り
306	溝1	弥生土器	高杯			13.3	(6.6)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	脚部1/6	裾部に三角形透かし
307	溝1	弥生土器	高杯			10.7	(11.2)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		脚部のみ	裾部に三角形透かし
308	溝1	弥生土器	高杯			10.3	(5.3)	灰白色(5Y7/1)	精良	脚部1/5	裾部に三角形透かし
309	溝1	弥生土器	高杯			11.8	(6.6)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	脚部1/6	裾部に三角形透かし
310	溝1	弥生土器	高杯			13.8	(8.5)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		脚部1/5	裾部に三角形透かし
311	溝1	弥生土器	高杯				(9.0)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		脚部のみ	裾部に凹形透かし
312	溝1	弥生土器	高杯			13.2	(6.5)	褐色(5YR7/6)		脚部1/3	裾部に凹形透かし
313	溝1	弥生土器	高杯			8.9	(4.4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		脚部1/4	裾部に凹形透かし
314	溝1	弥生土器	高杯			9.2	(3.0)	にぶい褐色(7.5YR7/4)		脚部1/2	裾部に凹形透かし
315	溝1	弥生土器	高杯			14.0	(3.4)	明赤褐色(2.5YR5/6)		脚部1/7	丹塗り
316	溝1	弥生土器	高杯			7.5	(9.4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		口縁部欠	脚部に黒斑
317	溝1	弥生土器	鉢	21.0		6.4	8.5	にぶい褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	2/3	
318	溝1	弥生土器	高杯	34.8			(8.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	杯部1/4	口縁部に黒斑
319	溝1	弥生土器	鉢	21.2		6.4	10.0	にぶい黄褐色(10YR6/3)	赤色土粒含む	1/2	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底-脚径	器高				
320	溝1	弥生土器	鉢	19.5	20.0		(7.8)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/4	
321	溝1	弥生土器	鉢	24.0		9.4	15.3	にぶい橙色(7.5YR6/4)		1/4	底部に黒斑
322	溝1	弥生土器	鉢	17.8	21.2	7.3	16.6	にぶい黄褐色(10YR7/1)	赤色土粒含む	3/4	底部に黒斑
323	溝1	弥生土器	鉢	13.2	13.8		(9.3)	橙色(2.5YR6/6)	赤色土粒含む	2/3	風化顕著
324	溝1	弥生土器	鉢	14.8		5.3	7.1	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	口縁部1/3欠	
325	溝1	弥生土器	鉢	12.5	18.5		(7.9)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	赤色土粒含む	体部上半のみ	頸部に紺孔一對
326	溝1	弥生土器	鉢	16.6	18.3	11.0	16.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	完形	風化顕著、肩に黒斑
327	溝1	弥生土器	鉢			9.9	(9.7)	にぶい橙色(7.5YR7/3)		脚台部のみ	
328	溝1	弥生土器	鉢			12.3	(10.3)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	脚台部2/3	脚部に黒斑
329	溝1	弥生土器	器台	30.0		27.4	30.0	にぶい橙色(7.5YR7/4)		2/3	筒部に沈線文、長方形透かし
330	溝1	弥生土器	器台	30.1			(14.6)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	上半部のみ	筒部に沈線文、長方形透かし
331	溝1	弥生土器	器台			19.8	(13.6)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	下半部1/4	筒部に沈線文、円形透かし二段
332	溝1	弥生土器	鉢	9.2		4.4	8.5	橙色(7.5YR6/6)		完形	製土器のミニチュア
333	溝5	弥生土器	甕			5.0	(10.4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	底部のみ	底部に黒斑
334	溝10	弥生土器	壺	16.0			(8.9)	浅黄褐色(7.5YR8/4)	赤色土粒含む	口頭部のみ	
335	溝10	弥生土器	甕	14.0			(4.8)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		口縁部1/6	
336	溝10	弥生土器	甕			7.3	(4.3)	灰白色(10YR8/2)		底部1/3	底部に黒斑
337	溝10	弥生土器	高杯			9.8	(6.8)	灰白色(2.5Y7/1)	赤色土粒含む	脚部1/10	
338	溝10	弥生土器	鉢	14.4		4.9	6.7	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	1/5	
339	溝10	弥生土器	鉢	8.4		3.3	9.5	灰黄色(2.5Y7/2)		4/5	側面に黒斑
340	溝11	弥生土器	甕	13.8			(2.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		口縁部1/10	
341	溝11	弥生土器	甕	18.2			(4.4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		口縁部1/8	
342	溝11	弥生土器	甕	13.7			(2.9)	灰黄褐色(10YR6/2)		口縁部1/8	外面に煤
343	水田1	弥生土器	壺				(5.4)	灰黄褐色(10YR6/2)		頸部1/3	頸部に貼り付け突帯
344	水田1	弥生土器	壺	23.2			(14.5)	灰白色(10YR8/2)		口頭部1/3	口縁部に棒状浮文、竹管文
345	水田1	弥生土器	壺	13.7			(9.4)	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	口頭部1/4	頸部に沈線文、刺突文
346	水田1	弥生土器	甕	13.7			(6.1)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		上半部1/7	
347	水田1	弥生土器	甕	14.0			(7.0)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		上半部1/4	
348	水田1	弥生土器	甕	13.4			(4.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		上半部1/5	外面に煤
349	水田1	弥生土器	甕	14.8			(6.3)	浅黄褐色(7.5YR8/3)		上半部1/5	外面に煤
350	水田1	弥生土器	甕	14.0			(6.9)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	赤色土粒含む	上半部1/3	
351	水田1	弥生土器	壺			8.0	(9.8)	にぶい橙色(7.5YR6/4)		下半部1/4	
352	水田1	弥生土器	甕			5.6	(4.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	底部1/2	外面に煤
353	水田1	弥生土器	鉢			6.6	(4.0)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	脚台部1/2	
354	水田1	弥生土器	高杯	21.2			(4.5)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	赤色土粒含む	杯部1/3	
355	水田1	弥生土器	高杯	21.6			(4.4)	明褐色(7.5YR7/2)	赤色土粒含む	杯部1/5	円盤充填
356	水田1	弥生土器	高杯	21.6			(7.0)	浅黄褐色(10YR8/3)	赤色土粒含む	杯部1/4	円盤充填
357	水田1	弥生土器	高杯				(15.0)	橙色(5YR6/6)		脚柱部1/3	
358	水田1	弥生土器	高杯				(10.2)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	脚柱部1/3	円盤充填
359	水田1	弥生土器	高杯				(7.8)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	脚柱部3/4	円盤充填、胴部に三角形透かし
360	水田1	弥生土器	高杯			9.6	(6.7)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	脚部1/2	胴部に三角形透かし
361	水田1	弥生土器	高杯			9.2	(5.4)	にぶい橙色(10YR7/2)		脚部1/4	胴部に円形透かし
362	水田1	弥生土器	高杯			12.0	(13.5)	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	脚部2/3	脚部に円形透かし五段
363	水田1	弥生土器	鉢			17.6	(5.4)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		脚台部1/5	
364	水田2	弥生土器	壺	12.8			(4.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		口頭部1/8	口縁部に刺突文
365	水田2	弥生土器	甕	12.8		6.0	(4.2)	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	赤色土粒含む	底部1/4	
366	水田2	弥生土器	高杯			10.3	(10.3)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		脚部2/3	胴部に黒斑
367	1区包含層	弥生土器	壺	10.9			(8.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		口頭部のみ	
368	1区包含層	弥生土器	壺	13.2			(9.7)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		口頭部1/3	頸部に刺突文
369	2区包含層	弥生土器	壺	18.2			(11.2)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	口頭部1/2	頸部に刺突文
370	2区包含層	弥生土器	壺	18.7			(10.1)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	口縁部2/3	頸部に沈線文、刺突文
371	1区包含層	弥生土器	壺	19.8			(13.8)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	赤色土粒含む	口頭部1/3	頸部に沈線文
372	1区包含層	弥生土器	甕	27.8			(4.5)	灰白色(2.5Y7/1)		口縁部1/8	頸部に貼り付け突帯
373	溝16	弥生土器	甕	14.6			(5.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	赤色土粒含む	口縁部1/4	肩部に黒斑
374	溝15	弥生土器	甕	14.0			(4.8)	にぶい黄褐色(10YR7/2)		口縁部1/2	
375	2区包含層	弥生土器	甕	15.7	18.4	5.0	21.0	橙色(5YR6/6)	赤色土粒含む	上半部1/4欠	体部に黒斑
376	1区包含層	弥生土器	甕	12.9	17.6		(9.6)	橙色(7.5YR7/6)	赤色土粒含む	口縁部1/4	外面うすく黒斑あり
377	1区包含層	弥生土器	高杯	24.9		13.8	19.2	明赤褐色(2.5YR5/6)	赤色土粒含む	2/3	丹塗り、脚部に円形透かし四段
378	1区包含層	弥生土器	高杯	20.6		13.0	10.3	にぶい橙色(7.5YR6/4)		1/3	差込接合
379	2区包含層	弥生土器	鉢	21.6			(9.7)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/2	口縁部に黒斑
380	1区包含層	弥生土器	鉢	14.0	16.6		(7.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	上半部1/3	風化顕著、肩部に黒斑
381	2区包含層	弥生土器	鉢	34.4	34.8		(12.9)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部1/10	備後系
382	2区包含層	弥生土器	鉢	11.9		4.0	9.2	にぶい橙色(7.5YR7/4)		完形	側面に黒斑
383	2区包含層	弥生土器	鉢	6.1		2.6	3.1	にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	口縁部欠	手押ね土器、底面に黒斑
384	1区包含層	弥生土器	壺	6.9	6.6		(4.8)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		1/4	手押ね土器

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底径	器高				
385	2区包含層	弥生土器	鉢	3.9		1.4	2.3	灰青褐色(10YR6/2)		1/3	手摺ね土器
386	2区包含層	弥生土器	鉢			3.8	(1.9)	褐色(2.5YR7/6)			脚台部のみ
387	2区包含層	弥生土器	鉢			3.4	(3.3)	浅黄褐色(7.5YR8/3)	赤色土粒含む		脚台部のみ
388	2区包含層	弥生土器	鉢			3.8	(3.6)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	赤色土粒含む		脚台部のみ
389	2区包含層	弥生土器	鉢			3.2	(4.8)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	金雲母含む		下半部のみ
390	2区包含層	弥生土器	壺		13.2	4.5	(18.9)	褐色(5YR6/8)			口縁部1/2
391	2区包含層	弥生土器	壺	16.8			(5.6)	褐色(5YR7/6)			口縁部1/12
392	2区包含層	弥生土器	壺	17.4			(7.7)	にぶい赤褐色(5YR5/4)	金雲母含む		口縁部1/4
393	2区包含層	土師器	壺	19.8	32.1		(27.9)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む		底部欠
394	2区包含層	土師器	甕	15.0	18.6		(7.9)	にぶい黄褐色(10YR7/2)			上半部1/3
395	2区柱穴	土師器	高杯			14.1	(9.9)	褐色(5YR6/8)	赤色土粒含む		口縁部欠
396	2区包含層	土師器	釜	20.1			6.3	にぶい黄褐色(10YR7/4)			1/2
397	1区包含層	土師器	支脚				(9.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)			体部片
398	井戸4	土師器	杯	11.9		7.8	3.1	にぶい褐色(7.5YR7/4)			ほぼ完形
399	井戸4	土師器	杯	12.0		7.3	3.0	にぶい褐色(7.5YR7/4)			ほぼ完形
400	井戸4	土師器	杯	12.6		8.1	3.0	にぶい褐色(7.5YR7/4)			口縁部1/3欠
401	井戸4	土師器	杯	12.6		7.7	3.2	にぶい褐色(7.5YR6/4)			ほぼ完形
402	井戸4	土師器	杯	12.2		8.4	2.9	にぶい褐色(7.5YR6/3)			完形
403	井戸4	土師器	杯	12.0		7.6	2.9	にぶい褐色(7.5YR7/4)			底部2/3
404	井戸4	土師器	杯	12.4		8.1	(2.7)	にぶい褐色(5YR6/4)			口縁部1/3
405	井戸4	土師器	杯	12.0		8.2	3.1	にぶい黄褐色(10YR7/2)			ほぼ完形
406	井戸4	土師器	杯	11.9		7.4	3.2	にぶい褐色(7.5YR7/4)			ほぼ完形
407	井戸4	土師器	杯	12.5		9.1	3.1	にぶい褐色(7.5YR6/4)			ほぼ完形
408	井戸4	土師器	杯	12.5		8.2	3.5	にぶい黄褐色(10YR7/3)			ほぼ完形
409	井戸4	土師器	杯	13.0		9.1	3.1	にぶい褐色(5YR6/4)			完形
410	井戸4	土師器	杯	11.9		8.5	3.2	にぶい褐色(7.5YR7/4)			ほぼ完形
411	井戸4	土師器	杯	12.2		7.6	3.0	褐色(5YR6/6)			口縁部1/2
412	井戸4	土師器	杯	12.4		8.0	2.9	にぶい黄褐色(10YR6/3)			ほぼ完形
413	井戸4	土師器	杯	12.7		9.2	2.6	にぶい黄褐色(10YR7/3)			1/4
414	井戸4	土師器	杯	14.0		10.3	3.4	にぶい赤褐色(5YR5/4)			底部2/3
415	井戸4	土師器	皿	19.6		17.4	1.5	灰白色(2.5Y7/1)			1/12
416	井戸4	須恵器	甕		99.6		(83.2)	灰色(5Y6/1)			口縁部欠
417	土壇25	須恵器	蓋	16.3			(1.5)	灰色(N5/)			1/6
418	土壇25	土師器	杯	12.0		8.8	3.1	にぶい黄褐色(10YR7/2)			口縁部1/12欠
419	土壇25	須恵器	杯	12.6		8.5	3.7	灰白色(5Y8/1)			ほぼ完形
420	土壇25	須恵器	杯	15.6		10.0	5.8	灰白色(10YR7/1)			1/2
421	土壇25	土師器	皿	20.0		15.0	2.3	にぶい黄褐色(10YR7/2)			高台部1/6
422	土壇25	土師器	椀	18.5			(2.8)	にぶい黄褐色(10YR7/2)			口縁部1/6
423	土壇27	緑釉陶器	皿	13.2			(1.5)	オリブ灰色(5Y6/4)			口縁部1/8
424	土壇27	須恵器	蓋				(1.3)	灰色(N6/)			つまみのみ
425	土壇29	須恵器	高杯	13.4			(3.7)	灰色(N4/)			口縁部1/10
426	土壇29	須恵器	杯	9.0			(4.0)	黄灰色(2.5Y6/1)			口縁部1/4
427	土壇30	須恵器	杯	12.1		8.2	(3.1)	灰色(N4/)			口縁部1/7
428	土壇30	須恵器	杯	12.2		8.6	(3.8)	灰白色(N7/)			1/3
429	土壇30	須恵器	杯	14.0		8.2	4.8	灰白色(N7/)			高台3/4
430	土壇30	須恵器	杯	16.6		11.6	4.9	灰色(2.5Y7/1)			ほぼ完形
431	土壇30	須恵器	杯	17.0		13.0	6.4	灰色(N5/)			口縁部2/3欠
432	土壇30	須恵器	高杯	9.6			(4.0)	灰色(N4/)			1/2
433	土壇30	土師器	椀	10.6			3.6	にぶい黄褐色(10YR7/3)			1/2
434	土壇30	土師器	椀	12.3			3.6	にぶい黄褐色(10YR7/3)			3/4
435	土壇30	土師器	皿	21.4			3.4	にぶい黄褐色(10YR7/3)			1/3
436	土壇30	土師器	甕	14.6			(5.6)	にぶい褐色(5YR7/3)			頸部1/3
437	土壇30	須恵器	甕	37.0			(7.1)	灰色(5Y6/1)			口縁部1/5
438	土壇30	須恵器	甕	34.8			(10.6)	灰色(N6/)			口縁部1/4
439	土壇31	須恵器	蓋	16.8			(2.5)	灰色(N4/)			1/7
440	土壇31	須恵器	杯	12.9		7.7	4.4	灰色(N5/)	赤色土粒含む		口縁部1/4欠
441	土壇31	須恵器	高杯	15.0			(4.0)	灰色(N6/)			1/3
442	土壇31	土師器	杯				(2.0)	褐色(5YR6/6)	精良		底部1/3
443	土壇31	土師器	皿	18.8		10.8	6.0	にぶい黄褐色(10YR7/4)			1/2
444	土壇31	土師器	高杯			10.9	(4.9)	褐色(5YR6/6)	赤色土粒含む		脚部2/3
445	土壇31	土師器	甕	12.4	14.0		12.0	黄灰色(2.5Y6/1)			1/2
446	土壇31	土師器	甕	19.6	21.4		(15.3)	褐色(2.5YR6/6)			口縁部1/2欠
447	土壇31	須恵器					(3.0)	灰白色(5Y7/1)			器種不明
448	土壇32	須恵器	蓋				(2.3)	灰色(N5/)			天井部1/4
449	土壇32	須恵器	蓋				(2.0)	灰色(N5/)			天井部1/3

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底脚径	器高				
450	土塋32	須恵器	蓋	16.6			(2.3)	灰色(N4/)		天井部1/7	
451	土塋32	土師器	皿	19.8		9.6	4.1	橙色(25YR6/6)		高台1/6	丹塗り
452	土塋34	土師器	杯	12.0		7.8	3.2	にぶい橙色(75YR7/4)	赤色土粒含む	3/4	ヘラ記号
453	土塋34	灰釉陶器	椀			7.4	(3.2)	オリブ灰色(10Y6/2)		高台2/3	9世紀後半、猿投産
454	たわみ	須恵器	杯	10.4	12.6		5.5	灰色(N4/)		完形	体部にヘラ描き「×」、ロクロ逆回り
455	たわみ	須恵器	杯	11.4	13.6		5.5	黄灰色(25Y5/1)		1/4	ロクロ逆回り
456	たわみ	須恵器	杯	11.2	13.0		(5.3)	灰色(25Y4/1)		1/2	ロクロ逆回り
457	たわみ	須恵器	杯	13.6	15.6		(4.4)	灰色(N4/)		1/2	ロクロ逆回り
458	たわみ	須恵器	杯	10.2	11.9		4.1	灰白色(25Y7/1)		1/4	
459	たわみ	須恵器	杯	12.8		9.4	4.4	暗灰色(N3/)		口縁部一部欠	
460	たわみ	須恵器	蓋	14.8			2.4	灰色(N6/)		1/8	ロクロ逆回り
461	たわみ	須恵器	蓋				(2.7)	灰色(10Y5/1)		つまみのみ	ロクロ逆回り
462	たわみ	須恵器	蓋	19.0			(3.4)	灰白色(N7/)		1/4	
463	たわみ	須恵器	蓋	16.2			(2.9)	灰色(75Y6/1)		1/6	ロクロ逆回り
464	たわみ	須恵器	蓋	18.6			(1.8)	黄灰色(25Y5/1)	精良	口縁部1/6	
465	たわみ	須恵器	高杯	14.9			(4.8)	灰色(N5/)		1/2	
466	たわみ	須恵器	高杯	14.8			(4.7)	灰色(N6/)		杯部1/5	ロクロ逆回り
467	たわみ	須恵器	高杯			8.6	(6.4)	黄灰色(25Y5/1)		口縁欠	
468	たわみ	須恵器	高杯			9.2	(5.0)	灰色(N4/)		脚部2/3	
469	たわみ	須恵器	高杯			8.3	(4.6)	灰色(N4/)		脚部のみ	
470	たわみ	須恵器	壺		19.0		(8.9)	灰色(N5/)		体部1/4	
471	たわみ	須恵器	壺		19.2		(11.0)	灰色(N5/)		1/3	
472	たわみ	須恵器	横瓶	11.4			(3.8)	灰色(N6/)		口縁部1/9	
473	たわみ	須恵器	横瓶	12.4			(4.1)	灰色(N6/)		口縁部1/3	
474	たわみ	須恵器	横瓶				(29.0)	灰色(N5/)	精良	体部1/8	
475	たわみ	須恵器	甕	18.7			(6.8)	灰色(N5/)		口縁部1/8	
476	たわみ	須恵器	甕	22.8			(6.9)	灰白色(N7/)		口縁部1/12	
477	たわみ	須恵器	甕	20.8	32.4		(20.8)	黄灰色(25Y6/1)		上半部1/4	
478	たわみ	須恵器	甕	26.2	55.6		(32.9)	灰色(N5/)		上半部1/3	
479	たわみ	土師器	甕	14.4			(9.6)	にぶい赤橙色(75YR7/2)		上半部1/3	
480	たわみ	土師器	鉢	16.4			(8.3)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	赤色土粒含む	1/3	底部に黒燻
481	たわみ	土師器	鉢	13.8	15.0		(12.2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		上半部1/3	底部に黒燻
482	たわみ	土師器	甕	15.5	10.8		(13.2)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	1/4	
483	たわみ	土師器	皿	20.1			3.7	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	口縁部一部欠	放射・螺旋状暗紋
484	たわみ	土師器	鍋				(9.3)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	赤色土粒含む	把手部分	
485	溝12	須恵器	蓋	13.4			1.9	灰色(N4/)		天井部1/4	
486	溝12	須恵器	杯			9.4	(3.1)	灰色(5Y6/1)		底部1/5	
487	溝12	須恵器	杯			10.0	(2.1)	灰色(75Y6/1)		底部1/5	底面に黒燻
488	溝12	須恵器	杯	12.8		8.5	3.4	灰白色(5Y7/1)		底部4/5	底面に黒燻「由」
489	溝12	須恵器	杯	12.4		8.0	3.4	灰白色(25Y8/1)		1/2	体部に黒燻「吉」
490	溝12	須恵器	杯	12.4		8.7	3.5	灰白色(10YR8/1)		1/2	底面に黒燻「由」?
491	溝12	須恵器	皿			18.6	(1.9)	灰白色(5Y7/1)		高台1/8	
492	溝12	土師器	杯	13.8		11.0	3.2	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/4欠	
493	溝12	土師器	杯	15.3		10.4	2.7	にぶい橙色(75YR6/4)		1/8	
494	溝12	土師器	椀	15.1			3.8	灰黄色(25Y7/2)		口縁部2/3欠	黒色土器
495	溝12	土師器	皿	18.2			(1.9)	にぶい褐色(75YR6/3)		口縁部片	
496	溝12	土師器	皿	15.7		14.0	(2.0)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/8	
497	溝12	土師器	皿	15.7		11.8	2.2	灰白色(10YR8/2)		口縁部2/3	
498	溝12	土師器	皿	15.6		13.6	2.2	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/4	
499	溝12	土師器	皿	13.2		13.7	(2.2)	灰黄色(25Y7/2)		1/8	
500	溝12	土師器	皿	15.3		14.0	1.8	にぶい黄橙色(10YR7/3)		1/4	
501	溝18	須恵器	蓋	11.9			2.3	灰色(N6/)		完形	
502	溝18	須恵器	蓋				(2.1)	灰色(N5/)		天井部1/5	
503	溝18	須恵器	高杯	12.8			(4.1)	灰白色(N7/)		口縁部1/4	
504	溝18	須恵器	杯	15.9		10.0	4.4	灰色(N5/)		高台1/8	
505	溝18	土師器	鍋	28.8			(11.2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		口縁部1/5	
506	溝19	土師器	杯	16.8		13.0	(3.8)	にぶい橙色(75YR7/4)		1/6	丹塗り、放射状暗紋
507	溝19	土師器	杯	17.6		13.5	5.2	明赤褐色(25YR5/6)		1/3	丹塗り
508	溝19	須恵器	蓋				(1.3)	灰色(N6/)		つまみのみ	
509	溝19	須恵器	杯	11.6		7.0	2.5	灰色(N6/)		1/4	
510	溝19	須恵器	高杯			9.8	(2.4)	灰白色(N7/)		脚部1/3	
511	溝19	須恵器	杯				(3.4)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	底部のみ	
512	溝19	須恵器	碗				(4.9)	オリブ灰色(10Y6/2)	精良	脚部片	透脚片面視、513と同一個体
513	溝20	須恵器	碗			21.0	(6.8)	オリブ灰色(10Y6/2)	精良	脚部1/8	透脚片面視、512と同一個体
514	溝21	須恵器	平瓶				(3.5)	灰色(N6/)		頸部1/3	

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底-脚径	器高				
515	2区包含層	須恵器	蓋	14.6			2.6	灰白色(N7/)		1/3	
516	1区包含層	須恵器	蓋	16.3			3.4	灰色(N4/)		1/2	
517	1区包含層	須恵器	蓋	14.5			3.2	灰色(N6/)		1/2	
518	2区包含層	須恵器	蓋	15.4			2.9	灰色(N6/)		1/3	
519	1区包含層	須恵器	杯	21.8		16.2	7.7	灰白色(25Y7/1)	赤色土粒含む	1/3	風化顕著
520	2区包含層	須恵器	杯	13.5		9.8	3.8	灰色(N5/)		11縁部1/2欠	
521	2区包含層	須恵器	杯	16.2		10.6	4.4	灰白色(10YR8/1)		1/7	
522	2区包含層	須恵器	杯	15.6		12.4	4.3	灰色(N6/)		1/5	
523	2区包含層	須恵器	杯	15.2		12.7	3.6	オリブ灰色(25GY6/1)		1/6	
524	1区包含層	須恵器	杯	14.9		10.2	4.2	灰白色(7.5Y7/1)		1/3	
525	1区包含層	須恵器	杯	17.2		12.8	6.3	灰色(7.5Y6/1)		1/8	
526	1区包含層	須恵器	杯	14.1		9.1	5.4	灰色(N5/)		3/4	
527	1区包含層	須恵器	杯	15.4		9.8	5.1	灰色(N6/)		11縁部1/3	
528	1区包含層	須恵器	杯	13.5		8.4	5.6	灰白色(25Y7/1)		1/4	
529	1区包含層	須恵器	杯	15.8		10.0	5.5	灰色(N6/)	精良	高台1/4	
530	1区包含層	須恵器	杯	15.6		11.0	5.5	灰色(N5/)		1/6	
531	2区包含層	須恵器	杯	12.0		9.2	3.8	灰白色(10YR8/1)		1/6	
532	2区包含層	須恵器	杯	13.0		7.8	4.6	褐色(10YR5/1)		1/3	
533	1区包含層	須恵器	杯	12.7		9.0	3.4	灰色(N6/)		口縁部1/4	
534	1区包含層	須恵器	杯	13.0		8.4	3.7	灰白色(N8/)		1/4	
535	2区柱穴	須恵器	杯	11.8		8.4	3.5	灰白色(N7/)		1/4	
536	2区柱穴	須恵器	杯	11.7		8.6	(3.4)	灰白色(25Y7/1)		1/8	
537	1区包含層	須恵器	杯	12.6		8.8	3.3	灰色(N6/)		1/4	
538	1区包含層	須恵器	杯	12.8		3.6	8.4	灰色(N5/)		3/5	重ね焼痕
539	2区包含層	須恵器	杯	11.8		8.0	3.4	灰色(N5/)		1/7	
540	1区包含層	須恵器	杯	12.2		8.3	3.3	灰色(N6/)		1/4	底部押圧
541	1区包含層	須恵器	杯	13.0		8.8	3.2	灰白色(N8/)		3/5	底部押圧、重ね焼痕
542	1区包含層	須恵器	杯	12.2		7.6	3.3	灰白色(5Y8/1)		1/3	底部押圧、重ね焼痕
543	1区包含層	須恵器	杯	12.6		8.5	3.6	灰白色(N8/)		1/2	底部押圧、底面に墨書「由」?
544	1区包含層	須恵器	杯	12.2		8.5	3.7	灰白色(N7/)		2/3	底部押圧、底面に墨書「由」?
545	1区包含層	須恵器	皿	19.4		14.4	2.7	にぶい黄褐色(10YR7/2)		11縁部1/6	
546	1区柱穴	緑袖陶器	椀			(1.6)		オリブ黄色(5Y6/4)		11縁部片	京都産
547	1区柱穴	緑袖陶器	椀			(2.5)		灰オリブ色(5Y5/3)		体部片	京都産
548	1区包含層	緑袖陶器	皿			6.2	(1.5)	やわらかい黄緑色(7GY7.5/4.5)	精良	高台のみ	9世紀後半、京都産
549	1区包含層	緑袖陶器	皿			7.4	(1.6)	浅青色(5Y7/4)	精良	高台1/3	9世紀後半、京都産
550	2区包含層	須恵器	高杯	12.8		7.3	6.7	灰色(N6/)		1/3	ロクロ逆回り
551	2区包含層	須恵器	盤	39.4		34.0	6.7	灰色(5Y6/1)		1/8	
552	2区包含層	須恵器	壺		12.4		(5.4)	灰色(N5/)		体部1/3	
553	2区包含層	須恵器	瓶	6.4			(7.7)	灰色(N5/)		口頸部のみ	
554	2区包含層	須恵器	壺				(3.5)	黄灰色(2.5Y6/1)		肩部片	刻書
555	1区包含層	須恵器	壺			13.2	(3.8)	褐色(10YR6/1)		底部1/4	
556	2区包含層	須恵器	壺		22.6		(6.7)	褐色(10YR4/1)		肩部1/8	四耳
557	1区包含層	須恵器	壺			16.0	(7.8)	灰色(N5/)		底部1/4	
558	1区包含層	須恵器	壺			12.8	(7.1)	灰色(N5/)		底部1/3	
559	1区包含層	須恵器	甕				(9.0)	灰色(N6/)		口縁部片	波状文三段
560	2区包含層	須恵器	甕	22.8			(6.3)	黄灰色(2.5Y6/1)		口縁部1/4	
561	1区包含層	須恵器	甕	22.6			(19.0)	灰色(N6/)		上半部1/4	頸部にヘラ描き「上」、寒風窯?
562	2区包含層	須恵器	斗		18.2	(3.5)	(11.4)	灰色(N5/)		体部1/3	
563	1区包含層	須恵器	瓶			16.7	(3.6)	灰白色(7.5Y7/1)		底部片	
564	2区包含層	土師器	杯			9.4	(2.0)	にぶい橙色(5YR6/4)	赤色土粒含む	底部1/5	丹塗り、放射・螺旋状暗紋
565	2区包含層	土師器	杯	12.4		8.8	(2.3)	明赤褐色(7.5YR5/6)	精良	11縁部1/8	丹塗り
566	2区包含層	土師器	杯	12.8		10.7	(3.1)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		1/6	丹塗り
567	1区包含層	土師器	杯	13.9		8.6	3.8	明赤褐色(5YR5.8)	赤色土粒含む	2/3	丹塗り
568	2区包含層	土師器	杯	12.9		9.6	3.2	明赤褐色(2.5YR5/6)	精良	1/3	丹塗り
569	1区包含層	土師器	杯	12.6		10.7	3.8	灰白色(10YR7/1)	赤色土粒含む	1/4	丹塗り
570	2区包含層	土師器	杯	13.0		11.3	(3.8)	明赤褐色(2.5YR5/6)		1/5	丹塗り
571	1区包含層	土師器	杯	12.8		8.6	3.4	にぶい赤褐色(5YR5/4)		ほぼ完形	丹塗り、底部押圧
572	1区包含層	土師器	杯	13.8		9.7	3.6	にぶい黄褐色(10YR7/2)	赤色土粒含む	7/8	丹塗り、底部押圧
573	1区包含層	土師器	杯	14.2		11.9	3.8	にぶい橙色(2.5YR6/6)		3/4	丹塗り、底面に墨書「古」
574	2区包含層	土師器	杯	16.1		13.5	(4.5)	明赤褐色(5YR5/6)	精良	1/4	丹塗り
575	1区包含層	土師器	杯	16.8		13.4	(4.6)	浅黄褐色(10YR8.3)		1/5	
576	1区包含層	土師器	皿	20.2			2.6	褐色(5YR6/6)		1/4	丹塗り、放射状暗紋
577	1区包含層	土師器	皿	20.0		17.4	1.9	褐色(5YR6/6)		1/2	丹塗り
578	2区包含層	土師器	皿	23.2		21.0	3.2	灰黄褐色(10YR4.2)		1/12	丹塗り

番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	状態	備考
				口径	最大径	底・脚径	器高				
579	1区包含層	土師器	皿	16.4		13.8	(1.5)	橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	1/8	丹塗り
580	1区包含層	土師器	皿	16.0		15.2	(1.4)	明赤褐色(5YR5/6)	赤色土粒含む	1/12	丹塗り
581	1区包含層	土師器	皿	14.8		13.4	(1.6)	橙色(2.5YR6/6)		1/3	丹塗り
582	2区包含層	土師器	皿	14.6		11.6	1.3	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	1/4	丹塗り
583	1区包含層	土師器	皿	16.2		14.3	2.3	にぶい橙色(7.5YR7/3)		1/6	丹塗り
584	1区包含層	土師器	皿	15.8		14.2	(2.5)	橙色(5YR7/6)		1/2	丹塗り
585	1区包含層	土師器	皿	15.3		13.9	(2.0)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	1/4	丹塗り
586	1区包含層	土師器	皿	15.0		13.0	(2.1)	橙色(5YR7/6)	赤色土粒含む	1/3	丹塗り
587	1区包含層	土師器	高杯			11.6	(4.4)	橙色(5YR6/6)		脚部1/6	丹塗り
588	1区包含層	土師器	鉢	18.0		5.5		にぶい黄褐色(10YR7/3)	赤色土粒含む	1/4	丹塗り
589	2区包含層	土師器	鉢	20.4			(4.7)	橙色(2.5YR6/6)		杯部1/10	丹塗り
590	1区柱穴	土師器	鉢	25.2			(8.2)	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)		1/3	丹塗り
591	1区包含層	土師器	蓋	25.2			(2.7)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	口縁部1/12	丹塗り
592	2区柱穴	土師器	椀	16.6		6.8	6.2	橙色(5YR6/6)	金雲母含む	1/4	黒色土器
593	2区柱穴	土師器	椀	13.8		7.2	4.6	橙色(5YR6/6)		1/8	黒色土器
594	2区柱穴	土師器	椀	13.0		6.8	4.3	橙色(7.5YR7/6)		完形	黒色土器
595	2区包含層	土師器	椀			8.8	(2.6)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	赤色土粒含む	底部1/2	黒色土器
596	2区包含層	土師器	椀			8.0	(2.5)	にぶい褐色(7.5YR6/3)		底部1/4	黒色土器
597	2区包含層	土師器	甕	28.0			(7.9)	灰白色(10YR8/2)	赤色土粒含む	口縁部1/12	体部に黒斑
598	2区包含層	土師器	甕	28.5			(8.8)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	赤色土粒含む	口縁部1/12	口縁部に黒斑
599	2区包含層	土師器	甕				(20.3)	にぶい橙色(5YR6/4)		焚口基部片	
600	土庫35	陶器	皿			4.0	(1.4)	オリーブ灰色(10Y4/2)		底部のみ	肥前陶器、胎土目
601	溝24	土師器	椀			8.0	(2.2)	にぶい褐色(7.5YR6/3)		底部1/4	
602	溝24	土師器	椀			8.6	(2.4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	赤色土粒含む	底部1/4	
603	水田3	土師器	椀			4.2	(1.0)	灰白色(2.5Y8/2)		高台部2/3	早島式土器
604	水田3	土師器	椀			6.3	(1.5)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		高台部1/2	早島式土器
605	水田3	土師器	鍋				(8.9)	浅黄褐色(10YR6/4)		脚部片	
606	2区包含層	土師器	椀	10.7		3.3	3.3	灰白色(10YR8/1)		ほぼ完形	早島式土器
607	1区柱穴	土師器	椀			4.1	(1.1)	灰白色(10YR8/1)		高台のみ	早島式土器
608	1区柱穴	土師器	椀			5.4	(1.2)	灰白色(2.5YR7/1)		高台1/4	早島式土器
609	2区包含層	土師器	小皿	6.5		5.0	(1.2)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	1/4	底部ヘラ切り
610	1区包含層	土師器	小皿	7.5		5.6	1.1	橙色(7.5YR8/3)	赤色土粒含む	完形	底部ヘラ切り
611	1区包含層	土師器	小皿	7.4		5.6	1.2	浅黄褐色(7.5YR7/3)	赤色土粒含む	1/3	底部ヘラ切り
612	1区包含層	土師器	小皿	7.8		6.2	1.4	にぶい橙色(7.5YR7/3)		1/3	底部ヘラ切り
613	1区包含層	須恵器	皿	13.7		2.4	7.4	灰色(N7/)		1/3	脣前焼、底部糸切り
614	2区包含層	須恵器	押鉢				(5.9)	灰白色(2.5Y7/1)		口縁部片	東播系
615	1区包含層	須恵器	甕				(10.9)	灰色(N4/)		胴部下部破片	亀山焼
616	1区柱穴	土師器	鍋	34.8			(6.7)	黒色(N1.5)		口縁部1/8	外面に煤
617	2区包含層	瓦質土器	鍋	27.8			(10.3)	灰色(N6/)		体部1/8	

石製品

番号	遺構名	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	時期	備考
			長さ	幅	厚さ				
S 1	溝 1	石鏃	2.2	1.7	3.3	0.8	サヌカイト	弥生中～後期	平基
S 2	溝 1	不定形石器	5.7	4.1	1.2	27.5	サヌカイト	弥生中～後期	使用による光沢
S 3	溝 1	フレーク	7.2	5.1	1.2	25.2	サヌカイト	弥生中～後期	
S 4	溝 1	石錘	9.0	6.8	6.2	528.2	花崗岩	弥生中～後期	有溝
S 5	溝 1	石錘	7.7	5.4	4.8	289.9	花崗岩	弥生中～後期	有溝
S 6	溝 1	叩き石	6.9	7.9	3.2	275.8	花崗岩	弥生中～後期	円礫、側縁を敲打
S 7	水田 2	スクレイパー	5.5	4.9	1.0	29.1	サヌカイト	弥生中～後期	
S 8	水田 1	スクレイパー	5.6	3.8	0.8	23.0	サヌカイト	弥生中～後期	石包丁を分割か
S 9	1区包含層	石鏃	2.3	1.5	0.2	0.7	サヌカイト	弥生中～後期	平基
S 10	1区包含層	石鏃	3.0	1.7	0.3	2.0	サヌカイト	弥生中～後期	平基
S 11	2区包含層	石包丁	9.1	4.0	1.3	70.4	粘板岩	弥生中～後期	打製
S 12	1区包含層	石包丁	9.4	3.6	0.9	43.9	粘板岩	弥生中～後期	打製
S 13	1区包含層	石錘	7.6	(4.2)	6.2	(201.0)	石英安山岩	弥生中～後期	有溝、未成品を叩き石に転用
S 14	1区包含層	叩き石	11.6	5.8	4.0	387.4	花崗岩	弥生中～後期	棒状、側縁を敲打
S 15	たわみ	叩き石	13.0	4.1	3.5	309.5	泥質片岩	弥生中～後期	棒状、両端を敲打
S 16	2区包含層	叩き石	8.0	6.8	4.1	312.6	細粒花崗岩	弥生中～後期	円礫、磨石としても使用
S 17	2区包含層	叩き石	6.6	6.6	3.0	215.7	花崗岩	弥生中～後期	円礫、側縁を敲打
S 18	2区包含層	叩き石	7.0	6.7	3.9	246.0	花崗岩	弥生中～後期	円礫、側縁を敲打
S 19	1区包含層	叩き石	7.2	7.4	4.6	311.3	流紋岩	弥生中～後期	円礫、側縁を敲打
S 20	2区包含層	砥石	5.4	3.6	0.5	19.0	粘板岩	古代	板状
S 21	2区包含層	砥石	(8.3)	5.2	(3.2)	(145.8)	流紋岩	古代	角粒状、折損

土製品

番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量(g)	胎土	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径				
C 1	たわみ	土馬	(3.9)	(3.8)	2.3		赤色土粒含む	古代	脚部、軸木痕跡	
C 2	1区包含層	土馬	(12.3)	(5.5)	2.1		赤色土粒含む	古代	胴部、粘土板折り曲げ、轆・手綱の表現	
C 3	井戸 4	土馬	(5.4)	(4.0)	1.5		赤色土粒含む	古代	胴部、轆の表現	
C 4	1区包含層	土馬	(5.6)	(5.3)	2.1		赤色土粒含む	古代	胴部、粘土板折り曲げ、手綱の表現	
C 5	2区包含層	土馬	(10.6)	4.3	2.5		赤色土粒含む	古代	脚部、方柱状	
C 6	1区包含層	土馬	(6.2)	3.6	2.6		赤色土粒含む	古代	脚部、円柱状、端面に板目	
C 7	2区柱穴	平瓦	(10.5)	(7.1)	1.8		赤色土粒含む	古代	凸面格子目叩き、凹面布目	
C 8	1区包含層	土錘	3.3	3.1	3.0		35.4	精良	中世	有溝、完形
C 9	水田 3	土錘	(3.3)	1.1	1.0	0.4	(2.3)		中世	管状、欠損
C 10	2区包含層	土錘	(3.4)	1.1	0.9	0.4	(3.8)	精良	中世	棒状、折損
C 11	2区包含層	土錘	(5.4)	1.5	1.5	0.4	(11.0)		中世	管状、欠損
C 12	2区包含層	土錘	(3.6)	1.6		0.6	(7.0)		中世	管状、折損

金属製品

番号	遺構名	器種	法量(cm)			重量(g)	材質	時期	備考
			長さ	幅	厚さ				
M 1	竪穴住居 3		(4.7)	1.3	0.3	(5.4)	鉄	弥生後期末	器種不明
M 2	竪穴住居 3	鉤?	(3.7)	1.1	0.6	(5.3)	鉄	弥生後期末	茎部
M 3	土壙 3	鏃?	9.8	1.1	0.8	13.2	鉄	弥生後期後葉	完形
M 4	土壙 20	鉤?	3.4	0.7	0.4	(2.2)	鉄	弥生後期後葉	茎部
M 5	溝 12	鏃	(7.8)	(2.8)	0.6	(16.7)	鉄	平安前期	刃部欠、平根(方頭か圭頭)
M 6	2区柱穴	刀子	(7.1)	1.5	0.4	(15.4)	鉄	平安前期	刃部
M 7	水田 1	鏃	(5.6)	(1.8)	0.4	(10.9)	鉄	古代	刃部・茎欠、平根(方頭か圭頭)
M 8	2区柱穴	釘	(5.6)	1.2	1.0	(17.4)	鉄	古代	頭部折り曲げ、折損
M 9	1区攪乱	手榴弾	9.2	5.8		610.0	鉄	現代	鋳造品

木製品

番号	遺構名	器種	法量(cm)			樹種	時期	備考
			長さ	幅	厚さ			
W 1	井戸 4	曲物	(56.4)	6.7	0.5	ヒノキ	平安前期	籬、樺皮綴じ
W 2	井戸 4	曲物	(51.9)	9.9	0.7	ヒノキ	平安前期	側板、樺皮綴じ、ケビキ(縦+斜格子)
W 3	井戸 4	曲物	(28.7)	7.0	0.5	ヒノキ	平安前期	側板、ケビキ(縦+斜格子)
W 4	井戸 4	曲物	(31.3)	8.3	0.5	ヒノキ	平安前期	側板、ケビキ(縦+斜格子)

動物遺体一覽表

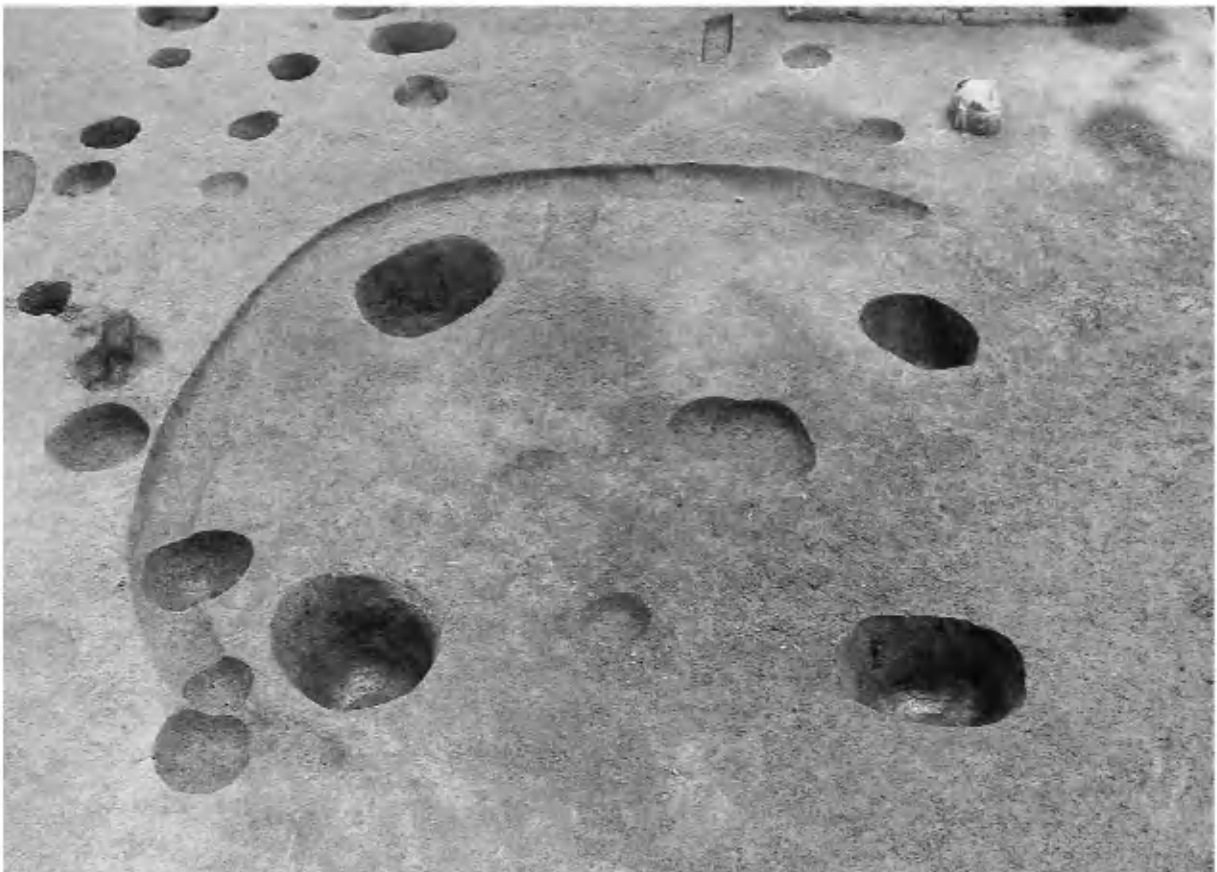
番号	遺構・層位	時代	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	破損	色調	計測値(mm)	備考
1	水田3上層	室町	哺乳綱	ウシ	上顎臼歯 (P4orM1?)	L	歯冠部完形	歯根部欠損	エナメル質咬耗開始	?	ノーマル	L: 26.70, B: 16.80	
2	水田3下層	鎌倉	哺乳綱	ウシ?	上顎臼歯	?	歯冠部破片		エナメル質咬耗開始以前	?	淡褐色		
3	溝12	平安	哺乳綱	目不明	部位不明	?	骨幹部		?	?	淡褐色		
4	土葬32	奈良	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	遠位端+遠位部		df	sp?	淡褐色		
5-1	1区包含層	不明	鳥綱	カモ科 (マガモクラス)	頸椎	M	完形		?	なし?	淡褐色		
5-1	1区包含層	不明	鳥綱	カモ科 (マガモクラス)	頸椎	M	完形		?	なし?	淡褐色		
5-1	1区包含層	不明	鳥綱	カモ科 (マガモクラス)	頸椎	M	完形		?	なし?	淡褐色		
5-2	1区包含層	不明	鳥綱	カモ科 (マガモクラス)	頭蓋	R	側頭骨		?	sp?	淡褐色		
5-3	1区包含層	不明	鳥綱	カモ科 (マガモクラス)	下顎骨	R	近位端		?	sp?	淡褐色	width: 12.00	
6	1区包含層	不明	哺乳綱	ウシ	距骨	L?	遠位部~遠位端		f	?	淡褐色		
7	1区西側溝	不明	哺乳綱	目不明(大型)	部位不明	?	骨幹部		?	?	淡褐色		
8	土葬31	奈良	脊椎動物門	綱不明	部位不明	?	骨幹部		?	?	白		
9	溝19下層	奈良	哺乳綱	ウシ	基節骨	L	完形 (骨幹部一部破損)		d,pf	?	淡褐色		
10-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M3	L	完形		平坦化	?	淡褐色		歯根部近くまで達するエナメル質 減形成らしい痕跡もある
10-2	たわみ	奈良	哺乳綱	シカ (ニホンジカ?)	中足骨?	R?	骨幹部		?	?	淡褐色		
11	2区包含層	不明	哺乳綱	目不明(大型)	部位不明 (橈骨?)	LR?	骨幹部		?	?	淡褐色		
12	2区包含層	不明	哺乳綱	ヒト?	大腿骨?	L?	骨幹部		?	?	褐色?		
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎M3	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 22.12, B: 20.46 歯冠高-	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎P4	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 23.72, B: 20.64 歯冠高-	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎M2	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 24.96, B: 23.02 歯冠高-	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M3	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 26.40, B: 12.06 歯冠高-	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M2	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 26.09, B: 13.46 歯冠高65.54	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M1	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 25.34, B: 13.22 歯冠高50.58	

番号	遺構・層位	時代	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	破損	色調	計測値(mm)	備考
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P4	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 26.94, B: 16.32 歯冠高49.54	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P3	L	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: 26.64, B: 15.28 歯冠高一	
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M2	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎M1	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P4	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P3	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
13-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P2	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
13-2	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマorウシ	四肢骨	?	骨幹部		?	?	淡褐色		
14	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎臼歯	L	歯冠部破片		?	?	淡褐色		
15-1	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎M1	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
15-2	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎M2	R	完形(一部欠損)		小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
15-3	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	上顎M3	R	完形(一部欠損)		小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
15-4	たわみ	奈良	哺乳綱	ウマ	下顎P4orM1	R	完形(一部欠損)	歯冠部	小窩連結平坦化未了	?	淡褐色		
16	2区包含層	古代	哺乳綱	ウマ	下顎臼歯	L	歯冠部破片		?	?	淡褐色		
17	2区包含層	不明	哺乳綱	ウマ?	上顎臼歯	?	歯冠部破片		?	?	淡褐色		
18-1	2区包含層	不明	哺乳綱	目不明	部位不明	?	骨幹部		?	?	淡褐色		
18-2	2区包含層	不明	哺乳綱	目不明	四肢骨	?			?	sp?	淡褐色		
18-3	2区包含層	不明	哺乳綱	ウシorウマ	寛骨	?	寛骨白破片		?	sp?	淡褐色		
19	2区包含層	不明	哺乳綱	ウマ	下顎M2	L	歯冠部		小窩連結平坦化未了	?	淡褐色	L: (23.00), B: 12.65	
20	2区P81	古代	軟骨魚綱	エイ目	椎骨	M	椎体		?	?	淡褐色	円筒横径>18.10	

※spはspiralの略



1 2区弥生時代遺構全景(南から)



2 竪穴住居2(西から)

図版 2



1 豎穴住居 1 (西から)



2 豎穴住居 3 (東から)



3 井戸 1 (南西から)



1 井戸 2 土層断面(東から)



2 井戸 3 上層遺物出土状況
(北西から)



3 井戸 3 (西から)

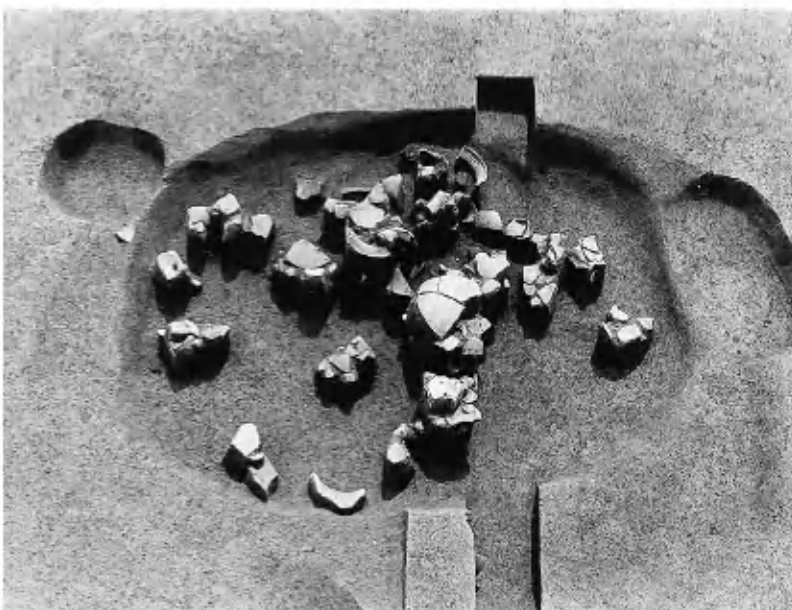
図版 4



1 土壙3(東から)



2 土壙5(東から)



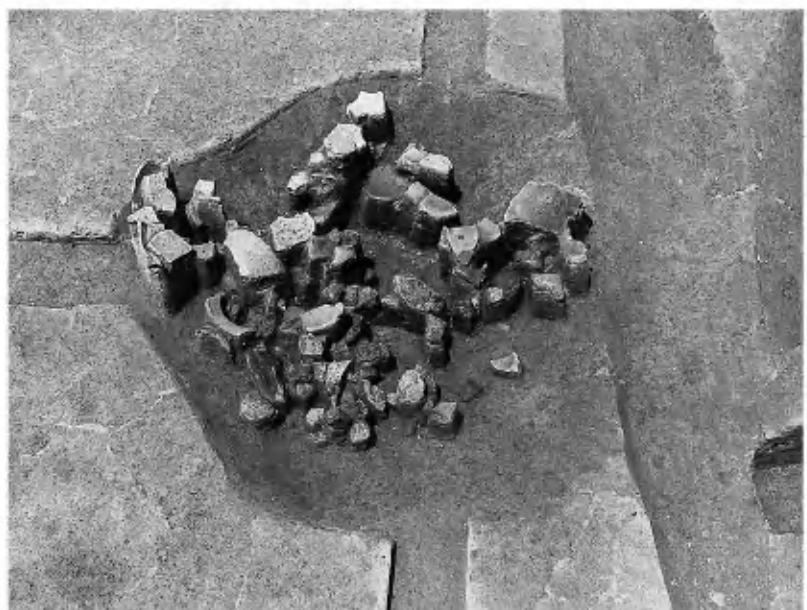
3 土壙12(西から)



1 土壌13(南から)



2 土壌14(南から)



3 土壌17(東から)

図版6



1 土壇20遺物出土状況
(北東から)



2 土壇20(南西から)



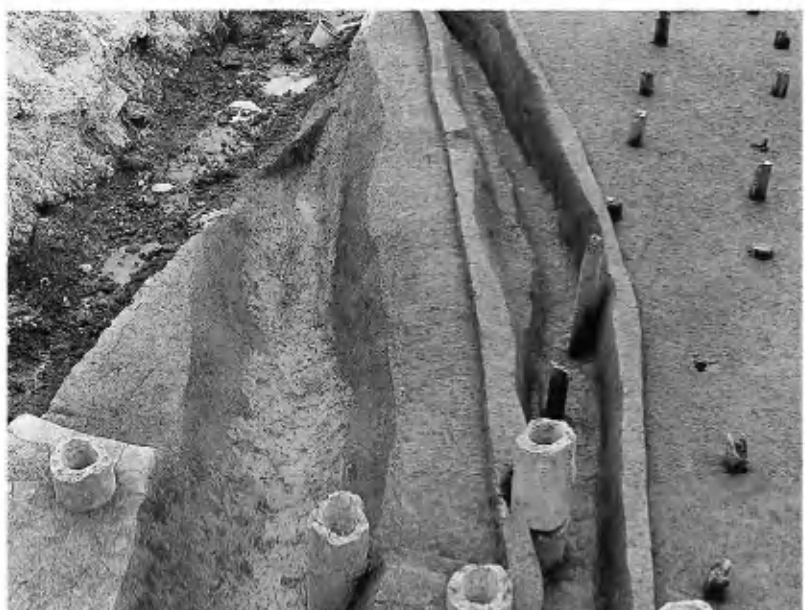
3 土壇21(東から)



1 土器溜り 1 (南から)

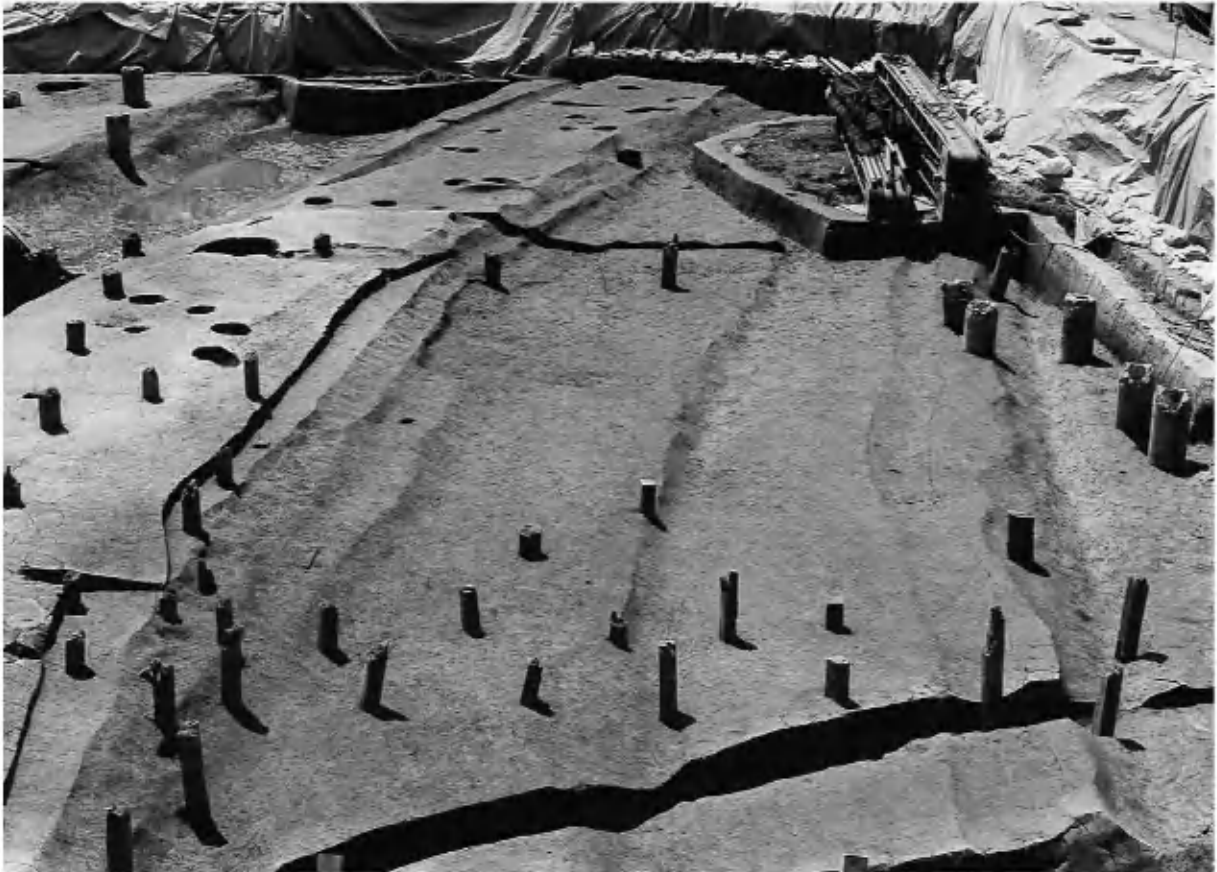


2 溝 1 (北西から)



3 溝 10・11 (北西から)

図版 8



1 溝 2・7～9 (東から)



2 水田 1・2 と 溝 1・5・6 (北西から)



1 水田 1 畦畔(北西から)

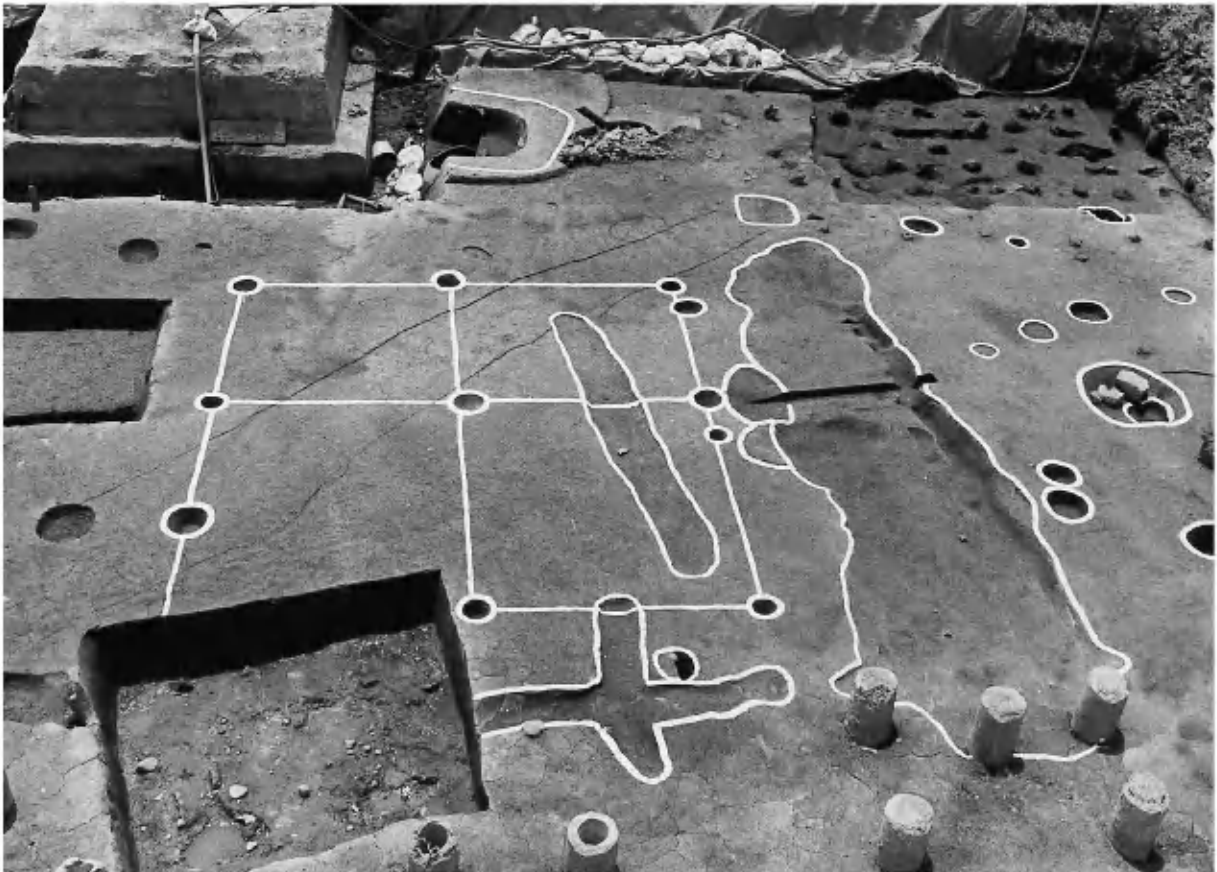


2 水田 1 土層断面(北西から)

図版10



1 1区古代～中世遺構全景(南東から)



2 掘立柱建物1周辺(北から)



1 井戸4(東から)



2 井戸4須恵器据え方(東から)

図版12



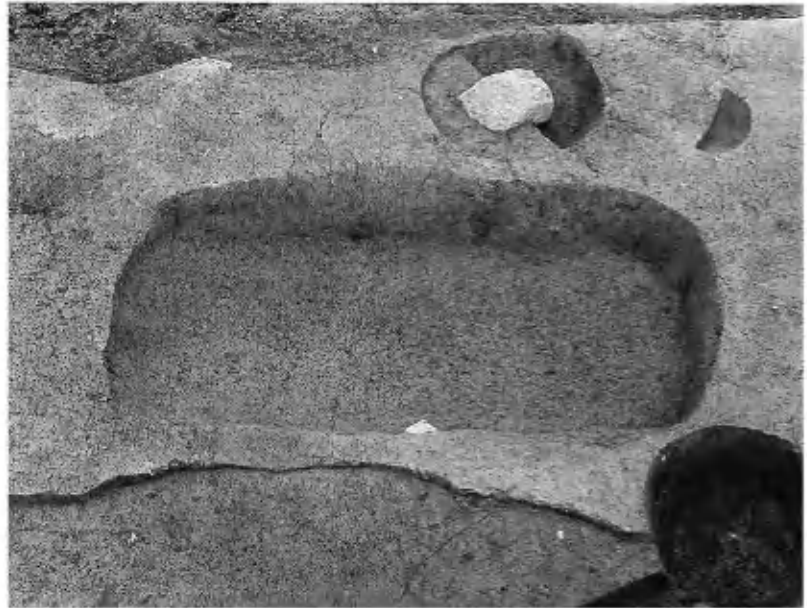
1 井戸4上層遺物出土状況
(南西から)



2 井戸4隅柱柄組み(南東から)



3 土壇25(南から)



1 土坑28(西から)



2 土坑30(北西から)

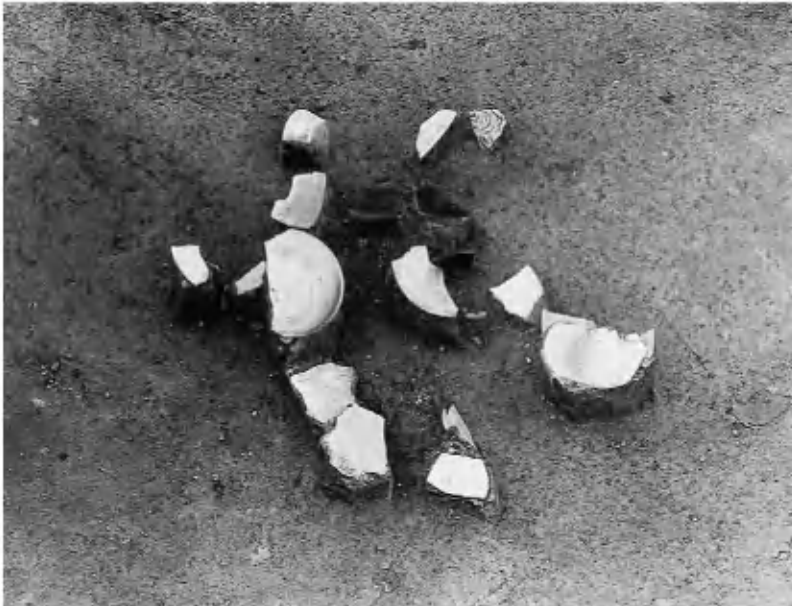


3 土坑31(西から)

図版14



1 土壙31遺物出土状況(西から)



2 溝12遺物出土状況(南から)



3 溝18(西から)



1 溝19(北西から)

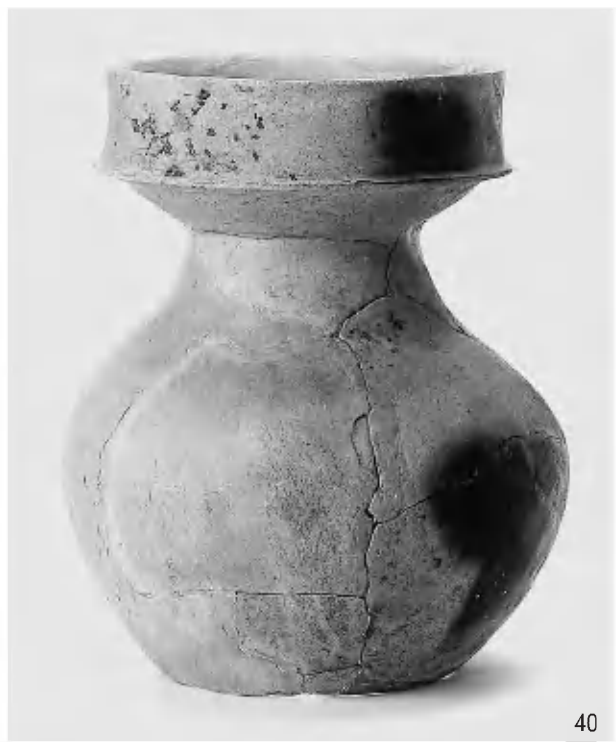
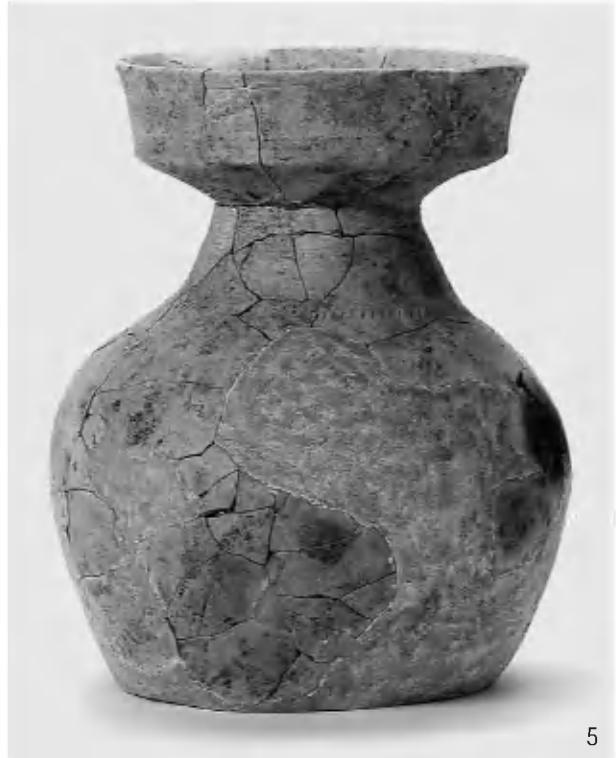


2 溝19土層断面(東から)



3 たわみ遺物出土状況(南から)

図版16

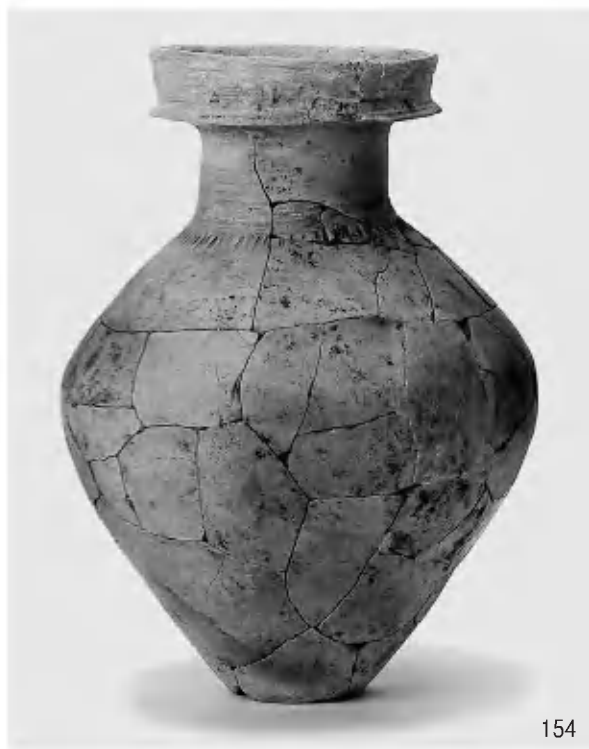


井戸1~3、土壙3出土土器

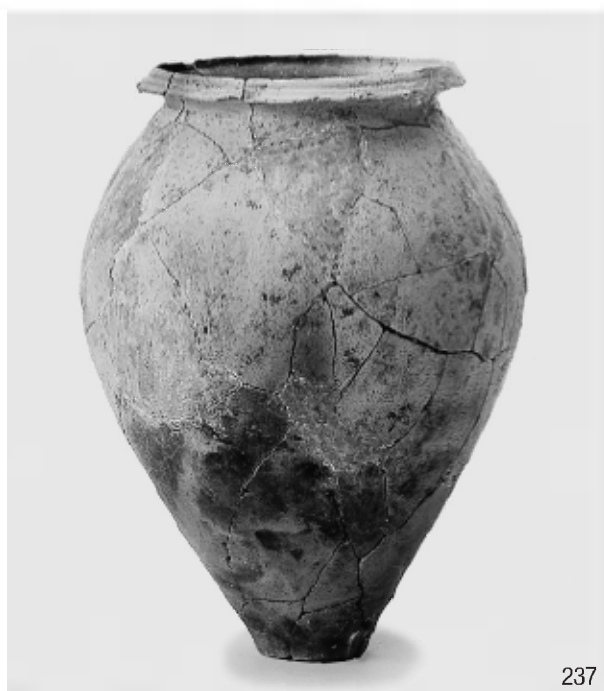


土壤13·19·20出土土器

图版18



土壤20出土土器



土器溜り1出土土器

图版20

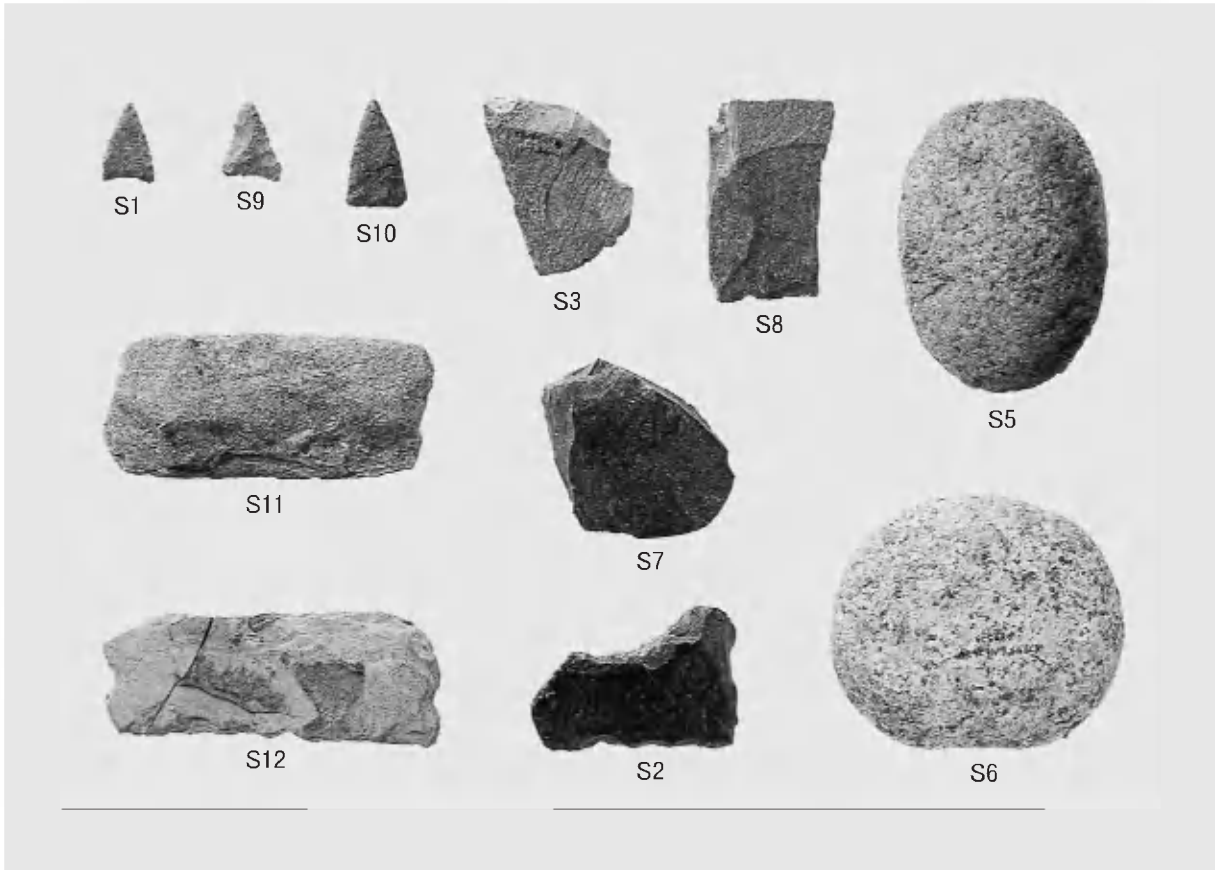


溝1出土土器

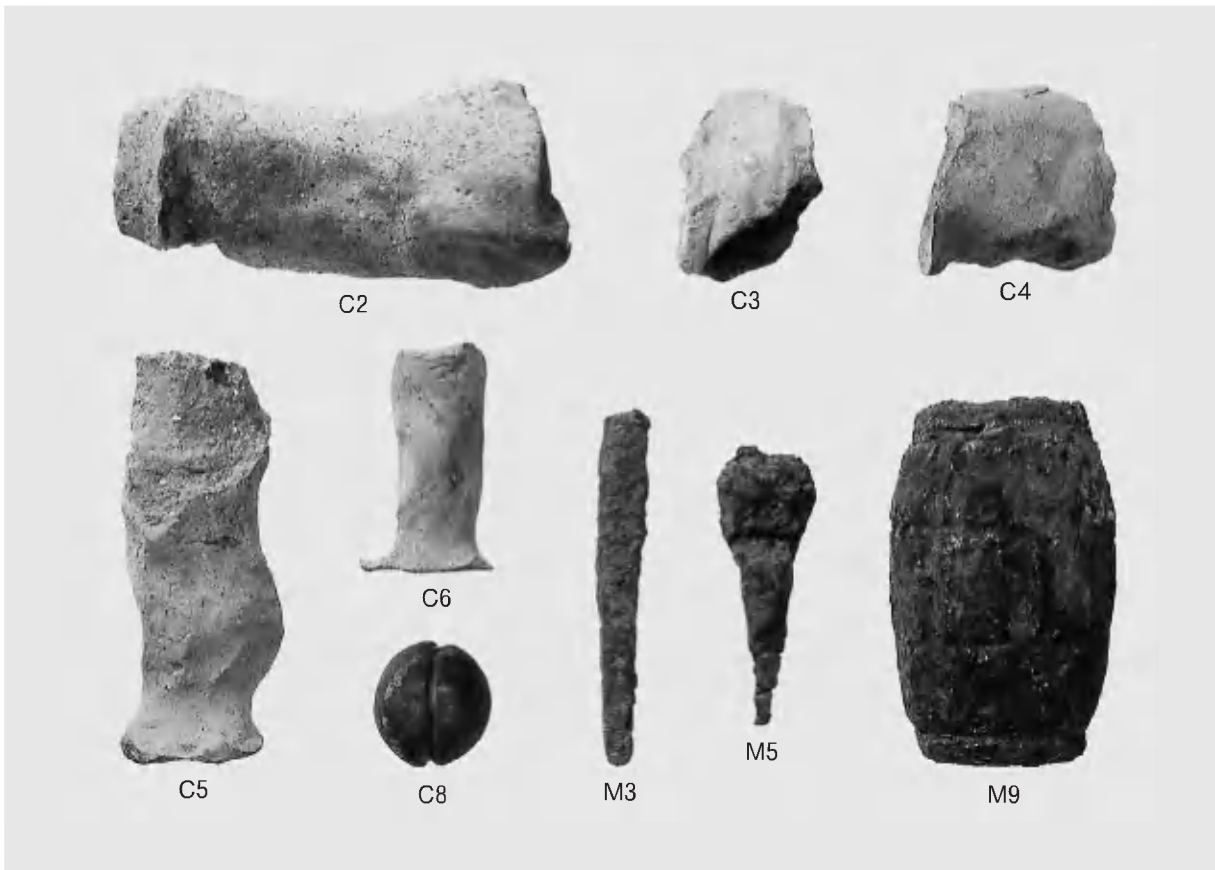


井戸4、土壙25・30・31、溝12、包含層出土土器

図版22



1 出土石製品



2 出土土製品・金属製品

報告書抄録

ふりがな	いふくさだくにまえいせき							
書名	伊福定国前遺跡							
副書名	独立行政法人国立病院機構岡山医療センター宿舎整備工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	224							
編著者名	亀山行雄 柴田英樹 上楯 武							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	独立行政法人国立病院機構岡山医療センター 岡山県教育委員会							
所在地	〒701-1192 岡山県岡山市北区田益1711-1 TEL 086-294-9911 〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いふくさだくにまえいせき 伊福定国前遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 北区伊福町4 ちょうめ 丁目8-12	33101	332011479	34° 40' 25"	133° 54' 34"	2008.4.1～ 2008.8.11	1,031㎡	独立行政法人国立病院機構岡山医療センター宿舎整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
伊福定国前遺跡	集落 生産	弥生～古墳時代		竪穴住居3軒、井戸3基、土壇24基、土器溜り3か所、溝11条、水田		弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄器・土錘		
		奈良～平安時代		掘立柱建物1棟、井戸1基、土壇10基、溝10条		土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・土馬・土錘・曲物		円面硯・墨書土器
		鎌倉～江戸時代		土壇1基、水田		土師器・陶器		
要 約	国の史跡に指定されている津島遺跡の南西に隣接した弥生時代～中世の集落跡である。奈良～平安時代には墨書土器や円面硯、緑釉陶器、灰釉陶器などを伴う遺構が展開し、古代伊福郷の一端をうかがわせる。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224

伊福定国前遺跡

独立行政法人国立病院機構岡山医療
センター宿舎整備工事に伴う発掘調査

平成22年 3月12日 印刷

平成22年 3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行 独立行政法人国立病院機構
岡山医療センター
岡山市北区田益1711-1
岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651

